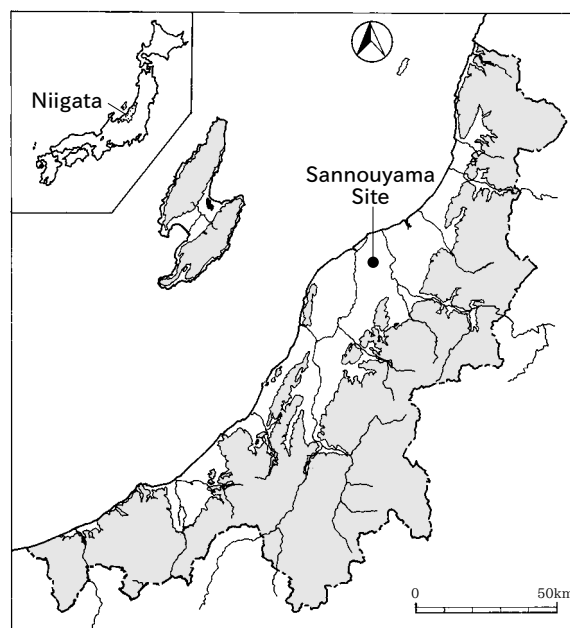


さんのうやま  
三王山遺跡Ⅱ 第4・7次調査

— 新潟市立亀田中学校校舎・体育館改築工事に伴う三王山遺跡第2・4次発掘調査報告書 —



2010

新潟市教育委員会

## 例 言

- 1 本書は新潟県新潟市江南区城山1丁目1170番地2号ほかに所在する三王山遺跡発掘調査の報告書である。
- 2 発掘調査は新潟市立亀田中学校（以下「亀田中学校」という。）改築工事に伴うもので、新潟市教育委員会（以下「市教委」という。）が調査主体となり、新潟市文化観光・スポーツ部歴史文化課埋蔵文化財センター（以下「市埋文センター」という。）が補助執行した。発掘調査に係る経費は、市教委施設課に予算を計上し、文化観光・スポーツ部歴史文化課（以下「歴史文化課」という。）が執行委任を受け、これを執行した。
- 3 遺跡の発掘調査は平成19年および平成20年に実施した。整理作業は平成19年から平成21年にかけて実施し、平成21年度に報告書刊行を行った。発掘調査と整理作業の体制は第Ⅲ章に記した。
- 4 本書の執筆・編集は朝岡政康（市埋文センター 主査）が行った。
- 5 本書で用いた写真は、遺跡写真は立木宏明（市埋文センター 主査）・潮田憲幸（同 副主査）・朝岡が撮影し、遺物写真は佐藤俊英（ビッグヘッド）に委託した。ただし写真図版1は国土地理院の提供による。
- 6 各種図版作成・編集に関しては、株式会社セビアスに委託してデジタルトレースとDTPソフトによる編集を実施し、完成データを印刷業者に入稿して印刷した。
- 7 調査から本書の作成に至るまで下記の方々・機関より多大なご指導・ご協力を賜った。厚く御礼申し上げます。

五十嵐喜智平・春日真実・鶴巻康志・水沢幸一

新潟県教育庁文化行政課 （財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

（所属・敬称略）

## 凡 例

- 1 本書は本文・別表と巻末図版（図面図版・写真図版）からなる。
- 2 本書で示す方位は全て真北である。磁北は真北から西偏約7度である。
- 3 掲載図面のうち、既存の地形図等を使用したものは、原図の作成者・作成年を示した。
- 4 引用・参考文献は、巻末に一括して掲載した。本文中は著者と発行年（西暦）を〔 〕中に示した。
- 5 遺構番号は発掘調査の際に付したものをを用いた。番号は遺構の種別毎に付さず、調査区ごとに通し番号とした。
- 6 土層観察の色調および遺物観察表の遺物の色調は『新版 標準土色帖』〔農林水産省農林水産技術会議事務局 1967〕を用い、その記号を本書に掲載した。
- 7 土器実測図の断面は、須恵器を黒塗り、須恵器以外を白抜きとした。その他、遺物の特徴を示すため網目をを用い、頁内に凡例を示した。
- 8 土器実測図で全周の1/12以下のような遺存率の低いものについては、誤差があるため中軸線の両側に空白を設けた。
- 9 遺物の注記は「07 三王山」・「08 三王山」とし、出土地点等を続けて付した。
- 10 掲載遺物は通し番号とし、本文・観察表・写真図版の番号は同一番号とした。
- 11 図面図版中の「P」は土器、「S」は石を表す。

# 目 次

第Ⅰ章 序 章	1
第1節 遺跡概観	1
第2節 三王山遺跡周辺の周辺の遺跡	1
第3節 調査履歴	2
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	3
第1節 遺跡の位置と地理的環境	3
第2節 三王山遺跡周辺の周辺の遺跡	3
第3節 歴史的環境	5
第Ⅲ章 調査の概要	8
第1節 試掘・確認調査	8
第2節 発掘調査	8
第3節 整理作業	12
第Ⅳ章 遺 跡	14
第1節 概 要	14
第2節 層 序	14
第3節 遺 構	15
第Ⅴ章 遺 物	33
第1節 土器の分類と記述	33
第Ⅵ章 自然科学分析	42
第1節 樹種同定	42
第2節 植物珪酸体（プラント・オパール）分析	43
第3節 花粉分析	45
第4節 三王山遺跡における放射性炭素（ <sup>14</sup> C）年代測定	47
第Ⅶ章 ま と め	48
第1節 各調査区の状況	48
第2節 各調査区の状況	49
第3節 遺物の年代観について	52
A SK13 出土遺物について	52
B その他出土土器について	52
C 鎌倉・室町時代	52



第4節 三王山遺跡の性格について	52
A 奈良・平安時代の三王山遺跡	53
B 鎌倉・室町時代の三王山遺跡	53
引用・参考文献	54
報告書抄録・奥付	巻末

## 挿図目次

第1図 越後平野周辺地形分類図	4	第9図 2区SK13覆土の土層柱状図	46
第2図 三王山遺跡周辺の遺跡分布図	6	第10図 三王山遺跡2区SK13覆土における花粉ダイアグラム	46
第3図 試掘・確認調査位置図および土層柱状図	10	第11図 3区SE30 土層断面	50
第4図 タタキメ・あて具痕跡の細分類図	34	第12図 3区SE193 土層断面	50
第5図 SK13出土炭化材の顕微鏡写真	42	第13図 3区SE193 土層断面図	51
第6図 植物珪酸体(プラント・オパール)	43	第14図 三王山遺跡周辺の遺跡の存続期間	53
第7図 三王山遺跡2区における植物珪酸体分析結果	44		
第8図 三王山遺跡の花粉・孢子・寄生虫卵	45		

## 表目次

第1表 三王山遺跡にかかる調査履歴一覧表	2	第7表 放射性炭素( <sup>14</sup> C)年代測定結果	47
第2表 SK13 2層出土炭化材樹種同定結果	7	第8表 2区SK13出土土器の器種構成率表	52
第3表 2層出土炭化材樹種同定結果	42	別表1 三王山遺跡 2区主要遺構計測表	56
第4表 三王山遺跡2区における植物珪酸体分析結果	43	別表2 三王山遺跡 3区主要遺構計測表	56
第5表 三王山遺跡における花粉分析結果	46	別表3 遺物観察表	59
第6表 測定試料と処理・測定方法	47		

## 図版目次

図版1 周辺の旧地形図(1/25,000)	図版22 3区 遺構実測図1
図版2 周辺の旧地形図(1/50,000)	図版23 3区 遺構実測図2
図版3 遺跡周辺図	図版24 3区 遺構実測図3
図版4 グリッド設定図(1/2,500)	図版25 3区 遺構実測図4
図版5 1～3区遺構平面図(1/1,000)	図版26 3区 遺構実測図5
図版6 1区・2区 遺構全体図(1/250)	図版27 3区 遺構実測図6
図版7 1区 調査区全体図(1/100)	図版28 3区 遺構実測図7
図版8 2区 遺構平面部分図1(1/100)	図版29 亀田中学校用地内の旧土地利用図、1・2区遺構確認面の状況
図版9 2区 遺構平面部分図2(1/100)	図版30 1・2区 III層出土土器重量分布図／第1次調査地遺構配置図・竪穴状遺構平面図
図版10 2区 遺構平面部分図3(1/100)	図版31 2区遺構出土土器 SE31・SE39・SE41・SK13・SK33・SX7・SX16・SX18
図版11 2区 遺構平面部分図4(1/100)	図版32 2区遺構出土土器 SD1・SD2・SD3・SD11・P36・P45／1区遺物外出土土器
図版12 2区 遺構平面部分図5(1/100)	図版33 2区遺構外出土土器
図版13 2区 遺構実測図1(1/40)	図版34 2区遺構外出土土器
図版14 2区 遺構実測図2(1/40)	図版35 2区 珠洲焼・遺構出土の銭貨・鍛冶関連遺物・金属製品・石器・石製品・木製品
図版15 2区 遺構実測図3(1/40)	図版36 2区遺構出土の木製品
図版16 2区 遺構実測図4(1/40)	図版37 3区遺構出土土器・陶器 SE30・SE31・SE45・
図版17 3区 遺構全体図(1/100)	
図版18 3区 遺構平面部分図1(1/60)	
図版19 3区 遺構平面部分図2(1/60)	
図版20 3区 遺構平面部分図3(1/60)	
図版21 3区 遺構平面部分図4(1/60)	

SE95・SE145・SE193  
図版 38 3区遺構出土 土器・陶磁器 SK47・SK50・  
SK59・SK62・SD7・P159・P170・P254・  
P332 / 遺構外出土 陶器 / 遺構出土 鉄製品・

石器・石製品  
図版 39 3区遺構出土の木製品 SE30・SE45・SE193・  
P64

## 写真図版目次

- |         |               |         |   |
|---------|---------------|---------|---|
| 写真図版 1  | 三王山遺跡周辺空中写真   | 写真図版 18 | 3区遺構個別写真 3  |
| 写真図版 2  | 2区全景空中写真(合成)  | 写真図版 19 | 3区遺構個別写真 4  |
| 写真図版 3  | 2区全景写真 1・2    | 写真図版 20 | 3区遺構個別写真 5  |
| 写真図版 4  | 3区全景写真 1・2    | 写真図版 21 | 3区遺構個別写真 6  |
| 写真図版 5  | 1区・2区土層堆積状況写真 | 写真図版 22 | 3区遺構個別写真 7  |
| 写真図版 6  | 2区遺構個別写真 1    | 写真図版 23 | 3区遺構個別写真 8  |
| 写真図版 7  | 2区遺構個別写真 2    | 写真図版 24 | 3区遺構個別写真 9  |
| 写真図版 8  | 2区遺構個別写真 3    | 写真図版 25 | 3区遺構個別写真 10   |
| 写真図版 9  | 2区遺構個別写真 4    | 写真図版 26 | 遺物写真 1 2区遺構出土・遺構外出土土器                                     |
| 写真図版 10 | 2区遺構個別写真 5    | 写真図版 27 | 遺物写真 2 2区遺構出土土器 / 1区・2区遺<br>構外出土土器                        |
| 写真図版 11 | 2区遺構個別写真 6    | 写真図版 28 | 遺物写真 3 3区遺構出土遺物・3区遺構外<br>出土遺物 / 2区・3区遺構出土遺物(土器・陶<br>磁器以外) |
| 写真図版 12 | 2区遺構個別写真 7    | 写真図版 29 | 遺物写真 4 2区出土墨書土器 / 2区・3区遺<br>構出土木製品                        |
| 写真図版 13 | 2区遺構個別写真 8    |         |   |
| 写真図版 14 | 2区遺構個別写真 9    |         |   |
| 写真図版 15 | 2区遺構個別写真 10   |         |   |
| 写真図版 16 | 3区遺構個別写真 1    |         |   |
| 写真図版 17 | 3区遺構個別写真 2    |         |   |

# 第 I 章 序 章

## 第 1 節 遺 跡 概 観

三王山遺跡は新潟市こうなんくところしま江南区所島1丁目780～790ほかに所在する(新潟県埋蔵文化財包蔵地カード)。昭和48(1973)年に発見された遺跡である。新砂丘 I の亀田砂丘と呼称される砂丘上およびその縁辺の自然堤防上に立地する遺跡である。これまでの調査結果から、古墳時代・奈良時代・平安時代・中世・近世の各時代に断続的に営まれた集落遺跡であることが分かっている。昭和54(1979)年、宅地造成を契機とした緊急発掘調査が行われた(図版4・30)。調査は3月21日～5月13日にかけて行われたが、主に休日や土曜日に限って行われた調査であった。井戸や溝状遺構・竪穴状遺構・柱穴などが発見され、古代の須恵器や土師器のほか、中世の陶磁器が多量に出土した。また銅製香炉や鉄鉢など仏器と推測される貴重な遺物が出土した〔酒井1980〕。

## 第 2 節 発掘調査に至る経緯

平成17(2005)年に新潟市は近隣の13市町村と合併した。また平成19(2007)年4月1日には政令市となり区政を施行している。合併に伴い、市内の埋蔵文化財保護行政に係る事務は歴史文化課で一括して対応することとなった(教育委員会事務の補助執行)。市埋文センターは歴史文化課に所属している。

新潟市立亀田中学校は旧亀田町にあり、60余年の歴史を持つ中学校である。亀田町が新潟市と合併したことで、町立から市立に名称を変更した。同校の校舎・体育館は昭和40～50年代の建築であり、老朽化が進んでいたことから亀田町時代に改築工事が計画された。合併に伴い事業は合併建設計画として新潟市に引き継がれた。

歴史文化課で行った合併建設計画の聞き取り調査の結果、当該地は三王山遺跡に隣接し、かつ市内でも遺跡が多く所在する亀田砂丘上に位置することから、事業着手前に埋蔵文化財の有無を確認する試掘調査が必要であると考えられたので、平成18(2006)年に亀田教育事務所学校教育課と協議を行った。協議後、新潟市長(以下「市長」という。)は、市教育長宛てに平成18年7月19日付新亀教学第170号にて試掘調査の依頼を行った。これを受け市教育長は平成19年10月27日付18新歴第701号の2にて新潟県教育委員会(以下「県教委」という。)教育長宛てに、文化財保護法(以下「法」という。)第99条に係る発掘調査の報告をし、平成18年10月31日および11月16～24日に試掘調査を実施した(第3次調査)。事業予定地を中心に36か所のトレンチを設定した。調査面積は約139m<sup>2</sup>である。

調査の結果、平安時代と考えられる遺物および遺構が発見され、事業地に三王山遺跡が広がっていることが判明したので、事業実施前に本調査が必要である旨、担当各課と協議を行った。また三王山遺跡の範囲が拡大したことを受け、平成18年12月28日付18新歴第701号の7にて遺跡の範囲変更の手続きを行い、平成19年1月4日付教文第1235号にて新範囲が新潟県埋蔵文化財包蔵地カードに登録された。

改築工事は、平成19年度に体育館・武道館・ランチルームを建築し、平成20(2008)年度に既存体育館を解体後、新校舎を建築する計画であった。協議の結果、計画変更はできないので事業計画に従い本調査を実施することとなった。

平成19年度工事に際して、市長は平成19年2月8日付新亀教学第445号にて県教育長に法94条に係る通知(以下「発掘通知」という。)を行った。県教委から平成19年3月5日付教文第1432号の2にて本調査の指示があった。市長は、平成19年3月20日付新亀教第1086号にて市教育長に調査依頼を行い、これを受け、

### 第3節 調査履歴

市教育長は平成19年4月26日付18新歴第701号の17にて県教育長宛てに法第99条に係る発掘報告を提出した。市埋文センターは平成19年5月1日～8月10日にかけて本調査を実施した(第4次調査)。調査に係る経費は市教委施設課に計上され、歴史文化課が執行委任を受け、これを執行した。

平成20(2008)年度は、既存体育館解体後新校舎を建築する予定であったことから、市長は平成20年4月25日付新教施第166号にて県教委教育長に法94条第1項に係る発掘通知を行った。また平成20年5月12日付第209号にて市教育長宛てに事前調査の依頼を行った。依頼を受け、市教育長は平成20年9月3日付新歴第5041号の2にて県教育長宛てに法第99条に係る発掘調査の報告を行った。平成20年9月3～8日にかけて確認調査(第6次調査)を実施した。調査は体育館の床を撤去した段階で実施した。事業予定地を中心に10か所のトレンチを設定した。調査面積は約166m<sup>2</sup>である。

確認調査の結果、調査対象面積約1,100m<sup>2</sup>のうち、410m<sup>2</sup>について本調査が必要であるとの結論に至った。このことを受け市長は平成20年9月30日付新教施第911号にて市教育長宛てに調査依頼を行った。市教育長は平成20年11月7日付新歴第5041号の17にて法第99条に係る発掘調査の報告を県教育長宛てに提出した。市埋文センターは平成20年11月5日～25日にかけて本調査を実施した(第7次調査)。調査経費は前年度同様、施設課に計上され、歴史文化課が執行委任を受け、これを執行した。

平成21(2009)年度は前2か年分調査の報告書作成を行った。整理作業および報告書作成に係る経費は前年度と同様に行った。

### 第3節 調査履歴

三王山遺跡は新潟市内で最も早く周知化された遺跡の1つである。発見以降の調査履歴は第1表のとおりである。今次調査は通算で第4・7次調査に当り、新潟市立亀田中学校改築工事に伴う調査としては、第2・4次調査に当たる。

第1表 三王山遺跡にかかる調査履歴一覧表(平成21年1月現在)

通算調査回数	市立亀田中学校改築工事に伴う発掘調査回数	調査年(西暦)		調査種別	調査原因	調査主体		調査の概要	文献
		調査期間				調査担当			
		昭和48年(1973)		分布調査		亀田町教育委員会 酒井和男	遺跡発見。 新潟県埋蔵文化財包蔵地カードへの登録。		
		—							
第1次調査		昭和54年(1979)	3.21～5.13	本調査	宅地造成	亀田町教育委員会 酒井和男	古代・中世の遺構・遺物発見。	『三王山遺跡発掘調査報告書』1980 亀田町教育委員会	
第2次調査		平成17年(2005)	5.6	確認調査	個人住宅建設	新潟市教育委員会 諫山えりか			
第3次調査	第1次調査	平成18年(2006)	10.31・11.16～24	試掘調査	学校改築に伴う試掘調査	新潟市教育委員会 潮田憲幸	古代の遺構・遺物発見(範囲拡大)		
第4次調査	第2次調査	平成19年(2007)	5.1～8.10	本調査	学校改築に伴う本調査	新潟市教育委員会 朝岡政康	古代・中世の遺構・遺物発見。 調査面積1,845.2㎡		
第5次調査		平成20年(2008)	6.2	確認調査	個人住宅建設	新潟市教育委員会 今井さやか	遺構：土坑 遺物：土師器		
第6次調査	第3次調査	平成20年(2008)	9.3～9.8	確認調査	学校改築に伴う確認調査	新潟市教育委員会 今井さやか	遺構：土坑・小土坑・溝 遺物：平安時代須恵器・土師器 中世珠洲焼		
第7次調査	第4次調査	平成20年(2008)	11.5～11.25	本調査	学校改築に伴う本調査	新潟市教育委員会 朝岡政康	古代・中世の遺構・遺物発見。 調査面積410.7㎡		
第8次調査		平成21年(2009)	1.26	試掘調査	宅地造成に伴う試掘調査	新潟市教育委員会 相田泰臣	平安時代土師器		

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 第1節 遺跡の位置と地理的環境（第1図、図版1～3）

新潟市は越後平野の中にあり市域は約726km<sup>2</sup>である。越後平野は河川の運ぶ土砂によってできた沖積平野で、平野面積約2,040km<sup>2</sup>と日本海側最大である。越後平野には信濃川・阿賀野川といった大河川が貫流し、これに連なる中・小河川と共に大量の水を日本海に注いでいる。市域はこの平野の約3分の1を占め、信濃川・阿賀野川の河口に位置している。

新潟市の地形は、西の角田山塊、南の新津丘陵といった山地丘陵部、海岸部に砂丘を持つほかは広大な沖積平野が広がる。平野の中には砂丘列や河川の自然堤防などの微高地が点在する。越後平野の砂丘は、信濃川や阿賀野川のような大河川や中・小河川の運ぶ膨大な土砂が沿岸流に押し止められ砂州となり、それが冬の季節風によってうず高く積もることによって形成された。現在の村上市と角田山塊を結ぶ海岸線に並行するように弧状に連なっている。これらの砂丘は全て完新世第四期以降形成されたとされ、更新世由来の「古砂丘」と対比して、「新砂丘」と呼ばれている〔新潟古砂丘グループ1979〕。この新砂丘は10列にもなり、砂丘列間の重複関係や、砂丘表面の腐植層（植物が腐った有機質を含んだ層）の状態、砂丘上で発見された遺跡の時代などから、大きく3つに分けられ、形成年代の古い内陸側から新しい海岸部へ向かって、新砂丘Ⅰ・Ⅱ・Ⅲと呼ばれている。三王山遺跡が立地する砂丘は亀田地域にあることから亀田砂丘と呼ばれ、新砂丘Ⅰに比定される。新砂丘Ⅰ列は現在の海岸線から最も内陸に位置し、亀田砂丘は海岸線から約10km内陸に位置する。新砂丘Ⅰ上には笹山前遺跡（江南区）や布目遺跡（西蒲区）といった縄文時代前期の遺跡があることから約6,000年前には既に形成されていたと考えられている。同様に新砂丘Ⅱ列は縄文時代後期～弥生時代には形成されていると考えられ、一部は新砂丘Ⅲ列の下に埋もれている。新砂丘Ⅲ列は室町時代にはかなりの高さになっていたものと考えられている。新砂丘Ⅲ列は現在の海岸線にもなっており、近年まで成長が続いていた。

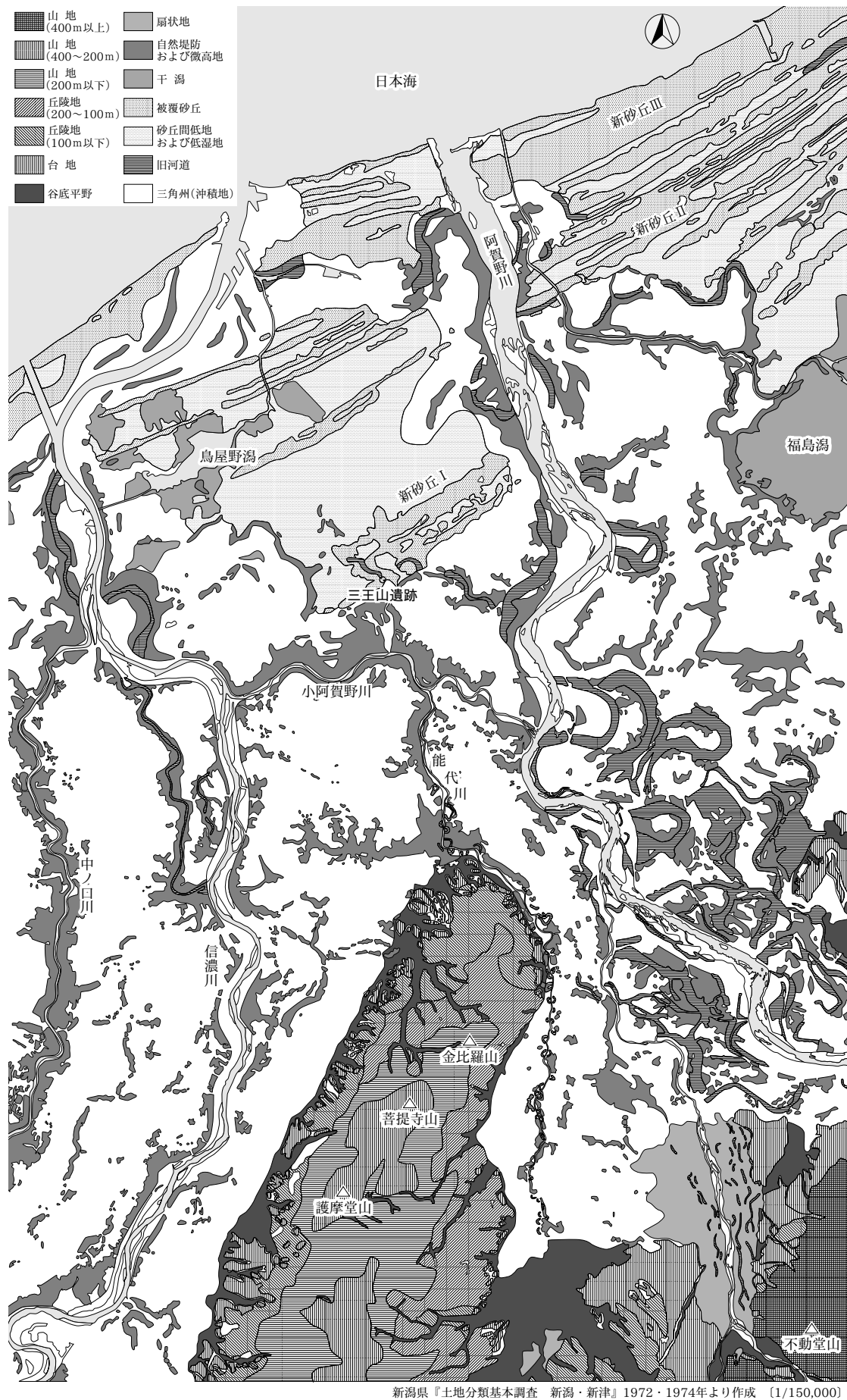
一方市域の大部分を占める沖積地は、上記砂丘によって土砂が堰き止められ、潟湖のような内海状の環境下で繰り返された堆積作用の結果形成されていった。その堆積層は主に粘土やシルト・未分解の植物遺体層（いわゆるガツボ層）から成り、軟弱な地盤である。平野中には、旧河道や旧潟湖の縁部に沿って自然堤防が数多く分布しており、地形図や空中写真を見ると、現在の河川もかつては様々な流路であったことや干拓以前の潟湖の縁部がうかがえる。

また市域に広がるこの沖積面は海拔0m前後の低地帯が広いことが特徴である。特に信濃川・阿賀野川・小阿賀野川に囲まれた地域は「亀田郷」と呼ばれ、鳥屋野潟に向かってすり鉢状に低くなっている。かつて水はけが悪く、腰までつかる沼田が多く水害の常襲地帯であったが、戦後は土地改良が進み乾田化され、現在は市内でも有数の穀倉地帯になっている。

### 第2節 三王山遺跡周辺の遺跡

現在新潟市内では約744か所の遺跡が周知化されており（2009年現在）、江南区の旧亀田町周辺は市内でも、角田山周辺・新津丘陵周辺に次いで様々な時代の遺跡が多く確認されている地域である。三王山遺跡周辺の遺跡は砂丘上や自然堤防上、あるいは双方にまたがるように立地している遺跡が多い。時代別に見ると、縄文・弥生時代の遺跡のほとんどは砂丘上に分布し、古墳時代以降になると自然堤防上にも分布が見られるようになる。し





第1図 越後平野周辺地形分類図

かし砂丘上という好条件は各時代ともに利用され続けるようで、砂丘上に分布する遺跡は様々な時代の複合遺跡である場合が多い。以下市町史〔亀田町 1990・新潟市 1994、2007・横越町 2000〕をもとに概観する。

縄文時代の遺跡は亀田砂丘前列（新砂丘Ⅰ-Ⅰ・Ⅱ 内陸側が前列）上に分布が見られる。笹山前遺跡から出土した縄文時代前期前葉の表館式の深鉢は亀田郷最古の土器である〔廣野 1997〕。このほか亀田城山 A 遺跡、山ノ家遺跡でも前期の土器が出土している。中期では砂丘上の遺跡としては大規模な砂崩遺跡が知られている。後期及び晩期の遺跡は少ないが、後期では中山遺跡や笹山前遺跡、城山遺跡、日水南遺跡、前郷遺跡からこの頃の土器の出土例がある。晩期では養海山遺跡や前郷遺跡、駒込小丸山遺跡で出土例がある。また晩期後半になると上田遺跡のように沖積面に進出する遺跡も現れる。

弥生時代になると石動遺跡や、緒立遺跡、六地山遺跡のように新砂丘Ⅱ上にも遺跡が分布するようになり、縄文時代より陸地が広がっていたことがうかがえる。亀田砂丘周辺では縄文時代と同様にほとんどが砂丘上（新砂丘Ⅰ-Ⅰ・Ⅱ）に分布する。日水南遺跡、亀田城山 A 遺跡、芥助山遺跡、上の山遺跡などから出土例が見られる。また縄文晩期から弥生時代中期にかけての土器・石器を多く出土した養海山遺跡は、地表面下 3m という深さからの出土であった。同じく西郷遺跡は平成 18・19 年に国道拡幅工事に伴い本調査が行われ、現地表面下 2～3m の深さから縄文時代晩期末葉～弥生時代中期の遺構・遺物が発見された〔土橋ほか 2009〕。養海山遺跡は沖積面に埋没した砂丘上に立地し、西郷遺跡は砂丘間低地に立地していると考えられており、これらのことから亀田砂丘あるいは新砂丘Ⅰが形成以来不均等に沈降している事が明らかになりつつある。江南区茅野山以西は埋没している砂丘列が存在する可能性が高い。

古墳時代は前期の遺跡が多く、中期・後期の遺跡はこれに比べて少ない。特に江南区以北の海岸平野部で顕著である。亀田砂丘上では、武左衛門裏遺跡のほか城山遺跡、三王山遺跡、山ノ家遺跡、養海山遺跡などで出土例があるが遺跡数は多くない。笹山前遺跡では後期の住居跡や土坑墓が発見されている〔廣野前掲〕。一方沖積面での発見例は弥生時代と比べるとはるかに増加し、新砂丘Ⅰの沿岸砂州上の東園遺跡〔朝岡ほか 2003〕や自然堤防上の上郷遺跡〔春日ほか 1997c〕、下西遺跡、宮尻郷遺跡、小杉中州遺跡などのほか、北区や秋葉区でも自然堤防上を中心に沖積地での遺跡の発見例が増加する。弥生時代と比べ低地への進出が顕著になることから、農耕社会の形成と関係が深いと考えられる。

奈良・平安時代、いわゆる古代の遺跡も古墳時代同様の分布を見せるが、平安時代に入ると沖積面での発見例が非常に多くなることが特徴で、市内遺跡中最も多いのがこの時代の遺跡である。

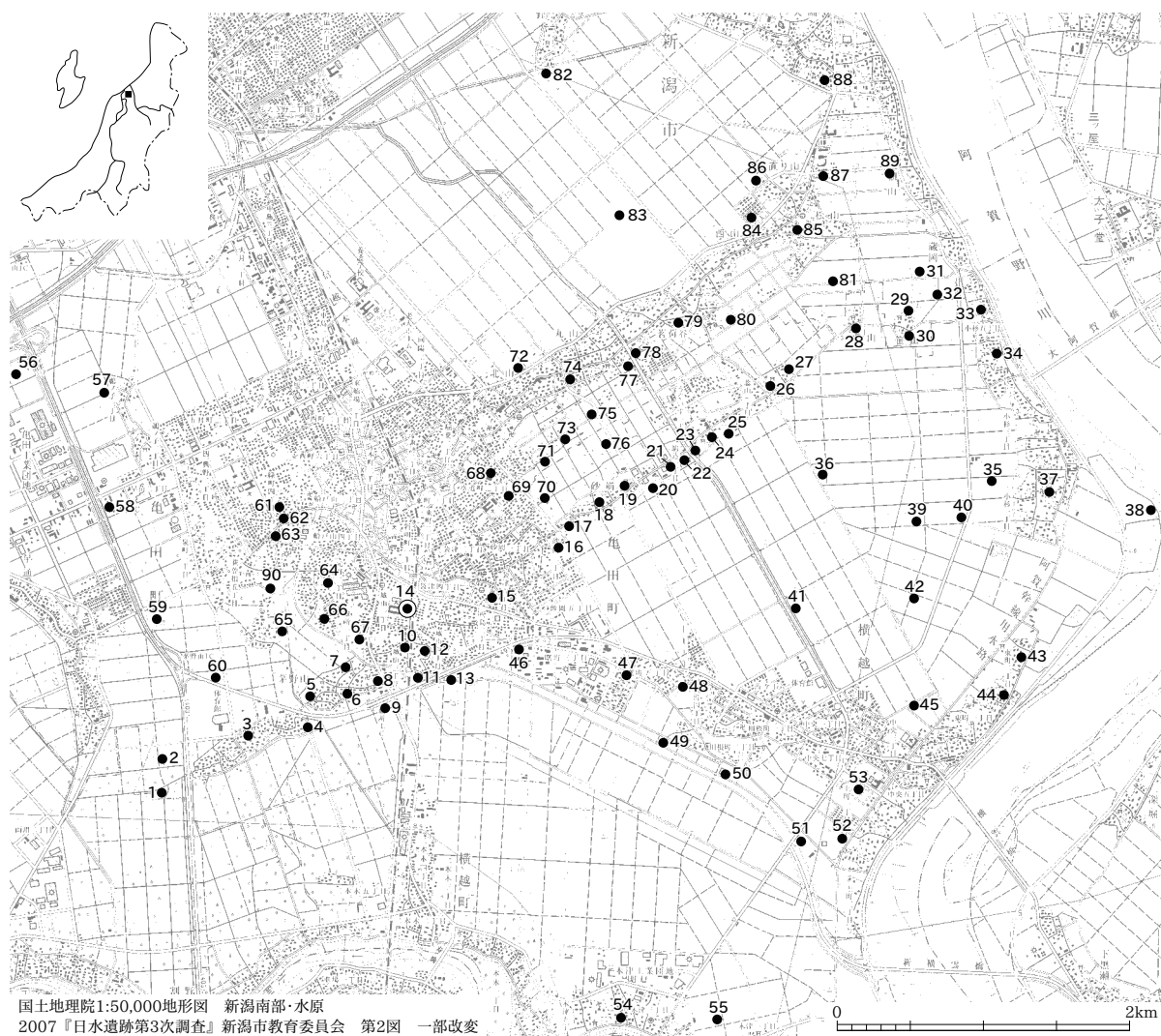
三王山遺跡周辺で行われた主に古代の遺跡の発掘調査成果の概要については第 2 表にまとめた。

### 第 3 節 歴史的環境

古代の江南区 江南区域は、古代では越後国蒲原郡に属していた。越後国は「越国」が分割されて成立したのであるが、その分割は、諸国の境界を定めた天武 12（683）年から、越前国司の記事が見られる持統 6（692）年の間になされ、成立当初の越後国は阿賀野川以北の沼垂郡・磐船郡およびそれ以北であったと考えられている〔新潟県編 1986〕。その後大宝 2（702）年に当時越中国であった頸城・古志・魚沼・蒲原の 4 郡が越後国に編入された。このことにより、越後国の南限が定まった。和銅元（708）年に越後国出羽郡が設置され、4 年後の和銅 5（712）年に出羽郡は出羽国として越後国から分離した。このことにより越後国の北限も定まった。佐渡は佐渡国として成立し、文武天皇 4（700）年に初見記事があることからこのころ成立したのと考えられる。天平 15（743）年から天平勝宝 4（752）年まで越後国に編入された時期もあるが、この間以外は 1 国として運営されている。

蒲原郡の郡域については明確ではないが、現在の北区を除く新潟市・五泉市の阿賀野川以西・田上町・加茂市・燕市・三条市・弥彦村を含む地域と考えられている。蒲原郡の成立は前述した 702 年ころには成立していたと

第3節 歴史的環境



No.	名称	時代	No.	名称	時代	No.	名称	時代
1	西前郷	縄文後期・奈良・平安	31	中山	縄文後期・奈良・平安	61	市助裏	平安・中世
2	早通前	平安	32	城山	縄文・古墳・平安・中世	62	川西	平安・中世
3	養海山	縄文・弥生・古墳・平安	33	居附B	平安	63	狐山	奈良・平安
4	八幡前	平安	34	居附C	平安	64	貝塚	奈良・平安
5	武左衛門裏	古墳	35	居附A	平安・中世	65	手代山	中世
6	日水前	縄文・弥生・平安	36	江尻	平安	66	中の山	奈良・平安・中世
7	日水	奈良・平安・中世	37	松嶺寺	平安	67	荒木前	中世
8	日水南	縄文後期・奈良・平安・中世	38	小杉申州	古墳	68	袋津向山	縄文
9	城所道下	平安	39	上田	縄文晩期・奈良・平安	69	塚ノ山	平安・近世
10	亀田城山B	中世	40	山のハサバ	平安	70	三條岡	奈良・平安・中世
11	亀田城山A	縄文中期・弥生中期・奈良・平安	41	新田郷	奈良・平安	71	前山	奈良・平安
12	斉助山	縄文・弥生・奈良・平安	42	宮尻郷	奈良・平安	72	北山	平安
13	牛道	平安	43	下郷	平安	73	金塚山	縄文・奈良・平安
14	<b>三王山</b>	<b>古墳・奈良・平安・中世</b>	44	下郷経塚	近世	74	大道外	平安
15	茨島	平安	45	曾我墓跡	平安	75	彦七山	奈良・平安
16	砂岡	平安	46	岡田	平安	76	浦ノ山	平安
17	砂崩上ノ山	奈良・平安	47	上沼	奈良・平安	77	清水が丘	平安
18	砂崩前郷	縄文・平安・江戸	48	川根谷内	平安	78	丸山	平安
19	砂崩	縄文中期・奈良・平安	49	川根谷内墓所	平安・中世	79	茗荷谷墓地	平安
20	迎山	縄文中期・晩期・奈良・平安	50	上郷C	平安	80	茗荷谷	縄文中期・平安・中世
21	前郷	縄文中期・平安・近世	51	上郷	古墳・平安	81	松山向山	平安
22	山ノ家	縄文前期・中期・弥生・奈良	52	上郷B	奈良・平安	82	西野	平安
23	駒込居浦郷	奈良・平安	53	横越館跡	中世	83	東圃	縄文・弥生・古墳
24	駒込墓所	奈良・平安	54	円通寺石仏	中世	84	小丸山	縄文中期・晩期・弥生中期・後期・奈良・平安
25	駒込小丸山	縄文・弥生・奈良・平安	55	天王杉	平安	85	松山	縄文・中世
26	上の山	弥生中期・平安	56	駒首潟	平安	86	直り山B	平安
27	藤山	平安・中世	57	鶴ノ子	平安	87	直り山A	平安
28	平山	平安	58	下西	古墳	88	大淵	平安・中世
29	神明社裏	平安	59	泥湯	平安・中世	89	細山石仏	中世
30	笹山前	縄文前期～晩期・弥生後期・古墳・平安	60	西郷	弥生	90	手代山北	奈良・平安・中世

第2図 三王山遺跡周辺の遺跡分布図



推定される。10世紀に成立した『和名類聚抄』によれば、蒲原郡内には日置郷・桜井郷・勇礼郷・青海郷・小伏郷の5つの郷が存在していたことが分かる。各郷の所在地については、桜井郷は弥彦村を中心とした地域に比定する説が多く、勇礼郷は三条市井栗周辺を、青海郷は加茂市周辺を、小伏郷は三条市布施谷周辺と比定する説が多い。残る日置郷の位置は不明であるが、『新津市史』では古津八幡山遺跡が存在することなどから旧新津市周辺としている。近年、西区赤塚周辺を当てる考えも出てきている〔小林2010〕。

郡内産業については、新津丘陵における須恵器生産が早ければ7世紀後半には始まり、8世紀前半～9世紀中頃が主な操業期間であり、このことは越後国内の他地域の須恵器生産動向とも一致しており、いわゆる「一郡一窯体制」であった。また金津丘陵製鉄遺跡群は新津丘陵北西側の金津地区に所在し、窯跡と近接するのは燃料である薪や木炭が共通するためだと考えられている。古代の重要な産業である須恵器生産と製鉄産業が新津丘陵で営まれていることから当地域が蒲原郡における重要な地域であったことがうかがえる。

8世紀中葉以降に成立した寺院のための荘園(初期荘園)も蒲原郡内に見ることができる。宝亀11年(780)「西大寺資材流記帳」(『寧良遺文』中巻)には西大寺の荘園として鶉橋庄・槐田庄が見られ、同資料に「越後国水田并墾田地帳景雲三年」と見られることから成立は8世紀中葉のことと考えられる。両庄は式内社所在位置から、鶉橋庄は五泉市橋田周辺・槐田庄は三条市周辺と考えられている。初期荘園は律令体制の衰退と共に衰退し、平安時代には衰退していたと考えられている。

11世紀後半に成立したと推定される金津保は、秋葉区に所在したと考えられている。保とは、未墾地の開発申請に対し国守が認可を与えることで出現した所領のことで、金津保の初見は建武3年(1336)11月18日「羽黒義成軍忠状写」で「同日、引籠于金津保新津城、对于小国政光以下御敵等、到散々合戦畢、」(『新潟県史』資料編4-1935)とあり、北朝方である三浦和田(羽黒)義成は金津保にあった新津城に籠り、南朝方の小国政光らと戦ったとある。この資料によって金津保には新津城が含まれていたことが分かり、この新津城とは新津城・程島館・東島城のいずれかであろうとされる〔木村1993〕。また天正5年(1577)「三条衆給分帳」に「金津保之内遊川」(『新潟県史』資料編5-2704)とあり、遊川は田上町湯川と見られ、天文13年(1544)10月10日「上杉玄清定実知行宛行状」・同「長尾晴景副状」(『新潟県史』資料編4-1495・1496)に「金津保下条村」とあるのは、五泉市下条に当たるとされる。以上のことから金津保の領域は年代によって違いがあった可能性はあるが、秋葉区～田上町北部と五泉市の一部を含む範囲であったと推定される。

第2表 三王山遺跡周辺の発掘調査一覧

遺跡名	本調査実施年	調査原因	調査主体	主な時代	主な遺構	主な遺物	出典
			調査担当者				
茗荷谷遺跡	1972	砂取工事	新潟市教育委員会 上原甲子郎	奈良・平安	竪穴住居・掘立柱建物 ほか	古代須恵器・古代土師器・銭貨・ 鈔帯金具など	『新潟市史』資料編1
三王山遺跡	1979	宅地造成	亀田町教育委員会 酒井和男	奈良・平安・鎌倉・ 室町	長方形竪穴遺構・井戸・ 溝ほか	古墳時代土師器 古代須恵器・古代土師器 中世土師器・青磁・白磁・珠洲 焼・瀬戸美濃焼・銅製香炉など	『三王山遺跡』
中の山遺跡	1981	宅地造成	亀田町教育委員会 川上貞夫	奈良・平安・鎌倉・ 室町	住居址・小形竪穴建物・ 鍛冶遺構・井戸・二重 周溝・溝ほか	古代須恵器・古代土師器 珠洲焼・瀬戸美濃焼など	『中の山遺跡』
荒木前遺跡	1988	宅地造成	亀田町教育委員会 渡邊ますみ	飛鳥・奈良・平安・ 鎌倉・室町	掘立柱建物・土坑・井 戸・溝状遺構・畝状遺 構ほか	古代須恵器・古代土師器 青磁・白磁・越前焼・珠洲焼・ 瀬戸美濃焼など	『荒木前遺跡』
荒木前遺跡	1994	宅地造成	亀田町教育委員会 川上貞夫	平安・鎌倉・室町	道路・土坑・井戸・溝 ほか	古代須恵器・古代土師器 珠洲焼など	『荒木前遺跡』第2次 調査
川根谷内墓所遺跡	1994 1995	国道建設	新潟県教育委員会 江口友子	平安・近世	土坑・井戸・溝状遺構 ほか	古代須恵器・古代土師器など	『川根谷内墓所遺跡』
上郷遺跡	1992 1993 1994	国道建設	新潟県教育委員会 高橋知之・上野一久・春日真実	古墳・平安	竪穴建物・掘立柱建物・ 土坑・井戸・溝状遺構・ 畝状遺構・水田跡ほか	古墳時代土師器 古代須恵器・古代土師器など	『上郷遺跡Ⅰ』 『上郷遺跡Ⅱ』
牛道遺跡	1995	国道建設	新潟県教育委員会 土橋由理子	平安	土坑・井戸・畝状遺構 ほか	古代須恵器・古代土師器など	『牛道遺跡』
日水遺跡	2005	宅地造成	新潟市教育委員会 今井さやか	平安・室町	竪穴遺構・掘立柱建物・ 土坑・井戸・溝ほか	古代須恵器・古代土師器	『日水遺跡 第3次調 査』
手代山北遺跡	2007 2008	市道建設	新潟市教育委員会 朝岡政康	平安・鎌倉・室町	掘立柱建物・土坑・井 戸・溝状遺構ほか	古代須恵器・古代土師器 珠洲焼	『手代山北遺跡 第2・ 3次調査』

## 第Ⅲ章 調査の概要

### 第1節 試掘・確認調査

#### A 試掘調査(第3次調査)

亀田中学校改築工事に伴う試掘調査(第3次調査)は平成18年10月31日と同年11月16日～24日にかけて行われた。調査対象面積5,217m<sup>2</sup>に対し、36か所の試掘坑を設定した(第3図)。調査面積は139m<sup>2</sup>である。試掘坑の位置は亀田教育事務所・亀田中学校と協議をして決定した。4T・9T・10T・11T・14T・15T・19T・21T・24T・26T・28T・30T・31Tから遺物が出土した。12T・13Tから遺構が発見された。8T・18T・34Tから遺構と遺物が発見された。遺物はほとんどが土師器や須恵器の破片で、平安時代のもと考えられた。土層の堆積状況は試掘坑ごとにより異なっており、調査対象地の土層はかなり改変を受けていることが推測されるため、遺物出土層と遺構確認層の関係は必ずしも明確にはならなかった。新校舎建築部分に遺跡が残っている事が判明したので工事着手前に発掘調査が必要であると判断された。

#### B 確認調査(第6次調査)

第4次調査の結果、調査対象地は遺跡であるものの、土層はかなり改変を受けており、遺存状況はあまり良くないことが分かってきた。この結果を受けて、平成20年の工事に際しては、事前に確認調査を実施し、遺跡の遺存状況を確認してから本調査の要否を判断することとなった。平成20年は新校舎建築に先立つ体育館解体工事が行われ、体育館の照明や内壁・床が撤去された段階で、9月3日～8日にかけて確認調査を実施した(第7次調査)。新校舎建築部分と渡り廊下建築部分に10か所のトレンチを設定して調査した(第3図)。調査対象面積は約1,200m<sup>2</sup>、調査面積は165.6m<sup>2</sup>である。1T・4T・6T・7T・8Tから遺物が出土した。1T・5T・6T・7T・8Tで遺構が発見された。遺物は、古代の須恵器・土師器の細片、中世の珠洲焼すり鉢細片、近世陶器片である。表土から遺構確認面までの土層は削平または客土に入れ替えられ、自然堆積層は残っていなかった。遺構確認面の上部も削平を受けていた。1Tでは土坑と溝状の遺構が検出されたが、近世もしくは近世以降の遺構と推定された。6T・8Tで古代～中世の井戸と推定される遺構が発見されたことから、遺構が発見された区域を中心に本調査が必要と判断された。

### 第2節 発掘調査

#### A 調査方法

調査は亀田中学校の改築工事の進捗にあわせ2か年にわたって実施した。

##### 1) 調査地の着手前状況

平成19年度調査地(以下「1区・2区」という。)は主に中庭・遊閑地・テニスコートとして利用されていた。

平成20年度調査地(以下「3区」という。)は体育館および武道場として利用されていた。

##### 2) グリッドの設定(図版4)

グリッド網は、三王山遺跡全体を覆うように設定した。座標軸は世界測地系を用いている。2区の20M杭

の X 座標は 206870.000、Y 座標は 53840.000 である。3 区の 12C 杭の X 座標は 206950.000、Y 座標は 53740.000 である。大グリッドの名称は北西隅の杭を基準として東西方向をアラビア数字、南北方向をアルファベットとし、この組み合わせによって表示している。大グリッドはさらに 2m 方眼に区分して 1 から 25 の小グリッドに分割し、「20M1」「13D1」のように呼称した。座標北は真北に対し 0 度 22 分 29 秒西偏し、磁北は真北に対し 7 度 20 分 0 秒西偏する。

### 3) 調査方法

#### ①事前準備

1 区には松などの樹木やブロックで作られた石畳があった。2 区には樹木や鉄筋造りの連絡通路、焼却炉などがあり、テニスコートは周囲全面にフェンスが巡らされていた。また周辺には体育設備や排水溝などが設置されていたので、調査に当たってはこれら全ての撤去や移設を先行した。

改築工事に必要な作業区域は施設課と学校との協議で決まっていたので、調査も同じ作業区域を使用した。作業区域内は関係者以外立ち入り禁止とし、全面を高さ 2m の鋼矢板で囲った。

3 区は体育館および武道場であった。解体業者によって照明や床・仕切り壁などを撤去した後に、確認調査を実施した。調査の結果から、解体工事を中断し、体育館の躯体を残したまま本調査を実施することとなった。調査では 1・2 区同様解体作業区域を作業区域として利用し、全て鋼矢板で囲い、関係者以外立ち入り禁止とした。

#### ② 1・2 区の調査方法

表土などの掘削残土は、量的に調査区域内に全てを仮置きすることができなかった。周辺は住宅密集地で道幅も狭く小・中学校の通学路にもなっていることから、大型ダンプによる頻繁な場外搬出も不可能と考えられた。このため 1 区調査後に 1 区を埋め、2 区の西側に張出した凸部を調査し、終了後これを埋めて 2 区東側の長方形部分を調査することとなった。表土ほか掘削残土は埋めた場所に積み、安全確保のため重機で整形した。

また、第 3 次調査の結果では土層の堆積状況を明確に掴めていなかった。調査環境の諸条件と期間とを考慮し、機械掘削開始前に小型重機によるトレンチ調査を行い、層序の確認をすることとした。幅 1m 前後で 5 本のサブトレンチを設定し、遺構確認面が見えた段階で掘り下げを止めた。層序を確認し、どの層まで機械掘削が可能か検討し、2 区の調査を実施した。

#### ③ 3 区の調査方法

3 区の表土および掘削残土は体育館内に仮置きした。残土山は安全のため重機で整形した。

#### ④包含層掘削・遺構検出・遺構掘削

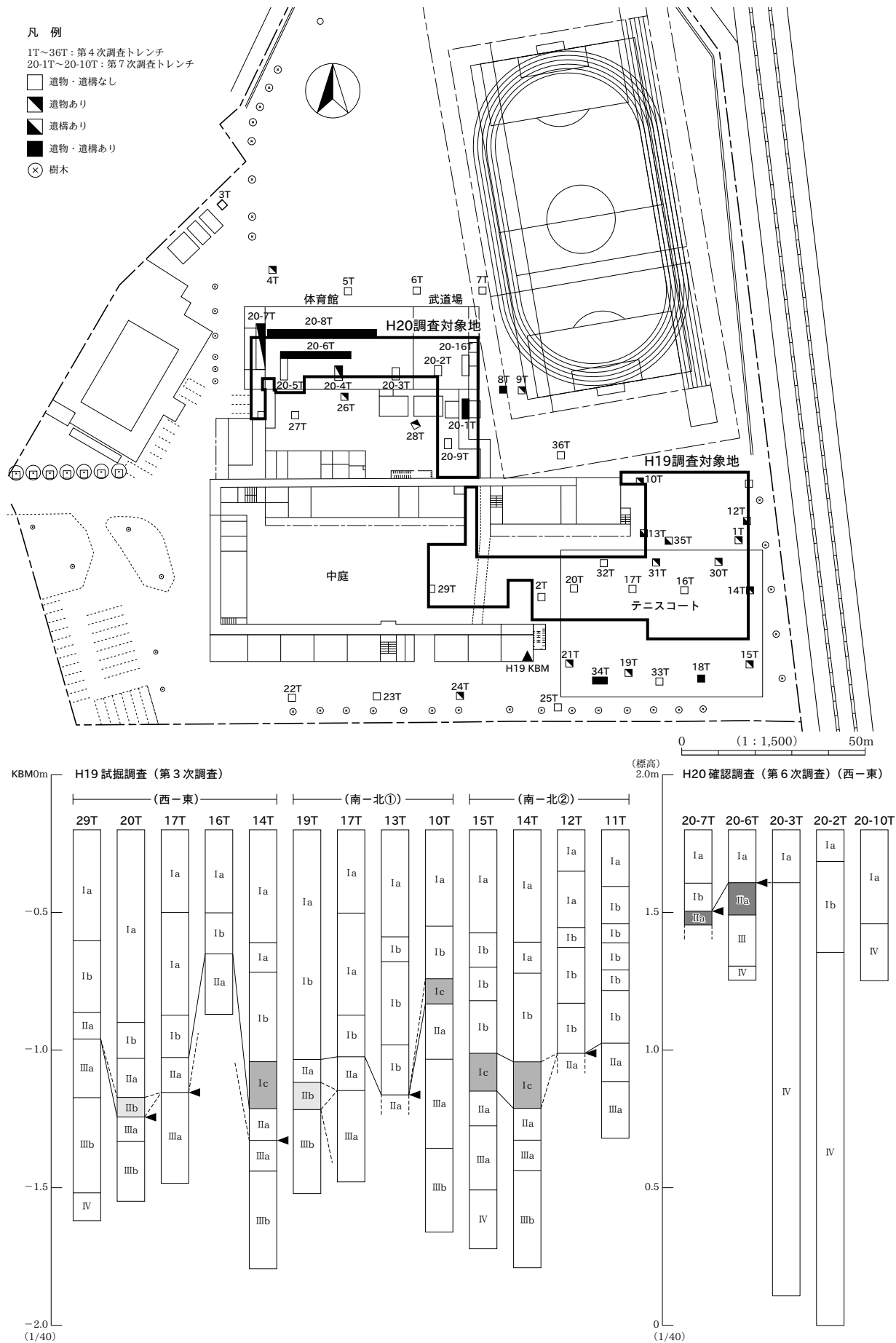
1 区・2 区の遺物包含層(Ⅲb・Ⅲc層)は 2 区の一部に確認でき、1 区と 3 区では確認できなかった。表土から遺構確認面までは、遺構・遺物の発見に努め、重機で慎重に掘り下げた。遺物が多く出土した部分は重機掘削は行わず、人力で掘り下げたが、機械掘削が主体的であった。掘削残土は重機で調査区外へ搬出した。その後 1・2 区の遺構確認面であるⅣa層上面を、3 区の遺構確認面であるⅢ層上面を人力で精査し遺構検出に勤めた。遺構は人力で掘削した。掘削残土はベルトコンベアで調査区外に搬出した。

⑤遺物の取り上げ 遺物は、包含層や攪乱層から出土したものは小グリッド単位で層位と日付を記入して取り上げた。遺構出土遺物は重要と考えられたものは、微細図を作成し、位置の測量をしてから番号を付して取り上げた。それ以外は各遺構とも層位一括で取り上げた。

⑥自然科学分析 古環境推定や土地の利用条件を考察するためのプラントオパール分析を行った。また SK13 からは遺物がまとまって出土しており、遺物の出土層から炭化材も出土したことから、この炭化材の樹種同定と放射性炭素年代測定を専門業者に委託して実施した。結果は第 VI 章にまとめた。

⑦実測・写真 実測図は断面図を 1/20 で作成した。平面図測量はトータルステーションを使用し全て国家座標(世界測地系)で記録した。1・2 区では、略図や遺構断面図は臨時職員が実測し、平面測量などは業者に委託

第2節 発掘調査



第3図 試掘・確認調査位置図および土層柱状図

### 第3次調査 土層注記

- I a層 グラウンド・テニスコート盛土。
- I b層 黒色細砂  
旧表土に由来すると思われるが、攪乱が激しい。古代～現代までの遺物が混入している。
- I c層 黒色腐食細砂  
腐食により土壌化した締まりの強い砂丘砂で、本来の表土と思われる。平安時代の遺物を包含する。
- II a層 明褐色～暗灰褐色粘質シルト  
ほぼ全ての試掘坑で確認されているが、表層部分は削平されていることが多い。8T、28T等良好な地盤では粘性の乏しい褐色土壌となるが、低湿地地盤では灰褐色の粘土層としてあらわれる。中世および平安時代の遺構確認面と思われる。
- II b層 暗色粘土  
調査地の南部で確認され、白色の粘土小塊を含む。平安時代の遺物を比較的多く含む。III層との境界が波状に荒れることが多く、遺構の可能性もあるが、比較的広い範囲に分布するため、今回の調査では包含層とした。
- III a層 灰白色～明褐色シルト  
粘土質のシルト。II b層の遺構確認面。
- III b層 灰色シルト  
粘質はIII a層より弱い。
- IV層 灰色～青灰色細砂  
未腐食・未固結の砂層。5T、6Tでは表土直下から確認される。今回の調査では基盤となる砂丘砂と認識したが、粒度は比較的粗く、川砂に似る。

◀ 遺構確認面

### 第6次調査 土層注記

- I a層 黄褐色砂を主体とした盛土砂。
- I b層 暗褐色砂を主体とした攪乱層。  
古代～近代遺物が出土する。
- II a層 明褐色シルト層。【遺構確認面】
- II b層 灰白色シルト層。
- II c層 灰色シルト層。
- III 層 暗褐色砂層（いわゆるクロスナ）。
- IV 層 黄白色砂層（砂丘基盤層）。

◀ 遺構確認面

して実測した。3区では、略図は臨時職員が実測し、遺構断面図・平面測量などは業者に委託して実測した。

写真は空中写真以外の写真記録は全て調査員が撮影した。35mm版および6×7版カメラを使用し白黒フィルム・カラーポジフィルムを適宜併用した。調査終了状況写真は1区と2区西側は校舎の屋上から撮影し、2区東側は高所作業車を使用して撮影した。3区はローリングタワーから撮影した。また2区は調査の進捗に合わせて西側終了後と東側終了後にそれぞれラジコンヘリコプターを使用した空撮を実施した。

## B 調査経過

1) 撤去工 平成19年5月1日から5月21日まで鉄筋造渡り廊下やテニスコートのフェンス・焼却炉などの撤去工事、樹木の伐採や移植、作業区域の仮囲い設置工事などの準備工事を実施した。この間に仮設事務所の設置とベルコン用の電気配線工事を行った。

2) 1区 5月21日から表土除去を開始した。表土直下からコンクリートの基礎やガラが多く出てきた。遺物が出土した段階で掘り下げを止めて、土層の観察を行ったが、遺物が出土した周辺だけIV a層が残っており、ここ以外は下水敷設に伴う工事で掘削され全壊している事が判明した。そこでこの他に2か所トレンチを設定し、1区内の遺跡の遺存状況を確認したところ、1区内は遺跡が全壊している事が判明したので、土層堆積状況の記録と完掘写真を撮って調査終了とした。5月30日に埋め戻しを行った。

3) 2区① 前述のとおりトレンチ調査を実施し、層序の確認を行った。その後2区西側の調査を実施した。2区西側完掘後は写真を撮り、図面等の記録類の確認をして、2区東側の掘削残土で埋め戻した。

5月21日から31日にトレンチ調査を実施し、6月1日から表土除去を開始した。6月19日に完掘写真を撮り、21日に空撮した。25日には、亀田中学校向けに、遺跡紹介を含めた簡単な現地説明会を実施した。生徒25名、校長ほか教諭2名が参加し、発掘された遺跡を見学し、出土品に触れるなどの体験学習を行った。亀田中学校では平成17年にも総合学習で日水遺跡の発掘体験をしている。

4) 2区② 2区西側の調査終了後、東側（主にテニスコート部分）の調査に入った。6月26日から表土除去を開始した。7月28日に市民向けに現地説明会を実施し、107名の参加者があった。8月1日の午前中に高所作業車から完掘写真を撮り、午後から空撮を行った。8月2日に下層の有無を確認するためトレンチを1か所設定して試掘した。試掘の結果、下層は無いことが確認された。その後、記録類の確認を行い、仮設事務所の撤去など後始末を行って、8月10日に調査を終了した。

最終的な発掘調査面積は、1区は上端約100.6m<sup>2</sup>・下端約38.9m<sup>2</sup>、2区は上端約1,744.7m<sup>2</sup>・下端約1,703.7m<sup>2</sup>である。

5) 3区 調査は、年内に体育館を解体し、年明け直後から建設用重機が搬入されるという厳しいスケジュールの中で行うこととなった。11月5日から仮設事務所等の建て込みを行った。11月8日から表土除去を開始した。表土からはコンクリートくずなどが多く出土し、体育館のコンクリート基礎が露出するなど、遺構確認面



### 第3節 整理作業

までの土層は自然堆積層とは考えられなかった。遺構と推測された痕跡も覆土はマーブル状に、あるいは掘り返されたような状況であった。11月11日から遺構掘削を開始した。3区は体育館の床と照明を取り除き、屋根と外壁を残したままで行った。雨天など悪天候の影響を受けずに進めることができたが、季節柄悪天候の日が多く、室内は暗く光量不足であったので、夜間工事などで使用するエンジン式のバルーンライトを3基導入した。遺構写真はライト有無の両条件で撮影したが、ライトが無いとほとんど撮影はできなかった。11月22日にローリングタワー上から完掘写真を撮影した。23日から25日は図面類のチェックと遺構個別写真撮影を行い、25日に調査を終了した。3区の調査面積は上端約410.7m<sup>2</sup>・下端約394.3m<sup>2</sup>である。

#### C 調査体制

【平成19年度 第4次調査（1区2区の調査）】

調査主体	新潟市教育委員会（教育長：佐藤満夫）
所管課	新潟市歴史文化課（課長：倉地一則 課長補佐：山田一雄 埋蔵文化財係長：渡邊朋和）
事務局	新潟市埋蔵文化財センター（所長：山田光行）
調査担当	新潟市埋蔵文化財センター 副主査 朝岡政康
調査員	新潟市埋蔵文化財センター 主査 立木宏明 新潟市埋蔵文化財センター 主事 潮田憲幸（5/21～5/24）

【平成20年度 第7次調査（3区の調査）】

調査主体	新潟市教育委員会（教育長：佐藤満夫）
所管課	新潟市歴史文化課（課長：倉地一則 課長補佐：山田一雄 埋蔵文化財係長：渡邊朋和）
事務局	新潟市埋蔵文化財センター（所長：山田光行）
調査担当	新潟市埋蔵文化財センター 主査 朝岡政康
調査員	新潟市埋蔵文化財センター 副主査 潮田憲幸

### 第3節 整理作業

#### A 整理方法

1) 遺物 第3次調査と第6次調査で出土した遺物はコンテナ（内径54.5×33.6×10.0cm）で0.5箱分、第4次調査は土器40箱・土壌洗浄後採取遺物（種実類）2箱・木製品5箱で、第7次調査は土器17箱・土壌洗浄後採取遺物（種実類）1箱・木製品5箱であった。その他金属製品が両調査合わせて1箱分出土している。

遺物のうち、土器の整理作業は、①洗浄→②注記→③グリッド別・種別の重量計測および遺構出土遺物の器種ごとの重量・個体数計測→④接合→⑤補修→⑥報告書掲載遺物の抽出→⑦実測図作成→⑧観察表作成の順で行った。第4次調査では発掘調査期間中に①・②を現場で行い、以降は市埋文センターで行った。第7次調査は全て市埋文センターで行った。

木製品は、①洗浄→②報告書掲載遺物の抽出→③実測図作成の順で進め、第4・7次調査で出土した曲物3点は実測図作成後、専門の業者へ委託し保存処理を施した。

井戸の覆土は下層を中心に採取し、水洗時にふるいを使用し種実類などの遺物を採取した。

2) 遺構 測量業者が作成した遺構平面図を1/20で出力し、手取りによる1/20遺構断面図との整合作業を行った。

## B 整理経過

出土遺物は種別・地点別に分類し、報告書作成のための重量・点数計測、接合・補修、実測図作成、写真撮影を行った。遺構測量図は、原図の確認作業後、平面図はデジタルデータで、断面図はその原図をデジタル図化編集業者に渡し、校正作業を行った。並行して現場記録写真の整理やフィルム写真のデジタル化を行い、報告書掲載用写真を抽出した。図版レイアウト・執筆ほか報告書の編集は市埋文センターで行った。

## C 整理体制

【平成 19 年度整理作業 第 4 次調査（1 区 2 区の調査）】

調査主体	新潟市教育委員会（教育長：佐藤満夫）
所管課	新潟市歴史文化課（課長：倉地一則 課長補佐：山田一雄 埋蔵文化財係長：渡邊朋和）
事務局	新潟市埋蔵文化財センター（所長：山田光行）
調査担当	新潟市埋蔵文化財センター 主査 朝岡政康
調査員	新潟市埋蔵文化財センター 主査 立木宏明

【平成 20 年度整理作業 第 7 次調査（3 区の調査）】

調査主体	新潟市教育委員会（教育長：佐藤満夫）
所管課	新潟市役所歴史文化課（課長：倉地一則 課長補佐：山田一雄 埋蔵文化財係長：渡邊朋和）
事務局	新潟市埋蔵文化財センター（所長：山田光行）
調査担当	新潟市埋蔵文化財センター 主査 朝岡政康

【平成 21 年度整理作業】

調査主体	新潟市教育委員会（教育長：佐藤満夫）
所管課	新潟市役所歴史文化課（課長：倉地一則 課長補佐：頓所洋一 埋蔵文化財係長：渡邊朋和）
事務局	新潟市埋蔵文化財センター（所長：山田光行）
調査担当	新潟市埋蔵文化財センター 主査 朝岡政康



亀田中学校生徒による遺跡見学会（6月25日）



現地説明会（7月28日）

# 第Ⅳ章 遺 跡

## 第 1 節 概 要

三王山遺跡は亀田砂丘の南斜面に位置し、砂丘縁辺に堆積した沖積層上に立地する。この場所は亀田中学校ができる以前（昭和 25 年以前）は、標高 6m ほどの小高い丘があり、「三王山」と呼ばれていたらしく、これが遺跡名の由来となっている〔酒井 1980〕。遺構確認面の標高は、1・2 区は 1.2m ～ 1.3m、3 区は 1.6m 前後である。各調査区ともに北側にあるグラウンドに向かって標高が高くなる。2 区の表土除去時には遺構確認面（Ⅳ a 層もしくはⅣ b 層）の上に、本来Ⅳ a 層の下に堆積しているはずの黒褐色砂層が堆積していた。

1・2 区の遺構確認面（Ⅳ a 層）までの堆積状況は、一部に自然堆積層が認められたのみで、ほとんど全ての区域で削平を受け、Ⅳ a 層上面もしくはそのものも広い範囲で削平されていた。3 区では遺構確認面（Ⅲ層）より上層は全て客土であり自然堆積層は全く残っていなかった。Ⅲ層の上面部分も削平を受けている可能性が高い。3 区の遺構確認面は西から東に向かって、粘性の強いシルト面（Ⅲ層）→黒褐色砂（Ⅳ層 砂丘砂）の面→黄褐色砂（Ⅴ層 砂丘砂）の面が広がっていた（図面図版 17、写真図版 4）。

発見された遺構は、井戸・土坑・性格不明遺構・溝・小土坑（Pit）などである。3 区で発見された井戸以外の遺構は近世、あるいは近現代の耕作などに関わる痕跡である可能性が高い。遺物は、古代の須恵器・土師器、中世の珠洲焼や青磁などが出土しているが、量は少ない。木製品は井戸を中心に曲物や井戸枠、井戸枠の部材などが出土している。金属製品では刀子と推測されるもの、鉄滓などが僅かながら出土している。

## 第 2 節 層 序

### A 1・2 区の層序

1・2 区は前述したように相当な範囲で削平されている。層序は地表面から遺構確認面まで大きく 3 層に分かれる。

- I 層 テニスコートやグラウンドの土。盛土層。テニスコート部分ではこの盛土層の下に砂利が敷かれている。
- II 層 黒褐色～黄褐色砂またはシルト 盛土層。コンクリート建造物の残骸が多く混ざる。明らかに他所からもたらされており、グラウンドやテニスコートの造成に当たって転圧されているため、非常にしまっている。砂丘砂と考えられる黒色砂や黄褐色砂が大部分を占めることから、元々の「三王山」部分の削平土か周辺砂丘の削平土と考えられる。
- III 層 褐色～黄褐色シルト さらに a～e に細分される。III b・III c 層は古代の遺物包含層で、自然堆積層と考えられる。粘性ややあり。しまりややあり。径 3mm の炭化物少量混入。2 区西側のみに認められる。III d・III e 層は削平後の盛土層と考えられる。
- Ⅳ a 層 灰黄色シルト 粘性ややあり。しまりややあり。古代～近世の遺構確認面。21L・22L グリッド付近は上面が削平され、灰色が強い。
- Ⅳ b 層 灰オリーブ色シルト 粘性なし。しまりあり。砂質が非常に強い。2 区東側の遺構確認面であるが、Ⅳ a 層が完全に削平されているため、本来の遺構の形状は不明である。
- V 層 暗灰黄色シルト 粘性ややあり。しまりあり。
- VI 層 灰黄色～暗灰黄色シルト 粘性ややあり。しまりややあり。a～d に細分される。噴砂の影響を受け



砂とシルトが混ざり合っている。

Ⅶ 層 黄褐色砂 砂丘砂。ほとんどの井戸はⅦ層上面まで掘り込んでいて、Ⅵ層とⅦ層の間が透水層と考えられる。

### B 3 区の層序

3 区の遺構確認面までは大きく 2 層に分かれる。

- I 層 黄褐色シルト 遺構確認面であるⅢ層のシルトに類似する。Ⅱ層と混ざり合いただらに存在する。耕作による天地換えなどで浮いてきたか、他所から運ばれたものと推測する。
- Ⅱ 層 黒褐色シルト 粘性ややあり。しまりあり。砂質強い。Ⅰ層のシルトブロックが多く混入する。コンクリート片などが入る。他所からもたらされたか、この地の黒砂層が掘り返された結果浮いたものと推測する。
- Ⅲ 層 黄褐色～オリーブ褐色シルト 粘性あり。しまりややあり。1・2 区のⅣ a 層に相当する。既存体育館建設時のものと考えられるコンクリートの基礎やブロック列などがあり、部分的にかなり攪乱されている。
- Ⅳ 層 黒褐色～黒色砂 粘性なし。しまりあり。砂丘形成層。遺物は全く出土しなかった。1・2 区では確認されなかった。
- Ⅴ 層 灰黄色～暗灰黄色砂 粘性なし。しまりあり。砂丘形成層。1・2 区のⅦ層に相当する。

## 第 3 節 遺 構

遺構番号は第 4 次調査 (1・2 区) と第 7 次調査 (3 区) とで分けて付した。それぞれの調査区で遺構の種別に関係なく通し番号で付した。両調査を通して発見された遺構は、井戸 (SE) 17 基・土坑 (SK) 82 基・性格不明遺構 (SX) 19 基・溝 (SD) 28 条・小土坑 (Pit) 386 基である。主要遺構の計測値は別表 1 に示した。奈良・平安時代と推測される遺構は古代、鎌倉・室町時代と推測される遺構は中世と略記した。

### A 1・2 区の遺構

1 区から遺構は発見されなかった。調査区の大半は上下水道工事や造庭工事などで掘り返され、遺跡はほとんど残っていなかった。一部に遺物包含層Ⅲ層と遺構確認面Ⅳ a 層が残っており、古代の須恵器や土師器が出土した (図版 33 35～38)。Ⅳ a 層の標高は 1.00m 前後で、2 区と比べ標高差はほとんど無い。

2 区の遺構確認面Ⅳ a 層の標高は 1.00m ～ 1.35m、Ⅳ b 層の標高は 0.90m 前後である。Ⅳ b 層で発見された遺構は、最大 0.45m 前後削平されている。

2 区で発見された遺構は、井戸 (SE) 7 基・土坑 (SK) 12 基・性格不明遺構 (SX) 18 基・溝 (SD) 10 基・小土坑 (Pit) 44 基である。以下に説明する。

#### 1) 井 戸 (SE)

SE20 (図版 13、写真図版 6)

18021・1901 に位置する。遺構確認面はⅣ b 層である。調査区北東端に位置し、一部調査区外へ広がる。上端の平面形は円形、断面形は漏斗状である。確認できた規模は上端で長軸 1.52m、深さ 0.46m、底面標高は 0.5m である。覆土は 4 層に分かれる。底面から曲物出土したが、腐食が進み覆土と一体化していたため取上げできなかった。調査の後半に大雨が降ったときに崩壊した。中世と推測される。

SE25 (図版 13、写真図版 6)

19N11 に位置する。遺構確認面はIV b 層である。上端の平面形はほぼ円形、断面形は箱形である。規模は上端で長軸 0.84m・短軸 0.77m で、深さ 0.4m、底面標高は 0.58m である。覆土は 2 層に分かれる。遺物は出土していない。中世と推測される。

SE31 (図版 13、写真図版 6)

19M2・3 に位置する。遺構確認面はIV b 層である。上端の平面形は円形、断面形は漏斗状である。規模は上端で直径 0.94m、深さ 0.6m、底面標高は 0.38m である。覆土は 4 層に分かれる。1 層から珠洲焼甕・鉄滓が出土している。1 層ではあるが、IV a 層が削平されていることから考えると、覆土中位付近からの出土と捉えたい。底部には曲物が据えられていた。この底部は曲物の幅分だけ掘られてあり、井戸掘削に当たっては曲物を準備してから掘っている様子がうかがえる。中世と推測される。

SE38 (図版 13、写真図版 6)

19M13・14・18・19 に位置する。遺構確認面はIV b 層である。上端の平面形は楕円形、断面形は皿形である。規模は上端で長軸 2.44m、短軸 2.03m、深さ 0.55m、底面標高は 0.43m である。覆土は 7 層に分かれる。井戸枠が設置された井戸であるが、井戸側は腐食が進み、板の内側の表面部分だけが覆土に張り付くように残っていた。取上げは不可能であったため、覆土として掘り下げた。底部から土居桁が組んである状態で出土した。1 層から土師器無台碗細片が出土している。平安時代と推測される。

SE39 (図版 13、写真図版 7)

19M17・18・22・23 に位置する。遺構確認面はIV b 層である。上端の平面形はほぼ円形、断面形は箱形である。規模は上端で長軸 1.87m、短軸 1.79m、深さ 0.44m、底面標高は 0.51m である。覆土は 6 層に分かれる。3 層から縄文土器深鉢と推測される細片・土師器長甕体部・礫が出土している。このほかに、いずれも細片であるが、3 層から土師器小甕、4 層から須恵器無台杯・土師器無台碗が出土している。平安時代と推測される。

SE41 (図版 14、写真図版 7)

19L10・19M6 に位置する。遺構確認面はIV b 層である。上端の平面形は円形、断面形は漏斗状である。規模は上端で直径 1.12m、深さ 0.75m、底面標高は 0.15m である。覆土は 5 層に分かれる。5 層から須恵器有台杯・須恵器無台杯の細片が出土している。底部には曲物が据えられていた。SE31 同様、曲物の幅分だけ掘られてあった。掘り形や、曲物の据え方・覆土の様相が SE31 と近似していること、距離が近いことなどから、中世と推測される。

SE42 (図版 13、写真図版 7)

19M11・16 に位置する。遺構確認面はIV b 層である。上端の平面形はほぼ円形、断面形は台形である。規模は上端で長軸 0.82m・短軸 0.77m、深さ 0.26m、底面標高は 0.71m である。覆土は 2 層に分かれる。遺物は出土していない。覆土の様相が SE31・SE41 と近似していることから、中世と推測する。

2) 土 坑 (SK)

SK13 (図版 14、写真図 7・8)

21I10・21J6・11 に位置する。遺構確認面はIV a 層である。上端の平面形は楕円形、断面形は皿形である。遺構の西側 21J11 付近は後世の削平により一部失われている。規模は上端で長軸 2.67m・短軸 1.26m、深さ 0.16m、である。覆土は 3 層に分かれる。2 層から須恵器有台杯・須恵器無台杯、土師器小甕・土師器長甕が出土した。このほかに、2 層から須恵器無台杯細片・土師器小甕細片・土師器長甕細片・礫片・鍛冶関連遺物・炭化物 0.35g が出土している。奈良時代と推測する。遺構覆土および出土炭化物について自然科学分析を行った。詳細は第 VI 章に記した。

SK28 (図版 14、写真図版 8)

18N15 に位置する。遺構確認面はIV b 層である。調査区北辺に位置し、南側約半分について調査した。上端

の平面形は円形と推測される。断面形は半円形である。確認できた範囲での規模は、上端で長軸 1.14m、深さ 0.33m である。覆土は 2 層に分かれる。遺物は出土していない。遺構直上層が水田耕土と考えられることから遺構の所属時期は不明である。

**SK30** (図版 14、写真図版 8)

22M16・17 に位置する。遺構確認面はIV a 層である。上端の平面形は楕円形、断面形は皿形である。規模は上端で長軸 0.60m・短軸 0.35m、深さ 0.13m である。覆土は 2 層である。遺物は出土していない。古代と推測される。

**SK33** (図版 14、写真図版 8)

22K9 に位置する。遺構確認面はIV a 層である。遺構は調査区外へ広がっていると考えられる。上端の平面形は不整形、断面形は半円形である。確認できた範囲で規模は、上端で長軸 1.14m・短軸 0.49m、深さ 0.25m である。覆土は 2 層に分かれる。1 層から土師器無台椀・土師器長甕、2 層から須恵器無台が出土している。このほかに 1 層から土師器無台椀細片・土師器長甕細片・土師器鍋細片が出土している。平安時代と推測される。

**SK34** (図版 14、写真図版 8)

21L23 に位置する。遺構確認面はIV a 層であるが上面の大半は削平されている。上端の平面形は長方形、断面形は皿形である。規模は上端で長軸 1.18m・短軸 0.88m、深さ 0.16m である。覆土は 2 層に分かれる。1 層から土師器小甕細片が出土している。平安時代と推測される。

**SK35** (図版 9、写真図版 9)

22K10・22L6 に位置する。遺構確認面はIV a 層であるが上面は削平されている。上端の平面形は長方形、断面形は皿形である。規模は上端で長軸 1.72m・短軸 1.56m、深さ 0.27m である。覆土は 1 層である。1 層から礫・軽石・須恵器無台杯細片・土師器小甕細片・土師器長甕細片・炭化物 2.41g・近世陶器すり鉢が出土している。近世の遺構と推測される。

**SK37** (図版 14、写真図版 9)

19N6・7・12 に位置する。遺構確認面はIV b 層である。上端の平面形は不整形、断面形は台形である。規模は上端で長軸 1.66m・短軸 1.57m、深さ 0.35m である。覆土は 2 層に分かれる。覆土の様相が SE25・SE31・SE41 と似ており、井戸の可能性もあるが底面の形状が平坦ではないことから、土坑と判断した。1 層下面から刀子と推測される鉄製品が出土している。中世と推測される。

**SK40** (図版 15、写真図版 9)

20M4 に位置する。遺構確認面はIV b 層である。上端の平面形は円形、断面形は半円形である。規模は上端で長軸 0.61m・短軸 0.58m、深さ 0.25m である。覆土は 1 層である。遺物は出土していない。覆土の様相から中世と推測する。

**SK44** (図版 14、写真図版 9)

19L12・13 に位置する。遺構確認面はIV b 層である。遺構は調査区外へ一部広がっている。上端の平面形は不整形、断面形は皿形である。確認できた範囲での規模は、上端で長軸 1.47m・短軸 1.43m、深さ 0.11m である。覆土は 2 層に分かれる。遺物は出土していない。覆土の様相が SE41 と似ていることから、中世と推測する。

**SK52** (図版 15、写真図版 10)

21M1 に位置する。遺構確認面はIV b 層である。SK53 と隣接する。上端の平面形は楕円形、断面形は皿形である。規模は上端で長軸 0.81m・短軸 0.61m、深さ 0.12m である。覆土は 1 層である。遺物は出土していない。覆土の様相から中世と推測するが近世の可能性もある。

**SK53** (図版 15、写真図版 10)

21L5・10 に位置する。遺構確認面はIV b 層である。SK52 と隣接する。上端の平面形は楕円形、断面形は皿

形である。規模は上端で長軸 0.68m・短軸 0.49m、深さ 0.13m である。覆土は 1 層である。遺物は出土していない。SK52 同様、中世と推測するが近世の可能性もある。

**SK57** (図版 15、写真図版 10)

20L17・22 に位置する。遺構確認面はIV b 層である。上端の平面形は不整形、断面形は円形である。規模は上端で長軸 0.69m・短軸 0.58m、深さ 0.25m である。覆土は 2 層に分かれる。遺物は出土していない。覆土の様相から平安時代と推測する。

**3) 性 格 不 明 (SX)**

**SX5** (図版 15、写真図版 10)

21K7 に位置する。遺構確認面はIV a 層であるが上面は削平されている。上端の平面形は長方形、断面形は皿形である。規模は上端で長軸 0.62m・短軸 0.36m、深さ 0.10m である。覆土は 1 層である。1 層から土師器無台碗細片が出土している。平安時代と推測される。

**SX6** (図版 15、写真図版 10)

21K6 に位置する。遺構確認面はIV a 層である。上端の平面形は円形、断面形は皿形である。規模は上端で長軸 0.50m・短軸 0.38m、深さ 0.06m である。覆土は 1 層である。遺物は出土していない。古代と推測する。

**SX7** (図版 15、写真図版 11)

21J4・5・9・10 位置する。遺構確認面はIV a 層である。上端の平面形は長方形、断面形は台形である。規模は上端で長軸 3.40m・短軸 1.58m、深さ 0.71m である。覆土は 3 層に分かれる。いずれも細片であるが 1 層から須恵器無台杯・土師器無台碗・土師器長甕・礫・近世陶器鉢・近世陶器碗・器種不明近世陶器が出土し、2 層から須恵器無台杯・須恵器杯蓋・須恵器長頸瓶・土師器無台碗・黒色土器無台碗・土師器小甕・土師器長甕・礫・近世陶器皿・同碗、3 層から須恵器無台杯・土師器無台碗・近世陶器すり鉢・梅の種が出土している。3 層から近世陶器片が出土しているため近世以降である。

**SX8** (図版 15、写真図版 11)

21J15・21K11 に位置する。遺構確認面はIV a 層である。上端の平面形は長方形、断面形は皿形である。規模は上端で長軸 1.37m・短軸 0.56m、深さ 0.07m である。覆土は 1 層である。遺物は出土していない。覆土の様相から古代と推測される。

**SX16** (図版 15、写真図版 11)

21J12 に位置する。遺構確認面はIV a 層である。遺構の大半はコンクリート基礎やIV a 層上面の削平により失われている。上端の平面形は長方形と推測される。断面形は皿形と推測する。規模は不明である。深さ 0.09m である。1 層から土師器無台碗・土師器長甕が、2 層から炭化物 14.95g が出土している。平安時代と推測される。

**SX17** (図版 15、写真図版 11)

21I5 に位置する。遺構確認面はIV b 層である。IV a 層が削平されているため、遺構上面は失われている。調査区縁辺に位置し、調査区外へ広がっている。排水路により一部切られる。上端の平面形は不整形、断面形は皿形である。規模は確認できた範囲で長軸 1.07m・短軸 0.69m、深さ 0.10m である。覆土は 1 層である。いずれも細片であるが 1 層から須恵器無台杯・土師器無台碗が出土している。平安時代と推測される。

**SX18** (図版 15、写真図版 11)

21J3 に位置する。遺構確認面はIV a 層である。西端部はコンクリート基礎のため失われている。上端の平面形は楕円形と推測される。断面形は皿形である。規模は確認できた範囲で長軸 0.86m・短軸 0.80m、深さ 0.06m である。1 層から土師器鍋が出土している。このほかにいずれも細片であるが 1 層から須恵器無台杯・土師器無台碗・土師器長甕・土師器鍋が出土している。平安時代と推測される。

**SX21** (図版 10、写真図版 12)

21N24・22N4に位置する。遺構確認面はIV b層である。調査区縁辺に位置し、遺構の大半は調査区外へ広がっていると推測される。上端の平面形は円形と推測される。断面形は台形である。規模は確認できた範囲で長軸 3.22m・短軸 0.50m、深さ 0.63m である。覆土は 2 層に分かれる。遺物は出土していない。遺構覆土が直上層と同質の攪乱土であることから、近現代と推測される。

**SX22** (図版 10、写真図版 12)

22N22・23に位置する。遺構確認面はIV a層である。調査区縁辺に位置し、遺構の大半は断面調査区外へ広がっていると推測される。上端の平面形は不明、断面形は皿形と推測される。規模は確認できた範囲で長軸 0.88m・短軸 0.63m、深さ 0.20m である。覆土は 1 層である。遺物は出土していない。覆土の様相から古代と推測される。

**SX24** (図版 10、写真図版 12)

22N2・6・7に位置する。遺構確認面はIV b層である。上端の平面形は不整形、断面形は箱形である。規模は上端で長軸 2.15m・短軸 2.07m、深さ 0.47m である。1 層からほぼ完形の近現代の香炉と推測される陶器と礫が出土している。近現代と推測する。

**SX32** (図版 15、写真図版 12)

21M11に位置する。遺構確認面はIV a層である。SD1より古い。SX46に隣接する。上端の平面形は不整形、断面形は箱形である。規模は上端で長軸 1.37m・短軸 0.69m、深さ 0.19m である。覆土は 2 層に分かれる。遺物は出土していない。平安時代と推測される。

**SX46** (図版 16、写真図版 12)

21M11・12に位置する。遺構確認面はIV a層である。上端の平面形は楕円形、断面形は台形である。規模は上端で長軸 1.07m・短軸 0.57m、深さ 0.42m である。遺物は出土していない。SX32と近似することから平安時代と推測する。

**SX47** (図版 16、写真図版 12)

21L8・12・13に位置する。遺構確認面はIV a層であるが、上面の大部分は削平されている。SD2を切る。上端の平面形は不整形、断面形は半円形である。規模は上端で長軸 1.90m・短軸 1.49m、深さ 0.42m である。覆土は 1 層である。1 層から須恵器無台杯細片・土師器長甕細片が出土している。平安時代と推測される。

**SX48** (図版 16、写真図版 13)

20N1・2・6に位置する。遺構確認面はIV b層である。上端の平面形は不整形、断面形は皿形である。規模は上端で長軸 2.91m・短軸 0.93m、深さ 0.08m である。覆土は 1 層である。銭貨が出土している。判読不能であった。覆土の様相から中世の可能性が高い。

**SX51** (図版 16、写真図版 13)

21M7に位置する。確認面はIV b層である。南側はサブトレンチ 5 により失われている。上端の平面形は不整形、断面形は台形である。規模は確認できる範囲で長軸 1.15m・短軸 0.53m、深さ 0.31m である。遺物は出土していない。覆土の様相から中世の可能性が高い。

**SX55** (図版 16、写真図版 13)

21L2に位置する。確認面はIV b層である。南側はサブトレンチ 5 により失われている。上端の平面形は円形と推測される。断面形は皿形である。規模は確認できる範囲で長軸 1.14m・短軸 0.49m、深さ 0.23m である。1 層から土師器無台椀細片・軽石細片が出土している。平安時代と推測される。

**SX58** (図版 16、写真図版 14)

18M8に位置する。遺構確認面はIV a層である。SD29に隣接する。上端の平面形は不整形、断面形は皿形である。規模は上端で長軸 0.76m・短軸 0.64m、深さ 0.12m である。遺物は出土していない。周辺は包含層(Ⅲ b・



Ⅲc層)の遺存状況が悪く、Ⅳa層上面も削平されている可能性が高いため特定できないが、覆土の様相から古代～中世の遺構と推測する。

#### 4) 溝 (SD)

SD1 (図版8・9・16、写真図版13)

21J・21K・21L・21Mに位置する。遺構確認面はⅣa層である。長軸方向はほぼ東西に延びる(N-85°-E)。断面形は皿形である。溝の南西端は調査区外へ延びている。北東端はサブトレンチ5により失われているが、このトレンチより北側では検出できないことから、Ⅳa層が削平されたときに、既に壊されていた可能性が高い。確認できた規模は上端で長軸27.37m・短軸0.96m、深さ0.19mである。覆土は1層である。1層から須恵器無台杯・須恵器甕が出土しているほか、細片であるが須恵器無台杯・須恵器甕、土師器無台碗・黒色土器無台碗・土師器小甕・土師器長甕、近世陶器碗が出土している。平安時代と推測される。

SD2 (図版8・9・16、写真図版13)

21J・21K・21Lに位置する。遺構確認面はⅣa層である。長軸方向はほぼ東西に延びる(N-83°-E)。断面形は台形である。溝の南西端、北東端の状況はSD1と同様の状況で損壊している。確認できた規模は上端で長軸23.87m・短軸0.80m、深さ0.14mである。SD1と並行するようで、溝間の幅は1m前後でほぼ均一である。覆土は1層である。1層から須恵器無台杯・須恵器甕、土師器器種不明品脚部が出土しているほか、細片であるが須恵器杯蓋・須恵器無台杯・須恵器甕、土師器無台碗・黒色土器無台碗・土師器小甕・土師器長甕・土師器鍋が出土している。平安時代と推測される。

SD3 (図版8・9・16、写真図版13)

21I・21J・21K・21Lに位置する。遺構確認面はⅣa層である。長軸方向はほぼ東西に延びる(N-86°-E)。断面形は台形である。溝の南西端、北東端の状況はSD1と同様の状況である。Ⅳa層が削平されたときに、既に壊されていた可能性が高い。確認できた規模は上端で長軸50.76m・短軸0.93m、深さ0.21mである。覆土は2層に分かれる。1層から須恵器有台杯・須恵器無台杯・須恵器甕、土師器小甕・土師器長甕・土師器鍋・炭化物2.62gが出土している。平安時代と推測される。

SD4 (図版8・9・16、写真図版13・14)

21J・21Kに位置する。遺構確認面はⅣa層である。長軸方向はほぼ東西に延び(N-81°-E)、SD1～3とほぼ同じ方向である。断面形は皿形である。規模は上端で長軸6.12m・短軸0.73m、深さ0.02mである。覆土は1層である。1層から須恵器無台杯・黒色土器無台碗・土師器長甕の細片が出土している。平安時代と推測される。

SD11 (図版8・16、写真図版14)

21I・21Jに位置する。遺構確認面はⅣa層である。長軸方向はほぼ東西に延びる(N-81°-W)が、SD1～4と比較すると傾きが異なる。断面形は台形である。西端は攪乱により壊れていると推測される。確認できた規模は、上端で長軸6.98m・短軸1.07m、深さ0.29mである。覆土は2層に分かれる。1層から須恵器無台杯・須恵器長頸瓶・須恵器甕・土師器無台碗・土師器小甕・土師器長甕の細片が、2層から土師器無台碗・土師器長甕の細片が出土している。平安時代と推測される。

SD23 (図版10・16、写真図版14)

22Nに位置する。遺構確認面はⅣa層である。長軸方向はほぼ南北に延びる(N-2°-E)。断面形は皿形である。南端は調査区外へ延び、北端は削平により失われている。確認できた規模は、上端で長軸4.80m、短軸1.00m、深さ0.10mである。覆土は1層である。1層から須恵器甕・土師器無台碗・土師器長甕の細片が出土している。平安時代と推測される。

SD29 (図版11・12・16、写真図版14)

18Mに位置する。遺構確認面はIV a層である。長軸方面はほぼ東西に延びる(N-73° -E)。断面形は皿形である。北東端はコンクリート基礎により失われるが、調査区外へ延びていると推測される。確認できた規模は上端で長軸 6.44m・短軸 0.94m、深さ 0.11m である。覆土は2層に分かれる。遺物は出土していない。周辺は包含層(Ⅲb・Ⅲc層)の遺存状況が悪く、IV a層上面も削平されている可能性が高いため特定できないが、覆土の様相から古代～中世と推測する。

SD49 (図版 11・16、写真図版 15)

19M・20Mに位置する。遺構確認面はIV b層である。長軸方向は北西－南東に延びる(N-22° -W)。断面形は半円形である。規模は上端で長軸 5.92m・短軸 0.58m、深さ 0.12m である。覆土は1層である。遺物は出土していない。周辺の井戸が古代～中世であることから、この中に納まる時期の遺構と推測する。

SD50 (図版 10・16、写真図版 15)

21M・21Nに位置する。遺構確認面はIV b層である。長軸方向はほぼ東西に延びる(N-90° -W)。東端は調査区外へ延び、西端はサブトレンチ 5により切られるが、IV a層が削平されているため、SD1～SD3との関係はつかめなかった。断面形は皿形である。確認できた規模は上端で、長軸 12.14m・短軸 1.59m、深さ 0.10m である。覆土は1層である。遺物は出土していない。方向がSD1～SD3と近似していることなどから、平安時代の遺構と推測する。

SD54 (図版 9・16、写真図版 15)

20L・21Lに位置する。遺構確認面はIV b層である。長軸方向は北西－南東に延びる(N-18° -W)。北端は調査区外へ延びる。南端はサブトレンチ 5により切られる。断面形は皿形である。確認できた規模は上端で、長軸 7.90m・短軸 0.74m、深さ 0.11m である。覆土は1層である。遺物は出土していない。古代～中世の遺構と推測する。

## 5) 小 土 坑 (Pit)

P9 (図版 8)

21J12・13に位置する。SD3を切る。上端の平面形は円形、断面形は筒形である。確認できた規模は上端で、長軸 0.46m・短軸 0.18m である。1層から土師器無台椀・土師器長甕の細片が出土している。平安時代と推測される。

P10 (図版 8)

21J18に位置する。SD2を切る。南端は調査区外へ広がる。上端の平面形は円形、断面形は筒形である。確認できた規模は上端で、長軸 0.52m・短軸 0.20m、深さ 0.30m である。1層から土師器長甕細片が出土している。平安時代と推測される。

P12 (図版 8)

21J9・10に位置する。SX7に切られる。上端の平面形は円形、断面形は筒形である。確認できた規模は上端で、長軸 0.44m・短軸 0.28m である。1層から土師器無台椀、礫細片が出土している。平安時代と推測される。

P36 (図版 9)

22K9に位置する。上端の平面形は円形、断面形は筒形である。規模は上端で長軸 0.32m・短軸 0.26m である。1層から土師器長甕細片が出土している。平安時代と推測される。

P45 (図版 9)

22K14に位置する。上端の平面形は円形、断面形は筒形である。規模は上端で長軸 0.29m・短軸 0.28m である。1層から土師器長甕細片が出土している。平安時代と推測される。

## B 3 区 の 遺 構

3区では、井戸(SE) 10基・土坑(SK) 58基・性格不明遺構(SX) 7基・溝(SD) 13基・小土坑(Pit) 332基と畝状遺構が発見された。

後述するが、調査区は全域にわたり、耕作などによる掘り返しや土木工事など削平が行われており、遺構確認面(特にⅢ層上面)は全域にわたり上面が削平されていると推測される。従ってⅢ層より上層は自然堆積層が存在していない。このような事情から、井戸以外の遺構は、耕作痕などを遺構と誤認している可能性や、掘り返し・削平などで損壊している遺構である可能性が非常に高いので事実報告のみとする。

### 1) 井 戸 (SE)

SE9 (図版 22、写真図版 15)

13C1・6に位置する。西端部は基礎コンクリートによって失われている。上端の平面形は東西方向にやや膨らむ円形と推測される。断面形はすり鉢形である。確認できた規模は上端で長軸 1.92m・短軸 1.84m、深さ 1.5m、底面標高 -0.59m である。覆土は 6 層に分かれる。Ⅵ層まで掘り抜いている。Ⅴ層は確認できなかった。黒褐色シルトと灰色シルトのブロックが混ざり合う土が堆積していることから、自然に埋没したのではなく、何らかの掘削土で埋めている様相を呈す。1 層から土師器長甕細片が出土している。このほか 2 層から珠洲焼甕細片が、6 層から須恵器甕細片が出土している。時期等詳細は不明であるが中世と推測される。

SE28 (図版 22、写真図版 15)

11C17・22に位置する。東側は土木工事によって失われている。上端の平面形は円形と推測される。断面形は台形である。確認できた規模は上端で直径 0.44m、深さ 1.34m、底面標高 0.18m である。覆土は 3 層に分かれる。遺物は出土していない。古代～中世と推測する。

SE30 (図版 22、写真図版 15)

12C19・20・24・25に位置する。南側の一部をSE96に切られる。上端の平面形は隅丸の方形に近い楕円形で、断面形は逆凸形である。覆土は 22 層に分かれる。1～14 層は井戸廃絶後堆積したもので、これら以外は井戸造成時に埋めた覆土と考える。掘り形はⅣ層を掘り抜きⅤ層まで達している。規模は上端で、長軸 2.45m・短軸 2.01m、深さ 1.44m、底面標高 -0.60m である。1 層から須恵器甕・珠洲甕(98 SE31 他と接合)・珠洲焼すり鉢が出土している。2 層からは珠洲すり鉢が出土している。このほかはいずれも細片であるが、1 層から土師器長甕、2 層から土師器無台椀・土師器小甕・土師器長甕、3 層から須恵器無台杯、9 層から土師器長甕、11 層から須恵器杯蓋、13 層から土師器無台椀・土師器長甕、14 層から須恵器無台杯・土師器無台椀・土師器小甕・土師器長甕が出土している。

また井戸枠の部材と推測される木製品が出土し、底面から曲物が出土している。曲物の取上げは 11 層以下の湧水が激しく、十分な記録は取れなかった。また曲物取り上げ直後に井戸壁面が崩落した。時期の詳細は不明であるが出土遺物から、中世と推測される。

SE31 (図版 24、写真図版 17)

12D16・21に位置する。SE96の東側の一部を切り、SE193にほとんどを切られている。確認できた範囲で、平面形は不明、断面形はすり鉢形を呈すると推測する。規模は深さが 0.88m、底面標高は 0.58m である。覆土は 7 層に分かれる。1 層から須恵器甕、2 層から珠洲甕(98 SE30 他と接合)・鉄滓が出土しているほか、いずれも細片であるが、2 層から土師器無台椀・礫、7 層から土師器無台椀・土師器長甕が出土している。出土遺物と切り合いから中世と推測され、SE30より新しい。

SE45 (図版 23、写真図版 16)

11C23・12C3・4に位置する。北側約半分は調査区外へ広がっている。SD51に切られる。遺構の上部は攪



乱されている。上端の平面形は円形を呈すると推測される。断面形は台形である。規模は確認できた範囲で直径2.72m、深さ1.43m、底面標高0.28mである。覆土は24層に分かれる。1～10層は黒褐色シルトや黒褐色砂質シルトが主体的であるが、これ以外は黄褐色シルトに黒褐色シルトブロックが混ざり合う状態であった。掘り形はIV層を掘り抜き、V層に達している。1層から須恵器杯蓋・無台杯・須恵器・土師器無台碗・土師器長甕が、3層から土師器長甕が、4層から須恵器無台杯・土師器小甕が、5層から須恵器甕・土師器無台碗・土師器長甕が、20層から須恵器無台杯・土師器無台碗・土師器長甕が出土している。また20層から種別は不明であるが木製部材が出土している。出土遺物から平安時代と推測される。

#### SE95 (図版 23、写真図版 17)

12D1・2・6・7に位置する。北側の一部は調査区外へ広がるとともに、第6次調査時に設定したサブトレンチにより一部切られている。また北西部の一部はSX341により切られる。東側の一部はSE145に切られる。SE45同様北側の遺構上部は攪乱されている。平面形は不整形円形を呈すると推測される。断面形は半円形である。確認できた範囲の規模は、上端で長軸2.60m・短軸2.38m、深さ0.93m、底面標高0.66mである。覆土は14層に分かれる。掘り形はIV層を掘り抜き、V層まで達する。1層から須恵器有台杯・須恵器無台杯・土師器無台碗・土師器長甕・土師器小甕・珠洲焼甕・近世陶器碗・礫が、2層から須恵器無台杯・須恵器甕・土師器無台碗・土師器長甕・土師器小甕が、3層から須恵器無台杯・土師器無台碗・土師器長甕・土師器小甕が、4層から須恵器無台杯・土師器無台碗・土師器長甕・土師器小甕が、5層から須恵器無台杯・土師器無台碗・土師器長甕が、6層から土師器無台碗・土師器長甕・土師器小甕が、10層から土師器小甕が、12層から須恵器甕・土師器長甕が出土している。珠洲焼甕と近世陶器碗の細片は混入と考えられることから、平安時代と推測される。

#### SE96 (図版 24、写真図版 17)

12C25に位置する。北側はSE30を切り、東側はSE31に切られる。南側の上部は攪乱されている。完掘後、湧水のため崩落した。平面形は円形と推測される。断面形は半円形である。規模は上端で長軸1.46m・短軸1.22m、深さ1.08m、底面標高0.42mである。覆土は11層に分かれる。掘り形はIV層を掘り抜き、V層まで達する。1層から須恵器無台杯・須恵器甕・土師器無台碗・土師器長甕・土師器小甕が、3層から土師器長甕・礫が出土している。切り合い関係から中世と推測される。SE30より新しく、SE31より古い。

#### SE145 (図版 24、写真図版 17)

12D6・7・11・12に位置する。SD250・SD268を切る。平面形は不整形であるが底面の掘り形を見ると、隅丸の方形のようである。断面形は台形である。規模は上端で長軸2.22m・短軸1.45m、深さ1.0m、底面標高0.58mである。覆土は7層に分かれる。掘り形はIV層を掘り抜き、V層まで達する。3層から珠洲すり鉢が出土している。このほかにいずれも細片であるが、1層から須恵器無台杯・土師器長甕が、3層から須恵器甕・土師器長甕・礫が、5層から須恵器甕・土師器長甕が出土している。中世と推測される。

#### SE193 (図版 24、写真図版 17・18)

12D16・21に位置する。SE193がSE31を切る。平面形は円形、断面形は台形である。確認できた範囲で規模は長軸1.88m・短軸1.62m、深さ1.04m、底面標高0.36mである。覆土は21層に分かれる。堆積状況から井戸枠が設置されていたものと考えられ、底部には曲物が据えられていた可能性もある。この井戸は、全体的に大きく掘り抜いてから井戸枠を設置し、その周りを残土で埋めて使用されていたものと推測される。よって18～21層は井戸枠設置後埋め戻された土層で、1～16層は井戸廃絶後堆積した土層、17層は井戸枠が腐敗したことによって堆積した土層と考えられる。さらに、9～11層が12～15層を切っていることから、井戸が廃棄され16～12層まで埋没した後、何らかの掘削行為を行っている。1～8層はこの行為後、堆積したものと考えられる。あるいは井戸廃絶後は全て人為的に埋め戻されている可能性がある。掘り形はIV層を掘り抜き、V層まで達する。2層から砥石・礫、5層から須恵器無台杯・砥石に転用された須恵器甕細片・珠洲甕(98 SE30・31他と接合)、13層から珠洲焼広口壺、14層から軽石が出土している。これ以外にはいずれも細片で

あるが5層から珠洲焼甕、8層から礫、11層から土師器無台椀、12層から須恵器甕・土師器無台椀・土師器長甕、13層から須恵器無台杯・土師器無台椀・土師器長甕、14層から須恵器無台杯・須恵器甕・土師器無台椀・土師器長甕が出土している。また井戸枠の部材と推測される木製品が出土している。切り合い関係や出土遺物から中世と推測される。

**SE283** (図版 24、写真図版 18)

13C6・7・11・12に位置する。平面形は円形と推測される。断面形は半円形である。東側半分は攪乱により失われている。南側の一部は調査区外へ広がっている。確認できた範囲で規模は、上端で1.15m、深さ0.53m、底面標高0.80mである。覆土は7層に分かれる。掘り形はIV層を掘り抜き、V層まで達する。遺物は出土していない。覆土がSE9と近似し、位置も近いことから中世と推測される。

2) 土 坑 (SK)

**SK1** (図版 25、写真図版 18)

13B9に位置する。平面形は楕円形と推測される。断面形は皿形である。遺構の東側は体育館基礎により失われている。規模は上端で長軸0.61m、深さ0.25mである。P2を切る。覆土は2層に分かれる。遺物は出土していない。

**SK3** (図版 25、写真図版 18)

13B9に位置する。平面形は不整形、断面形は箱形である。遺構の東側は体育館基礎により失われている。規模は上端で長軸1.00m、深さ0.22mである。P2に切られる。覆土は2層に分かれる。遺物は出土していない。

**SK4** (図版 25、写真図版 18)

13B4・9に位置する。平面形は円形と推測される。断面形は皿形である。東側は体育館基礎により失われている。規模は上端で長軸1.59m、深さ0.24mである。SK3を切る。覆土は2層である。1層から須恵器無台杯・土師器無台椀・土師器長甕・近世陶器椀が出土している。

**SK5** (図版 25、写真図版 18)

13B9・10に位置する。平面形は長方形、断面形は皿形である。規模は上端で長軸0.59m・短軸0.44m、深さ0.05mである。覆土は1層である。遺物は出土していない。

**SK11** (図版 25、写真図版 18)

12B24・25に位置する。平面形は不整形、断面形は皿形である。東側は体育館基礎により失われている。規模は上端で長軸0.67m・短軸0.30m、深さ0.17mである。覆土は2層に分かれる。遺物は出土していない。

**SK12** (図版 25、写真図版 18)

12B20に位置する。平面形は円形と推測される。断面形は半円形である。規模は上端で長軸0.42m・短軸0.27m、深さ0.31mである。SD21に切られる。覆土は2層に分かれる。遺物は出土していない。

**SK13** (図版 25、写真図版 19)

12B25に位置する。平面形は楕円形、断面形は半円形である。規模は上端で長軸0.49m・短軸0.41m、深さ0.20mである。覆土は6層に分かれる。1層から土師器長甕細片が出土している。

**SK14** (図版 25、写真図版 19)

12B25に位置する。平面形は不整形、断面形は半円形である。南東部はコンクリート基礎により失われている。また北西部はP15に切られる。規模は上端で短軸0.34m、深さは0.19mである。覆土は3層に分かれている。1層から土師器長甕の細片が出土している。

**SK17** (図版 25、写真図版 18)

12B20・25に位置する。平面形は楕円形、断面形は半円形である。規模は上端で長軸0.78m・短軸0.50m、深さ0.31mである。SK18を切る。覆土は3層に分かれる。1層から須恵器長頸瓶・土師器長甕細片が出土し

ている。

**SK18** (図版 25、写真図版 18)

12B20 に位置する。平面形は不整形、断面形は箱形である。底面は凹凸に富んでいる。規模は上端で長軸 1.22m・短軸 0.48m、深さ 0.13m である。SK17・P19 に切られる。覆土は 1 層である。遺物は出土していない。

**SK20** (図版 25、写真図版 18)

12B20 に位置する。平面形は不整形、断面形は台形である。規模は上端で長軸 0.72m・短軸 0.41m、深さ 0.20m である。SD21・P25 に切られる。覆土は 1 層である。遺物は出土していない。

**SK22** (図版 25、写真図版 19)

12B20 に位置する。平面形は不整形、断面形は皿形である。規模は上端で短軸 0.32m、深さ 0.15m である。SK23 に切られる。覆土は 1 層である。遺物は出土していない。

**SK23** (図版 25、写真図版 19)

12B15 に位置する。平面形は不整形、断面形は皿形ある。規模は上端で短軸 0.40m、深さ 0.19m である。SK24 を切る。覆土は 2 層に分かれる。遺物は出土していない。

**SK24** (図版 25、写真図版 19)

12B15 に位置する。平面形は不整形、断面形は半円形である。東側は体育館基礎により失われている。規模は上端で長軸 0.70m・短軸 0.67m・深さ 0.46m である。SK23 に切られる。覆土は 5 層に分かれる。遺物は出土していない。

**SK26** (図版 25、写真図版 19)

12B20 に位置する。平面形は不整形、断面形は台形である。規模は上端で長軸 0.57m・短軸 0.43m、深さ 0.14m である。SK27・P34 に切られる。覆土は 2 層に分かれる。1 層から土師器長甕の細片・礫の細片が出土している。

**SK27** (図版 25、写真図版 19)

12B20・12C16 に位置する。平面形は不整形、断面形は皿形である。規模は上端で長軸 2.12m・短軸 0.36m、深さ 0.14m である。SK26 を切り、P34 に切られる。覆土は 2 層に分かれる。遺物は出土していない。

**SK35** (図版 25、写真図版 19)

12B10・15 に位置する。平面形は楕円形、断面形は半円形である。規模は上端で長軸 0.73m、深さ 0.32m である。P165 を切り、SK36 に切られる。覆土は 2 層に分かれる。遺物は出土していない。

**SK36** (図版 25、写真図版 19)

12B15 に位置する。平面形は不整形、断面形は皿形ある。規模は上端で長軸 0.52m・短軸 0.40m・深さ 0.19m である。SK35 を切る。覆土は 1 層である。遺物は出土していない。

**SK37** (図版 25、写真図版 20)

12B5・10 に位置する。平面形は円形と推測される。断面形は皿形である。東側は体育館基礎により失われている。規模は上端で長軸 0.50m、短軸 0.20m、深さ 0.27m である。覆土は 3 層に分かれる。遺物は出土していない。

**SK42** (図版 26、写真図版 19)

11C21 に位置する。平面形は長方形、断面形は半円形である。規模は上端で長軸 0.50m・短軸 0.37m、深さ 0.37m である。P173 を切る。覆土は 5 層に分かれる。遺物は出土していない。

**SK43** (図版 26、写真図版 20)

11C16 に位置する。東側は調査区外へ広がる。平面形は円形と推測される。断面形は半円形である。規模は上端で短軸 0.36m、深さ 0.14m である。北西部は SK44 に切られる。覆土は 3 層に分かれる。遺物は出土していない。

SK44 (図版 22、写真図版 20)

11C16 に位置する。平面形は不整形と推測される。断面形は皿形である。SK43 を切る。規模は上端で長軸 1.00m、深さ 0.06m である。覆土は 1 層である。1 層から須恵器甕細片が出土している。

SK46 (図版 26、写真図版 20)

12C6 に位置する。平面形は長方形、断面形は台形である。西側は P64 に、北側は P195 に、南側は SK335 に、中心付近は P334 に切られる。遺構が複雑に絡み合い、原形は保っていないと推測される。確認できた規模は上端で短軸 0.95m、深さは 0.39m である。覆土は 1 層である。1 層から須恵器無台杯細片・土師器無台碗細片・土師器長甕細片が出土している。

SK47 (図版 26、写真図版 20)

12C1 に位置する。平面形は不整形、断面形は皿形である。SK48 を切り、P170 に切られる。規模は上端で長軸 1.17m・短軸 0.85m、深さ 0.12m である。覆土は 2 層に分かれる。1 層から土師器小甕・長甕が、4 層から瓶と推測される近世陶器片が出土している。

SK48 (図版 26、写真図版 20)

12B5・12C1 に位置する。平面形は不整形、断面形は半円形である。SK49 を切り、SK47・P216 に切られる。規模は上端で長軸 1.40m・短軸 0.65m、深さ 0.34m である。覆土は 3 層に分かれる。遺物は出土していない。

SK49 (図版 26、写真図版 20)

12B5・12C1 に位置する。平面形は不整形、断面形は半円形である。SK48・SD41 を切る。規模は上端で長軸 1.12m・短軸 0.58m、深さ 0.12m である。覆土は 2 層に分かれる。遺物は 1 層から須恵器甕細片・土師器長甕細片・土師器小甕細片が出土している。

SK50 (図版 26、写真図版 20)

12C1・2 に位置する。北側はコンクリート基礎により失われている。上部は攪乱される。平面形は不整形、断面形は台形である。P222・SD51 を切る。深さは 0.58m である。覆土は 5 層に分かれる。2 層から土師器無台碗細片・土師器鍋が出土している。

SK52 (図版 26、写真図版 21)

12C2・3 に位置する。平面形は不整形、断面は皿形である。P223 に切られる。底部には Pit 状の窪みが見られるが、覆土に差異は認められなかった。規模は上端で長軸 1.23m・短軸 1.10m、深さ 0.44m である。覆土は 5 層に分かれる。遺物はいずれも細片であるが、1 層から須恵器無台杯・土師器長甕・珠洲焼甕が、2 層から土師器無台碗・鉄滓が出土している。

SK53 (図版 26、写真図版 21)

12C7 に位置する。平面形は楕円形、断面形は半円形である。P54・P224 に切られる。底部に Pit 状の窪みが見られる。規模は上端で長軸 1.55m・短軸 0.88m、深さ 0.41m である。覆土は 2 層に分かれている。1 層から須恵器杯蓋・須恵器無台杯・須恵器甕・土師器無台碗・土師器長甕・礫が出土している。

SK55 (図版 26、写真図版 21)

12C7 に位置する。平面形は方形、断面形は台形である。SK56 に切られる。規模は上端で長軸 0.44m・短軸 0.44m、深さ 0.55m である。覆土は 4 層に分かれている。遺物は出土していない。

SK56 (図版 26、写真図版 21)

12C7 に位置する。平面形は不整形と推測される。断面形は皿形である。SK55 を切る。確認できた範囲で規模は、上端で長軸 0.80m・短軸 0.50m、深さ 0.04m である。覆土は 1 層である。遺物は出土していない。

SK57 (図版 26、写真図版 21)

12C7 に位置する。平面形は長方形、断面形は半円形である。P58 を切る。規模は上端で長軸 0.48m・短軸 0.42m、深さ 0.26m である。覆土は 3 層に分かれる。遺物は出土していない。



**SK59** (図版 27、写真図版 22)

12C12 に位置する。平面形は不整楕円形、断面は皿形である。SK338・SD21・P339 を切る。規模は上端で長軸 1.02m・短軸 0.88m、深さ 0.31m である。覆土は 2 層に分かれる。2 層から珠洲甕 (98 SE30・31 他と接合)・珠洲焼すり鉢・青磁碗が出土しているほか、いずれも細片であるが 1 層から礫、2 層から須恵器無台杯・土師器無台碗・土師器小甕・礫・現代の瓦が出土している。近現代の遺構である。

**SK61** (図版 27、写真図版 22)

12C16・17 に位置する。平面形は楕円形、断面形は皿形ある。規模は上端で長軸 0.87m・短軸 0.32m、深さ 0.07m である。覆土は 4 層に分かれる。遺物は出土していない。

**SK62** (図版 27、写真図版 22)

12C17 に位置する。東側は P63 に切られる。平面形は長方形、断面形は皿形である。規模は上端で長軸 0.61m・短軸 0.42m、深さは 0.18m である。覆土は 1 層である。1 層から青磁碗細片が出土している。

**SK65** (図版 27、写真図版 22)

12C17 に位置する。南側は確認調査時のトレンチにより失われている。平面形は楕円形、断面形は皿形である。SK66 を切る。規模は上端で長軸 0.61m・短軸 0.35m、深さ 0.08m である。覆土は 1 層である。遺物は出土していない。

**SK66** (図版 27、写真図版 22)

12C17 に位置する。西側は SK65 に切られる。断面形は皿形である。規模は上端で長軸 0.32m・短軸 0.35m、深さは 0.16m である。覆土は 2 層に分かれる。1 層から須恵器無台杯細片と炭化物細片が出土している。

**SK67** (図版 27、写真図版 23)

12C17・18 に位置する。平面形は不整形、断面形は皿形である。規模は上端で長軸 0.80m・短軸 0.74m、深さ 0.22m である。覆土は 2 層に分かれる。2 層から鉄滓細片・焼土塊細片が出土している。

**SK68** (図版 27、写真図版 23)

12C18 に位置する。平面形は不整形、断面形は皿形である。南側は確認調査時のトレンチにより一部失われている。確認できた規模は上端で長軸 0.57m・短軸 0.72m、深さ 0.16m である。覆土は 4 層に分かれる。遺物は出土していない。

**SK69** (図版 27、写真図版 4)

12C13・18 に位置する。平面形は不整形、断面形は台形である。SK70 を一部切り、東側は P146 に切られる。規模は上端で長軸 1.35m・短軸 0.70m、深さ 0.19m である。覆土は 1 層である。1 層から須恵器甕細片・珠洲焼すり鉢細片・近世陶器片が出土している。

**SK70** (図版 27、写真図版 23)

12C13 に位置する。平面形は不整形、断面形は皿形である。南側の一部を SK69 に切られる。規模は上端で長軸 0.98m・短軸 0.39m、深さ 0.09m である。覆土は 3 層に分かれる。遺物は出土していない。

**SK77** (図版 27、写真図版 23)

12C14・15 に位置する。平面形は不整形、断面形は皿形である。一部 SD76 に切られる。確認できた規模は上端で長軸 0.78m、短軸 0.37m、深さ 0.07m である。覆土は 1 層である。遺物は出土していない。

**SK80** (図版 27、写真図版 23)

12C8・13 に位置する。平面形は楕円形、断面形は皿形である。P144 を切る。規模は上端で長軸 0.62m・短軸 0.39m、深さ 0.07m である。覆土は 2 層に分かれる。遺物は出土していない。

**SK83** (図版 27、写真図版 24)

12C7・8 に位置する。平面形は不整形、断面形は皿形ある。西側は SK53 を切り、東側は SK84 に切られる。規模は上端で長軸 1.13m・短軸 1.01m、深さ 0.12m である。覆土は 3 層に分かれる。1 層から近世陶器碗細

片が出土している。

**SK84** (図版 27、写真図版 24)

12C8 に位置する。平面形は楕円形、断面形は台形である。底面は Pit が 2 基並んだような窪みになっている。SD85 を切り、SK337 に東側を切られる。規模は上端で長軸 0.98m、短軸 0.71m、深さ 0.59m である。覆土は 7 層に分かれる。遺物は出土していない。

**SK86** (図版 28、写真図版 24)

12C8 に位置する。平面形は楕円形、断面形は皿形である。SD85 を切る。規模は上端で長軸 0.44m・短軸 0.36m、深さ 0.11m である。覆土は 2 層に分かれる。1 層から須恵器無台杯細片・土師器無台椀細片が出土している。

**SK90** (図版 23、写真図版 4)

12C4 に位置する。大半が調査区外へ広がっていると推測され、一部しか確認できない。SK97 を切る。短軸 0.56m、深さは 0.14m である。覆土は 2 層に分かれる。遺物は出土していない。

**SK97** (図版 23、写真図版 4)

12C4 に位置する。北側は調査区外へ広がると推測される。SK90・SD92 に切られる。深さは 0.20m である。覆土は 3 層に分かれる。1 層から土師器無台椀細片・土師器長甕細片が、3 層から土師器長甕細片が出土している。

**SK229** (図版 28、写真図版 24)

12C4・5・9・10 に位置する。平面形は不整形、断面形は半円形である。SD92 を切る。規模は上端で長軸 0.66m・短軸 0.28m、深さ 0.29m である。覆土は 2 層に分かれる。遺物は出土していない。

**SK251** (図版 28、写真図版 25)

12D12 に位置する。平面形は不整形、断面形は皿形である。西端は SD250 に、南東端は SK276 に切られる。確認面できた規模は上端で長軸 0.93m・短軸 0.74m、深さ 0.07m である。覆土は 1 層である。1 層から土師器無台椀細片が出土している。

**SK253** (図版 28、写真図版 4)

12C4・9 に位置する。平面形は不整形、断面形は半円形である。SD92 を切る。規模は上端で長軸 0.56m・短軸 0.44m、深さ 0.23m である。覆土は 2 層に分かれる。2 層から土師器小甕細片・土師器長甕細片が出土している。

**SK257** (図版 28、写真図版 25)

12D13 に位置する。平面形は長方形、断面形は皿形である。規模は上端で長軸 1.32m・短軸 0.85m、深さ 0.09m である。覆土は 2 層に分かれる。遺物は出土していない。

**SK263** (図版 28、写真図版 25)

12D18 に位置する。平面形は楕円形、断面形は皿形である。P363 を切る。規模は上端で長軸 0.81m・短軸 0.44m、深さ 0.09m である。覆土は 2 層に分かれる。1 層から土師器長甕細片が出土している。

**SK276** (図版 28、写真図版 25)

12D12 に位置する。平面形は不整形、断面形は皿形である。SK251 を一部切る。規模は上端で長軸 0.61m・短軸 0.51m、深さ 0.05m である。覆土は 1 層である。遺物は出土していない。

**SK317** (図版 20、写真図版 4)

13D6 に位置する。平面形は楕円形、断面形は箱形である。南東部は P315 に切られる。確認できた規模は上端で長軸 0.82m・短軸 0.57m、深さ 0.29m である。覆土は 1 層である。礫が出土している。

**SK335** (図版 26、写真図版 20)

12C6 に位置する。平面形は楕円形を呈すると推測され、断面形は台形である。SK46 を切り、P336 に切られる。確認できた規模は短軸 0.83m、深さ 0.38m である。覆土は 2 層に分かれる。遺物は出土していない。

**SK337** (図版 27、写真図版 24)

12C8 に位置する。平面形は楕円形、断面形は皿形である。SD85・SK84 を切る。規模は上端で長軸 0.59m・短軸 0.52m、深さ 0.14m である。覆土は 2 層に分かれる。遺物は出土していない。

**SK338** (図版 27、写真図版 22)

12C12 に位置する。平面形は楕円形、断面形は台形である。中央部に P339 が掘り込まれている。また直上に SK59 が新たに掘り込まれている。深さは 0.63m と推定される。覆土は 3 層に分かれる。1 層から土師器長甕細片が出土している。

## 3) 不 明 遺 構 (SX)

**SX72** (図版 19、写真図版 4)

12C13 に位置する。平面形は不整形、断面形は台形である。北西部は P213 に切られる。規模は上端で長軸 0.81m・短軸 0.62m、深さ 0.14m である。覆土は 1 層である。遺物は出土していない。

**SX94** (図版 19、写真図版 4)

12C9・10 に位置する。平面形は不整形、断面形は台形である。規模は上端で長軸 0.97m・短軸 0.67m、深さ 0.09m である。覆土は 1 層である。土師器無台碗細片・土師器小甕細片が出土している。

**SX243** (図版 21、写真図版 4)

12D7・8 に位置する。平面形は不整形、断面形は皿形である。SX244 を切る。規模は上端で長軸 0.78m・短軸 0.54m、深さ 0.09m である。覆土は 1 層である。遺物は出土していない。

**SX244** (図版 21、写真図版 4)

12D8 に位置する。平面形は楕円形、断面形は皿形である。SX243 に切られる。規模は上端で長軸 0.94m・短軸 0.80m、深さ 0.10m である。覆土は 1 層である。炭化物細片が出土している。

**SX341** (図版 19、写真図版 4)

12C5 に位置する。北側は 6 次調査のトレンチに切られる。大半は調査区外へ広がっているものと推測される。平面形は不整形、断面形は皿形である。SE95 を切る。確認できた規模は上端で短軸 1.18m、深さ 0.15m である。覆土は 1 層である。遺物は出土していない。

**SX342** (図版 20、写真図版 4)

13D9・14 に位置する。平面形は不整形、断面形は台形である。規模は上端で長軸 1.05m・短軸 0.68m、深さ 0.20m である。覆土は 1 層である。遺物は出土していない。覆土の様相が近似していることから、隣接する畝状遺構の一部である可能性が高い。

**SX343** (図版 20、写真図版 4)

3D9・10 に位置する。平面形は円形、断面形は皿形である。規模は上端で長軸 0.55m・短軸 0.50m、深さ 0.20m である。覆土は 1 層である。遺物は出土していない。覆土の様相が近似していることから、SX342 同様、隣接する畝状遺構の一部である可能性が高い。

## 4) 溝 (SD)

**SD7** (図版 18・28、写真図版 4)

12C・13B・13C に位置する。長軸方向はほぼ東西 (N-72° -E) に延びる。断面形は皿形であるが底面は凹凸に富んでおり平坦ではない。P116 を切る。南西部はコンクリート基礎のため一部失われている。規模は上端で長軸 5.67m・短軸 0.51m、深さ 0.15m である。覆土は 1 層である。珠洲焼甕細片が出土しているほか、いずれも細片であるが、土師器長甕・礫・炭化物が出土している。

**SD8** (図版 18・28、写真図版 4)

12C・13B・13Cに位置する。長軸方向はSD7と並行するように、ほぼ東西(N-73° -E)に延びる。断面形は皿形であるが底面は凹凸に富んでおり平坦ではない。P113を切る。SD7同様南西部はコンクリート基礎のため一部失われている。規模は上端で長軸5.87m・短軸0.80m、深さ0.18mである。覆土は6層に分かれる。1層から珠洲焼甕細片・礫・釘と推測される鉄製品の細片が出土している。

SD10 (図版18・28、写真図版4)

12C21・22に位置する。長軸方向はSD7・8と並行するように、ほぼ東西(N-67° -E)に延びる。断面形は半円形であるが底面は凹凸に富んでおり平坦ではない。SD102を切る。SD7・8同様南西部はコンクリート基礎のため一部失われている。確認できた規模は上端で長軸2.25m・短軸0.38m、深さ0.16mである。覆土は1層である。土師器長甕細片・礫細片が出土している。

SD16 (図版18・28、写真図版4)

12B・12Cに位置する。長軸方向はSD7・8・10と並行するように、ほぼ東西(N-72° -E)に延びる。断面形は皿形であるが底面は凹凸に富んでおり平坦ではない。SD7・8・10同様南西部はコンクリート基礎のため一部失われている。規模は上端で長軸2.22m・短軸0.36m、深さ0.17mである。覆土は2層に分かれる。2層から須恵器無台杯細片・礫が出土している。

SD21 (図版19・25、写真図版4)

12B・12Cに位置する。長軸方向はSD7・8・10・16同様ほぼ東西(N-70° -E)に延びる。断面形は台形である。SK12・P25・P259を切り、SK59に切られる。南東方向は調査区外へ延びるが、コンクリート基礎により失われている。規模は上端で長軸7.06m・短軸0.64m、深さ0.20mである。覆土は3層に分かれる。いずれも細片であるが、1層から須恵器無台杯・土師器無台椀・礫・炭化物が出土し、3層から礫・炭化物が出土している。表土と同質の土が覆土になっていることから、近現代のものである。

SD32 (図版19、写真図版4)

12Cに位置する。長軸方向は北西-南東(N-65° -W)に延びる。断面形は皿形である。規模は上端で長軸1.02m・短軸0.27m、深さ0.13mである。覆土は2層に分かれる。遺物は出土していない。

SD33 (図版19、写真図版4)

12C16・17に位置する。長軸方向はほぼ東西(N-73° -E)である。断面形は箱形である。南西端はP319に切られる。確認できた規模は上端で長軸1.31m・短軸0.26m、深さ0.13mである。覆土は2層に分かれる。遺物は出土していない。

SD40 (図版19、写真図版4)

11B・11C・12Bに位置する。長軸方向は、ほぼ東西(N-70° -E)に延びる。断面形は皿形である。SK49に切られ、P39・SD41を切る。南東方向・北東方向はそれぞれコンクリート基礎により失われている。確認できた規模は上端で、長軸2.14m・短軸0.27m、深さ0.06mである。覆土は2層に分かれている。2層から土師器小甕細片・鉄滓細片が出土している。SD21と覆土の堆積状況・主軸方向が近似することから、セット関係にある遺構と考えられる。SD21同様近現代のものとする。

SD41 (図版19、写真図版4)

11C21・12C1に位置する。長軸方向は、ほぼ東西(N-70° -E)に延びる。断面形は皿形である。SK49・SD40・P38・P39・P215・P221に切られる。調査区外に延びるものと考えられるが南西端・北東端ともにコンクリート基礎により失われている。確認できた規模は上端で、長軸2.41m・短軸0.59m、深さは0.17mである。覆土は5層に分かれる。1層から土師器長甕細片と2層から土師器長甕細片、炭化物細片が出土している。

SD51 (図版19、写真図版4)

12Cに位置する。長軸方向は、ほぼ東西(N-73° -E)に延びる。断面形は箱形であるが底面は凹凸に富んでおり平坦ではない。SE45を切り、南東端はSK50に切られる。規模は上端で長軸2.06m・短軸0.45m、深さ



0.19mである。覆土は1層である。土師器無台碗細片が出土している。

**SD76** (図版 19・27、写真図版 4)

12C14に位置する。長軸方向は、ほぼ東西 (N-82° -W) に延びる。平面形は不整形、断面形は皿形である。SK77を切る。規模は上端で長軸 2.03m・短軸 0.62m、深さ 0.14mである。覆土は2層に分かれる。1層から土師器長甕細片が出土している。

**SD85** (図版 19・28、写真図版 4)

12C3・8に位置する。長軸方向は、ほぼ南北 (N-11° -W) に延びる。断面形は皿形である。SK86・SK84に切られ、SE45を切る。確認できた規模は上端で長軸 2.61m・短軸 0.55m、深さ 0.18mである。覆土は2層に分かれる。1層から土師器長甕細片が、2層から土師器長甕細片が出土している。

**SD88** (図版 19・28、写真図版 4)

12C4に位置する。長軸方向は東西からやや北 (N-52° -E) に延びる。断面形は半円形である。北東端はP91に、南西端はP87・P225に切られる。確認できた規模は上端で短軸 0.45m、深さ 0.27mである。覆土は2層に分かれる。1層から土師器無台碗細片が出土している。

**SD92** (図版 19・28、写真図版 4)

12C4・5に位置する。長軸方向は、ほぼ南北方向 (N-1° -E) に一致する。断面形は皿形である。北側は調査区外へ延びているものと推測される。南端部はSK253・SK229に切られているほか、P93・P227・P228に切られる。確認できた規模は上端で長軸 2.10m・短軸 0.74m、深さ 0.19mである。覆土は2層に分かれる。遺物はいずれも細片であるが1層から須恵器無台杯・土師器無台碗・土師器長甕・礫が出土している。

**SD102** (図版 18・28、写真図版 4)

12C17・21・22に位置する。長軸方向は、ほぼ東西 (N-57° -E) に延びる。断面形は皿形であるが底面は凹凸に富んでおり平坦ではない。南部はSD10に切られる。規模は上端で長軸 1.05m・短軸 0.40m、深さ 0.12mである。覆土は3層に分かれる。遺物は出土していない。

**SD250** (図版 21・28、写真図版 4)

12D12・17に位置する。長軸方向は、北西-南東 (N-8° -W) に延びる。断面形は皿形である。北端部はSE145に切られ、南端部は第6次調査の確認トレンチにより失われている。確認できた規模は上端で長軸 2.98m・短軸 0.53m、深さ 0.08mである。覆土は2層に分かれる。1層から礫細片が出土している。

**SD268** (図版 21、写真図版 4)

12D7・8に位置する。長軸方向は、ほぼ東西 (N-65° -E) に延びる。断面形は皿形であるが底面は凹凸に富んでおり平坦ではない。西端部はSE145に、東端部は一部SK244に切られる。確認できた規模は上端で長軸 1.86m・短軸 0.75m、深さ 0.38mである。1層から、土師器長甕細片・炭化物細片が出土している。

**SD269** (図版 21、写真図版 4)

12C・12Dに位置する。12C10付近はほぼ南北方向で、12D11グリッド交点付近で南東方向に緩やかに屈曲する。中央部と南部は攪乱により失われている。断面形は箱形である。確認できた規模は上端で長軸 2.92m・短軸 0.40m、深さ 0.21mである。覆土は5層に分かれる。遺物は出土していない。

**畝状遺構** (図版 20・28、写真図版 24)

13C・13Dに位置する。ほぼ南北方向と一致する (N-85° -E) 軸で長軸 1.50m 前後・短軸 0.30m 前後の細長い溝が25条ほど連続する。東から4条目の1層から珠洲すり鉢細片が出土している。コンクリくずなども出土することから近現代の遺構である。

5) 小 土 坑 (Pit)

P64 (図版 17)

12C12 に位置する。平面形は不整形、断面形は筒形である。規模は上端で長軸 0.69m・短軸 0.42m、深さ 0.46m を測る。覆土は 1 層である。1 層から土師器長甕細片、焼土塊細片が出土している。底部から杭と推測される木製品が出土している。

P159 (図版 19)

12C24 に位置する。平面形は円形、断面形は皿形である。規模は上端で長軸 0.30m・短軸 0.26m、深さ 0.21m である。1 層から須恵器無台杯が出土している。

P170 (図版 17)

12C1 に位置する。平面形は方形、断面形は皿形である。SK47 を切る。規模は上端で長軸 0.38m・短軸 0.28m、深さ 0.52m である。1 層から土師器無台椀・土師器長甕細片が出土している。

P254 (図版 21)

12D8 に位置する。平面形は楕円形、断面形は半円形である。規模は上端で長軸 0.44m・短軸 0.38m、深さ 0.20m である。覆土は 3 層に分かれる。2 層から須恵器甕細片・土師器無台椀細片・炭化物細片が出土しているほか、3 層から土師器無台椀が出土している。

P272 (図版 21)

12D22 に位置する。平面形は円形、断面形は箱形である。規模は上端で長軸 0.27m・短軸 0.14m、深さ 0.15m である。1 層から種別不明の鉄製品が 1 点出土している。

P332 (図版 19)

12C20 に位置する。平面形は方形、断面形は箱形である。P331 を切る。規模は上端で長軸 0.28m・短軸 0.26m、深さ 0.06m である。1 層から珠洲壺が出土している。

## 第V章 遺物

1～3区から出土した遺物量は、コンテナ（内寸54.5×33.6×10.0cm）にして60箱である。ほとんどが土器・陶器であるが、青磁・石製品・鉄製品も少量含んでいる。また、3基の井戸から1点ずつ曲物が出土している。このほか井戸を中心に木製品がコンテナ10箱分出土している。

遺物は古代・中世・近世～近現代が認められる。古代は奈良～平安時代前期（9世紀頃）の須恵器・土師器が主体で、鍛冶関連遺物・砥石等の石製品が若干認められる。須恵器では食膳具（杯蓋・有台杯・無台杯）と貯蔵具（瓶壺類・甕）が出土した。土師器では食膳具（無台碗）と煮炊具（長甕・小甕・鍋）が出土した。

中世は鎌倉・室町時代の珠洲焼の甕・壺・すり鉢のほか青磁碗が少量出土している。このほか礫や砥石などの石製品、鉄滓などの鉄製品が少量出土し、井戸から曲物や井戸枠に用いられていたと推測される部材が出土している。木製品の遺存状態はあまり良くない。これは地下水位が変動したことにより、水漬の環境と乾燥した環境が繰り返されたためと推測される。

### 第1節 土器の分類と記述

古代の土器は、須恵器と土師器で大別し、次いで器種別に分類した。形態的な特徴による分類は行わなかった。鎌倉・室町時代については珠洲焼や青磁が確認できたが、出土量が少ないため、器種別の分類のみ行った。

土器の成形・調整技法の表現・名称は、山三賀Ⅱ遺跡〔坂井<sup>ほか</sup>1989〕の所見を参考に以下のとおりとした。珠洲焼についても概ね踏襲できることから、同じ用語を使用することとする。

1. 「ロクロナデ」－ロクロ・回転台使用、「ナデ」－ロクロ・回転台未使用。
2. 「ロクロケズリ」－ロクロ・回転台使用、「ケズリ」－ロクロ・回転台未使用。
3. 「カキメ」－ロクロ・回転台使用、「ハケメ」－ロクロ・回転台未使用。
4. 「ロクロミガキ」－ロクロ・回転台使用、「ミガキ」－ロクロ・回転台未使用。
5. 「タタキメ」－外面、「あて具」－内面。
6. 底部切り離し技法の「ヘラ切り」「糸切り」はロクロの回転を利用したものである。「回転ヘラ切り」と称すべきであるが、「回転」は省略した。

須恵器の胎土については沖ノ羽遺跡〔春日2003〕の成果を参考に、以下のとおり分類した。

A群：素地は粘土質が強く、石英・長石粒を定量含む。石英・長石粒の大きさは1mm前後のものが多いが、大きいものでは7mm前後のものが混入していることもある。触感としては軟質な感じを受ける。生産地は新津丘陵窯跡群の可能性が高い。なお、酸化炎焼成須恵器の胎土はこの群である。

B群：素地は砂質が強い。白色粒子を多量に含むが長石・石英などの混入物は少なく精良な胎土である。黒色で1mm程度の付着物が斑点状に付着しているものも見られる。生産地は佐渡小泊窯跡群の可能性が高い。

C群：素地は粘土質が強い。石英・長石粒を多く含み、粒径も5mm～10mm前後と大きなものが見られる。器面はざらついており、硬質な焼き上がりである。生産地は笹神丘陵などを中心とした阿賀北地域の窯跡群である可能性が高い。

D群：A～C以外のものを一括した。

須恵器甕や横瓶などに見られるタタキメ・あて具痕については、第4図のとおりに分類した。

## A 古代の土器の分類

### 1) 須恵器

食膳具と貯蔵具とがある。食膳具には杯蓋・有台杯・無台杯があり、貯蔵具には長頸瓶・短頸壺（あるいは広口壺）・横瓶・甕がある。

**杯蓋** 有台杯に付く蓋。出土量は少ない。

**有台杯** 出土量は多くない。特徴としては、5のような扁平で大きな杯の底部外面中央部に高台の付く（無台杯に高台を付けて有台杯としているもの）と、41のように5と比較して深身で、当初から有台杯形として製作されたものにと大きく大別できる。後者は42のような小型品も見られる。

**無台杯** SK13出土6～9のように口径・底径ともに大きく身の開きが小さく器壁が厚い一群と、21や46のようSK13出土のものより小型で身の開きが大きく、器壁が薄い一群が認められる。胎土B群のほとんどは後者である。また後者は焼成が良好でよく焼き締まっていることに対し、前者の焼成があまり良くなく、後者に比べ軟質な感じがある。

**横瓶** 側端部が確認できる(52)。口縁部は出土していない。

**長頸瓶** 1例確認できた(50)。肩部内面の頸部接合部付近にしぼり痕があることから長頸瓶と判断した。口縁部は出土していない。

**短頸壺** 51は口頸部の開口部が広いことから短頸壺と推測する。広口壺の可能性もある。

**甕** 25のような大甕と16のようなこれより小型の甕が確認できる。

### 2) 土師器

食膳具と煮炊具がある。食膳具には無台碗があり、煮炊具には長甕・小甕・鍋がある。平安時代の遺跡で出土例の多い黒色土器は確認できない。また器種が不明な24が1点出土している。

**無台碗** 成形をロクロナデのみで行う一群と、62のように内外面に磨きを丁寧に行うものがある。後者の器面調整は黒色土器によく見られるものであるが、黒色処理は施されていない。後者は前者に比べ大型である。前者の底部の切り離し技法は、回転糸切りである。

**長甕** 37・38のようなロクロを使用せず成形し、内外面ともハケメ調整により器面を整えるものと、69～73のようにロクロを使用して成形し、ロクロナデやカキメを施し器面を整えるものがある。後者は口縁部が「く」の字状に屈曲し、口縁端部に面を持つものが多い。出土量は後者が多く、前者は図示したものを以外にはほとんど出土していない。

**小甕** 口縁部と底部の細片資料しか確認できない。ロクロ成形のもののみ確認できる。

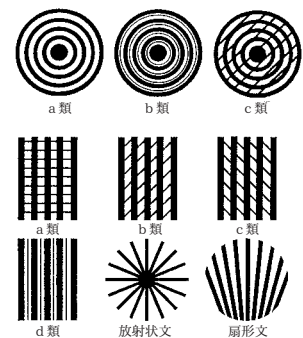
**鍋** 破片資料が多く、全体の器形が分かるものはない。口縁部はゆるく屈曲し、口縁端部に面を持つものが多い。器面はロクロナデもしくはカキメを施すものが確認できる。

## B 中世陶磁器の分類

### 1) 珠洲焼

**甕** 口縁部(80)や1・98・100のような体部が確認できる。1は吉岡分類〔吉岡1994〕の壺T種である可能性もある。

**壺** 111・121や123が確認できる。121は吉岡分類の壺T種（叩打壺）、123は瓶類か壺K種（研磨壺）の可能性がある。111は広口壺と推測する。



名称	分類基準	番号
同心円文a類	木目のみられないもの	D a
同心円文b類	年輪状の木目のみられるもの	D b
同心円文c類	柵目状の木目のみられるもの	D c
平行線文a類	木目が彫り込みに対し垂直なもの	H a
平行線文b類	木目が彫り上がりに対し垂直なもの	H b
平行線文c類	木目が彫り上がりに対し斜交するもの	H c
平行線文d類	木目が平行するもの	H d

第4図 タクキメ・アテキ具痕跡の細分類図  
〔柿田2001〕をもとに再トレース

すり鉢 97・99・108・115 など3区で出土している。

## 2) 青磁

椀 出土例は114・116の2点のみである。3区で出土している。

## C 出土土器等各説

### 1) 2区遺構出土土器

#### SE31 (図版31、写真図版26)

1は珠洲焼甕下半部の破片と推測するが壺の可能性もある。外面は叩き、内面は押圧痕の表面を撫でるように、下から上へ向かう指ナデが施される。胎土には砂粒や海面骨針が多く混じる。時期等詳細は不明である。1層から出土しているが、本来の遺構確認面であるIV a層が削平されているので、覆土中位の出土と捉えたい。

#### SE39 (図版31、写真図版26)

2は土師器長甕の体部である。外面は磨耗し、よく観察できない。内面は横位のハケメが施される。底部付近の破片であろうか。内面のみ拓本で表した。

#### SE41 (図版31、写真図版26)

3は須恵器有台杯である。外面はロクロナデ痕が明瞭に残る。4は須恵器無台杯である。底部外面はヘラ切り後ナデられており、底部から体部の立ち上がり部分に丸みを帯びる。3・4共に胎土B群で、佐渡小泊窯跡群産と推測される。

#### SK13 (図版31、写真図版26)

須恵器有台杯(5)・須恵器無台杯(6～9)・土師器小甕(10)・同長甕(11)のほか鉄滓と推測される細片が2点・炭化材(0.35g)が出土している。全て2層及び3層出土である。出土遺物はほとんど接合し一括性が高い。

5の底部内面には「三」状のヘラ記号が刻まれる。高台は杯部底部外面のやや内側に付く。高台の底部外面の中央部は沈線状に凹む。杯部の底部から体部への立ち上がりは柔らかく丸みを帯びる。口縁部はやや焼きゆがみが認められる。無台杯に高台を貼り付けたような器形である。胎土に径2～7mm大の白色礫を多量に含み、硬質な焼き上がりである。胎土C群に属し、阿賀北産と推測される。6の底部はほぼ平坦で、底部から体部の屈曲は明瞭である。質感は硬質な感じはあるが、焼き上がりはやや甘く、口縁部のみ青灰色を呈し、体部・底部とも灰白色を呈す。これは重ね焼きの際、中位付近に重ねられたためと推測する。胎土はC群に属すが、白色礫などの混入物は有台杯5に比し非常に少ない。7は口縁部外面に「サ」状のヘラ記号が刻まれる。筆跡は横・縦・縦の順である。記号の一部は欠損しているため詳細は不明である。底部外面の触感滑らかで、これは使用に伴う磨耗と考えられる。体部に比べ底部の器壁は厚い。底部はほぼ平坦である。底部から体部の立ち上がりは丸みを帯びて立ち上がり、屈曲は柔らかい。全体に青灰色を呈し、焼成も良好で硬質である。径2～4mmの礫を多く含み胎土はA群と判断したが、C群とも近似する。8は底径の大きさに違いはあるものの器形・法量ともに7に似ている。硬質ではあるものの内外面・断面ともに灰白色を呈す。底部外面の外縁部は回転ヘラキリ後ナデられており、底部から体部への屈曲部が丸みを帯びている。9は口径12.4cmと他の無台杯の口径と比べ小さい。底部外面には「井」状のヘラ記号が刻まれる。底部はほぼ平坦で、底部から体部の屈曲は明瞭である。質感は硬質な感じではあるが、焼成はやや甘く、外面は青灰色を呈すが、断面は赤褐色を呈する。胎土はA群に属し、径1～2mmの礫や粒子が少量含まれるものの、全体的に精良な感じを受ける。10は土師器小甕の口縁部である。体部中位から底部にかけて欠損している。内外面ともに磨耗が著しく調整その他の観察は困難である。口縁部は「く」字状に屈曲し、内彎気味に開く。口縁端部外面に面を持つ。胎土には径1～3mmの小礫を多く含む。11は土師器長甕の底部である。底部は平坦であるが、丸底を意図していると推測される。外面は被熱と磨耗のため表面が剥離しているが、ハケメ調整であることが観察できる。内面はハケメ調整である。内面



の立ち上がり部にススが付着する。

**SK33** (図版 31、写真図版 26)

12は須恵器無台杯の底部である。SK13出土須恵器無台杯に比し、底径が小さく、底部・体部ともに器壁が薄い。胎土はB群に属し、径1mm前後の白色粒子を多く含む。底部回転ヘラ切りの回転方向は左である。13は土師器無台碗の口縁部である。胎土には径1～2mmの礫を少量含む。14は土師器長甕の口縁部である。ロクロ成形の長甕である。口頸部は「く」字状に強く屈曲し、口縁端部外面は面を持つとともにやや上方へ摘み出される。内外面とも磨耗が進み、表面が剥離しているため詳細な観察はできなかった。

**SX7** (図版 31、写真図版 26)

15は須恵器無台杯の底部である。径1mm前後の黒斑が散見する。胎土B群に属する。16は須恵器甕の口縁部である。口縁端部内面は下方に摘み出される。細片であるため口径は正確さを欠いている可能性が高い。胎土には1mm前後の白色粒子を多く含む。B類にも似るが判断できなかった。

**SX16** (図版 31、写真図版 26)

17～19は土師器無台碗である。17は内外面とも磨耗し表面が剥離している。18・19も内外面とも磨耗が著しい。17の内面の立ち上がり方が底部から口縁部にかけてなだらかに湾曲しながら開いているのに対し、18は平坦な底部から強く屈曲し、外傾して開く。19は17より大型と推測されるが、器形は17に似ると推測される。

**SX18** (図版 31、写真図版 26)

20は土師器鍋口縁部である。口頸部は「く」字状にゆるく外反し、口縁端部は上方にやや摘み出される。内外面とも磨耗が著しい。口頸部はロクロナデ、体部外面はカキメが施されている。外面にはススが付着する。

**SD1** (図版 32、写真図版 26)

21は須恵器無台杯である。体部は直線的に外傾し、身の開きは大きい。胎土はB群に属する。器形がSE41出土の4と似るが、器壁はこちらが薄い。22は須恵器甕の体部である。肩部付近と推測される。硬質であるが断面は赤褐色を呈する。胎土はA群に属し、1～2mmの白色粒子を多く含む。内面当て具痕はDc類である。

**SD2** (図版 32、写真図版 26)

23は須恵器無台杯である。焼成は口縁部から体部にかけては良好であるが、底部は還元が進まず赤褐色を呈す。体部は直線的に開くが、底部外面は回転ヘラ切り後外周をナデており、外面の底部から体部にかけての屈曲はやや丸みを帯びる。胎土は精良でB群である。ヘラ切り後底部外面の外周をナデる手法は8に似る。24は土師器の器種不明品である。口縁部とした場合、頸部の径が小さくなることから、脚部と判断した。口縁部である可能性も高い。25は須恵器甕の口縁部である。遺存状況がよくないため、口径は正確さを欠くが、大型甕の口縁部である。口縁端部の内側は上方に短く摘み出される。

**SD3** (図版 32、写真図版 26)

26は須恵器有台杯である。SE41の3に比し、体部は直線的に開き、器壁も厚い。口径も小さく、身も浅くなるようである。胎土はB群である。27は須恵器無台杯である。胎土B群である。体部はやや内彎気味に開く。底部外面の体部への立ち上がり部分にロクロケズリが施される。28は須恵器無台杯である。27に比し器壁が薄く、身の開きが大きい。口縁端部はやや外反する。器形的には23に似る。胎土はB群である。29は須恵器甕の体部である。胎土はD群である。小片のため判断できなかった。外面タタキメは平行線文、内面の当て具痕は同心円である。30は土師器小甕である。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁端部は内側へ摘まれ内屈する。31は土師器鍋である。口縁部端部は摘まれ、断面形が三角形状になる。体部外面は口縁部直下にカキメが施される。内面はロクロナデである。

**SD11** (図版 32、写真図版 26)

32は土師器無台碗である。内外面ともに磨耗している。

**P45** (図版 32、写真図版 27)

34は土師器長甕である。口縁部は「く」の字状に屈曲し、口縁端部外面に面を持つ。口縁端部外面の下端は下方に僅かに垂下する。内外面ともに磨耗している。

## 2) 1区遺構外出土遺物(図版32、写真図版27)

35は須恵器杯蓋である。口縁端部が僅かに欠損する。つまみの中央部はやや突起する。頂部外面はロクロケズリが施される。胎土はB群である。36は土師器小甕の底部である。内外面とも磨耗が著しい。37・38は土師器長甕である。同一品と推定される。粘土紐の輪積み痕が明瞭に残る。外面は縦方向のハケメ、内面は横方向のハケメが施される。非ロクロ成形の長甕である。口縁部に向かってややすぼまる体部に、緩やかに外反する口縁部を持つ。胴部最大径は中位より下方にくると推定される。

## 3) 2区遺構外出土土器(図版33・34・35、写真図版26・27)

39は須恵器杯蓋である。35に比し口径はやや小さく身は深い(器高が高い)。鈕は欠損している。重ね焼きの痕跡が明瞭で口縁部外面は灰色を呈し、体部～底部は内外面とも灰白色を呈す。胎土はD群であるが、C群に似る。

40～43は有台杯である。40の胎土はA群である。41の胎土には白色粒子が多く混ざる。B群である。42は断面形が三角形を呈す低い高台が付く。杯部の底部外面にロクロケズリを施す。胎土はB群である。43の底部内面は使用に伴うと推測される磨耗が顕著である。胎土はA群である。

44～49は須恵器無台杯である。44は口縁部が一部欠損するがほぼ完存品である。平坦な底部にやや内彎気味に開く体部を持つ。器壁はやや厚い。ヘラ切りの回転方向は右回転である。口縁部の一部に焼成不良で灰白色を呈する部分があるが、全体に焼成は良好で灰色を呈す。胎土はB群である。45の胎土はB群である。46の器形は44に近似するが、44に比し器壁が薄く法量も小さい。ヘラ切りの回転方向は左回転である。胎土はB群である。47は底部中央付近が内側にくぼみ、直線的に開く体部を持つ。ヘラ切りの回転方向は左回転である。胎土はB群である。48は底部外面に漢数字の「一」状の墨書が見られる。ヘラ切りの回転方向は右回転である。胎土はA群である。49は底部中央付近が若干内側にくぼみ、直線的であり開かない体部を持つ。胎土はB群と判断したがA群にも近似する。

50は須恵器長頸瓶の肩部～頸部付近の破片である。肩部は丸みを帯びる。頸部付近の内面に絞り痕が認められる。胎土はB群である。

51は須恵器短頸壺と判断した。広口壺の可能性もある。胎土はB群である。

52は須恵器横瓶の側端部である。内面の閉塞痕が明瞭である。閉塞面の外面は灰白色を呈し、それ以外には薄く自然釉がかかる。焼成時はこの部分を下に倒立していたと推測される。外面は平行文のタタキメ、内面は同心円文の縁辺を利用した当て具により整形される。

53～63は土師器無台碗である。すべて破片資料である。55は内外面ともにほぼ全面にわたって表面が剥離している。底部外面に僅かに糸切り痕が観察できる。62は内外面ともに表面の剥離範囲が広いが、内外面全面にミガキが施されているようである。内面は、体部下部～底部にかけて棒状工具による縦方向のミガキが施される。外面は、横方向のミガキが施されるが、内面で使用された工具とは異なるものを使用しているようである。

64～68は土師器小甕である。64は内外面とも全面にわたり表面が剥離している。体部内面はハケメが施される。65の口縁部は「く」字状に屈曲し、口縁端部は内側に短く摘み出される。66は底部であるが、大きい。内外面ともに磨耗し調整にかかる痕跡は乏しい。内面には横方向のハケメが施され、外面は横方向のケズリによって整形される。底部に比し体部の器壁はかなり薄い。68は口縁端部外面に面を持つ。65や30のように口縁端部を内側に摘み出し屈曲させるものと本資料のようなものと確認できる。

69～73は土師器長甕である。ロクロ整形で体部外面にカキメが観察できるものもある(69・70)。口縁部は「く」字状に屈曲し口縁端部に面を持つ。口縁端部を上方に摘むもの(69・70)も見られる。

74～79は土師器鍋である。口縁部付近の小破片のみで、全体の器形が分かる個体はない。口縁部はゆるく外傾し、口縁端部に面を持つものが多いが、口縁端部をさらに短く摘み上げるものが多い。

80は珠洲焼甕の口縁部である。口頸部は「く」字状に鋭く屈曲し肥厚する口縁端部を持つ。13世紀末～14世紀頃と推測する。

#### 4) 2区遺構出土土製品・銭貨・鉄製品・石製品

##### a) 土製品

P36 (図版 32、写真図版 26)

33は土管状の土製品である。外面は縦方向のケズリ調整が施されるが、粘土紐の輪積み痕が明瞭である。内面はナデにより内面の輪積み痕が消されている。奈良～平安時代初頭と推測する。

##### b) 銭貨

SX48 (図版 35、写真図版 28)

81は銭貨である。「寶」のみ認識できる。時代は不明である。

##### c) 鉄製品等

SE31 (図版 35、写真図版 28)

82は鉄滓で、重量は71.8gである。珠洲焼甕片が同遺構から出土していることから、鎌倉・室町時代と推測する。

SK37 (図版 35、写真図版 28)

83はX線写真の結果、刀子と推測される。この他に出土した遺物が無いため時代の判定は難しいが、遺構覆土の様相がSE31やSE41に近似していることから、鎌倉・室町時代と推測する。

##### d) 石製品

SE39 (図版 35、写真図版 28)

84は表面全体が磨耗し、特に下端部がよく磨耗していることから、摺り棒のような役割を果たした石製品と推測する。古代と推測する。

SK35 (図版 35、写真図版 28)

85は軽石である。切断されたものか、若しくは砥石のような使用方法によると推測される平坦面を持つ。

86は下端部に僅かに擦痕が観察できる。緑色を呈す。SK35からは須恵器・土師器・近世陶器の細片も出土していることから、時代・時期ともに不明である。

#### 5) 2区遺構出土木製品

SE31 (図版 35、写真図版 29)

87は円形の盤である。小型の曲物の底板と推測する。木取りは柾目で鑑定はしていないが、杉の可能性が高い。88も円形の盤と推測される。欠損しているため、全形は不明である。左端に径6～8mm程の穿孔が上部に2か所、下部に1か所穿たれ、右端には径3mm前後の穿孔が上下に1ヶ所ずつ施される。87は1枚で円形を成しているが、88は複数枚で円形を成すものと推測される。穿孔は紐や木釘等を通すためのものと推測する。

89は曲物である。出土段階でかなり脆弱であったため、保存処理を先行して行い、処理後実測を行った。曲物の上部には一重の籬が、下部には二重の籬が施されている。側板・籬共に桜皮で止められている。側板の合わせ目は「キメかき」が施され、重ね合わせの厚みが調整される。側板の内側は縦方向の「けびき」が施されている。水溜として用いられた。

SE38 (図版 36、写真図版 29)

90～93は井戸底部に据えられた土居桁である。内径は概ね60～64cm前後で方形を呈し、正方形を意図していると推測する。90・91(出土時の南北)は5×4cm前後の角材に3cm前後角のほぞを切り、92・93(出

土時の東西)は板状部材の上下に2×4cm前後のほぞ穴が施される。土層の堆積状況から粹材が存在していたことが確認できるが、腐食し土と同化していたため、残っていない。須恵器・土師器片が出土したSE39と覆土の様相が近似することから、古代と推測する。

SE41 (図版36、写真図版29)

94は板状木製品である。1～3層にかけ横たわるよう出土した。

95は曲物である。側板の外側上下にそれぞれ1重の籬が巻かれている。下の籬の合わせ目は下になる方に「キメかき」が施される。側板・籬共に桜皮で留められている。側板の内側は縦方向の「けびき」が施されている。側板の合わせ目は上にかぶさる方に「キメかき」が施され厚さが調整される。井戸内の水溜として用いられた。井戸の掘り方や覆土がSE31と近似することから、鎌倉・室町時代と推測する。

### 6) 3区遺構出土土器

SE30 (図版37、写真図版28)

96は須恵器甕である。外面は格子目状のタタキメが内面は同心円文の当て具が施される。胎土は不明である。

97・99は珠洲焼すり鉢である。97は、外面ロクロナデ、内面はロクロナデの後卸し目が施される。胎土は海綿骨針を含む。99は内外面ともロクロナデのみ施され、内面に卸し目は施されない。底部外面はハケ状工具で不規則にナデて底部が平坦になるよう調整される。胎土に海綿骨針を含む。

98・100は珠洲焼甕である。98はSE30のほか、SE31・SK59・SE193出土破片と接合した。一番大きい破片であるSE30出土として報告する。外面にはタタキメが、内面には無文の当て具痕が残る。胎土は海綿骨針を含む。100の外面にはタタキメが、内面には無文の当て具痕が残る。胎土は海綿骨針を含む。98より大形の甕である。

SE31 (図版37、写真図版28)

101は須恵器甕である。外面は平行線文のタタキメが、内面は格子目文の当て具が施される。

SE45 (図版37、写真図版28)

102は須恵器無台杯である。胎土はB群である。

SE95 (図版37、写真図版28)

103は須恵器有台杯である。胎土はB群である。104・105は須恵器無台杯である。共に胎土B群である。106は須恵器甕である。肩部付近の破片と推測される。外面タタキ目はHa類、内面当て具はDc類である。外面はタタキメの後カキメが施される。細片のため胎土は判断できなかった。107は土師器無台碗の底部である。

SE145 (図版37、写真図版28)

108は珠洲焼すり鉢の口縁部である。胎土に海綿骨針を含む。

SE193 (図版37、写真図版28)

109は須恵器無台杯である。外面底部付近にヘラケズリが施される。胎土はB群である。110は須恵器甕である。外面および左側面は研磨具として転用され摩耗している。111は珠洲焼広口壺口縁部である。内面中位に輪積痕と推測される稜線が残る。

SK47 (図版38、写真図版28)

112は土師器小甕口縁部の細片である。

SK50 (図版38、写真図版28)

113は土師器鍋である。口縁部外面は外方向に強く摘まみ出され、かつ上方にも摘まみ出され断面形が三角形を呈する。体部は外面にカキメが施され、内面はロクロナデが施される。

SK59 (図版38、写真図版28)

114は青磁碗口縁部である。比較的細身の連弁文が描かれる。115は珠洲焼すり鉢である。内面に卸し目が

刻まれる。よく使用されており、内面は摩耗している。

SK62 (図版 38、写真図版 28)

116 は青磁碗体部細片である。

SD7 (図版 38、写真図版 28)

117 は珠洲焼甕の体部片である。外面に「×」状の線刻が刻まれる。外面はタタキメが、内面は無文当て具が施される。

P159 (図版 38、写真図版 28)

118 は須恵器無台杯の底部片である。胎土はB群である。

P170 (図版 38、写真図版 28)

119 は土師器無台碗の底部片である。底部外面に回転糸切り痕が残る。

P254 (図版 38、写真図版 28)

120 は土師器無台碗の底部片である。底径 6cm で体部が大きく開くことから大型の無台碗と推測される。

P332 (図版 38、写真図版 28)

121 は珠洲焼壺の口縁部である。

畝状遺構 (図版 38、写真図版 28)

122 は珠洲焼すり鉢の口縁部である。

#### 7) 3区遺構外出土土器 (図版 38、写真図版 28)

123 は珠洲焼の小型壺の口縁部である。口縁端部の内側はやや上方に摘み出される。124 は近世陶器甕の口縁部である。

#### 8) 3区遺構出土鉄製品・石製品

P272 (図版 38、写真図版 28)

125 は器種不明鉄製品である。現代の可能性も高い。

SE95 (図版 38、写真図版 28)

126 の頂部付近に被熱痕が見られることから、表面の剥離痕はこれによる可能性がある。1層から出土した。

SE96 (図版 38、写真図版 28)

127 は扁平な円形礫と推測される。表面及び縁辺は磨耗し滑らかである。3層から出土した。

SE193 (図版 38、写真図版 28)

128 は面取りされ方形を呈すると推測される。2層から出土した。残存部が少ないため用途は不明である。129 は軽石で扁平な半円形を呈すると推測される。円形のを半分切断したようで、切断面が磨耗する。14層から出土した。130 は砥石である。方形を呈すると推測される。4面全て使用されているが角部分と上下部分のほとんど、砥面の一部は損欠している。仕上げ砥石と推測される。2層から出土した。

#### 9) 3区遺構出土木製品

SE30 (図版 39、写真図版 29)

出土した木製品は現位置を保っていると推測されるものと、井戸廃棄時に混入若しくは現位置を失ったと推測されるものがある。

135・141・133 は北西角に組まれた状態で出土した。135・141 はほぼ直角を成すように縦位で出土した。135 が東西軸で、141 が南北軸で並んでいた。133 はこの直角部分の内側に接するように縦位で出土した。下端部はやや先細る程度に削られていることから、杭のように突き刺していたものと推測される。132 は北東角



に突き刺さるように立った状態で出土した。損欠部分が多い。133と対を成すものと推測される。133の裏側直近から134が立った状態で出土している。出土位置と状況から同一品である可能性が高い。140は南東隅に突き刺さっている状態で出土した。先端部は尖って杭状になっている。131は南西角から出土した。突き刺さるように立った状態で出土した。損欠部分が多いため詳細は不明である。137は140と131を結ぶライン上に出土している。137は131の外側で出土している。これらの出土状況から、131～133・140は隅柱で、135～137・141は枳板にあたるかと推測される。SE30は縦板組隅柱（横棧留めか）の井戸枳である可能性が高い。143は水溜用の曲物である。井戸最底部から出土した。曲物の下部は桜皮で留められていた。側板の内側は縦方向の「けびき」が施される。籬は無かった。欠損部分が多いため詳細は不明である。覆土中から珠洲焼が出土していることから鎌倉・室町時代と推測される。

**SE45**（図版39、写真図版29）

144・145とも最下層からまとめて横位の状態で出土している。145は角材で先端部は削られやや杭状を呈す。

144・145は井戸枳部材と推測される。SE45は堆積状況から井戸枳が存在した可能性が考えられることから、この井戸に付随する遺物と考えられる。

**SE193**（図版39、写真図版29）

146～148は井桁状に出土した。146と148は平行関係でほぼ同一標高で出土し、147はこれと直行するように出土した。147の出土標高は146・148より低位で出土している。出土状況から現位置を保っていないと推測される。146～148は井戸枳横棧と推測される。腐食が進み損欠部分が多いため詳細は不明である。SE193は鎌倉・室町時代のSE30を切るSE96に切られている事から、鎌倉・室町時代と推測される。

**P64**（図版40、写真図版26）

149は底部に突き刺さった状況で出土した。杭と推測される。欠損部分が多い。時代・時期ともに不明。

# 第VI章 自然科学分析

## 第1節 樹種同定

### A 試料と分析方法

試料は、2区SK13の2層から採取された炭化材片6点のうち、保存状況の良い3点(試料1~試料3)を分析試料とした。また、その他の3点についても同定を試みた。割折して新鮮な横断面(木口と同義)、放射断面(柾目)、接線断面(板目)の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって50~1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

### B 分析結果

第3表に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

#### クルミ属 *Juglans* クルミ科 第5図1・2

横断面：大型で丸い道管が単独あるいは2~数個放射方向に複合してまばらに散在する散孔材である。早材から晩材にかけて道管の径は徐々に減少する。軸方向柔細胞が多少波打ちながら短接線状に1列に並び、網状柔組織をつくる傾向がある。放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射組織はほとんどすべて平伏細胞からなるが、ときおり上下の縁辺にいくぶん大きい方形細胞が見られる。接線断面：放射組織は同性放射組織型で1~3細胞幅である。

以上の形質よりクルミ属に同定される。クルミ属にはオニグルミ、ヒメグルミがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ15~30m、径70~90cmである。材は耐朽性、保存性は低いが、狂いが少なく靱性に富んでいて、建築、器具、彫刻など広く用いられる。

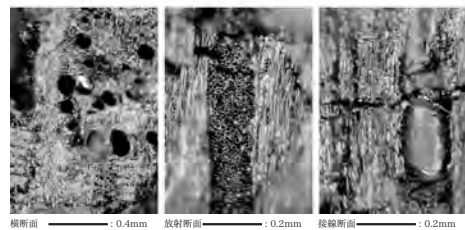
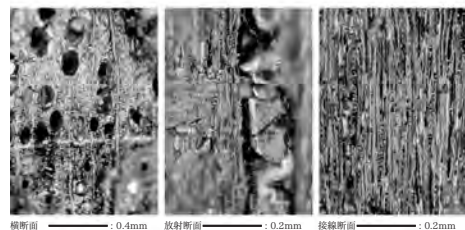
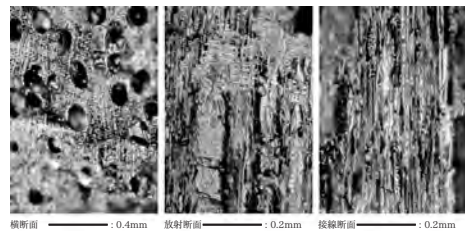
#### コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Prinus* ブナ科 第5図3

横断面：年輪のはじめに大型の道管が1~数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ15m、径60cmぐらいに達する。材は強靱で弾力に富み、建築材などに用いられる。

第3表 SK13 2層出土炭化材樹種同定結果

試料	結果(学名/和名)
試料1	<i>Juglans</i> クルミ属
試料2	<i>Juglans</i> クルミ属
試料3	<i>Quercus sect. Prinus</i> コナラ属コナラ節



第5図 SK13 出土炭化材の顕微鏡写真

## C 所 見

樹種同定の結果、2区SK13の2層から採取された炭化材のうち、試料1と試料2はクルミ属、試料3はコナラ属コナラ節と同定された。また、その他の3点についても同定を試みたところ、いずれもクルミ属と判断された。クルミ属は、温帯に広く分布する落葉高木で、やや冷涼で谷沿いなど湿潤なところに生育する。コナラ属コナラ節は、温帯を中心に広く分布する落葉高木で、日当たりの良い山野に生育する。ミズナラなどの冷温帯落葉広葉樹林の主要構成要素や暖温帯性のナラガンワ、二次林要素でもあるコナラなどが含まれる。いずれも当時の遺跡周辺もしくは近隣の地域で採取可能な樹種であったと考えられる。

## 第2節 植物珪酸体 (プラント・オパール) 分析

### A 分析試料と分析方法

#### 1) 試 料

分析試料は、2区のサブトレンチ5の基本土層断面、西壁21J17グリッド、SK13覆土の3地点から採取された計7点である。試料採取か所を分析結果の柱状図に示す。

#### 2) 分 析 法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法〔藤原1976〕を用いて次の手順で行った。

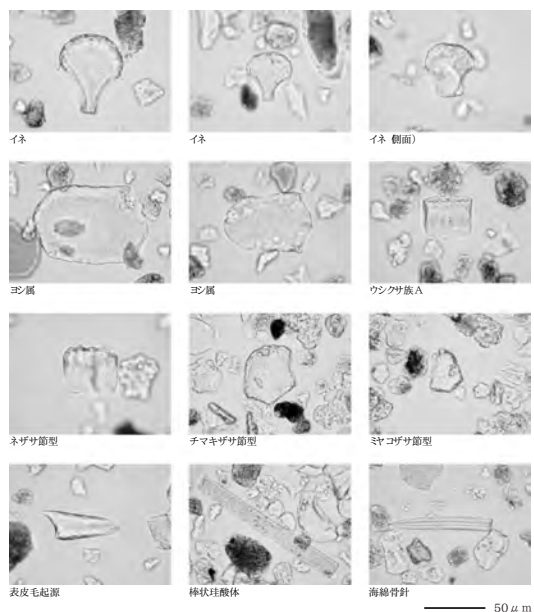
(1) 試料を105℃で24時間乾燥(絶乾)、(2) 試料約1gに対し直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加(電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)、(3) 電気炉灰化法(550℃・6時間)による脱有機物処理、(4) 超音波水中照射(300W・42KHz・10分間)による分散、(5) 沈底法による20μm以下の微粒子除去、(6) 封入剤(オイキット)中に分散してプレパラート作成、(7) 検鏡・計数。

同定は400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞起源の植物珪酸体を対象として行った。計数はガラスビーズ個数が400以上になるまで行った(ほぼプレパラート1枚分の精査に相当)。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけ試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重(1.0と仮定)と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個

第4表 三王山遺跡2区における植物珪酸体分析結果

検出密度 (単位: × 100 個 / g)		サブトレンチ5		西壁21J17グリッド			SK13覆土	
分類群	学名	1	2	1	2	3	1	2
イネ科	Gramineae							
イネ	<i>Oryza sativa</i>	117	48	78			103	78
ヨシ属	<i>Phragmites</i>		21	7		7	7	14
ウシクサ族A	Andropogoneae A type		7	7	7			7
タケ亜科	Bambusoideae							
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>							7
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	14	21	7	27	14	21	14
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	69	21	28	34	55	69	21
未分類等	Others	34	41	7	27	35	28	7
その他のイネ科	Others							
表皮毛起源	Husk hair origin	14	14	21	7		28	14
棒状珪酸体	Rod-shaped	103	48	191	7	7	179	113
茎部起源	Stem origin							7
未分類等	Others	110	207	148	88	104	193	99
(海綿骨針)	Sponge		14	14				
植物珪酸体総数	Total	461	428	494	196	222	633	376
おもな分類群の推定生産量 (単位: / cm) : 試料の仮比重を1.0と仮定して算出								
イネ	<i>Oryza sativa</i>	3.44	1.42	2.28			3.03	2.29
ヨシ属	<i>Phragmites</i>		1.31	0.45		0.44	0.43	0.89
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>							0.03
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	0.10	0.16	0.05	0.20	0.10	0.15	0.11
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	0.21	0.06	0.08	0.10	0.17	0.21	0.06
タケ亜科の比率 (%)								
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>							17
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	33	71	38	67	38	43	52
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	67	29	62	33	62	57	31



第6図 植物珪酸体 (プラント・オパール)

あたりの植物体乾重、単位:10<sup>-5</sup>g) をかけ、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的に把握できる。イネの換算係数は2.94、ヨシ属(ヨシ)は6.31、ススキ属(ススキ)は1.24、ネザサ節は0.48、チマキザサ節・チシマザサ節は0.75、ミヤコザサ節は0.30である〔杉山2000〕。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

## B 分析結果

分析の結果を第4表および第7図に示した。また、主要な分類群について第6図に顕微鏡写真を示す。

## C 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

1) 稲作跡の検討 水田跡(稲作跡)の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体(プラント・オパール)が試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している〔杉山2000〕。なお、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

### (1) サプトレンチ5基本土層断面

Ⅲ d層(試料1)とⅢ e層(試料2)について分析を行った結果、両試料からイネが検出された。このうち、Ⅲ d層(試料1)では密度が11,700個/gとかなり高い値で、Ⅲ e層(試料2)でも4,800個/gと比較的高い値である。したがって、これらの各層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

### (2) 西壁21J17グリッド

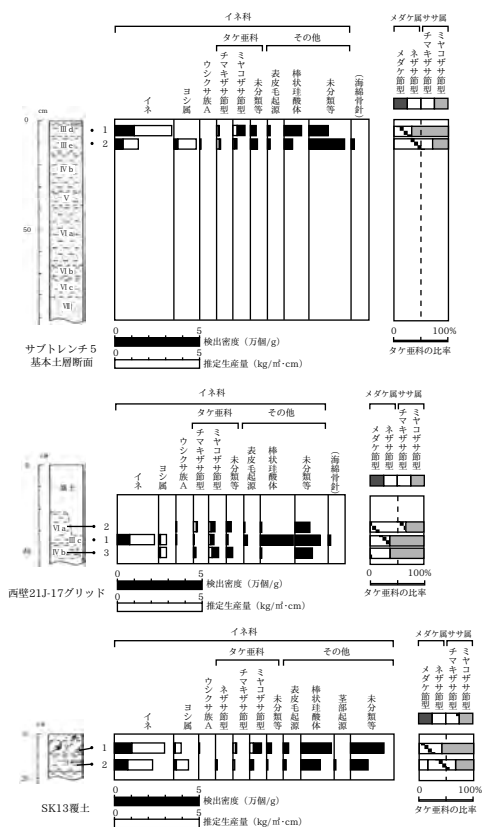
Ⅲ b層(試料1)、Ⅳ a層(試料2)、Ⅳ b層(試料3)について分析を行った結果、Ⅲ b層(試料1)からイネが検出された。密度は7,800個/gと高い値である。したがって、同層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

### (3) SK13

遺構覆土の2層(試料1)と3層(試料2)について分析を行った結果、両試料からイネが検出された。このうち、2層(試料1)では密度が10,300個/gとかなり高い値で、3層(試料2)でも7,800個/gと高い値である。同遺構は土器捨て場とみられることから、イネの茎葉(稲藁)が何らかの形で集積されていたと考えられる。

2) イネ科栽培植物の検討 植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもムギ類、ヒエ属型(ヒエが含まれる)、エノコログサ属型(アワが含まれる)、キビ属型(キビが含まれる)、ジユズダマ属(ハトムギが含まれる)、オヒシバ属(シコクビエが含まれる)、モロコシ属型、トウモロコシ属型などがあるが、これらの分類群はいずれの試料からも検出されなかった。

3) 植物珪酸体分析から推定される植生と環境 ヨシ属、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型などが検出されたが、いずれも比較的少量である。おもな分類群の推定生産量によると、イネが検出された層準ではイネが優勢となっている。以上の結果から、当時はおおむね稲作が行われ、ササ属(チマキザサ節やミヤコザサ節)などが生育していたと推定される。



第7図 三王山遺跡2区における植物珪酸体分析結果



## E ま と め

植物珪酸体（プラント・オパール）分析の結果、平安時代と推定される各層準からイネが多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、土器捨て場とみられるSK13では、イネの茎葉（稲藁）が集積されていた可能性が認められた。

## 第3節 花粉分析

### A 分析試料と分析方法

分析試料は、2区の西壁21J17グリッド、SK13の2地点から採取された計5点である。分析結果を柱状図に示す。花粉の分離抽出は、中村〔中村1973〕の方法をもとに以下の手順で行った。

(1) 0.5%リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加えて15分間湯煎、(2) 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去、(3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置、(4) 水洗処理の後に氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9:濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す、(5) 再び氷酢酸を加えて水洗処理、(6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成、(7) 検鏡・計数。

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉〔島倉1973〕および中村〔中村1980〕をアトラスとして所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。イネ属については、中村〔中村1974・1977〕を参考に、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とした。

### B 分析結果

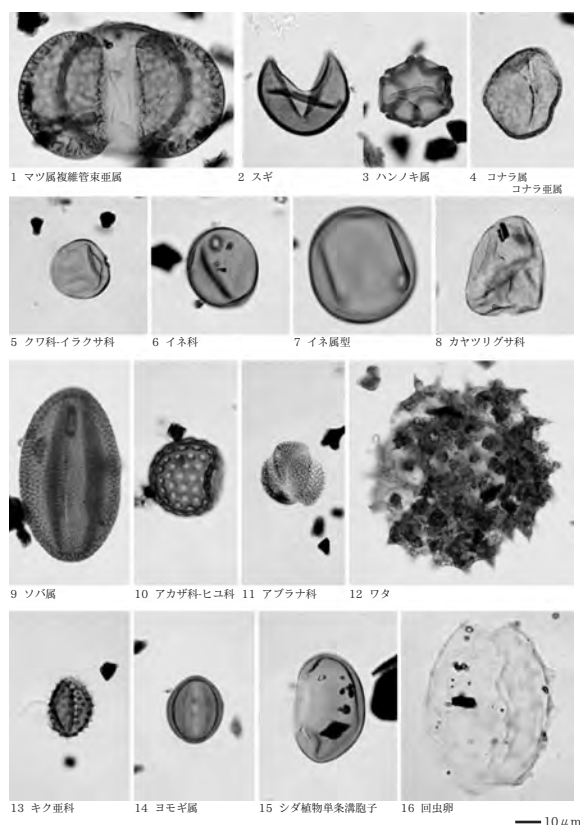
#### 1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉19、樹木花粉と草本花粉を含むもの3、草本花粉17、シダ植物孢子2形態の計41である（第5表）。また寄生虫卵1分類群が認められた。花粉数が100個以上計数された試料については花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した。主要な分類群については、第8図に顕微鏡写真で示した。

#### 2) 花粉群集の特徴

##### (1) 西壁21J17グリッド（第9図）

III c層（試料1）では草本花粉の占める割合がかなり高い。イネ科（イネ属型を含む）が優占し、アブラナ科、ヨモギ属、カヤツリグサ科、およびソバ属、ワタ、サジオモダカ属などが伴われる。樹木花粉では、ハンノキ属、スギ、マツ属複雑維管束亜属、コナラ属コナラ亜属などが検出され、樹木・草本花粉のクワ科-イラクサ科も認められた。クワ科-イラクサ科は、生態的に人里や耕地周辺の土手などに多いカナムグラが想定



第8図 三王山遺跡の花粉・孢子・寄生虫卵



される。IV a層(試料2)およびIV b層(試料3)では、花粉があまり検出されなかった。

(2) SK13 (第10図)

3層(試料2)では草本花粉の占める割合が高い。ヨモギ属が卓越し、カヤツリグサ科、イネ科、アブラナ科などが伴われる。樹木花粉ではハンノキ属やスギなどが検出され、樹木・草本花粉のクワ科-イラクサ科も多く認められた。また、寄生虫卵の回虫卵がわずかに検出された。2層(試料1)の草本花粉ではイネ科(集塊あり)が増加し、ヨモギ属は減少している。また、樹木花粉のハンノキ属、樹木・草本花粉のクワ科-イラクサ科も増加する。

### C 花粉分析から推定される植生と環境

#### 1) 西壁 21J17 グリッド

平安時代とされるⅢ c層の堆積当時には稲作のほか、周辺でソバ属、ワタ、アブラナ科植物などの畑作も行われていたと推定される。また、水田の周囲にカヤツリグサ科、サジオモダカ属などの水生植物、畑の周囲などにクワ科-イラクサ科(カナムグラなど)が生育していたと考えられる。森林植生としては、周辺地域にスギ、マツ類(マツ属複雑管束亜属)、ナラ類(コナラ属コナラ亜属)などが分布し、周辺の湿地などにハンノキ属が分布していたと推定される。

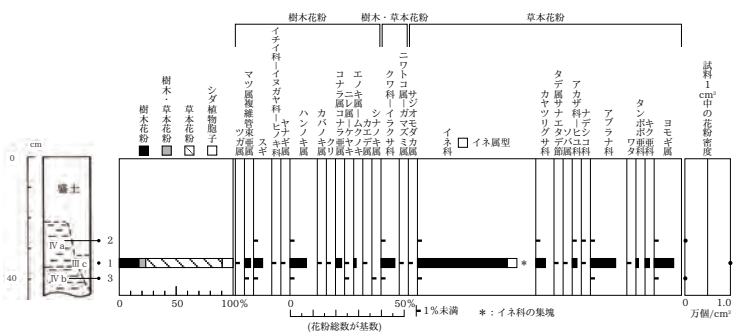
IV a層とIV b層では花粉があまり検出されなかった。乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたことなどが考えられる。

#### 2) SK13

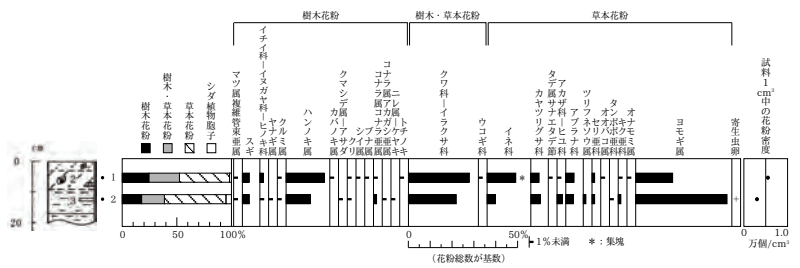
平安時代とされる3層と2層の堆積当時は、クワ科-イラクサ科(カナムグラなど)やヨモギ属などが生育する開かれた人里で、周辺ではアブラナ科植物などの畑作が行われていたと推定される。森林植生としては、周辺の湿地などにハンノキ属が

第5表 三王山遺跡における花粉分析結果

学名	分類群	和名	2区西壁21J-17グリッド			2区SK13覆土	
			1	2	3	1	2
Arboreal pollen	樹木花粉						
<i>Tsuga</i>	ツガ属		1				
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属		13		2	1	1
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ		19	3	1	11	11
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イスガヤ科-ヒノキ科		1			5	2
<i>Salix</i>	ヤナギ属		1				2
<i>Juglans</i>	クルミ属					3	1
<i>Alnus</i>	ハンノキ属		34	2	6	60	38
<i>Betula</i>	カバノキ属		2			1	
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属-アサダ						1
<i>Castanea crenata</i>	クリ		1			1	2
<i>Castanopsis</i>	シイ属					1	
<i>Fagus</i>	ブナ属					1	
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属		13			1	5
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属						1
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属-ケヤキ		1		1		1
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属-ムクノキ		5				
<i>Acer</i>	カエデ属		1				
<i>Aesculus turbinata</i>	トチノキ					1	
<i>Tilia</i>	シナノキ属				1		
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉						
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科		29	2	1	96	76
Araliaceae	ウコギ科					1	
<i>Sambucus-Viburnum</i>	ニワトコ属-ガマズミ属		2				
Nonarboreal pollen	草本花粉						
<i>Alisma</i>	サジオモダカ属		1				
Gramineae	イネ科		188	7	1	45	13
<i>Oryza type</i>	イネ属型		20			1	
Cyperaceae	カヤツリグサ科		20	3		13	15
<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria</i>	タデ属サナエタデ節		1			1	
<i>Fagopyrum</i>	ソバ属		1				
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科		10	2		22	8
Caryophyllaceae	ナデシコ科		3	1			
Cruciferae	アブラナ科		53	1	1	13	12
<i>Impatiens</i>	ツリフネソウ属						4
<i>Gossypium indicum</i>	ワタ		1				
Apiodeae	セリ亜科					4	4
<i>Plantago</i>	オオバコ属					1	
Lactucoideae	タンポポ科		5				1
Asteroidae	キク亜科		9			1	4
<i>Xanthium</i>	オナモミ属					2	
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属		41	2	2	58	145
Fern spore	シダ植物胞子						
Monolate type spore	単条溝胞子		47	11	10	6	17
Trilate type spore	三条溝胞子		3	2			1
Arboreal pollen	樹木花粉		92	5	11	86	65
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉		31	2	1	97	76
Nonarboreal pollen	草本花粉		353	16	4	161	206
Total pollen	花粉総数		476	23	16	344	347
Pollen frequencies of 1cm <sup>3</sup>	試料1cm <sup>3</sup> 中の花粉密度		1.0	1.5	9.6	5.5	3.0
			$\times 10^4$	$\times 10^2$	$\times 10$	$\times 10^3$	$\times 10^3$
Unknown pollen	未同定花粉		12	2	0	3	8
Fern spore	シダ植物胞子		50	13	10	6	18
Helminth eggs	寄生虫卵						
<i>Ascaris(tumbricoides)</i>	回虫卵						4
Total	計		0	0	0	0	4
Helminth eggs frequencies of 1cm <sup>3</sup>	試料1cm <sup>3</sup> 中の寄生虫卵密度		0.0	0.0	0.0	0.0	2.4
							$\times 10$
Digestion remains	明らかな消化残渣		(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Charcoal fragments	微細炭化物		(-)	(-)	(-)	(+)	(-)



第9図 三王山遺跡2区西壁21J17グリッドにおける花粉ダイアグラム



第10図 三王山遺跡2区SK13覆土における花粉ダイアグラム

分布しており、周辺地域にスギ、ナラ類、クルミ属などが分布していたと考えられる。

3層では寄生虫卵の回虫卵が検出された。密度は低いものの、周囲に何らかの人為環境が存在したことが示唆される。回虫は中間宿主を必要とせず、虫卵の付着した野菜・野草の摂取や水系により経口感染する。

## 第4節 三王山遺跡における放射性炭素 ( $^{14}\text{C}$ ) 年代測定

### A 測定試料と測定方法

2区 SK13 覆土の2層から採取された炭化物について、酸-アルカリ-酸洗浄を行って試料の処理・調整後、加速器質量分析 (AMS) 法により年代測定を行った (第6表)。測定実施機関は米国ベータ社である。

### B 測定結果

測定結果は推定されている奈良・平安時代を若干遡るようにもみえる。これについては、今回の  $^{14}\text{C}$  年代 (補正  $^{14}\text{C}$  年代) が測定対象部位の生育終了年代を示していることからさほど問題はないと思われるが、考古学側からの検討もお願いしたい。

なお、各用語の意味は次の通りである。

(1) 未補正  $^{14}\text{C}$  年代測定値 試料の  $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$  比から、単純に現在 (AD1950年) から何年前かを計算した値。 $^{14}\text{C}$  の半減期は、国際的慣例によりリビー (Libby) の 5,568年を用いた。

(2)  $\delta^{13}\text{C}$  測定値 試料の測定  $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$  比を補正するための炭素安定同位体比 ( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ )。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。

(3) 補正  $^{14}\text{C}$  年代値  $\delta^{13}\text{C}$  測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$  の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。試料の  $\delta^{13}\text{C}$  値を -25 (‰) に標準化することによって得られる年代である。

(4) 暦年代 過去の宇宙線強度の変動による大気中  $^{14}\text{C}$  濃度の変動を補正することにより算出した年代 (西暦)。補正には、年代既知の樹木年輪の  $^{14}\text{C}$  の詳細な測定値、およびサンゴの U-Th 年代と  $^{14}\text{C}$  年代の比較により作成された較正曲線を使用した。使用したデータセットは、INTCAL04: Calibration Issue of Radiocarbon, 46 (3), 2004 (海洋性試料については、Marine04) である。なお、較正曲線のスムーズ化には、下記の理論を用いた。

Talma, A.S. and Vogel, J.C. (1993) A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates. Radiocarbon, 35 (2), p.317-322.

暦年代の交点とは、補正  $^{14}\text{C}$  年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1  $\sigma$  (68%確率)  $\cdot$  2  $\sigma$  (95%確率) は、補正  $^{14}\text{C}$  年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。

第6表 測定試料と処理・測定方法

地点・遺構	試料	種類	前処理・調整	測定法
2区 SK13	$^{14}\text{C}$ -1	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄	加速器質量分析 (AMS) 法

第7表 放射性炭素 ( $^{14}\text{C}$ ) 年代測定結果

試料	未補正 $^{14}\text{C}$ 年代 (年 BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 $^{14}\text{C}$ 年代 (年 BP)	暦年代 (西暦)	測定 No. (Beta-)
$^{14}\text{C}$ -1	1340 $\pm$ 40	-25.4	1330 $\pm$ 40	2 $\sigma$ : AD 640 ~ 770 2 $\sigma$ : AD 640 ~ 770 交点 : AD 670	232924

モダン・リファレンス・スタンダードは、国際的な慣例として NBS Oxalic Acid の  $^{14}\text{C}$  濃度の 95% を使用した。

## 第七章 ま と め

### 第 1 節 各調査区の状況

亀田中学校がこの地へ移転してきたのは昭和 25 年である。更正図によると、移転以前の土地の利用状況は、図版 29 に示したように、畑・水田・道・宅地・その他として利用されていた。発掘調査の結果、第 V 章で記したように、1～3 区は遺構確認面の一部、あるいは大半が削平されており遺跡の遺存状況は悪かった。

1 区は 20F グリッド付近に遺物包含層のⅢ b 層・遺構確認面のⅣ a 層が僅かに残っており、非ロクロの土師器長甕 (37・38) が出土している。地震痕跡である噴砂痕も確認された。この噴砂痕が確認された場所は包含層相当のⅢ b 層が残っていなかった。噴砂痕はⅣ a 層を破っているが、Ⅲ b 層を破っているかまでは確認できなかった。地震の起きた時代は不明である。ほかは全て土木工事によりⅦ層まで削平されていた。この工事は昭和 54 年に行われた鉄筋校舎への改築工事とこれ以降の下水道工事・造園工事などと考えられる。遺跡は、2 区・3 区の様子から 1 区にも広がっていたことが確実と考えられるが、現在は全壊していると推測される。

2 区もⅣ a 層は広範囲に削平されていたが、部分的に包含層～遺構確認面が残っていたので、遺跡の様相の一端を調査することができた。更正図 (上図) と 2 区の遺構確認面の様相を示した下図を比較すると以下のことが見えてくる (図版 29)。更正図の水田部分の形状と 21・22M グリッド付近、18L・M グリッド付近、20I20・25 グリッド付近の形状が近似している。包含層Ⅲ層・遺構確認面Ⅳ a 層が残っていた場所の形状は、更正図の「畑地」とされた場所の形状に近似している。調査には移転後の亀田中学校第 1 回卒業生であった五十嵐喜智平氏が作業員として参加下さっていた。五十嵐氏の記憶によれば、中学校建設以前には梨畑や畑・水田が広がっていたとのことである。これらのことから更正図は記載事項および縮尺など測量図としても概ね正しいものと解される。

一方、酒井和男氏の報告 [酒井 1980] にあるように、亀田中学校の敷地にあったとされる三王山と呼ばれていた砂丘の丘は、更正図には載っていない。しかし五十嵐氏の話ではこの砂丘上に畑があったとのことである。中学校移転に伴いこの砂丘を崩し平地にしたとのことである。高さは現在より 4～5m ほど高かったと記憶されていた。

また同報告ではこの砂丘上には戦時中砲台が築かれ、遠く新潟の方まで見渡せた、という話を伝えるが、砲台は 2 区のやや南側、砂丘の下にあったらしい。以上のことから、三王山と呼ばれた砂丘は亀田中学校移転間際まで存在し、移転工事に伴って崩されたと推測される。そして崩された砂を水田部分に盛って用地を平坦化したのであろう。2 区基本層序の⑥⑦にあるⅢ e 層は粘土質土壌で、これは水田耕土と推測される。そしてこの上の盛土は黒砂層と言ってよいほどであった。この黒砂は三王山が崩されたときのものであろう。Ⅲ e 層に古代や中世の遺物が入る要因はこのことに由来すると考えられる。

3 区は図版 17・写真図版 4 のとおり、この遺跡の立地条件を如実に示していた。すなわち砂丘の南側を選定し、砂丘上ではなく、その縁辺に堆積したシルト層上に立地している。3 区遺構確認面は、西側から東側へ向かって、「黄褐色シルト層 (Ⅲ層)→黒色砂層 (Ⅳ層)→黄灰～灰白色砂層 (Ⅴ層)」と堆積順を示すように土質が変化している。現在のグラウンド方面に砂丘が存在していたことを、このことから傍証できよう。また第 1 次調査の基本層序は表土を除くⅡ～Ⅴ層は全て砂層を基調としており、遺跡の北東部が砂丘により標高が高かったことがうかがわれる。

なお、3 区遺構確認面の黄褐色シルト層 (Ⅲ層、1・2 区のⅣ a 層に相当) の上面は削平されていることから、黒





として挙げられる。

覆土はIV a層と推測されるシルトと暗褐色のシルト層（おそらく本来の包含層に当たる層）が大きなブロック状になって入り乱れて堆積していた。覆土は人為的に埋めたものと推測する。

SE38では井戸枠を伴うものであった可能性が高い。SE39は素掘りの井戸であったと推測する。共にすり鉢状に大きく掘り下げ、透水層のVII層も一気に掘り抜いている。SE38では大きく掘り抜いた後、土居桁を設置し（水溜用曲物が据えられていた可能性もある）、井戸枠を構築しつつ、これを支持するため外側を残土で埋め、井戸を構築していた様子が想定できる。廃絶にあたっては井戸枠の上部を撤去し、一気に埋めたものと推測する。共に距離が近いことから水が湧くことを知っての構築作業であったと推測する。

SE38からは土師器無台椀片が出土し、SE39からは土師器長甕片（2）のほかいずれも細片であるが須恵器無台杯・土師器無台椀・土師器小甕が出土している。これらのこととSE31等と井戸の構築方法が異なることから、SE38・39は平安時代に属する可能性が高い。

### 3) 3区 SE30・SE193（図版22・24、写真図版16・17）

両井戸は井戸枠部材と推測される木製品が出土した。

SE30の断面形は逆凸状になっており、覆土が1～14層では暗褐色のシルトまたは砂質土を、15～23層ではIII層の黄褐色地山層を基調とし、色調・土質とも全く異なっていたので、構築（掘削と井戸側設置）→使用→廃絶に至るまで概ね以下の過程を経たものと考えられる。

①掘削 開口部（15～22層）を広く掘削する（井戸枠部材は全て準備されている状態）。

②井戸枠設置（aまたはb）

②a 挿入式〔鐘方2003〕 曲物を据え、既成の井戸枠を設置し、井戸枠外縁を埋め戻す。

②b 組立て式〔鐘方2003〕 曲物を据え予め用意された井戸枠部材で井戸枠を構築。その後井戸枠外縁を埋め戻す。

③使用

④廃絶後 井戸枠の上部構造は回収された可能性が高い。1～14層は崩落土も含まれるだろうが人為的な埋め戻しが行われた可能性が高い。2層は炭化物を非常に多く含む層で、火を用いた何らかの行為を直上で行ったか、意図的にそのような土を搬入して埋めた可能性が高い。

出土遺物は1・2層から珠洲焼甕（100）やすり鉢（97・99）が出土しており、細片だが須恵器蓋や無台杯、土師器食膳具や煮炊具が11～14層で出土している。これらのことも上記埋め戻しの傍証と考え得る。このように考えた場合、SE30は鎌倉～室町時代の遺構と考えられる。

SE193の断面形は逆台形状を呈する。横棧と推測される木製品（146～148）が出土していることと覆土の堆積状況から、井戸枠を伴う井戸であったと推測する。覆土の堆積状況には特徴があるのでSE30と同様に見て行くこととする。なお曲物が備わっていたかどうかは不明であった。

①掘削 作業スペースを含め広く一気に掘り下げる（井戸枠部材は全て準備されている状態）。

②井戸側設置

②a 3基の井戸が切り合っている。湧水深度が既知であった場合、上記挿入式で井戸枠を設置した可能性も考えられる。

②b 上記組立て式で井戸枠を組み立てつつ外縁を埋める。

③使用



第11図 3区SE30 土層断面



④ 廃絶後 廃棄にあたっては幾つかの ⑦  
特徴が観察できた。

⑦  
1.9m

④-1 17層は枠の板痕と推測される。板が腐食し土壌化したものか、抜板後別の土が混入したものかは明瞭でないが前者と推測する。

④-2 9～11層は12層上面から掘られている。

④-3 上記の結果、12層～16層は廃棄に伴う人為的な埋め戻しの可能性が高い。

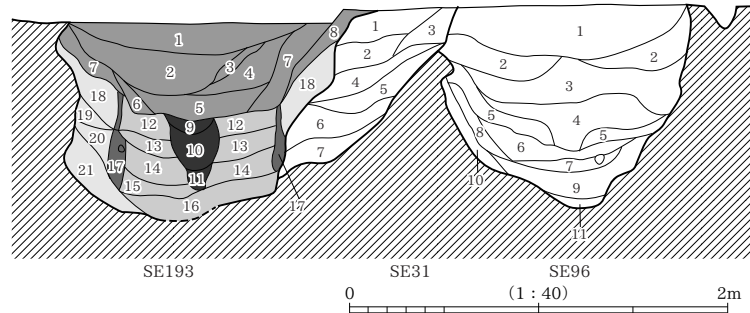
④-4 12層から上部にも井戸枠が存在し、廃棄時に抜き取られている可能性が高い。

これらのことから、以下のことが想定される。

- a 廃棄に伴い12～16層を埋め戻す。
- b 9～11層を掘り抜き何らかの行為を執り行う。この段階で井戸枠上部は既に取り外されている可能性が高い。
- c 地表面まで埋め戻す。

bについては、現在でも神社が行う「井戸祭祀」が参考になるかも知れない。これは埋井に伴うお祓いで、祭神は水波能売命である。井戸下部を埋め、そこに竹筒を刺し「息抜き」をする。祝詞を奏上し竹は刺したまま残りを埋める。という祭式である。9～11層がこの「息抜き」痕と言いつけることはできないが、この井戸では埋井に伴い、広義の祭祀（習俗的行為）が行われたものと推測する。今後類例の増加を待ちたい。

遺物は、1～7層で珠洲焼甕や砥石（130）が出土している。このほか須恵器食膳具や貯蔵具、土師器食膳具・煮炊具の細片が出土しているが、12層以下では珠洲焼広口壺（111）のほか須恵器食膳具や貯蔵具、土師器食膳具・煮炊具の細片が出土している。18～21層中からは遺物は出土しなかった。これらのことから、本井戸の帰属年代は鎌倉～室町時代と推測する。



第12図 3区 SE193 土層断面図

## B 2区 SD1～3について（図版6）

本遺構については以下の特徴が挙げられる。

- ① SD1とSD2・3は約1.2m前後の間隔で平行しており、深さはいずれも10～20cmと浅い。
- ② IV a層上面の標高は全体的には北から南に向かって、東から西に向かって低くなっている。

上記のことから以下のことが推測される。

a 水を流す目的であれば東から西に向かって流れていたものと推測する。

b 溝と溝の間が道であったと仮定すると、当初はSD1-SD3の間がこれにあたり、後にSD2が設けられたのであろう。旧亀田町域では、荒木前遺跡第2次調査（川上1996）で道幅3.9～5m・側溝深度0.65～0.89mの道路状遺構が検出されている。また中の山遺跡では溝間約1m前後に保ちながら平行に走る2号溝・3号溝が検出されている。溝の規模は、2号溝が幅員1.0～1.2m、深さ0.4～0.5mで、3号溝は幅員1.0～1.2m、深さ0.5mであった。報告では溝間に何らかの目的があるのではないかと推測されている（川上1982）。

遺構の規模や位置関係などから、2区SD1～SD3は道路の側溝である可能性もある。

### 第3節 遺物の年代観について

#### A SK13 出土遺物について

SK13からは須恵器有台杯・須恵器無台杯・土師器長甕・土師器小甕が出土している。細片のため掲載できなかった土器も上記器種であった。第V章で記したように出土遺物の一括性は高い。

本遺構出土食膳具の構成比率は須恵器100%である。器種構成率表は第8表のとおりである。報告遺物のほかに無台杯もしくは有台杯の口縁部片が2点あり（無台杯としてカウントした）、これらを含めた上で須恵器食膳具の胎土を観察すると、5と6の胎土はC群で、残りの5点の胎土はA群であった。須恵器の産地別構成比率は、C群：A群＝75%：25%であった。

須恵器有台杯・無台杯の器形と法量の特徴は山三賀Ⅱ遺跡でⅣ1期〔新潟古代土器研究会2004〕と比定されるSI14出土遺物やⅣ2期〔同上〕に比定されるSI15出土遺物に近似する。しかしながら須恵器有台杯5の器形や法量はSI14により近いことから、SK13出土遺物はⅣ1期を中心とした時期と推測する。実年代では8世紀中葉頃と考えられている〔春日<sup>ほか</sup>2008〕。

なお、SK13の2層出土炭化物の放射性炭素年代測定の結果は、AD640～770、交点AD670と推測される時期よりも古い年代の結果が出ている。

第8表 2区SK13出土土器の器種構成率表

	食膳具 須恵器				食膳具計		煮炊具 土師器				煮炊具計		総計						
	有台杯		無台杯				長甕		小甕										
	口縁値(X/36)	口縁数(点)	底残値(X/36)	底部数(点)	総点数(点)	総重量(g)	口縁値(X/36)	口縁数(点)	底残値(X/36)	底部数(点)	総点数(点)	総重量(g)	口縁値(X/36)	口縁数(点)	底残値(X/36)	底部数(点)	総点数(点)	総重量(g)	
口縁値(X/36)	0.41	0.37%	0.88	80.44%	1.29	80.81%	0.13	11.88%	0.08	7.31%	0.21	19.19%	1.50	100.00%					
口縁数(点)	1	9.09%	7	63.64%	8.00	72.73%	1	9.09%	2	18.18%	3	27.27%	11.00	100.00%					
底残値(X/36)	1	31.64%	1.33	42.10%	2.33	73.74%	0.83	26.26%	0	0.00%	0.83	26.26%	3.06	100.00%					
底部数(点)	1	16.67%	4	66.66%	5.00	83.33%	1.00	16.67%	0	0.00%	1	16.67%	6.00	100.00%					
総点数(点)	1	2.86%	11	31.43%	12.00	34.26%	16	45.71%	7	20.00%	23	65.71%	35.00	100.00%					
総重量(g)	216.0	26.71%	326.6	40.39%	452.60	67.10%	250.0	30.92%	16.0	1.98%	266	32.90%	808.60	100.00%					

#### B その他出土土器について

攪乱土から出土している39や44、49はこれに近い時期と推測する。一方胎土B群、佐渡小泊窯跡群産と推測される須恵器も定量出土している。破片資料が多く詳細な時期の比定は困難である。これまでの研究成果から小泊窯跡群産須恵器が越後国に流通し始めるのはⅤ1期以降、9世紀前半以降と考えられていることから、これを上限年代と考えておくこととする。土師器無台碗も破片資料が多く詳細については良く分からない。口径13cm前後で器高3cm前後のものが多いと考えられることから、Ⅵ期頃、9世紀末頃と考えておく。

以上のことから古代についてはSK13のⅣ1期を上限、Ⅵ期を下限として断続的に営まれていたと推測される。

#### C 鎌倉・室町時代

鎌倉・室町時代の遺物は、珠洲焼や青磁が少量出土した。しかし全て破片資料であるため詳細な時期については不明である。珠洲焼甕の口縁部80をみると、頸部で明瞭に括れ、口縁端部を角縁状に仕上げていることからⅣ期かⅤ期頃と考えておく。実年代では14世紀～15世紀頃と推測される〔吉岡1994〕。第1次調査地出土遺物も鎌倉時代と推定される遺物も出土しているが、室町時代の遺物も多く出土している。

### 第4節 三王山遺跡の性格について

第1次調査～今次調査に至る中で主体的に出土している遺物は、奈良・平安時代の須恵器や土師器と鎌倉・室町時代の国内産陶器・青磁や白磁といった貿易陶磁である。このことから三王山遺跡は古代～中世に亘って断続的に人が暮らした場所であることが分かってきた。また各時代によって遺跡の性格も異なっていたことも分か

ってきた。ここでは周辺遺跡の様相も概観しながら三王山遺跡の性格について検討する。三王山遺跡周辺の遺跡については『上郷遺跡Ⅱ』〔春日<sup>ほか</sup>1997c〕（以下「上郷Ⅱ」という）で詳しく検討されているので、このことも踏まえて検討する。

### A 奈良・平安時代の三王山遺跡

前節で見たように8世紀中葉頃に出現し9世紀末頃まで営まれていた。周辺遺跡の消長について上郷Ⅱを参考に第13図にまとめた。亀田砂丘上に位置する古代の遺跡は8世紀中葉頃から出現し9世紀の終わり頃まで営まれている例が多い。一方砂丘周辺の自然堤防上に位置する遺跡は9世紀後半頃出現し10世紀初頭頃まで営まれているようである。

奈良～平安時代の砂丘上の遺跡では茗荷谷遺跡から銅製の銚帯金具が出土しており、当遺跡に律令官人が関与していた可能性がある〔新潟市1994〕。平安時代の砂丘上の遺跡では小丸山遺跡が上層農民の居宅域と考えられている〔新潟市1994・小池<sup>ほか</sup>1995〕。三王山遺跡からは階層性を示す遺物が出土していないことから、一般的な集落であったと推測される。また削平範囲が広いこともあり、出土遺物量も少なく明確な遺構も把握しにくい状況であった。遺跡の性格まで考察できるような状況ではなかったが、三王山遺跡は8世紀中葉以降に一般的な集落として成立し、徐々に小規模になっていった集落と推測する。

一方で平安時代になると沖積地で展開する集落が活発化する。9世紀前葉から10世紀初頭の遺跡が多く、この時期が当地域の開発の画期になっていると考えられる〔春日<sup>ほか</sup>1997〕。上郷遺跡では水田跡が検出されている。牛道遺跡では畠作や稲作が行われていた可能性が高いと推定される〔土橋<sup>ほか</sup>1999〕。また則天文字が書かれた墨書土器が18点出土していることも特徴的である。駒首渦遺跡でも水田耕作を基盤としていたことが推測され、吉祥句が書かれた墨書土器が多く出土している。また仏教関連施設と考えられる四面庇付の2間×2間の掘立柱建物跡が検出されている〔渡邊<sup>ほか</sup>2009〕。これらの遺跡と比較すると、三王山遺跡では、活発な人の営みの様子はうかがえない。このことから小規模な集落であった可能性が高い。

遺跡名	年代	上郷Ⅱ ブロック	7世紀	8世紀	9世紀	10世紀	11世紀	主な文献
1 阿賀野川中州A遺跡	1	1		—————	—————			新潟市1994
2 茗荷谷遺跡	1	1		— — — — —	—————			新潟市1995
3 小丸山遺跡	1	1			—————	-----		新潟市1996
4 山ノ家遺跡	1	1		—————				川上1992・横越町2000
5 三王山遺跡	1	1		— — — — —	—————			酒井1980
6 中ノ山遺跡	1	1		—————	— — — — —			川上 <sup>ほか</sup> 1983
7 荒木前遺跡	1	1	—————	— — — — —				渡邊 <sup>ほか</sup> 1994
8 上郷遺跡	2	2			— — — — —	—————		春日 <sup>ほか</sup> 1997
9 牛道遺跡	2か	2か			—————	—————		土橋 <sup>ほか</sup> 1999
10 西郷遺跡（上層）	2か	2か			—————	—————		土橋 <sup>ほか</sup> 2009
11 大蔵遺跡	2か	2か			—————	—————		土橋 <sup>ほか</sup> 2007
12 日水遺跡	2か	2か			—————	—————		今井 <sup>ほか</sup> 2007
13 駒首渦遺跡	2か	2か			— — — — —	— — — — —		渡邊 <sup>ほか</sup> 2009

第13図 三王山遺跡周辺の遺跡の存続期間  
 (春日1997cを参考に作成。実年代の比定に当たっては春日2008を使用した)

### B 鎌倉・室町時代の三王山遺跡

今次調査区での出土量は極端に少ないが、特に1次調査地（図版4・30）では国内産の陶器や青磁といった貿易磁器も定量出土していることから、かなり経済力があつたものと推測される。同時代と考えられる周辺の遺跡と比較しても、量や器種構成共に優越している。第1次調査地の長方形竪穴遺構（図版30）から出土した青銅製の香炉や鉄鉢が共伴したとされる珠洲焼すり鉢と同じ年代を考えてよいのならば、仏器がまとまって出土した好例となるが、現段階では判断し兼ねる。しかしながら国内陶器や貿易陶磁器が多いこと、今次調査区で曲物を有する井戸が多いことから、活発な人の営みや経済力が高いことが推測される。これらのことから、三王山遺跡は階層性が高い集団により営まれた遺跡である可能性が高いと考えられる。このことは周辺の荒木前遺跡についても考えられることで、両者の関係については今後の課題として待ちたい。

## 引用・参考文献

- ア 荒川隆史ほか 2006 『一般国道49号 安田バイパス関係発掘調査報告書Ⅰ 大坪遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- イ 飯坂盛泰ほか 2002 『一般国道7号中条黒川バイパス関係発掘調査報告書 蔵ノ坪遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 石山精哉ほか 1996 『磐越自動車道関係発掘調査報告書 江内遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 伊藤 崇 1998 『松山窯跡 新潟県北蒲原郡黒川村大字塩沢地内における古代窯跡の発掘調査報告書』黒川村教育委員会
- 今井さやか 2007 『日水道跡 第3次調査-鍋田土地区画整理事業に伴う日水道跡発掘調査報告書-』新潟市教育委員会
- ウ 植田真・速竹陽一郎ほか 2003 『結七島遺跡発掘調査報告書Ⅱ』新潟市教育委員会
- 上野一久・春日真実 1997 『横雲バイパス関係発掘調査報告書 上郷遺跡Ⅱ』新潟市教育委員会
- 潮田憲幸 2008 『諏訪畑遺跡 第3次調査-老人保健施設「秋葉の郷」建設に伴う発掘調査報告書-』新潟市教育委員会
- 潮田憲幸 2010 『上浦A遺跡 第14次調査-市道結第6号市之瀬線改良工事に伴う発掘調査報告書-』新潟市教育委員会
- 宇野隆夫 1989 『考古資料に見る古代と中世の歴史と社会』真陽社
- 宇野隆夫 1992 『食器計量の意義と方法』『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集 国立歴史民俗博物館
- エ 江口友子 2001 『川根谷内墓所遺跡』国道49号横雲バイパス関係発掘調査報告書Ⅳ 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 遠藤恭雄 2004 『下前川原遺跡』新潟県豊栄市下前川原遺跡発掘調査報告書 豊栄市教育委員会
- オ 岡安光彦・大谷祐司ほか 2005 『日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書Ⅶ 六斗砦遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小田由美子・高橋保雄 2002 『磐越自動車道関係発掘調査報告書 赤坂中世窯跡 赤坂山B遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- カ 柿田祐司 2001 『須恵器甕の叩き目から』『北陸古代土器研究』第9号 北陸古代土器研究会
- 春日真実 1991 『古代佐渡小泊窯における須恵器の生産と流通』『新潟考古談話会』第8号 新潟考古学談話会
- 春日真実 1994 『第Ⅵ章まとめ 2古墳時代後期の土器』『北陸自動車道 上越市春日・木田地区発掘調査報告書Ⅳ 一ノ口遺跡東地区(本文編)』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 1995 『古代集落の展開』『研究紀要』(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 1997a 『越後・佐渡における9世紀中葉の画期』『北陸古代土器研究』第6号 北陸古代土器研究会
- 春日真実 1997b 『越後・佐渡における10・11世紀の土器様相』『北陸古代土器研究』第7号 北陸古代土器研究会
- 春日真実 1997c 『横雲バイパス関係発掘調査報告書 上郷遺跡Ⅱ』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 1998 『中組遺跡出土の緑釉陶器について』『町史研究 よした』第2号 吉田町教育委員会
- 春日真実 1999 『第4章古代 第2節土器編年と地域性』『新潟県の考古学』古志書院
- 春日真実 2000 『考古編 第5章 まとめ』『吉田町史 資料編1 考古・古代・中世』吉田町
- 春日真実 2003a 『磐越自動車道関係発掘調査報告書 沖ノ羽遺跡Ⅲ(C地区)』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 2003b 『消費遺跡出土佐渡小泊産須恵器のロクロ回転方向-越後出土の資料を中心に』『研究紀要』第4号 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 2005 『越後における奈良・平安時代土器編年の対応関係について-「今池編年」・「下ノ西編年」・「山三賀編年」の検討を中心に-』『新潟考古』第16号 新潟県考古学会
- 春日真実 2007 『越後における古代の煮炊具について』『新潟考古』第18号 新潟県考古学会
- 春日真実ほか 2004 『越後阿賀北地域の古代土器様相』新潟古代土器研究会
- 春日真実ほか 2008 『一般国道8号 糸魚川東バイパス関係発掘調査報告書Ⅲ 六反田南遺跡 前波南遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実・笹澤正史 1999 『越後・佐渡の様相』『北陸古代土器研究』第8号 北陸古代土器研究会
- 加藤 学ほか 2003 『北陸新幹線関係発掘調査報告書Ⅱ 仲田遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学ほか 2006 『北陸新幹線関係発掘調査報告書Ⅳ 用言寺遺跡Ⅰ』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学ほか 2007 『北陸新幹線関係発掘調査報告書Ⅶ 用言寺遺跡Ⅱ』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 鐘方正樹 2003 『ものが語る歴史8 井戸の考古学』同成社
- 亀田町史編さん委員会 1990 『亀田の歴史』上巻・下巻 亀田町
- 亀田町史編さん委員会 1990 『亀田の歴史』資料編 亀田町
- 川上貞夫 1981 『山崎須恵器窯』五泉市教育委員会
- 川上貞夫 1982 『中の山遺跡発掘調査報告書』亀田町教育委員会
- 川上貞夫 1993 『山人家遺跡緊急発掘調査報告書』横越村教育委員会
- 川上貞夫 1996 『荒木前遺跡 第2次調査』新潟県中蒲原郡亀田町・荒木前遺跡発掘調査報告書 亀田町教育委員会
- キ 北野博司 1999 『須恵器貯蔵具の器種分類案』『北陸古代土器研究』第8号 北陸古代土器研究会
- 北村 淳・菊池康一郎ほか 2004 『中谷内遺跡Ⅲ・沖ノ羽遺跡Ⅱ・細池寺道上遺跡発掘調査報告書』新潟市教育委員会
- コ 小池邦明 1999 『山木戸遺跡第2次発掘調査概報』新潟市教育委員会
- 小池邦明・藤塚 明 1993 『新潟市の場遺跡 的場土地区画整理事業用地内発掘調査報告書』新潟市教育委員会
- 小池邦明ほか 1992 『山木戸遺跡第1次発掘調査概報』新潟市教育委員会
- 小池邦明・本間佳吉 1995 『新潟市小丸山遺跡 直り山団地建設事業用地内発掘調査報告書』新潟市教育委員会
- 小林昌二 2010 『古代越後の蒲原・沼垂郡一四石遺跡に触れて-』『平成21年度 新潟市遺跡発掘調査速報会 最新調査成果が語る新潟市の歴史』新潟市埋蔵文化財センター
- 古山正忠・竹原秀雄 1967 『新版標準土色帖』農林水産技術会議事務所監修
- サ 酒井和男 1980 『三王山遺跡発掘調査報告書』亀田町教育委員会
- 酒井和男 2000a 『小丸山遺跡』『横越町史』資料編 横越町
- 酒井和男 2001b 『山人家遺跡』『横越町史』資料編 横越町
- 坂井秀弥 1988a 『越後・佐渡における古代土器の生産と流通-8~10世紀を中心として-』『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』報告編 石川県考古学研究会・北陸古代土器研究会
- 坂井秀弥 1988b 『古代のごはんは蒸した『飯』であった』『新潟県考古学談話会会報』第2号 新潟県考古学談話会
- 坂井秀弥 1989a 『第Ⅶ章まとめ 2奈良・平安時代の土器』『新新バイパス関係発掘調査法報告書 山三賀Ⅱ遺跡』新潟県教育委員会・建設省北陸地方建設局新潟県国道工事事務所
- 坂井秀弥 1989b 『北陸型土師器長甕の制作技法』『新潟県考古学談話会会報』第3号 新潟県考古学談話会
- 坂井秀弥 1990a 『山三賀Ⅱ遺跡からみた阿賀北地方の古代土器』『新潟県考古学談話会会報』第4号 新潟県考古学談話会
- 坂井秀弥 1990b 『古代ロクロ土師器甕の二系譜と須恵器の関係』『新潟県考古学談話会会報』第6号 新潟県考古学談話会
- 坂井秀弥 1994 『庁と館、集落と屋敷-東国古代遺跡における館の形式-』『城と館を掘る・読む-古代から中世へ-』山川出版社
- 坂井秀弥 1996 『水辺の古代官衙遺跡-越後平野の内水面・舟運・漁業』『越と古代の北陸』名著出版
- 坂井秀弥 1999 『第Ⅳ章古代 第1節総論』『新潟県の考古学』古志書院
- 坂井秀弥ほか 1984 『上新バイパス関係発掘調査報告書Ⅰ 今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』新潟県教育委員会
- 坂井秀弥ほか 1986 『北陸自動車道 上越市春日・木田地区発掘調査報告書Ⅱ 一之口遺跡西地区』新潟県教育委員会
- 坂井秀弥ほか 1989 『新新バイパス関係発掘調査法報告書 山三賀Ⅱ遺跡』新潟県教育委員会・建設省北陸地方建設局新潟県国道工事事務所
- 坂井秀弥・鶴間正昭・春日真実 1991 『佐渡の須恵器』『新潟考古』第2号 新潟県考古学会
- 笹澤正史 2001 『須恵器瓶類の口縁頸部接合痕跡』『北陸古代土器研究』第9号 北陸古代土器研究会
- 佐藤友子 2007 『新潟市近世新潟町跡の調査について』『新潟県考古学会第18回大会研究発表会要旨』新潟県考古学会
- 佐藤友子ほか 2008 『一般国道7号 万代橋下流橋関係発掘調査報告書 近世新潟町跡(広小路掘地点)』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- シ 上越市 2003 『上越市史』資料編2 考古 上越市
- ス 鈴木俊成 1994 『第Ⅵ章まとめ 1平安時代の土器』『北陸自動車道 上越市春日・木田地区発掘調査報告書Ⅳ 一之口遺跡東地区(本文編)』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 鈴木俊成ほか 1998 『県営ほ場整備事業(神林村)関連埋蔵文化財発掘調査報告書 天王前遺跡・有明の場遺跡・石川遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 鈴木俊成・春日真実・高橋一功 1994 『北陸自動車道 上越市春日・木田地区発掘調査報告書Ⅳ 一之口遺跡東地区(本文編)』新潟県教育委員会・(財)新潟



- 泉埋蔵文化財調査事業団
- タ 高橋保雄ほか 2006 『日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書XIII 住古遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 高野裕子・渡邊朋和 2003 『川口乙遺跡発掘調査報告書』 新潟市教育委員会
- 田中一廣・丹下昌之ほか 2004 『結七島遺跡発掘調査報告書III』 新潟市教育委員会
- ツ 立木宏明・渡邊朋和ほか 1998 『細池遺跡発掘調査報告書』 新潟市教育委員会
- 立木宏明ほか 1999 『中谷内遺跡発掘調査報告書』 新潟市教育委員会
- 立木宏明ほか 2000 『川根遺跡発掘調査報告書』 新潟市教育委員会
- 立木宏明・高野裕子ほか 2002 『内野遺跡発掘調査報告書』 新潟市教育委員会
- 立木宏明・澤野慶子ほか 2003 『結七島遺跡発掘調査報告書I』 新潟市教育委員会
- 立木宏明・澤野慶子ほか 2004a 『愛宕澤遺跡発掘調査報告書』 新潟市教育委員会
- 立木宏明・澤野慶子ほか 2004b 『山王浦遺跡発掘調査報告書』 新潟市教育委員会
- 立木宏明・澤野慶子ほか 2005 『沖ノ羽遺跡発掘調査報告書III』 新潟市教育委員会
- 立木宏明・澤野慶子ほか 2008 『沖ノ羽遺跡IV 第15次調査-県営圃場整備事業(担い手育成型) 満日地区に伴う沖ノ羽遺跡第8次発掘調査報告書』 新潟市教育委員会
- 立木宏明・八藤後智人ほか 2009 『萱免遺跡 第2次調査-宅地造成に伴う萱免遺跡第2次発掘調査報告書-』 新潟市教育委員会
- 鶴巻康志・若林知美ほか 2003 『桑ノ口遺跡発掘調査報告書』 新潟市教育委員会
- ト 土橋由理子ほか 1999 『国道49号横雲バイパス関係発掘調査報告書III 牛道遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 土橋由理子 2009 『一般国道49号亀田バイパス関係発掘調査報告書II 西郷遺跡 大蔵遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- ナ 長澤展生ほか 2002 『無頭遺跡発掘調査報告書』 新潟市教育委員会
- ニ 新潟県 1986 『新潟県史 通史編1 原始・古代』 新潟県
- 新潟県 1987 『新潟県史 通史編2 中世』 新潟県
- 新潟古代土器研究会 2004 『越後阿賀北地域の古代土器様相』 新潟古代土器研究会
- 新潟市 2007 『新新潟歴史双書2 新潟市の遺跡』 新潟市
- 新潟市史編さん原始古代中世史部会 1994 『新潟市史』資料編1 原始古代中世 新潟市
- ヒ 廣野耕造 1996 『石動遺跡平成7年度発掘調査概報』 新潟市教育委員会
- 廣野耕造 2000 『新潟市前田遺跡 県営かんがい排水事業に伴う発掘調査報告書』 新潟市教育委員会
- 廣野耕造・朝岡政康 1999 『大淵遺跡 宅地開発事業に伴う発掘調査報告書』 新潟市教育委員会
- 藤塚 明・小池邦明・渡邊朋和 1982 『新潟市小丸山遺跡発掘調査概報』 新潟市教育委員会
- 古庄浩朗ほか 2003 『結七島遺跡発掘調査報告書II』 新潟市教育委員会
- 星野信明ほか 1996 『磐越自動車道関係発掘調査報告書 沖ノ羽遺跡II (B地区)』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 細野高伯ほか 2002 『沖ノ羽遺跡発掘調査報告書』 新潟市教育委員会
- ミ 水沢幸一 1996a 『中条町埋蔵文化財調査報告書 第9集 下町・坊城遺跡・中倉遺跡ほか』 中条町教育委員会
- 水沢幸一 1996b 『中条町埋蔵文化財調査報告書 第10集 江上館遺跡IV』 中条町教育委員会
- 水沢幸一 1997 『中条町埋蔵文化財調査報告書 第12集 下町・坊城遺跡II』 中条町教育委員会
- 水沢幸一 1999b 『中条町埋蔵文化財調査報告書 第18集 下町・坊城遺跡III』 中条町教育委員会
- 水沢幸一 2000 『中条町埋蔵文化財調査報告書 第20集 下町・坊城遺跡IV』 中条町教育委員会
- 水沢幸一 2001 『中条町埋蔵文化財調査報告書 第21集 下町・坊城遺跡V』 中条町教育委員会
- 水沢幸一 2005 『中条町埋蔵文化財調査報告書 第33集 下町・坊城遺跡VI』 中条町教育委員会
- 水沢幸一 2005 『越後の中世土器』『新潟考古』第16号 新潟県考古学会
- 水沢幸一 2006 『奥山荘城館遺跡 中世越後の荘園と館群 日本の遺跡15』 同成社
- ヤ 山崎忠良ほか 2008 『上越三和道路関係発掘調査報告書VI 延命寺遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- ヨ 吉井雅勇ほか 1999 『元山窯跡群 平成9・10年町内遺跡試掘確認調査報告書』 荒川町教育委員会
- 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』 吉川弘文館
- 吉岡康暢 2003 『珠洲焼概論』『平成15年度埋蔵文化財専門職員実務研修「講義」・「事例報告」資料集』 新潟県教育庁文化行政課
- 米沢 康 1965 『大化前代における越の史的位』『信濃』17-1 信濃史学会
- 米沢 康 1980 『大化二年の越中国四群分割をめぐって』『信濃』32-6 信濃史学会
- ワ 渡邊朋和 1991 『長沼遺跡発掘調査報告書』 新潟市教育委員会
- 渡邊朋和 1992 『上浦遺跡発掘調査報告書』 新潟市教育委員会
- 渡邊朋和 1999 『第4章第4節第3項 製鉄』『新潟県の考古学』 新潟県考古学会
- 渡邊朋和ほか 1997 『金津丘陵製鉄遺跡群発掘調査報告書II 居村遺跡E・A・C地点、大入遺跡A地点』 新潟市教育委員会
- 渡邊朋和ほか 1998 『金津丘陵製鉄遺跡群発掘調査報告書III (分析・考察編)』 新潟市教育委員会
- 渡邊朋和ほか 2001 『寺道上遺跡発掘調査報告書』 新潟市教育委員会
- 渡邊朋和ほか 2002 『中谷内遺跡発掘調査報告書II』 新潟市教育委員会
- 渡辺ますみ 1991 『荒木前遺跡』 亀田町教育委員会
- 渡辺ますみ 1994 『緒立C遺跡発掘調査報告書』 黒崎町教育委員会
- 渡辺ますみ 1998 『第2章 原始・古代-緒立遺跡-第3節出土遺物第3項奈良・平安時代の遺物1』『黒崎町史資料編1』原始・古代・中世 黒崎町
- 渡辺ますみ 2009 『駒首遺跡 第3・4次調査-大型小売店舗建設に伴う駒首遺跡第3・4次発掘調査報告書』 新潟市教育委員会
- 渡辺美穂子・田中耕作 2001 『坂ノ沢C遺跡II (平安時代編)』 新発田市教育委員会

## 第VI章 引用・参考文献

- カ 金原正明 1999 『寄生虫 考古学と動物学』『考古学と自然科学』2 p.151-158 同成社
- 金原正明 1993 『花粉分析法による古環境復原』『新版古代の日本 第10巻 古代資料研究の方法』p.248-262 角川書店
- シ 鳥倉巳三郎 1973 『日本植物の花粉形態』『大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集』60p
- 島地 謙ほか 1985 『木材の構造』290p 文永堂出版
- 島地 謙・伊東隆夫 1988 『日本の遺跡出土土製品総覧』296p 雄山閣
- ス 杉山真二 2000 『植物珪酸体(プラント・オパール)』『考古学と植物学』p.189-213 同成社
- タ 只見川第四紀研究グループ 1966a 『福島県野沢盆地の浮石質砂層の基底部より産出した木材の<sup>14</sup>C年代-日本の第四紀層の14C年代X XVI』『地球科学』82 p.8-9
- 只見川第四紀研究グループ 1966b 『只見川・阿賀野川流域の第四紀の編年-とくに沼沢浮石層の層位学的諸問題について』『第四紀』8 p.76-79
- ナ 中村 純 1973 『花粉分析』p.82-110 古今書院
- 中村 純 1974 『イネ科花粉について、とくにイネ(Oryza sativa)を中心として』『第四紀研究』13 p.187-193
- 中村 純 1977 『稲作とイネ花粉』『考古学と自然科学』第10号 p.21-30
- 中村 純 1980 『日本産花粉の標徴』『大阪自然史博物館収蔵目録』第13集 91p
- フ 藤原宏志 1976 『プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)-数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法-』『考古学と自然科学』9, p.15-29
- 藤原宏志・杉山真二 1984 『プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)-プラント・オパール分析による水田址の探査-』『考古学と自然科学』17 p.73-85
- 山田昌久 1993 『日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成』『植生史研究特別1号』242p 植生史研究会



別表1 三王山遺跡 2区主要遺構計測表

※遺物が出土していない Pit は省略した。

図版 No.	遺構	グリッド	時代	確認面	主軸方位	規模 (m)					底面標高 (m)	形態		遺物の有無	遺物図版頁	備考
						上端		下端		深度		上端				
						長軸	短軸	長軸	短軸			平面	断面			
13	SE 20	18O21 19O1	中世か	IV b 層		(1.52)	(0.86)	(1.26)	(0.52)	(0.46)	0.50	(円形)	漏斗状	○		曲物出土 (腐敗激しく取り上げ不可)
13	SE 25	19N11	中世か	IV b 層		(0.84)	(0.77)	(0.50)	(0.55)	(0.40)	0.58	円形	箱形			
13	SE 31	19M2・3	中世	IV b 層		(0.94)	(0.94)	(0.43)	(0.15)	(0.60)	0.38	円形	漏斗状	○	31・36	曲物出土
13	SE 38	19M13・14・18・19	平安時代	IV b 層	N-12° -E	(2.44)	(2.03)	(1.33)	(1.08)	(0.55)	0.43	楕円形	皿形	○	36	井戸枠出土
13	SE 39	19M17・18・22・23	平安時代	IV b 層		(1.87)	(1.79)	(1.09)	(1.28)	(0.44)	0.51	円形	箱形	○	31	
14	SE 41	19L10 19M6	中世	IV b 層		(1.12)	(1.12)	(0.52)	(0.21)	0.75	0.15	円形	漏斗状	○	31・36	曲物出土
13	SE 42	19M11・16	中世か	IV b 層		(0.82)	(0.77)	(0.54)	(0.51)	0.26	0.71	円形	台形			SE42>P43
14	SK 13	21I10 21J6・11	奈良時代	(IV a 層)	N-63° -W	2.67	1.26	2.26	1.02	0.16	0.85	楕円形	皿形	○	31	
14	SK 28	18N15		IV b 層		(1.14)	(0.42)	(0.19)	(0.07)	0.33	0.67	(円形)	半円形			
14	SK 30	22M16・17	古代か	IV a 層	N-10° -E	(0.60)	0.35	(0.40)	0.20	0.13	1.08	楕円形	皿形			
14	SK 33	22K9	平安時代か	IV a 層		(1.14)	(0.49)	(0.28)	(0.23)	0.25	0.95	不整形	半円形	○	31	
14	SK 34	21L23	平安時代か	IV a 層	N-82° -E	1.18	0.88	0.90	0.58	0.16	0.82	長方形	皿形	○		
9	SK 35	22K10 22L6	近世以降	(IV a 層)	N-6° -W	1.72	1.56	0.94	1.34	0.27	0.75	長方形	皿形	○	35	
14	SK 37	19N6・7・12	中世か	IV b 層	N-78° -W	(1.66)	(1.57)	(0.54)	(0.62)	0.35	0.60	不整形	台形	○	35	井戸の可能性もある
15	SK 40	20M4	中世か	IV b 層	N-9° -E	(0.61)	(0.58)	(0.35)	(0.39)	0.25	0.67	円形	半円形			
14	SK 44	19L12・13	中世か	IV b 層		(1.47)	(1.43)	(1.36)	(1.12)	0.11	0.79	不整形	皿形			
15	SK 52	21M1	中世か	IV b 層	N-78° -W	(0.81)	(0.61)	(0.41)	(0.35)	0.12	0.83	楕円形	皿形			
15	SK 53	21L5・10	中世か	IV b 層	N-13° -E	(0.68)	(0.49)	(0.39)	(0.21)	0.13	0.83	楕円形	皿形			
15	SK 57	20L17・22	平安時代か	IV b 層	N-12° -W	(0.69)	(0.58)	(0.51)	(0.43)	0.25	0.72	不整形	円形			
15	SX 5	21K7	平安時代か	(IV a 層)	N-5° -W	(0.62)	(0.36)	(0.32)	(0.13)	0.10	0.86	長方形	皿形	○		
15	SX 6	21K6	古代	IV a 層	N-83° -E	0.50	0.38	0.38	0.19	0.06	0.98	円形	皿形			
15	SX 7	21J4・5・9・10	近世以降	IV a 層	N-86° -W	3.40	1.58	1.28	0.38	0.71	0.32	長方形	台形	○	31	
15	SX 8	21J15 21K11	古代	IV a 層	N-74° -E	1.37	0.56	1.21	0.41	0.07	0.94	長方形	皿形			
15	SX 16	21J12	平安時代か	IV a 層						(0.09)	1.40	(長方形)	(皿形)	○	31	
15	SX 17	21I5	平安時代か	(IV b 層)		(1.07)	(0.69)	(0.67)	(0.56)	0.10	0.86	(不整形)	皿形	○		
15	SX 18	21J3	平安時代か	IV a 層	(N-4° -E)	(0.86)	(0.80)	(0.74)	(0.70)	(0.06)	1.10	(楕円形)	皿形	○	31	
10	SX 21	21N24 22N4	近現代	IV b 層		(3.22)	(0.50)	(0.95)	(0.31)	0.63	0.39	(円形)	台形			
10	SX 22	22N22・23	古代か	IV a 層		(0.88)	(0.63)	(0.29)	(0.20)	0.20	0.98	不明	(皿形)			
10	SX 24	22N2・6・7	近現代	IV b 層	N-16° -E	2.15	2.07	0.81	1.19	(0.47)	0.39	不整形	箱形	○		
15	SX 32	21M11	平安時代か	IV a 層		(1.37)	(0.69)	(0.99)	(0.61)	0.19	0.80	不整形	箱形			
16	SX 46	21M11・12	平安時代か	IV a 層	N-84° -E	1.07	0.57	0.62	0.34	(0.42)	0.53	楕円形	台形			
16	SX 47	21L8・12・13	平安時代か	(IV a 層)	N-85° -E	(1.90)	(1.49)	(1.06)	(0.83)	0.42	0.53	不整形	半円形	○		SX47>SD2
16	SX 48	20N1・2・6	中世か	IV b 層	N-67° -E	(2.91)	(0.93)	(2.57)	(0.62)	0.08	0.86	不整形	皿形	○	35	
16	SX 51	21M7	中世か	IV b 層		(1.15)	(0.53)	(0.80)	(0.31)	(0.31)	0.62	不整形	台形			
16	SX 55	21I2	平安時代	IV b 層		(1.14)	(0.49)	(0.95)	(0.41)	(0.23)	0.73	(円形)	皿形	○		
12	SX 58	18M8	古代～中世	IV a 層	N-21° -W	0.76	0.64	0.53	0.41	0.12	1.25	不整形	皿形			
8・9・16	SD 1	21J 21K 21L 21M	平安時代	IV a 層	N-85° -E	(27.37)	0.96	(27.37)	0.50	0.19	1.00		皿形	○	32	
8・9・16	SD 2	21J 21K 21L	平安時代	IV a 層	N-83° -E	(23.87)	0.80	(23.87)	0.56	0.14	0.86		台形	○	32	
8・9・16	SD 3	21I 21J 21K 21L	平安時代	IV a 層	N-86° -E	(50.76)	0.93	(50.76)	0.65	0.21	0.83		台形	○	32	
8・9・16	SD 4	21J10 21K6～8	平安時代	IV a 層	N-81° -E	6.12	0.73	0.60	0.68	0.02	1.01		皿形	○		
8・16	SD 11	21I5・10 21J6～8	平安時代	IV a 層	N-18° -W	6.98	1.07	6.69	0.60	0.29	0.90		台形	○	32	
10・16	SD 23	22N11・12・16・17・21・22	平安時代	IV a 層	N-2° -E	(4.80)	(1.00)	(4.80)	(0.67)	0.10	1.03		皿形	○		
11・12・16	SD 29	18M8～10・12～14	古代～中世	IV a 層	N-73° -E	(6.44)	(0.94)	(6.34)	(0.83)	0.11	1.25		皿形			
11・16	SD 49	19M18・23 20M4・9	古代～中世	IV b 層	N-22° -W	(5.92)	(0.58)	(5.70)	(0.30)	0.12	0.84		半円形			
10・16	SD 50	21M 21N	平安時代か	IV b 層	N-90° -W	(12.14)	(1.59)	(12.14)	(1.41)	0.10	0.84		皿形			
9・16	SD 54	20L 21L	古代～中世	IV b 層	N-18° -W	(7.90)	(0.74)	(7.90)	(0.45)	0.11	0.84		皿形			
8	P 9	21J12・13	平安時代	IV a 層	N-2° -E	0.46	0.18	0.46	0.15	0.32	0.78	円形	筒形	○		P9>SD3 無台 碗・長囊
8	P 10	21J18	平安時代	IV a 層		(0.52)	(0.20)	(0.14)	(0.12)	0.30	0.68	円形	筒形	○		P10>SD2 長 囊
8	P 12	21J9・10	平安時代か	IV a 層		(0.44)	(0.28)	(0.22)	(0.18)	0.16	0.90	円形	筒形	○		無台碗・鏝
9	P 36	22K9	平安時代か	IV a 層		0.32	0.26	0.09	0.09	0.33	0.83	円形	筒形	○	32	長囊
9	P 45	22K14	平安時代	IV a 層		0.29	0.28	0.09	0.11	0.23	0.92	円形	筒形	○	32	長囊

別表2 三王山遺跡 3区主要遺構計測表

図版 No.	遺構	グリッド	時代	確認面	主軸方位	規模 (m)			底面標高 (m)	形態		遺物の有無	遺物図版頁	備考
						上端		深度		上端				
						長軸	短軸			平面	断面			
22	SE 9	13C1・6	中世	Ⅲ層		(1.92)	(1.84)	1.50	-0.59	(円形)	すり鉢形	○		
22	SE 28	11C17・22	古代～中世	Ⅲ層		0.44		1.34	0.18	(円形)	台形			
22	SE 30	12C19・20・24・25	中世	Ⅲ層	N-22° -W	(2.45)	2.01	1.44	-0.60	(楕円形)	逆凸形	○	38・40	曲物ほか木製品出土 SE30<SE96
24	SE 31	12D16・21	中世	Ⅲ層				0.88	0.58	-	すり鉢	○	38	SE31>SE96 SE31<SE193
23	SE 45	11C23 12C3・4	平安時代か	Ⅲ層		(2.72)		1.43	0.28	(円形)	台形	○	38・40	木製品出土 SE45<SD51
23	SE 95	12D1・2・6・7	平安時代	Ⅲ層	N-3° -E	2.60	(2.38)	0.93	0.66	(不整形)	半円形	○	38・39	SE95<SE145・SX341
24	SE 96	12C25	中世	Ⅲ層		(1.46)	(1.22)	1.08	0.42	(円形)	(半円形)	○	39	SE96<SE31
24	SE 145	12D6・7・11・12	中世	Ⅲ層	N-18° -E	2.22	1.45	1.00	0.58	不整形	台形	○	38	SE145>SD250・SD268
24	SE 193	12D16・21	中世	Ⅲ層		(1.88)	(1.62)	1.04	0.36	(円形)	(台形)	○	38・39 ・40	SE193>SE31 SE193<SE31
24	SE 283	13C6・7・11・12	中世か	Ⅲ層	N-12° -E	(1.15)		0.53	0.80	(円形)	(半円形)			

図版 No.	遺構	グリッド	時代	確認面	主軸方位	規模 (m)			底面 標高 (m)	形態		遺物 の有無	遺物 図版頁	備考
						上端		深度		上端				
						長軸	短軸			平面	断面			
25	SK 1	13B9		Ⅲ層		(0.61)		(0.25)	(1.34)	(楕円形)	(皿形)			SK1>P2
25	SK 3	13B9		Ⅲ層	N-21° -W	(1.00)		(0.22)	(1.38)	(不整形)	(箱形)			SK3<P2
25	SK 4	13B4・9		Ⅲ層		(1.59)		(0.24)	(1.35)	(円形)	(皿形)	○		SK4>SK3
25	SK 5	13B9・10		Ⅲ層	N-57° -E	0.59	0.44	0.05	1.45	長方形	皿形			
25	SK 11	12B24・25		Ⅲ層		(0.67)	(0.30)	(0.17)	(1.44)	(不整形)	(皿形)			
25	SK 12	12B20		Ⅲ層		(0.42)	(0.27)	(0.31)	(1.39)	(円形)	(半円形)			SK12<SD21
25	SK 13	12B25		Ⅲ層	N-22° -W	0.49	0.41	0.20	1.30	楕円形	半円形	○		
25	SK 14	12B25		Ⅲ層			0.34	0.19	1.29	不整形	半円形	○		SK14<P15
25	SK 17	12B20・25		Ⅲ層	N-72° -E	0.78	0.50	0.31	1.25	楕円形	半円形	○		SK17>SK18
25	SK 18	12B20		Ⅲ層	N-71° -E	1.22	0.48	0.13	1.39	不整形	箱形			SK18<SK17・P19
25	SK 20	12B20		Ⅲ層	N-74° -E	0.72	(0.41)	0.20	1.35	不整形	台形			SK20<SD21・P25
25	SK 22	12B20		Ⅲ層			(0.32)	(0.15)	(1.50)	不整形	(皿形)			SK22<SK23
25	SK 23	12B15		Ⅲ層			0.40	(0.19)	(1.50)	不整形	(皿形)			SK23>SK24
25	SK 24	12B15		Ⅲ層	N-80° -E	(0.70)	(0.67)	(0.46)	(1.21)	(不整形)	(半円形)			SK24<SK23
25	SK 26	12B20		Ⅲ層		(0.57)	(0.43)	0.14	1.38	(不整形)	台形	○		SK26<SK27・P34
25	SK 27	12B20 12C16		Ⅲ層	N-54° -E	(2.12)	(0.36)	0.14	1.38	不整形	皿形			SK27>SK26 SK27<P34
25	SK 35	12B10・15		Ⅲ層	N-25° -W	0.73	0.32	1.34	(楕円形)	(半円形)				SK35>P165 SK35<SK36
25	SK 36	12B15		Ⅲ層	N-25° -W	0.52	0.40	0.19	1.34	不整形	皿形			SK36>SK35
25	SK 37	12B5・10		Ⅲ層		0.50	(0.20)	(0.27)	(1.41)	(円形)	(皿形)			
26	SK 42	11C21		Ⅲ層	N-9° -E	0.50	0.37	0.37	1.18	長方形	半円形			SK42>P173
26	SK 43	11C16		Ⅲ層			0.36	0.14	1.15	(円形)	(半円形)			SK43<SK44
22	SK 44	11C16		Ⅲ層		1.00		0.06	1.46	(不整形)	皿形	○		SK44>SK43
26	SK 46	12C6		Ⅲ層			(0.95)	0.39	1.13	(長方形)	台形	○		SK46<P334・P64・P195・P334
26	SK 47	12C1		Ⅲ層	N-68° -E	1.17	0.85	0.12	1.42	不整形	皿形	○	39	SK47>SK48 SK47<P170
26	SK 48	12B5 12C1		Ⅲ層	N-48° -E	1.40	0.65	0.34	1.12	不整形	半円形			SK48>SK49 SK48<SK47・P216
26	SK 49	12B5 12C1		Ⅲ層	N-22° -W	1.12	0.58	0.12	1.43	不整形	半円形	○		SK49>SK48 SD41
26	SK 50	12C1・2		Ⅲ層		1.48		0.58	0.94	不整形	(台形)	○	39	SK50>P222・SD51
26	SK 52	12C2・3		Ⅲ層	N-72° -E	1.23	1.10	0.44	1.11	不整形	皿形	○		SK52<P223
26	SK 53	12C7		Ⅲ層	N-75° -W	1.55	0.88	0.41	1.12	(楕円形)	半円形	○		SK53<P54・P224
26	SK 55	12C7		Ⅲ層	N-82° -E	(0.44)	0.44	0.55	1.02	(方形)	台形			SK55<SK56
26	SK 56	12C7		Ⅲ層	N-82° -E	0.80	0.50	0.04	1.52	不整形	(皿形)			SK56>SK55
26	SK 57	12C7		Ⅲ層	N-71° -W	0.48	0.42	0.26	1.31	長方形	半円形			SK57>P58
27	SK 59	12C12	近現代	Ⅲ層	N-16° -W	1.02	0.88	0.31	1.26	不整形楕円形	(皿形)	○	39	SK59>P339・SK338・SD21
27	SK 61	12C16・17		Ⅲ層	N-73° -E	0.87	0.32	0.07	1.43	楕円形	皿形			
27	SK 62	12C17		Ⅲ層	N-77° -E	0.61	0.42	0.18	1.36	長方形	(皿形)	○	39	SK62<P63
27	SK 65	12C17		Ⅲ層		0.61	0.35	0.08	1.48	楕円形	皿形			SK65>SK66
27	SK 66	12C17		Ⅲ層		(0.32)	0.35	0.16	1.41		(皿形)	○		SK66<SK65
27	SK 67	12C17・18		Ⅲ層	N-80° -W	0.80	0.74	0.22	1.36	不整形	皿形	○		
27	SK 68	12C18		Ⅲ層	N-83° -W	0.57	(0.72)	0.16	1.42	不整形	皿形			
27	SK 69	12C13・18		Ⅲ層	N-82° -E	(1.35)	(0.70)	0.19	1.36	不整形	台形	○		SK69>SK70 SK69<P146
27	SK 70	12C13		Ⅲ層	N-84° -E	0.98	0.39	0.09	1.46	不整形	皿形			SK70<SK69
27	SK 77	12C14・15		Ⅲ層	N-58° -E	0.78	0.37	0.07	1.50	不整形	皿形			SK77<SD76
27	SK 80	12C8・13		Ⅲ層	N-18° -W	0.62	0.39	0.07	1.50	楕円形	皿形			SK80>P144
27	SK 83	12C7・8		Ⅲ層	N-17° -W	1.13	1.01	0.12	1.48	不整形	皿形	○		SK83>SK53 SK83<SK84
27	SK 84	12C8		Ⅲ層	N-71° -E	0.98	(0.71)	0.59	0.96	(楕円形)	台形			SK84<SK337 SK84>SD85
28	SK 86	12C8		Ⅲ層		(0.44)	(0.36)	0.11	1.48	(楕円形)	皿形	○		SK86>SD85
23	SK 90	12C4		Ⅲ層			0.56	(0.14)	(1.47)	(不整形)	(皿形)			SK90>SK97
23	SK 97	12C4		Ⅲ層			(0.56)	(0.20)	(1.44)	不整形	皿形	○		SK97<SD92
28	SK 229	12C4・5・9・10		Ⅲ層	N-42° -E	0.66	0.28	0.29	1.30	不整形	(半円形)			SK229>SD92
28	SK 251	12D12		Ⅲ層	N-9° -W	(0.93)	(0.74)	0.07	1.55	不整形	皿形	○		SK251<SD250・SK276
28	SK 253	12C4・9		Ⅲ層	N-16° -W	0.56	0.44	0.23	1.39	不整形	半円形	○		SK253>SD92
28	SK 257	12D13		Ⅲ層	N-11° -W	1.32	0.85	0.09	1.50	長方形	皿形			
28	SK 263	12D18		Ⅲ層	N-54° -E	0.81	0.44	0.09	1.50	楕円形	皿形	○		SK263>P363
28	SK 276	12D12		Ⅲ層	N-35° -E	0.61	0.51	0.05	1.61	不整形	皿形			SK276>SK251
20	SK 317	13D6		Ⅲ層	N-54° -E	0.82	(0.57)	0.29	1.21	(楕円形)	箱形	○		SK317<P315
26	SK 335	12C6		Ⅲ層			0.83	0.38	1.16	(楕円形)	(台形)			SK335>SK46 SK335<P336
27	SK 337	12C8		Ⅲ層	N-71° -E	0.59	0.52	0.14	1.44	楕円形	皿形			SK337>SD85・SK84
27	SK 338	12C12		Ⅲ層		(0.88)	(0.82)	0.63	0.94	(楕円形)	(台形)	○		SK338<SK59・P339
19	SX 72	12C13		Ⅲ層		(0.81)	(0.62)	0.14	1.44	不整形	台形			SX72<P213
19	SX 94	12C9・10		Ⅲ層	N-77° -W	0.97	0.67	0.09	1.50	不整形	台形	○		
19	SX 243	12D7・8		Ⅲ層		0.78	0.54	0.09	1.54	不整形	皿形			SX243>SX244
19	SX 244	12D8		Ⅲ層		(0.94)	0.80	0.10	1.70	(楕円形)	皿形	○		SX244<SX243
19	SX 341	12C5		Ⅲ層			1.18	0.15	1.46	不整形	皿形			SX341>SE95
20	SX 342	13D9・14		Ⅲ層		(1.05)	0.68	0.20	1.35	不整形	台形			
20	SX 343	13D9・10		Ⅲ層		0.55	0.50	0.20	1.35	円形	皿形			
18・28	SD 7	12C22・23 13B5 13C1・2		Ⅲ層	N-72° -E	(5.67)	0.51	0.15	1.26	-	皿形	○	39	SD7>P116
18・28	SD 8	12C21・22・23 13B5 13C1		Ⅲ層	N-73° -E	(5.87)	0.80	0.18	1.24	-	皿形	○		SD8<113
18・28	SD 10	12C21・22		Ⅲ層	N-67° -E	(2.25)	(0.38)	0.16	1.27	-	半円形	○		SD10<SD102
18・28	SD 16	12B25 12C21		Ⅲ層	N-72° -E	(2.22)	(0.36)	0.17	1.26	-	皿形	○		
19・25	SD 21	12B15・20 12C11・12・13	近現代	Ⅲ層	N-70° -E	(7.06)	0.64	0.20	1.35	-	台形	○		SD21>SK12・P25・P259 SD21<SK59
19	SD 32	12C16		Ⅲ層	N-65° -W	1.02	0.27	0.13	1.35	-	皿形			

別 表

図版 No.	遺構	グリッド	時代	確認面	主軸方位	規模 (m)			底面 標高 (m)	形態		遺物 の有無	遺物 図版頁	備考
						上端		深度		上端				
						長軸	短軸			平面	断面			
19	SD 33	12C16・17		Ⅲ層	N-73° -E	(1.31)	0.26	0.13	1.31	—	箱形	○		SD33<P319
19	SD 40	11B25 11C2 11B5	近現代	Ⅲ層	N-70° -E	(2.14)	0.27	0.06	1.48	—	皿形	○		SD41<SK49 SD40>P39・SD41
19	SD 41	11C21 12C1		Ⅲ層	N-70° -E	(2.41)	0.59	0.17	1.39	—	皿形	○		SD41<SK49・SD40・P38・P39・P215・P221
19・26	SD 51	12C2・3		Ⅲ層	N-73° -E	(2.06)	0.45	0.19	1.36	—	箱形	○		SD51>SE45 SD51<SK50
19・27	SD 76	12C14		Ⅲ層	N-82° -W	2.03	0.62	0.14	1.43	不整形	皿形	○		SD76>SK77
19・28	SD 85	12C3・8		Ⅲ層	N-11° -W	2.61	0.55	0.18	1.42	—	皿形	○		SD85<SK86・SK84 SD85>SE45
19・28	SD 88	12C4		Ⅲ層	N-52° -E		0.45	0.27	1.32	—	半円形	○		SD88<P87・P91・P225
19・28	SD 92	12C4・5		Ⅲ層	N-1° -E	(2.10)	0.74	0.19	1.40	—	皿形	○		SD92<P93・P227・P228・SK229・SK253
18・28	SD 102	12C 17・21・22		Ⅲ層	N-57° -E	1.05	0.40	0.12	1.30	—	皿形	○		SD102<SD10
21・28	SD 250	12D12・17		Ⅲ層	N-8° -W	(2.98)	0.53	0.08	1.55	—	皿形	○		SD250<SE145
21	SD 268	12D7・8		Ⅲ層	N-65° -E	(1.86)	0.75	0.38	1.25	—	皿形	○		SD268<SE145・SK244
17	SD 269	12D6・11 12C10・15		Ⅲ層		(2.92)	0.40	0.21	1.46	—	(箱形)			
20・28	畝状遺構	13C10・11 13D6～9・11～14	近現代	Ⅲ層	N-85° -E	(1.50)	(0.30)	0.15 ～ 0.30	1.40 ～ 1.25		箱形	○	39	
18	P 19	12B20		Ⅲ層		0.25	0.22	0.15	1.38	—	(筒形)	○		P19>SK18 近世陶器
19	P 29	12B10 12C6		Ⅲ層		0.32	0.25	0.16	1.41	楕円形	箱形	○		長甕
19	P 34	12B20		Ⅲ層		0.60	0.36	0.46	1.08	(楕円形)	筒状	○		P34>SK26 無台碗
19	P 64	12C12		Ⅲ層		0.69	0.42	0.46	1.10	不整形	筒状	○	40	長甕・焼土塊
19	P 74	12C13		Ⅲ層		0.39	0.35	0.28	1.29	方形	皿形	○		P74<P73 無台碗
19	P 75	12C13		Ⅲ層		0.48	0.22	0.14	1.42	不整形	皿形	○		長甕
19	P 91	12C4		Ⅲ層	N-0°	(0.43)	0.08	0.30	1.29	方形	(半円形)	○		P91>SD88 無台碗・小甕
18	P 111	13C2		Ⅲ層		0.31	0.28	0.38	1.03	円形	皿形	○		長甕
19	P 113	12C22・23		Ⅲ層		0.41	(0.20)	0.31	1.12	(方形)	(台形)	○		P113<SD8 近世陶器・礫
19	P 116	12C22		Ⅲ層		(0.26)	0.28	0.10	1.32	(円形)	皿形	○		礫
19	P 130	12C16		Ⅲ層		0.38	0.34	0.15	1.37	方形	皿形	○		長甕・礫
19	P 144	12C8		Ⅲ層		0.24	0.19	0.29	1.30	(円形)	皿形	○		P144<SK80 長甕
19	P 150	12C14		Ⅲ層		0.21	0.20	0.10	1.48	方形	皿形	○		P150>P149 無台杯
19	P 159	12C24		Ⅲ層		0.30	0.26	0.21	1.08	円形	皿形	○	39	無台杯
19	P 170	12C1		Ⅲ層		0.38	0.28	0.52	1.04	(方形)	(皿形)	○	39	P170>SK47 無台碗・長甕
19	P 176	12C14		Ⅲ層		0.40	0.24	0.43	1.13	楕円形	皿形	○		近世陶器
19	P 194	12D16		Ⅲ層		0.58	0.43	0.08	1.52	不整形	皿形	○		無台碗
19	P 195	12C6		Ⅲ層		0.49	0.36	0.56	0.97	楕円形	皿形	○		P195>SK46 無台杯・無台碗
21	P 203	12D22		Ⅲ層		0.28	0.27	0.08	1.45	不整形	皿形	○		近世陶器
19	P 222	12C1		Ⅲ層		0.36	0.28	0.40	0.66	方形	漏斗形	○		SK222<SK50 杯蓋・無台碗・長甕・礫
19	P 225	12C3・4		Ⅲ層		0.34	(0.43)	0.19	1.43	(楕円形)	皿形	○		P225<SK87 近現代陶器
19	P 230	12C10		Ⅲ層		0.35	0.33	0.08	1.51	不整形	皿形	○		P230>P231 無台碗
21	P 240	12D12		Ⅲ層		0.37	0.30	0.34	1.26	楕円形	筒形	○		P240>P231 須恵器甕
21	P 248	12D14		Ⅲ層		0.58	0.31	0.32	1.22	楕円形	半円形	○		P248<SK243 近現代陶器
21	P 254	12D8		Ⅲ層		0.44	0.38	0.20	1.36	楕円形	半円形	○	39	須恵器甕・無台碗・炭化物
21	P 264	12D18		Ⅲ層		0.48	0.34	0.10	1.51	楕円形	皿形	○		無台碗
21	P 270	12D11		Ⅲ層		0.28	0.20	0.11	1.48	不整形	皿形	○		無台碗
21	P 272	12D22		Ⅲ層		0.27	(0.14)	0.15	1.41	(円形)	箱形	○	39	トレンチにより一部欠 鉄製品
19	P 280	12B20		Ⅲ層		0.26	0.25	0.27	1.29	楕円形	皿形	○		P280<SD21 長甕
20	P 285	13D7		Ⅲ層		0.34	0.30	0.26	1.24	円形	箱形	○		長甕・珠洲焼甕・軽石
20	P 311	13C10.15	近世以降	Ⅲ層		0.32	0.23	0.12	1.27	円形	皿形	○		近現代陶器
20	P 318	13D2		Ⅲ層		0.34	0.23	0.18	1.33	方形	皿形	○		近現代陶器
19	P 332	12C20		Ⅲ層		0.28	0.26	0.06	1.52	(方形)	(箱形)	○	39	P332>P331 珠洲焼壺
19	P 336	12C6		Ⅲ層		(0.44)	(0.42)	0.79	0.78	(楕円形)	(筒形)	○		P336>SK335 無台碗・長甕

別表 3 遺物観察表

凡例

- 1 出土位置 遺構名・グリッド番号を記した。
2 器種 第V章に記した。
3 径高指数 器高/口径x100
4 底径指数 底径/口径x100
5 法量 口径・底径・器高を示す。括弧付の数値は遺存率の低いものである。
6 胎土 須恵器・土師器について胎土中に含まれる藍物・小礫等について記した。「石」は石英石、「長」は長石粒、「雲」は金雲母もしくは黒雲母、「チ」はチャート、「焼」は焼土粒、「角」は角閃石粒、「海」は海綿骨針を表す。産地については第V章に記した。
7 色調 『新版 標準土色帳』(小山・竹原 1967)の記号を記した。
8 焼成 酸化・還元・還元・還元成の区別を記した。須恵器で酸化としたものは褐色あるいは褐色で軟質のものを示している。白色・灰白色のものを含めていない。
9 手法 特徴的な手法のみを記し、網羅的な記載は行っていない。底部の「ヘラ切り」はいずれも回転台を用いたものである。「無調整」はそれが認められないものである。回転方向は回転台の回転方向を表す。底部調整やクロコズリ、クロコナ
10 遺存率 分散表示で遺存割合を示した。

1・2区出土 土器・土製品・陶磁器

Table with columns for Report No., Excavation Name, Grid, Investigation Area, Type, Material, Dimensions, Weight, Color, Firing, Handmade, and Preservation Rate. It lists various archaeological artifacts such as pottery vessels and their characteristics.

別 表

2 区出土 鉄製品等観察表

図版No.	報告書No.	出土位置		器種	大きさなど				備考
		遺構名	グリッド		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	
35	81	SK48	20N1	鏡貨	2.40	2.40	1.00	244.30	
35	82	SE31	19M2	鉄滓	7.10	4.70	2.20	71.80	
35	83	SK37	19N7	刀子か	14.50	2.20	1.80	42.80	

2 区出土 石製品観察表

図版No.	報告書No.	出土位置		用途	石材	大きさなど				備考
		遺構名	グリッド			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	
35	84	SE39	19M22	摺り棒か	不明	10.80	4.70	3.75	244.30	
35	85	SK35	22L5	砥石か	軽石	4.90	3.70	2.20	16.40	
35	86	SK35	22L4	不明	不明	5.10	3.80	2.60	48.20	

2 区出土 木製品観察表

図版No.	報告書No.	出土位置		種類	法量 (cm)			樹種	木取	備考
		遺構名	グリッド		長さ・直径	幅	厚さ			
35	87	SE31	19M2	凹形板	14.30	13.90	0.80			紐目 No.8・9・10
35	88	SE31	19M2	凹形板	23.30		0.90			紐目 No.1
35	89	SE31	19M2	曲物	48.80			42.40		杉 紐目
36	90	SE38	19M18・19	井戸枠材	72.70	7.80	4.30			No.2
36	91	SE38	19M18・19	井戸枠材	74.90	8.20	6.10			No.4
36	92	SE38	19M18・19	井戸枠材	68.80	6.50	2.50			No.5
36	93	SE38	19M18・19	井戸枠材	39.10	6.20	2.10			No.3 欠損大
36	94	SE41	19L10.19M6	板材	41.70	10.40	1.60			板目
36	95	SE41	19L10.19M6	曲物	56.25		2.00	46.70		杉 紐目

3 区出土 土器・陶磁器

図版No.	報告書No.	実No.	出土位置		調査区	種別	器種	法量 (cm)				胎土	色調	焼成	手法			遺存率	備考							
			遺構名	グリッド				口径	底径	器高	器指数				底径指数	含有物	外面			内面	底部	回転方向	口縁部	底部	全体	
37	96	7	SE30	12C20		須恵器	甕						白・茶粒	内外面灰 (N7/)	還元	硬	タタキメ (格子文)	当て具 (同心円+格子文)								
37	97	11	SE30	12C20		珠洲焼	すり鉢	34.8					海・白粒	内外面灰 (7.5Y5/1)		硬	ロクロナデ	ロクロナデ・押し目				2/36				
37	98	9	SE30・SE31・SK59・SE193	12D21		珠洲焼	甕						海・白粒・小石	内外面灰 (N5/)		硬	タタキメ	無文当て具						遺構間接合		
37	99	8	SE30	12C20		珠洲焼	すり鉢		11.8				石・海・白粒	内外面青灰 (10BG5/1)		硬	ロクロナデ	ロクロナデ				13/36		底部外面刷毛状工具による粗いナデ		
37	100		SE30	12C20		珠洲焼	甕						海・白粒・小石	内外面灰 (N5/)		硬	タタキメ	無文当て具								
37	101	12	SE31	12D20		須恵器	甕						石・小石	内外面灰白 (5Y7/1)		硬	タタキメ (平行文)	当て具 (格子文)							外面スス	
37	102	13	SE45	12C3	3区	須恵器	無台杯		8.1			B	石・白粒	内外面灰 (10Y6/1)	還元	硬	ロクロナデ	ロクロナデ					8/36			
37	103	16	SE95	12D6	3区	須恵器	有台杯		(8.4)			B	白粒・小石	灰 (10Y6/)	還元	硬	ロクロナデ	ロクロナデ					2/36		底部付近へラ削り	
37	104	14	SE95	12D1	3区	須恵器	無台杯		12.5			B	白・茶粒	外面灰 (7.5Y6/1) 内面灰 (5Y6/1)	還元	硬	ロクロナデ	ロクロナデ					6/36			
37	105	15	SE95	12D6	3区	須恵器	無台杯		6.8			B	白・茶粒	内外面灰 (7.5Y6/1)	還元	硬	ロクロナデ	ロクロナデ					7/36			
37	106	17	SE95	12D6	3区	須恵器	甕						白粒	外面灰 (7.5YR5/1) 内面灰 (10Y5/1)	還元	硬	タタキメ (平行文)	当て具 (同心円)								
37	107	18	SE95	12D6	3区	土師器	無台碗		6.0				石・茶粒	内外面浅橙 (7.5YR8/6)	酸化	軟	ロクロナデ	ロクロナデ					2/36			
37	108	21	SE145	12D12	3区	珠洲焼	すり鉢						白粒・海	内外面灰 (5Y5/1)	還元	硬										
37	109	23	SE193	12D21	3区	須恵器	無台杯		8.5			B	白・黒粒・小石	内外面灰 (7.5Y6/1)	還元	硬	ロクロナデ	ロクロナデ					9/36			
37	110	25	SE193	12D21	3区	珠洲焼	壺						白・黒粒	外面青灰 (10GB5/1) 内面灰 (10Y6/1)	還元	硬	タタキメ (平行文)	当て具 (同心円)							外面・破断面、砥石に転用	
37	111	24	SE194	12D22	3区	珠洲焼	壺	10.7					石・雲・白粒	内外面灰 (N5/)		硬	ロクロナデ	ロクロナデ					14/36			
38	112	1	SK47	12C1	3区	土師器	小甕						石・雲・白粒	外面に赤い橙 (7.5YR6/4)	酸化	軟	ロクロナデ	ロクロナデ					1/36			
38	113	2	SK50	12C1	3区	土師器	鍋	(38.0)					石・小石	外面浅黄橙 (10YR8/4) 内面浅黄橙 (7.5YR8/4)	酸化	軟	ロクロナデ +タタキメ	ロクロナデ					1/36			
38	114	4	SK59	12C12	3区	青磁	碗							内外面緑灰 (7.5Y6/1)											外面連弁模様	
38	115	5	SK59	12C12	3区	珠洲焼	すり鉢						石・海・白粒・小石	外面灰 (7.5Y5/1) 内面灰 (2.5Y5/1)			ロクロナデ	ロクロナデ +押し目								
38	116	6	SK62	12C17	3区	青磁	碗							内外面緑灰 (7.5Y6/1)												
38	117	35	SD7	13C1	3区	珠洲焼	甕						海・白・黒・茶粒・小石	内外面灰 (5Y6/1)	還元	硬	タタキメ	無文当て具							外面「×」状記号	
38	118	29	P159	12C24	3区	須恵器	無台杯	(7.8)				B		内外面灰 (10Y5/1)	還元	硬	ロクロ	ロクロナデ	ロクロナデ					5/36		
38	119	30	P170	12C1	3区	土師器	無台碗		5.2				白粒・小石	内外面浅橙 (10YR8/4)	酸化	軟		ロクロナデ	系切り	左			36/36			
38	120	31	P254	12D8	3区	土師器	無台碗		6.0				石・茶粒・小石	内外面橙 (7.5YR7/6)	酸化	軟	ロクロナデ	ロクロナデ					6/36			
38	121	33	P332	12C15	3区	珠洲か	壺						石・白粒	内外面灰 (N5/)		硬	ロクロナデ +タタキメ	ロクロナデ					1/36			
38	122	34	畝	13D13	3区	珠洲焼	すり鉢	27.6					石・海・白粒・小石	内外面灰 (7.5Y5/1)		硬	ロクロナデ	ロクロナデ					2/36			
38	123	36	II層	12D7	3区	珠洲焼	壺	17.0					石・白粒	灰 (10Y5/1)	還元	硬	ロクロナデ	ロクロナデ					4/36			
38	124	37	カクラン	12D17	3区	近世	壺	(25.4)					白・茶粒	外面褐色 (5YR4/1) 内面灰褐色 (5YR4/2)									2/36			

3 区出土 鉄製品等観察表

図版No.	報告書No.	出土位置		種別	法量				備考
		遺構名	グリッド		長さ	径 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	
38	126	P272	12D22	不明	11.60	1.38	0.35	9.08	近現代か

3 区出土 石製品観察表

図版No.	報告書No.	実No.	出土位置		用途	石材	大きさなど				備考
			遺構名	グリッド			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	
38	109	25	SE193	12D21	砥石		7.05	4.80	1.55	52.00	裏面を砥石に転用 大半欠損
38	126	19	SE95	12D6		不明	10.40	8.80	5.10	629.50	外面に剥離痕
38	127	20	SE96	12C25		不明	6.10	9.35	3.60	258.00	
38	128	28	SE193	12D21		不明	6.80	5.15	4.60	164.00	方形に成形される
38	129	27	SE193	12D21		軽石	6.50	9.30	4.10	85.50	表面やや磨耗 破断面に被熱痕
38	130	26	SE193	12D21	砥石	不明	8.05	6.15	4.85	284.50	

3 区出土 木製品観察表

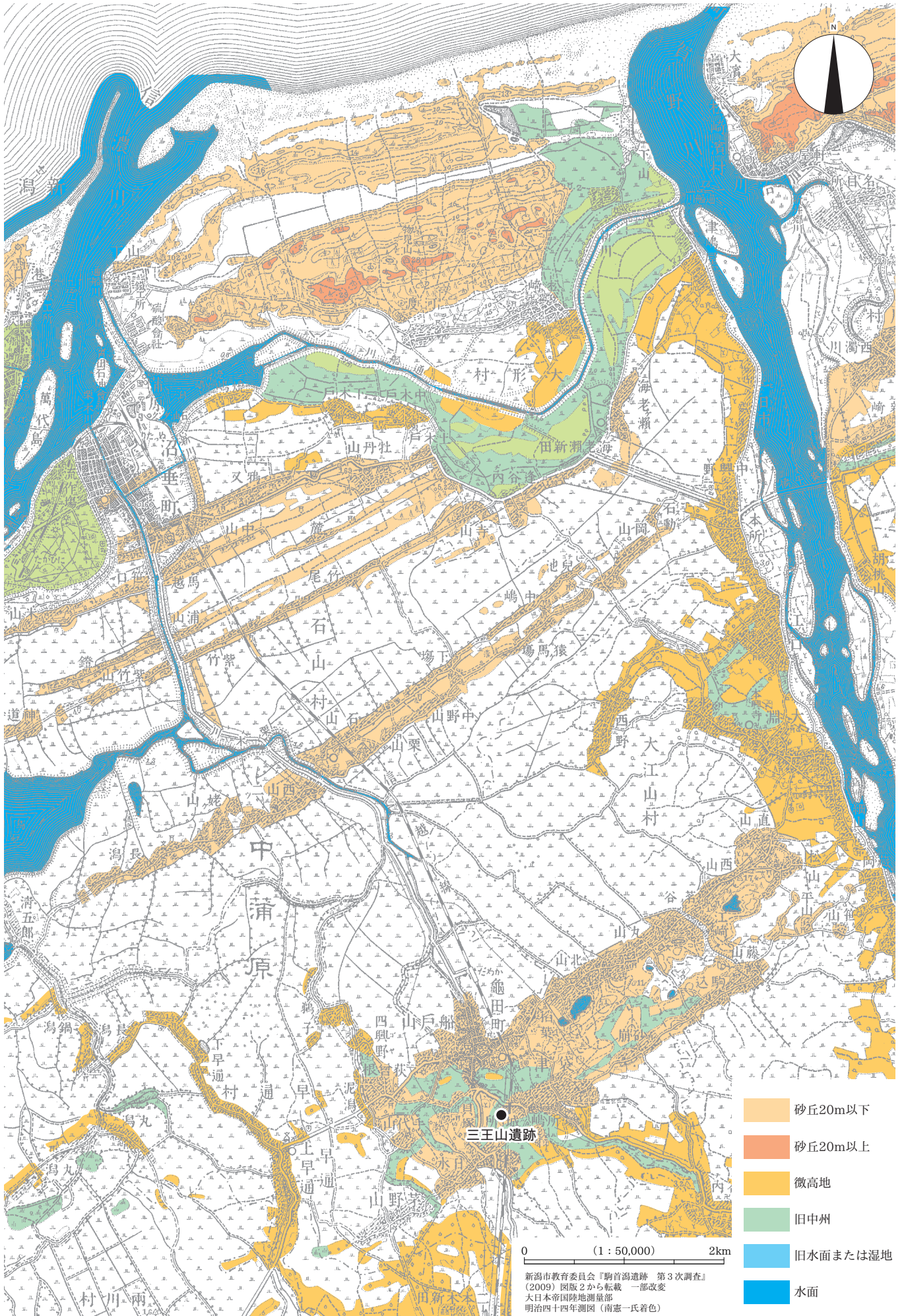
図版No.	報告書No.	出土位置		器種	法量 (cm)				樹種	備考
		遺構名	グリッド		長さ・直径	幅	厚さ	高さ		
39	131	SE30	12C20	井戸枠部材か	48.00	7.45	4.00			
39	132	SE30	12C20	井戸枠部材か	66.30	7.30	3.05			
39	133	SE30	12C20	井戸枠部材か	74.40	6.85	6.90			
39	134	SE30	12C20	井戸枠部材か	26.50	3.40	1.50			133と同一か
39	135	SE30	12C20	井戸枠材か	30.00	13.70	2.80			
39	136	SE30	12C20	井戸枠材か	37.80	12.10	2.40			
39	137	SE30	12C20	井戸枠材か	36.20	10.20	2.60			
39	138	SE30	12C20		16.30	1.45	0.75			
39	139	SE30	12C20		32.55	3.15	1.80			
39	140	SE30	12C20	井戸枠部材か	34.85	7.70	3.90			
39	141	SE30	12C20	井戸枠材か	41.55	16.95	2.35			
39	142	SE30	12C20		11.20	2.70	1.15			11・12層 接合
39	143	SE30	12C20	曲物	52.30		0.70	11.50		杉か
39	144	SE45	12C3	井戸枠材か	23.95	7.50	1.30			
39	145	SE45	12C3	井戸枠部材か	66.00	6.00	3.50			
39	146	SE193	12D21	井戸枠材か	53.20	3.95	2.05			
39	147	SE193	12D21	井戸枠材か	30.40	3.20	1.55			
39	148	SE193	12D21	井戸枠材か	(76.00)	4.60	3.10			
39	149	P46	12C15	杭	30.20	5.00	2.90			



# 圖 版



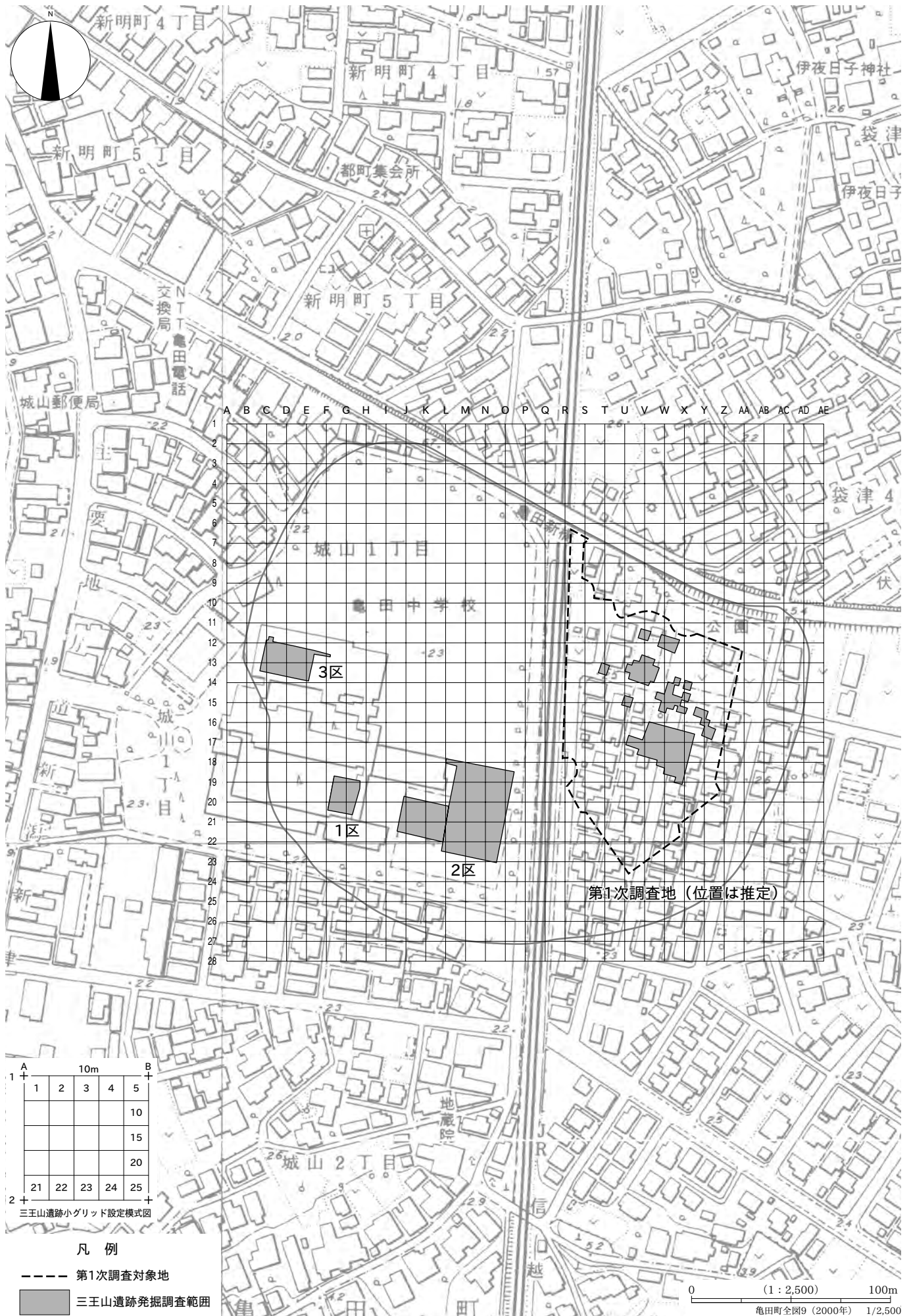




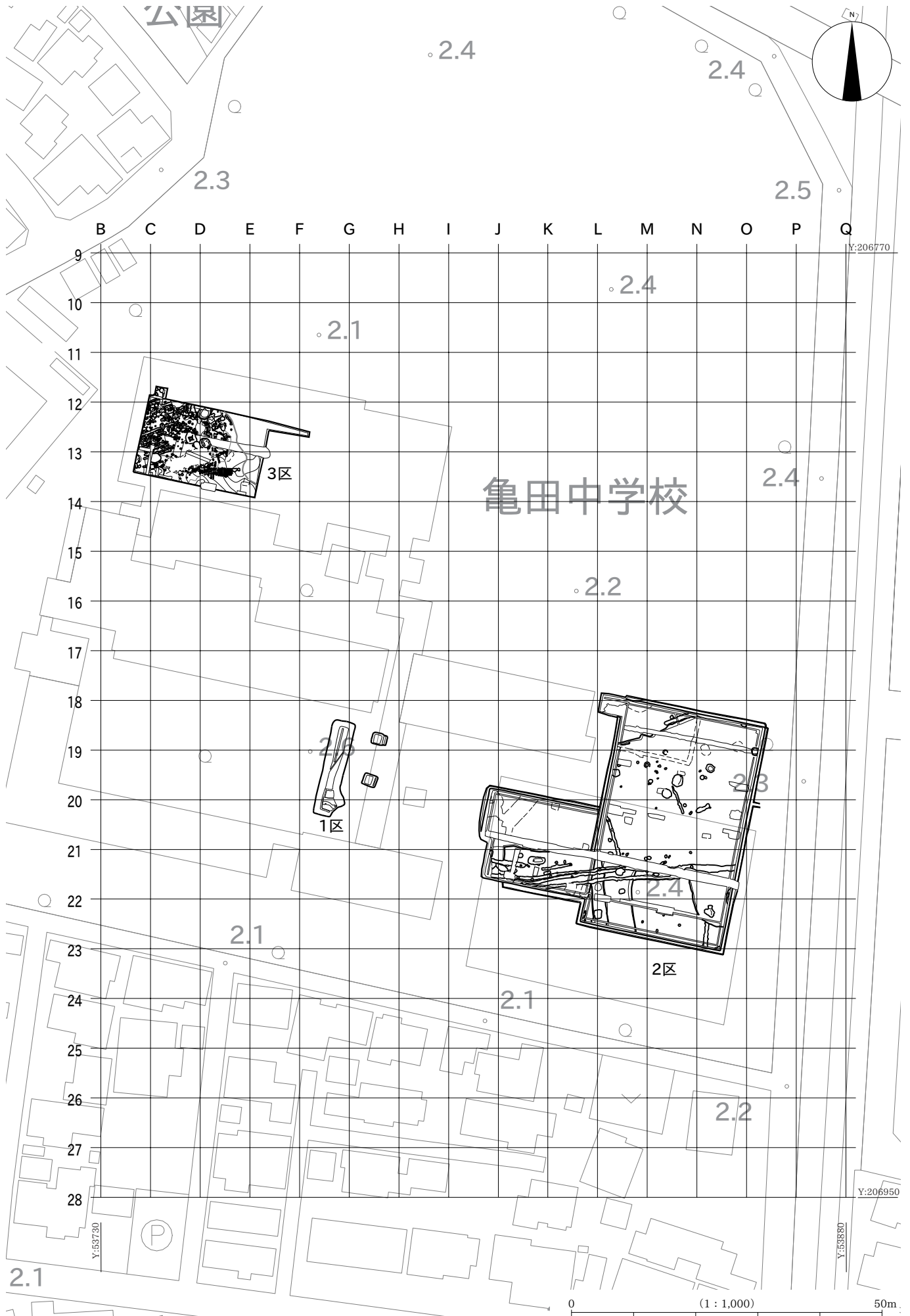




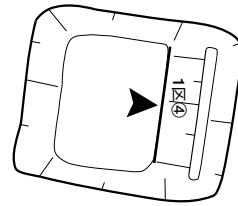
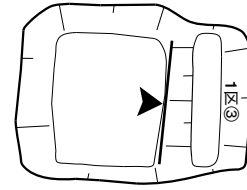
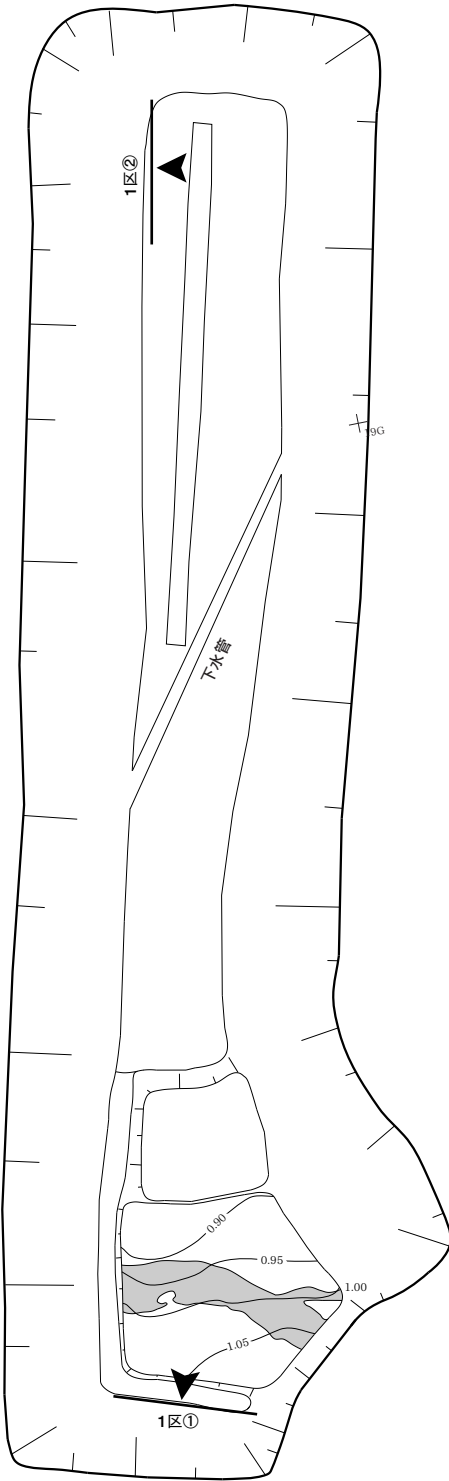
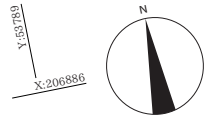








X:206890  
Y:53774



+20F

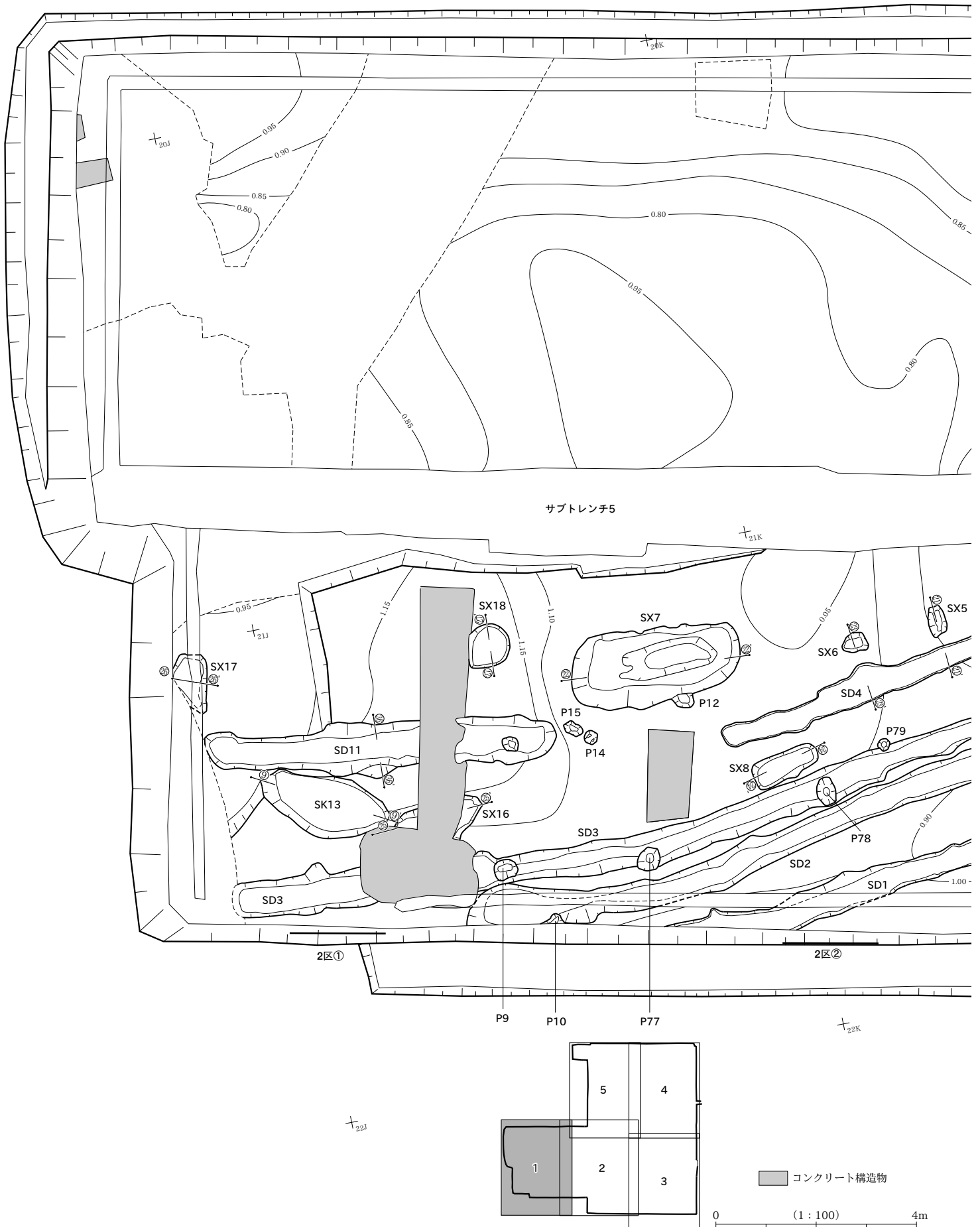
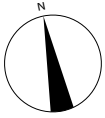
+20G

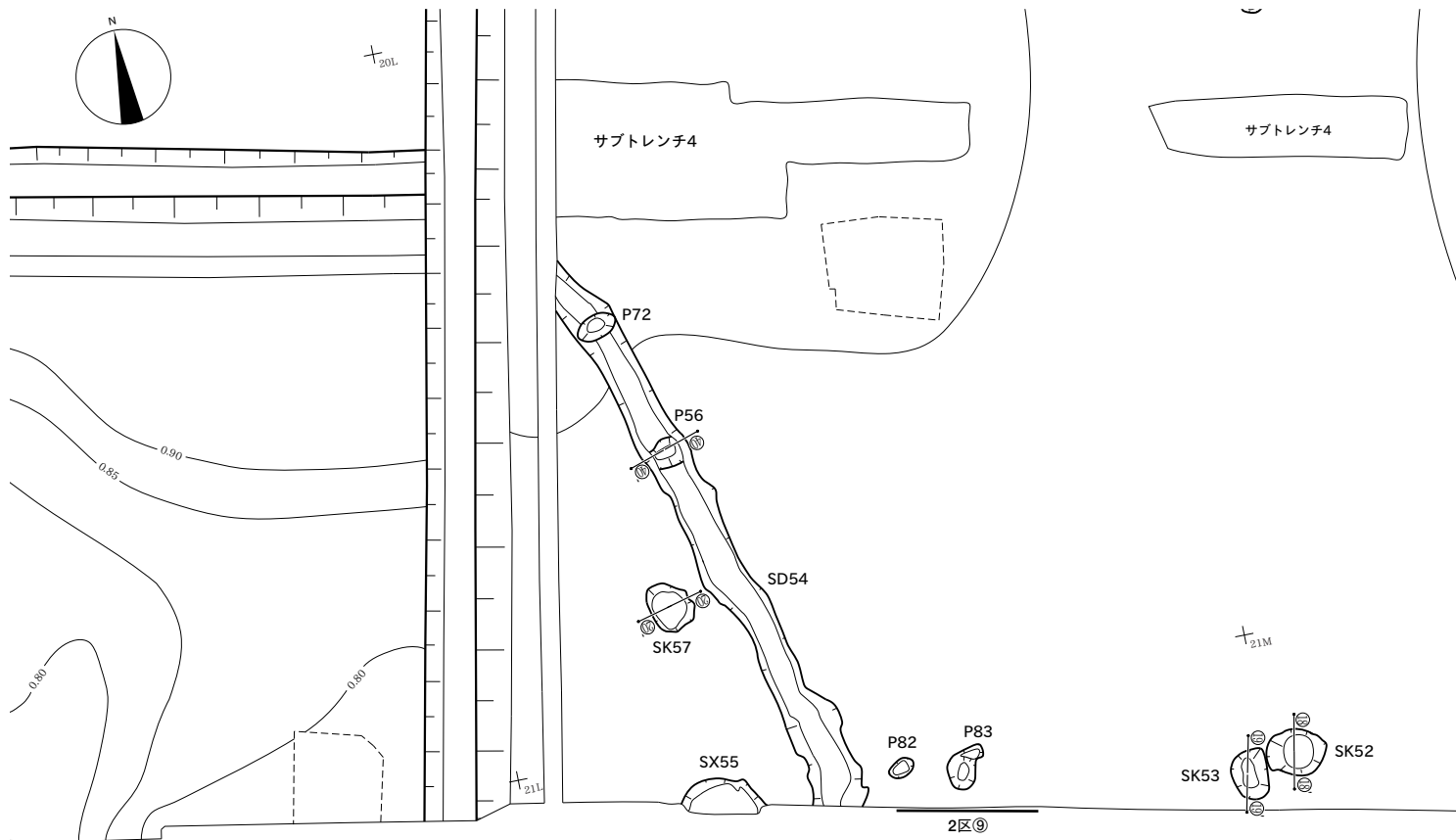
X:206865  
Y:53770

噴砂痕

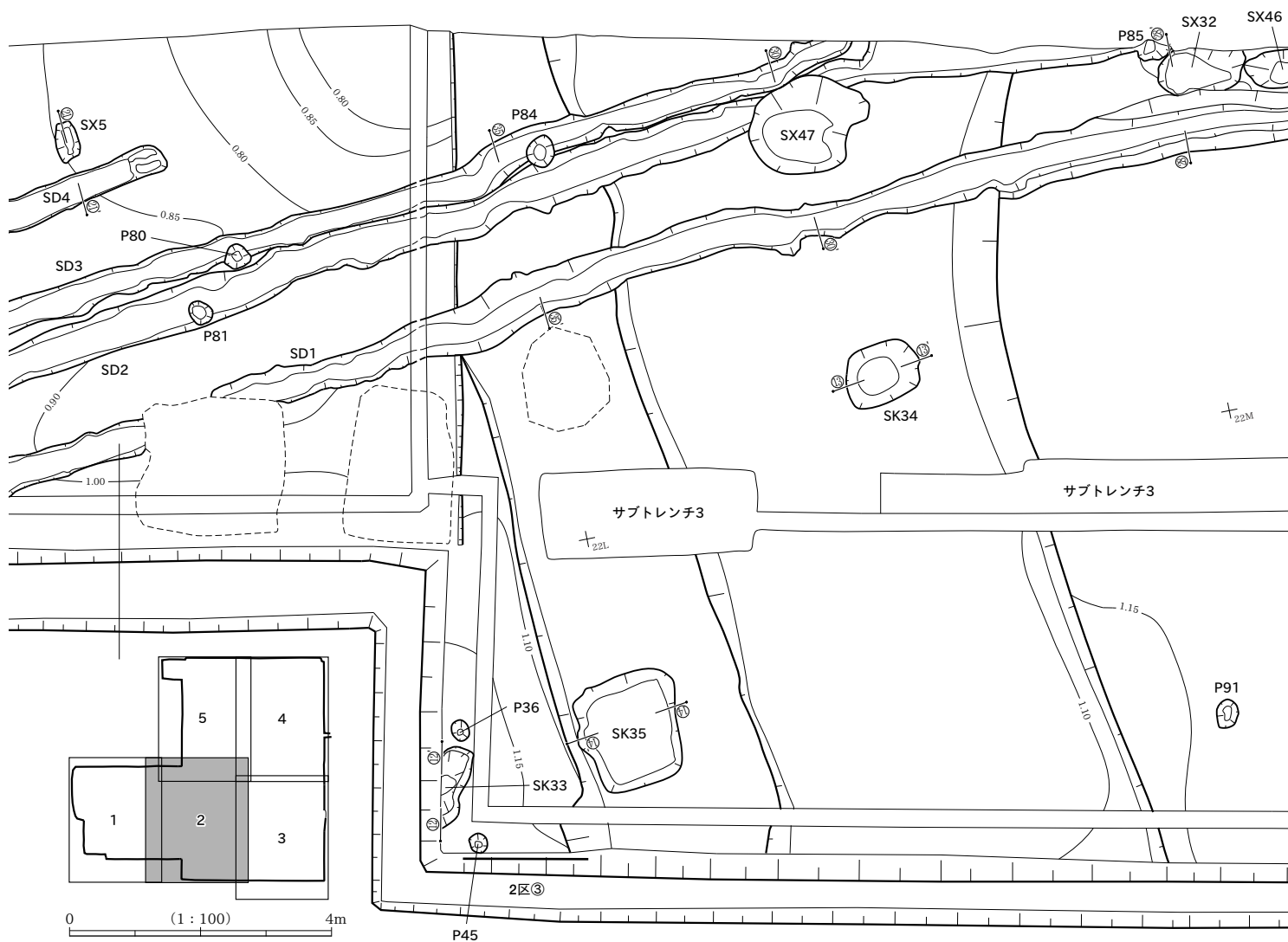
0 (1:100) 4m

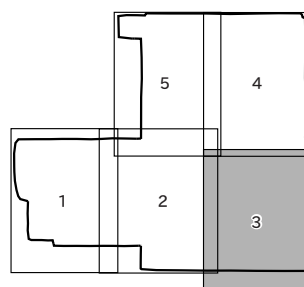
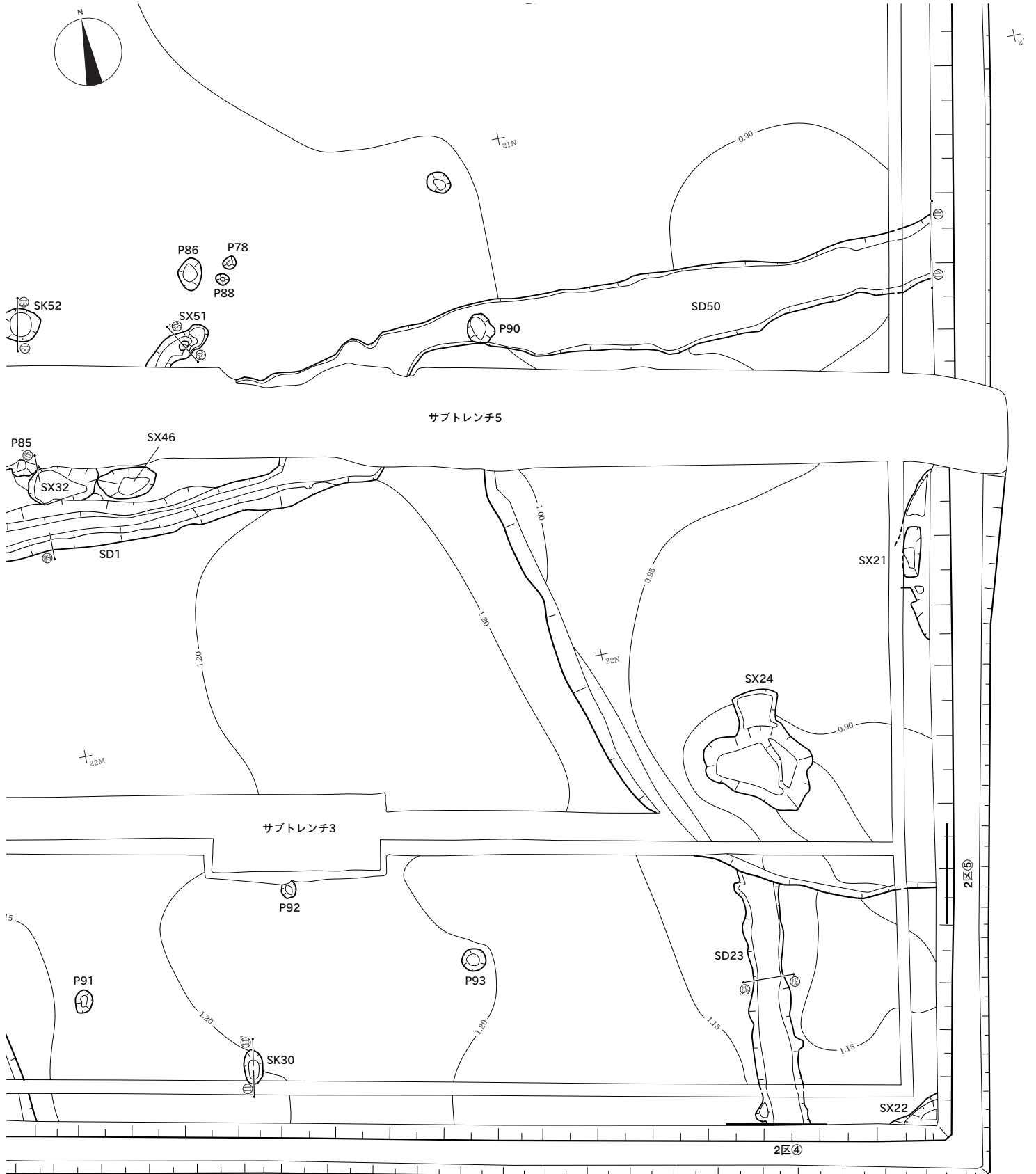
X:206862  
Y:53786





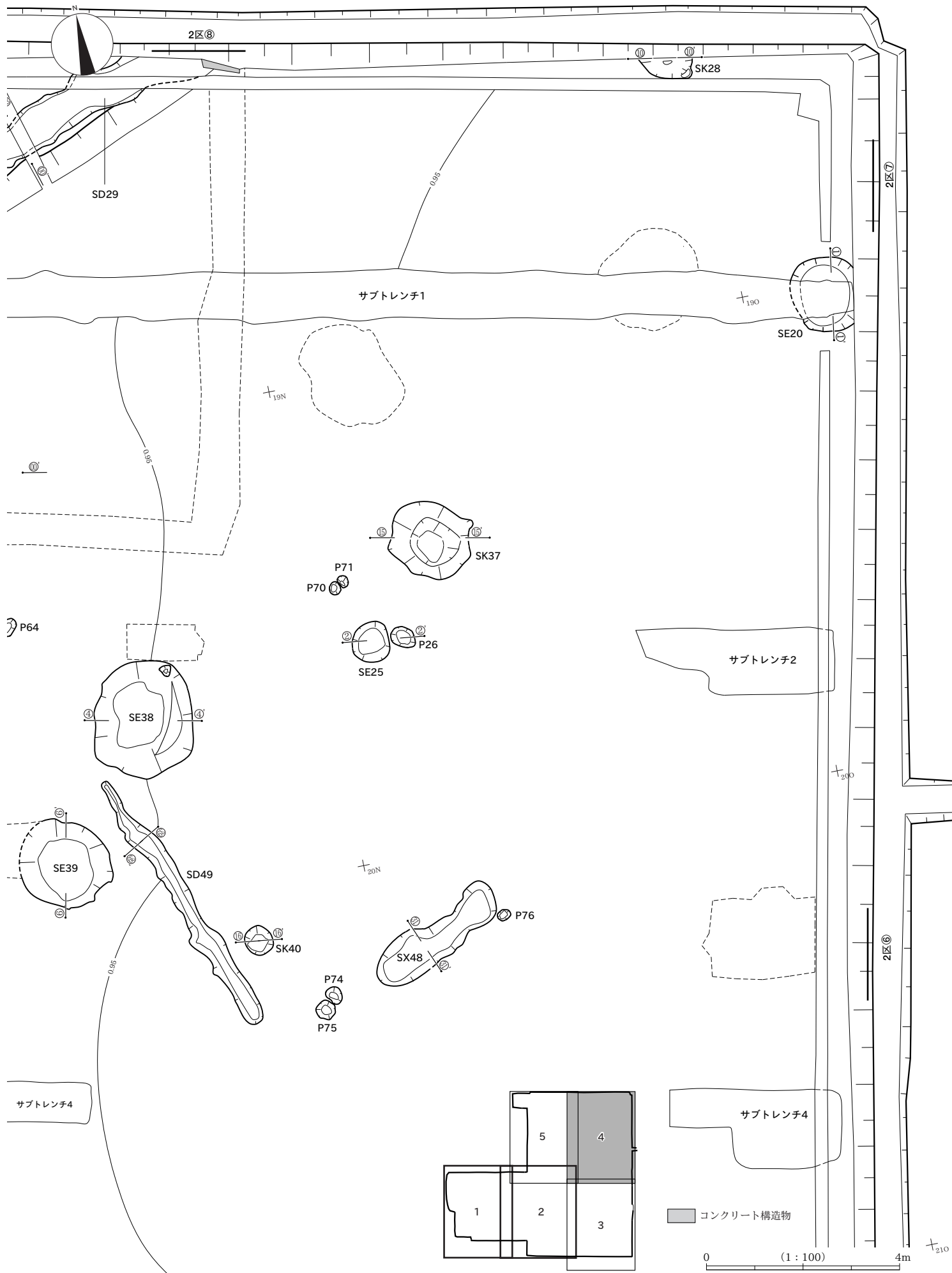
サブトレンチ5

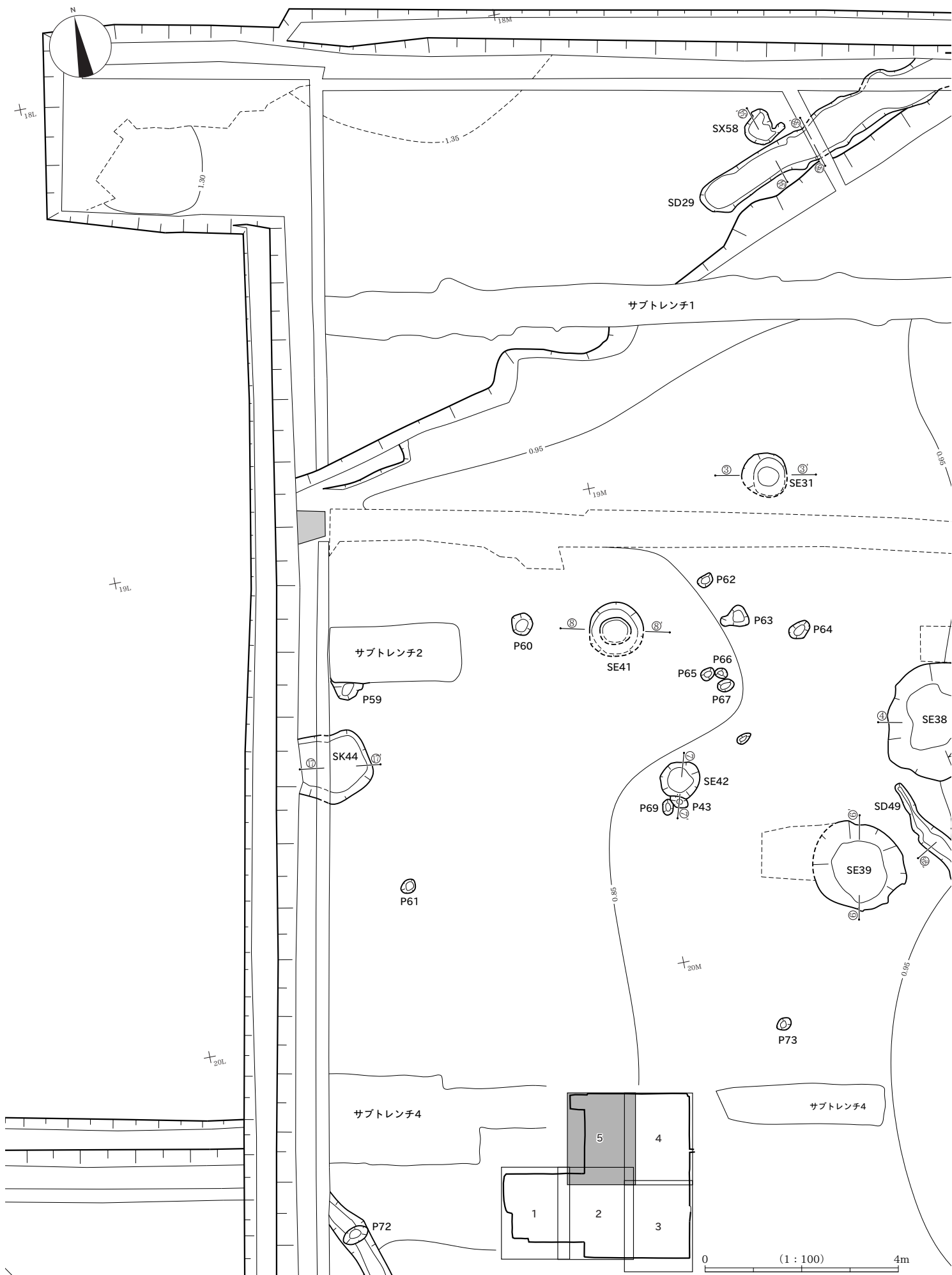


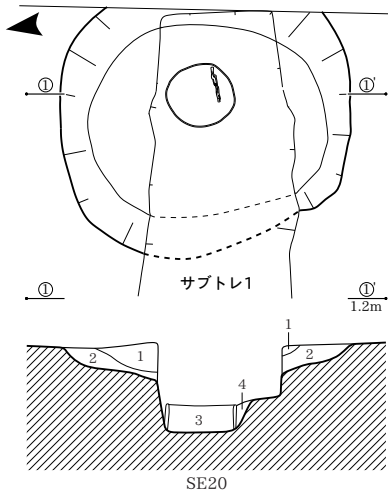


0 (1 : 100) 4m

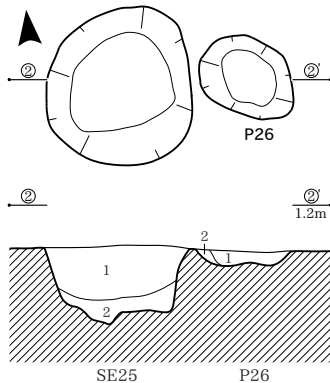






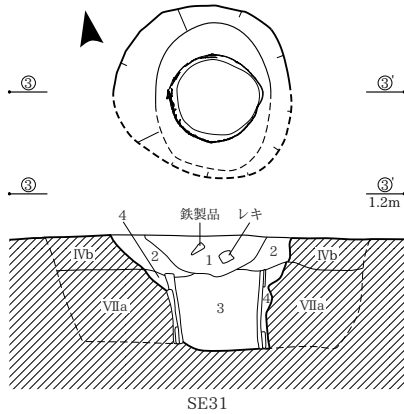


**SE20**  
 1.褐灰シルト (10YR5/1) 粘性わずかにあり。しまりややあり。マーブル状に黒色腐食土層が含まれる。  
 2.褐灰シルト (10YR6/1) 粘性わずかにあり。しまりややあり。炭化物が少量含まれる。  
 3.灰黄褐色砂質土 (10YR4/2) 粘性なし。しまりわずかにあり。  
 4.灰黄褐色砂質土 (10YR5/2) 粘性なし。しまりややあり。粘質土が少量入る。

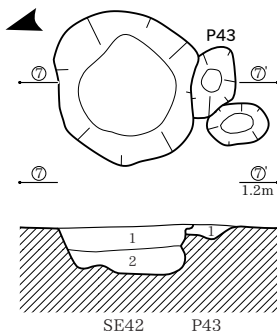


**SE25**  
 1.暗黄褐色シルト (2.5Y5/2) 粘性わずかにあり。しまりややあり。黒色腐食土層がマーブル状に入る。  
 2.灰黄褐色シルト (2.5Y6/2) 粘性わずかにあり。しまりややあり。炭化物が極少量入る。

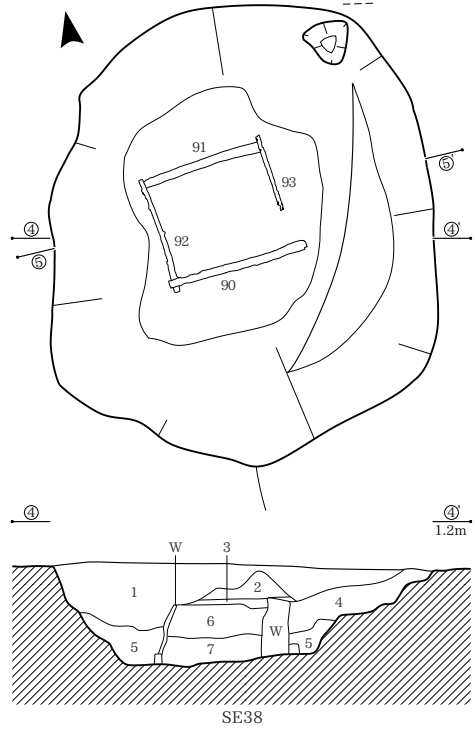
**P26**  
 1.黒褐色シルト (2.5Y3/1) 粘性ややあり。しまりややあり。黒色腐食土層が多く入る。  
 2.黄灰色シルト (2.5Y4/1) 粘性わずかにあり。しまりややあり。炭化物が少量入る。



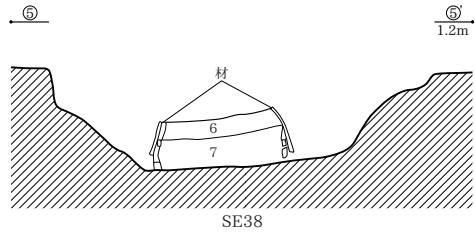
**SE31**  
 1.黒褐灰シルト (10YR3/2) 粘性ややあり。しまりややあり。炭化物が少量入る。  
 2.褐灰シルト (10YR4/1) 粘性わずかにあり。しまりややあり。極少量炭化物が入る。  
 3.黄灰シルト (2.5Y5/1) 粘性ややあり。しまりややあり。  
 4.灰黄褐色砂質土 (10YR6/2) 粘性ややあり。しまりややあり。VIIa砂質土と礫土層が入る。



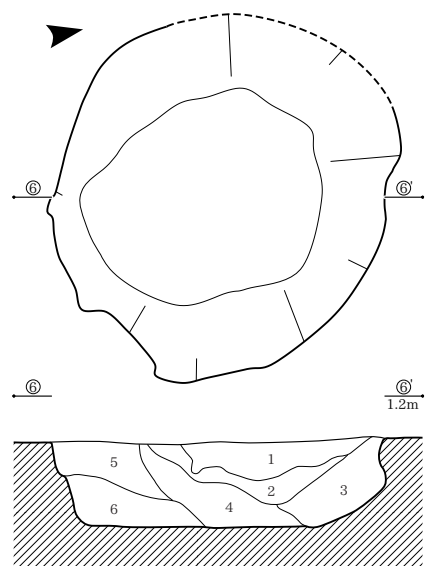
**SE42 P43**



**SE38**  
 1.黄褐色シルト (10YR5/6) 粘性なし。しまりややあり。褐灰色粘土 (10YR4/1) と灰色粘土 (7.5Y6/1) が縞状に入る。  
 2.黒褐色粘土 (10YR2/2) 粘性ややあり。しまりややあり。  
 3.黄灰色粘土 (2.5Y5/1) 粘性ややあり。しまりなし。  
 4.黄灰色シルト (2.5Y6/1) 粘性あり。しまりややあり。黒色粘土ブロック入る。  
 5.灰色砂 (5Y6/1) 粘性あり。しまりなし。粘土混じる。  
 6.オリーブ褐色砂 (2.5Y4/3) 粘性なし。しまりなし。  
 7.オリーブ褐色砂 (2.5Y4/3) 粘性なし。しまりややあり。6層に比べて粘質土が少量入る。



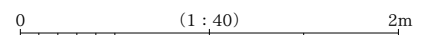
**SE38**

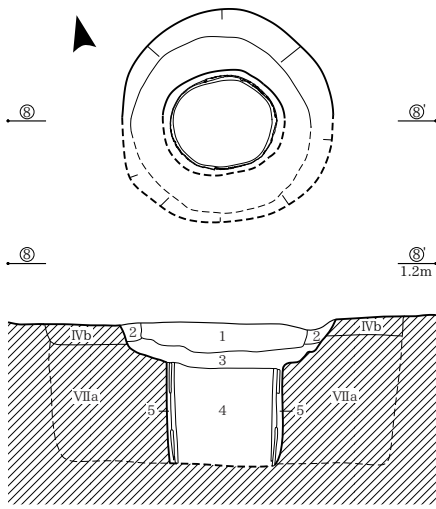


**SE39**  
 1.明黄褐色シルト (10YR6/6) 粘性なし。しまりややあり。2層の粘性シルトブロック混。砂多。  
 2.黒褐色粘土 (10YR3/1) 粘性ややあり。しまりややあり。6層の白粘土ブロック少混。  
 3.灰黒色粘土 (10YR1.7/1) 粘性ややあり。しまりややあり。黄灰粘土 (2.5Y6/1) 多混。  
 4. 粘性ややあり。しまりややあり。2層と3層 (黄灰粘土) +黄灰砂のラミナ状堆積。  
 5.にぶい黄褐色シルト (10YR6/3) 粘性あり。しまりややあり。灰色シルト (10Y6/1) 粘性ややあり。しまりややあり。  
 6.灰色シルト (10Y6/1) 粘性あり。しまりややあり。

**SE42**  
 1.黒褐色シルト (10YR2/2) 粘性あり。しまりあり。黄灰色砂質 (2.5Y6/2) シルトブロック30%混。  
 2.黒褐色シルト (10YR2/2) 粘性あり。しまりあり。黄灰色砂質 (2.5Y6/2) シルトブロック15%混。

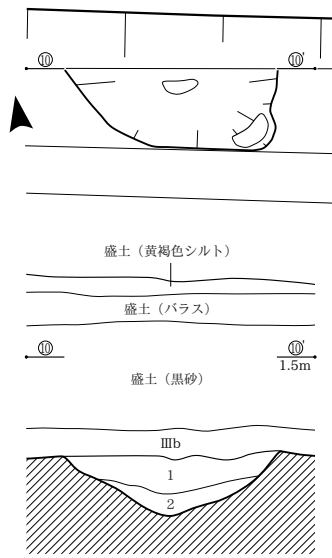
**P43**  
 1.灰黄褐色シルト (10YR4/2) 粘性なし。しまりあり。黄灰色シルトブロック少混。





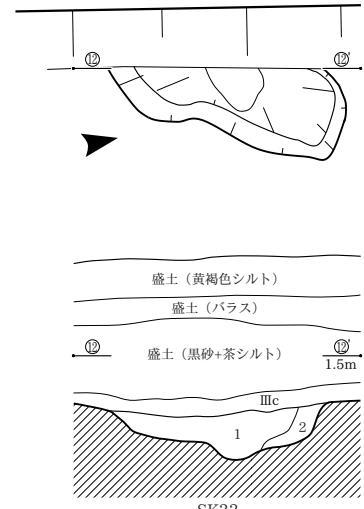
SE41

- SE41
- 1.黒褐色シルト (10YR3/1) 粘性ややあり。しまりややあり。マール状にVIIa層砂質土層が入る。炭化物が少量入る。
  - 2.褐灰砂質土層 (10YR7/1) 粘性わずかにあり。しまりややあり。VIIa層砂質土に粘質土が混じる。
  - 3.黒褐色シルト (10YR3/1) 粘性あり。しまりややあり。1層に比べて粘性が高い。炭化物が少量入る。
  - 4.灰黄色砂質土層 (2.5Y6/2) 粘性わずかにあり。しまりややあり。VIIa層砂質土に粘質土が少量混じる。
  - 5.暗灰黄色シルト (2.5Y4/2) 粘性ややあり。しまりややあり。マール状にVIIa層砂質土が少量入る。



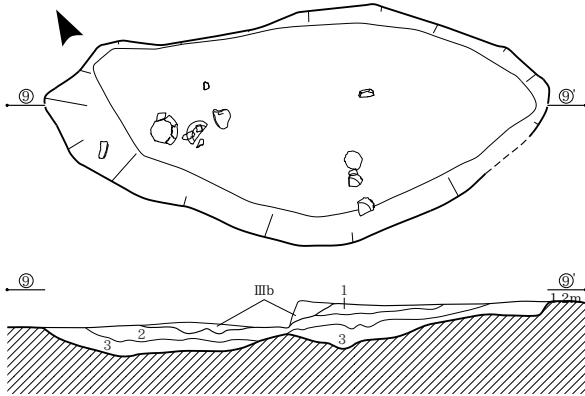
SK28

- SK28
- 1.灰オリーブシルト (5Y5/2) 粘性ややあり。しまりややあり。黒色腐食土層がマール状に入る。
  - 2.オリーブ黄シルト (5Y6/1) 粘性わずかにあり。しまりややあり。炭化物が極少量入る。



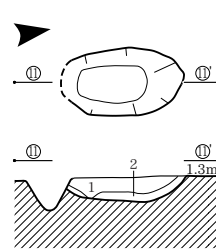
SK33

- SK33
- 1.黒褐色シルト (10YR3/2) 粘性わずかにあり。しまりややあり。φ5mm程度の炭化物が多く入る。
  - 2.灰褐色シルト (7.5YR4/2) 粘性わずかにあり。しまりややあり。IVa層土が混入する。



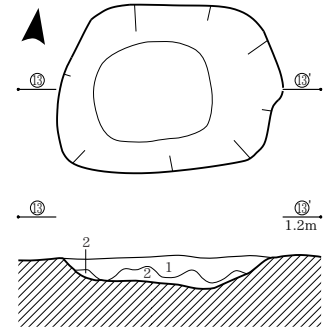
SK13

- SK13
- 1.灰黄褐色シルト (10YR5/2) 粘性ややあり。しまりあり。炭化物が少量入る。
  - 2.黒褐色シルト (10YR3/2) 粘性わずかにあり。しまりややあり。炭化物を多く含む。遺物(完形)が含まれる。
  - 3.にぶい黄褐色シルト (10YR5/2) 粘性わずかにあり。しまりあり。炭化物が極少量入る。



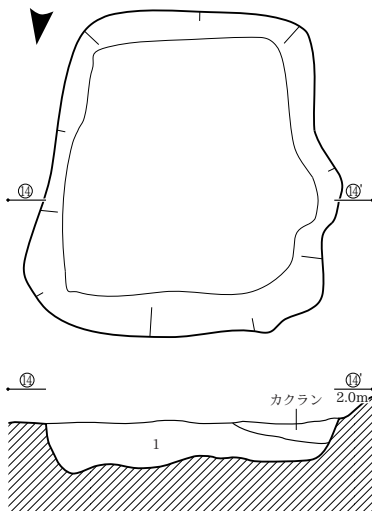
SK30

- SK30
- 1.暗灰黄色シルト (2.5Y4/2) 粘性わずかにあり。しまりややあり。黒色腐食土層が多く入る。
  - 2.灰白色シルト (5Y7/2) 粘性あり。しまりややあり。1層シルトブロック●混入。



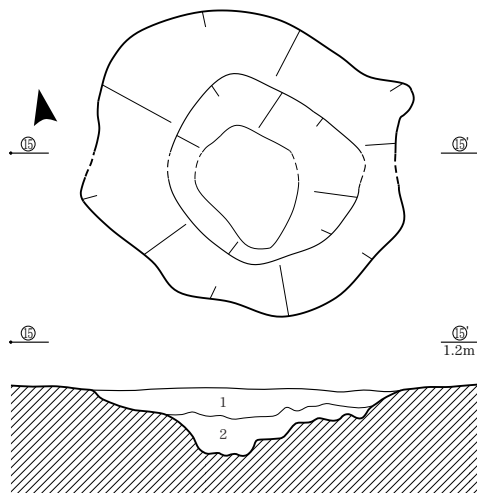
SK34

- SK34
- 1.オリーブ黒シルト (5Y3/1) 粘性あり。しまりややあり。炭化物が極少量入る。
  - 2.灰オリーブシルト (5Y6/2) 粘性あり。しまりややあり。IVa層土が入る。



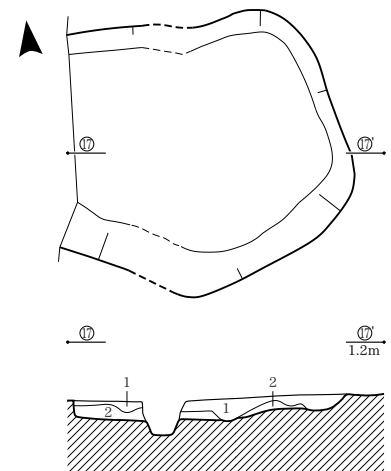
SK35

- SK35
- 1.にぶい黄褐色シルト (10YR4/3) 粘性かなりあり。しまりあり。IVa層土が混入。



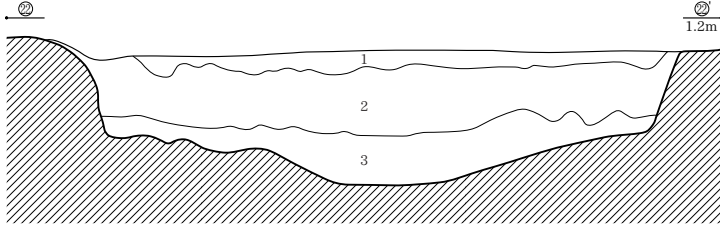
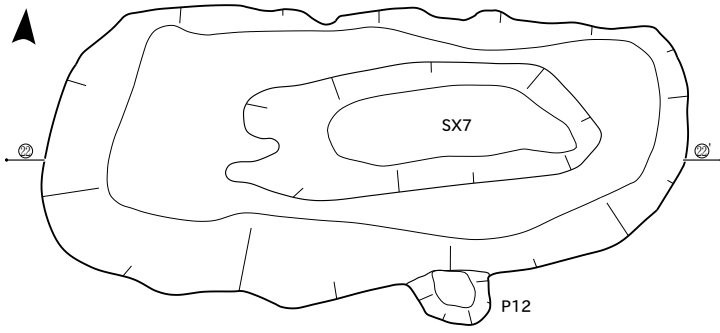
SK37

- SK37
- 1.暗灰黄色シルト (2.5Y5/2) 粘性わずかにあり。しまりややあり。黒色腐食土層がマール状に入る。
  - 2.灰黄色砂質土層 (2.5Y6/2) 粘性なし。しまりややあり。VIIa層土に若干の粘質土が混じる。

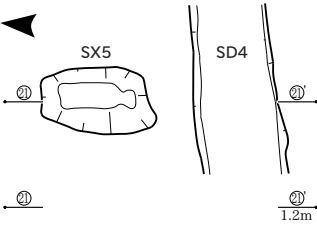


SK44

- SK44
- 1.黒褐色粘土 (10YR3/2) 粘性ややあり。しまりややあり。
  - 2.暗灰黄色砂 (2.5Y5/2) 粘性ややあり。しまりややあり。粘土多混。1層の粘土少混。

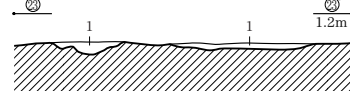
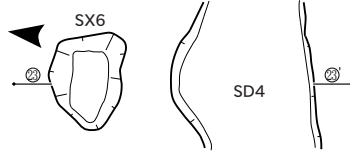


**SX7**  
 1.暗褐色シルト (10YR3/3) 粘性ややあり。しまりややあり。炭化物が少量含まれる。IV層土がブロック状に入る。  
 2.黒褐色シルト (10YR3/1) 粘性ややあり。しまりややあり。炭化物が少量含まれる。IV層土がブロック状に入る。  
 3.黒褐色シルト (10YR3/2) 粘性わずかにありあり。しまりややあり。IV層土がマール状に入る。

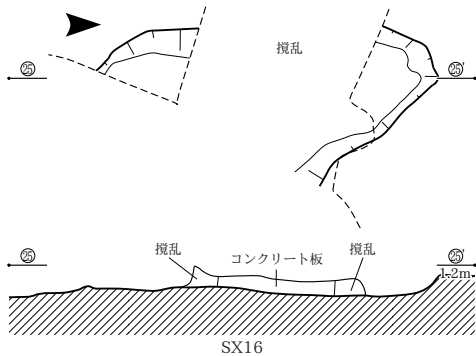


**SX5**  
 1.灰黄褐色シルト (10YR4/2) 粘性わずかにあり。しまりややあり。VI層土がマール状に混入する。

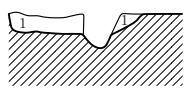
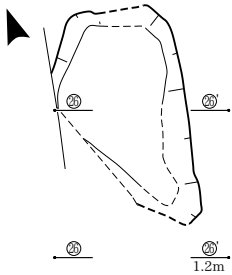
**SD4**  
 1.褐色シルト (10YR4/1) 粘性わずかにあり。しまりややあり。炭化物多混。



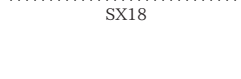
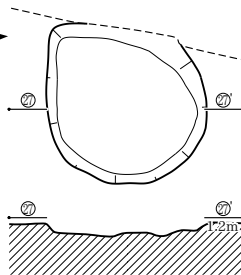
**SX6**  
 1.灰黄褐色シルト (10YR4/2) 粘性わずかにあり。しまりややあり。VI層土がマール状に混入する。



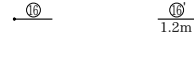
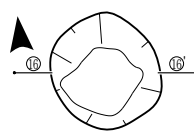
**SX16**



**SX17**  
 1.黄灰シルト (2.5Y4/1) 粘性ややあり。しまりややあり。炭化物が極少量入る。

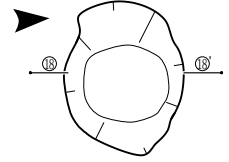


**SX18**



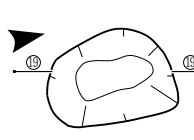
**SK40**

**SK40**  
 1.暗灰黄色シルト (2.5Y5/2) 粘性ややあり。しまりややあり。IVa層土がマール状に入る。



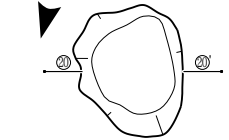
**SK52**

**SK52**  
 1.黒色シルト (10YR2/1) 粘性ややあり。しまりあり。黄灰シルト (2.5Y6/1) ブロック多混。マール状。



**SK53**

**SK53**  
 1.黒色シルト (10YR2/1) 粘性ややあり。しまりややあり。



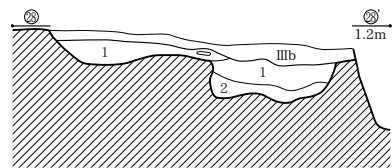
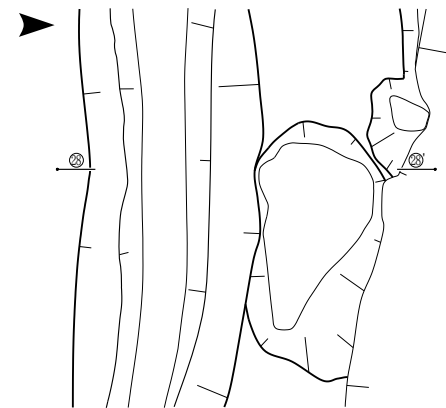
**SK57**

**SK57**  
 1.暗灰黄シルト (2.5Y4/2) 粘性ややあり。しまりややあり。炭化物が少量含まれる。  
 2.灰色シルト (5Y4/1) 粘性ややあり。しまりあり。



**SX8**

**SX8**  
 1.にぶい黄褐色シルト (10YR4/3) 粘性わずかにあり。しまりややあり。φ5mmが多く含まれる。IV層土が混入する。

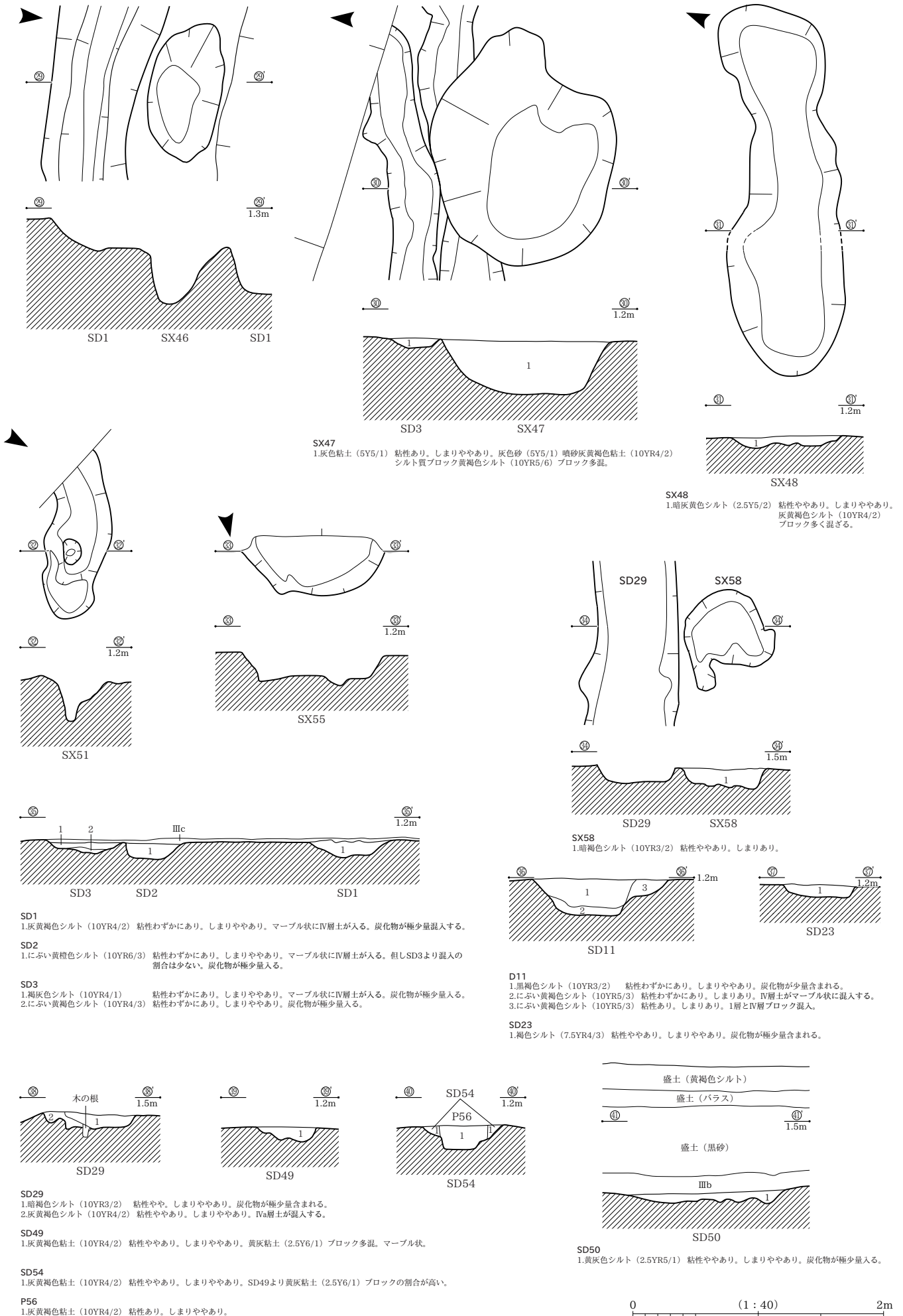


**SD1**

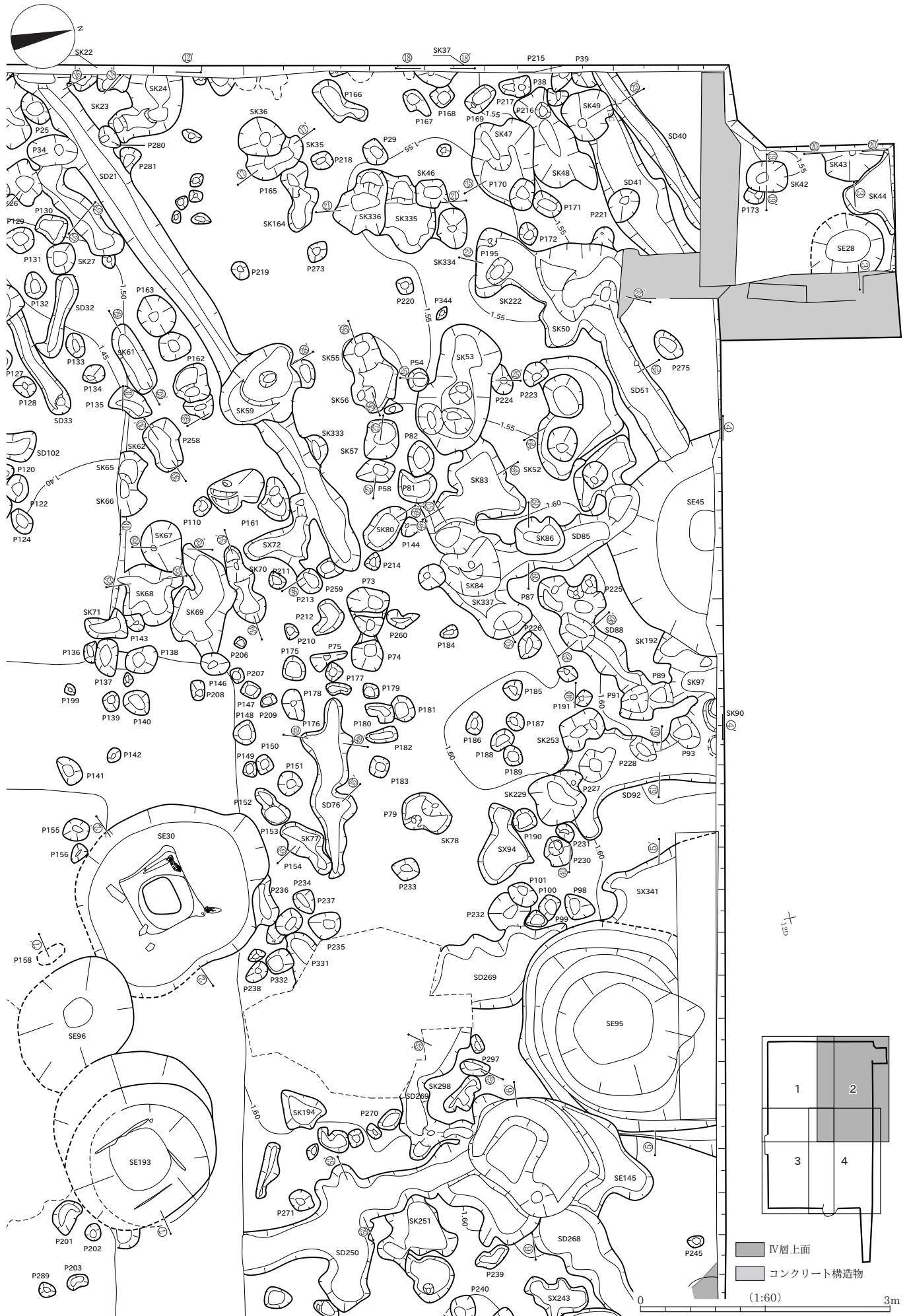
**SX32**

**SX32**  
 1.灰黄褐色シルト (10YR4/2) 粘性ややあり。しまりややあり。黒色腐食土層が混入する。  
 2.黒褐色シルト (10YR3/1) 粘性ややあり。しまりややあり。粘質性が高い。









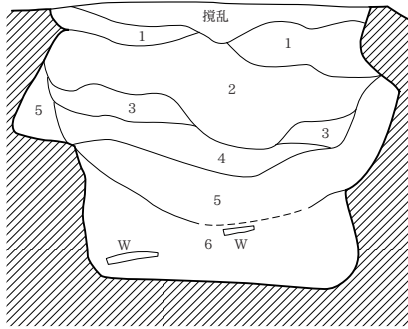
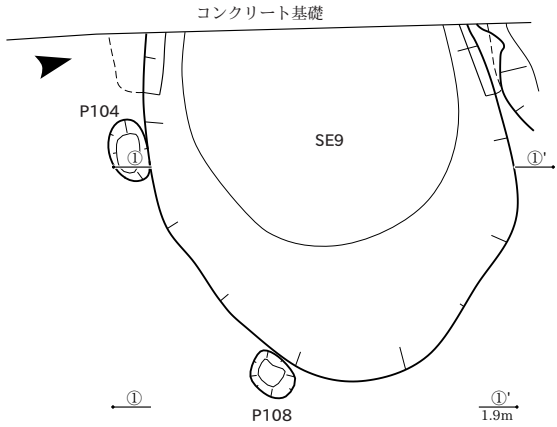


■ IV層上面  
 ■ V層上面

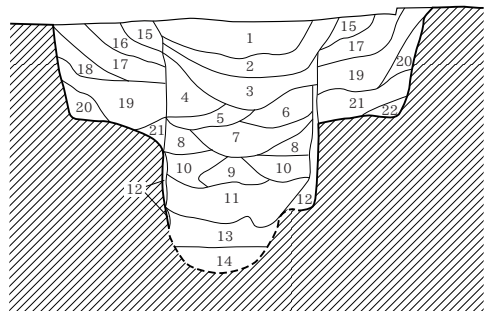
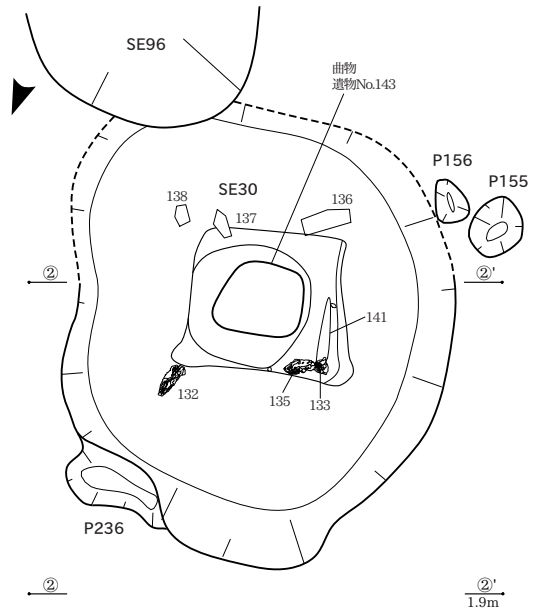
0 (1:60) 3m



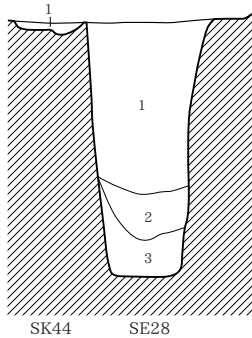
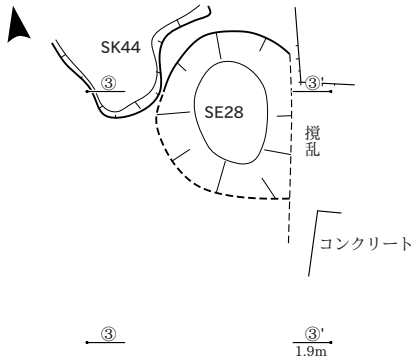




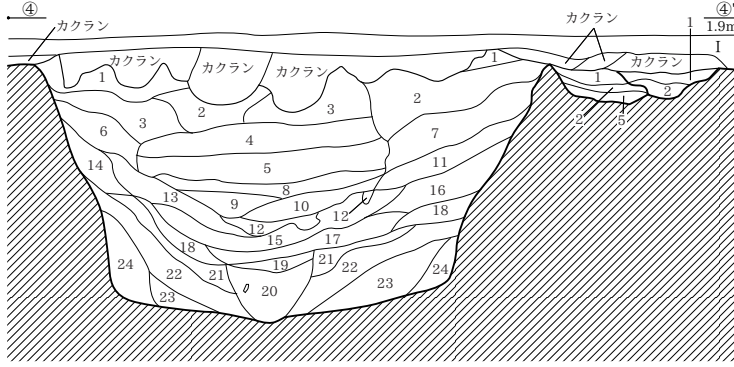
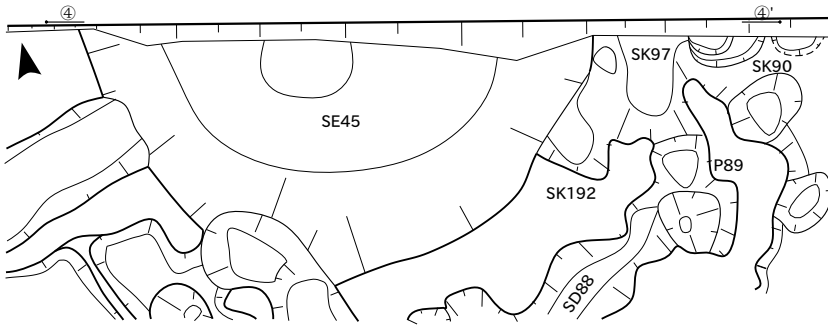
- SE9**
- 1.黒褐色砂 (7.5YR3/1) 粘性あり。しまり非常にあり。暗灰黄色 (2.5Y5/2) シルトブロック20%混。
  - 2.黒褐色砂 (7.5YR3/1) 粘性あり。しまり非常にあり。暗灰黄色 (2.5Y5/2) シルトブロック50%混。
  - 3.暗灰黄色シルト (2.5Y5/2) 粘性あり。しまり非常にあり。黒褐色砂 (7.5YR3/1) 10%混。
  - 4.黒褐色砂 (7.5YR3/1) 粘性あり。しまり非常にあり。暗灰黄色 (2.5Y5/2) シルトブロック30%混。
  - 5.暗灰黄色シルト (2.5Y5/2) 粘性あり。しまり非常にあり。黒褐色砂 (7.5YR3/1) 10%混。
  - 6.灰色粘土 (7.5Y4/1) 粘性非常にあり。しまりあり。腐蝕植物の層 (1~3cm) がラミナ状に入る。風倒木入る。



- SE30**
- 1.オリーブ黒色微砂 (7.5Y3/1) 粘性あり。しまりあり。地山ブロックわずかに入る。
  - 2.黒色微砂 (10Y2/1) 粘性あり。しまりあり。炭化粒多い。
  - 3.灰色細砂 (5Y4/1) 粘性ややあり。しまりあり。地山ブロックラミナ状に入る。
  - 4.灰オリーブ色中粒砂 (5Y6/2) 粘性なし。しまりややあり。黒砂斑状に入る。炭化粒わずかに入る。
  - 5.灰オリーブ色中粒砂 (5Y6/2) 粘性ややあり。しまりややあり。黒砂斑状に入る。
  - 6.灰色細砂 (7.5Y4/1) 粘性ややあり。しまりあり。炭化物帯状に入る。地山斑状に入る。
  - 7.オリーブ黒色細砂 (5Y3/1) 粘性ややあり。しまりあり。黒砂斑状に入る。地山ブロック状に入る。
  - 8.オリーブ黒色細砂 (5Y3/1) 粘性ややあり。しまりあり。黒砂。地山のラミナ。
  - 9.浅黄色細砂 (5Y7/3) 粘性なし。しまりややあり。黒砂ブロック状に入る。
  - 10.暗灰色細砂 (N3/0) 粘性ややあり。しまりややあり。黒砂。地山の混層。
  - 11.オリーブ黒色細砂 (5Y3/1) 粘性ややあり。しまりややあり。黒砂。地山の混層。地山ブロック状に入る。
  - 12.オリーブ黒色粘質シルト (5Y3/2) 粘性ややあり。しまりなし。井戸枠が腐食した部分の層。
  - 13.オリーブ黒色細砂 (5Y3/1) 粘性ややあり。しまりややあり。井戸枠が腐食した部分の層。
  - 14.灰色細砂 (5Y6/1) 粘性なし。しまりややあり。最底部の層。曲物あり。湧水激しい。
  - 15.灰黄色微砂 (2.5Y7/2) 粘性あり。しまりあり。地山砂ブロック状に入る。土質は同じ。地山砂ブロックと黒砂の量の多寡による。
  - 16.黄灰色細砂 (2.5Y5/1) 粘性ややあり。しまりあり。
  - 17.灰白色細砂 (2.5Y8/2) 粘性あり。しまりあり。
  - 18.灰白色細砂 (2.5Y8/2) 粘性あり。しまりあり。
  - 19.灰白色細砂 (2.5Y8/2) 粘性あり。しまりあり。
  - 20.灰白色細砂 (2.5Y8/2) 粘性あり。しまりあり。
  - 21.灰白色細砂 (2.5Y8/2) 粘性あり。しまりあり。
  - 22.灰白色細砂 (2.5Y8/2) 粘性あり。しまりあり。



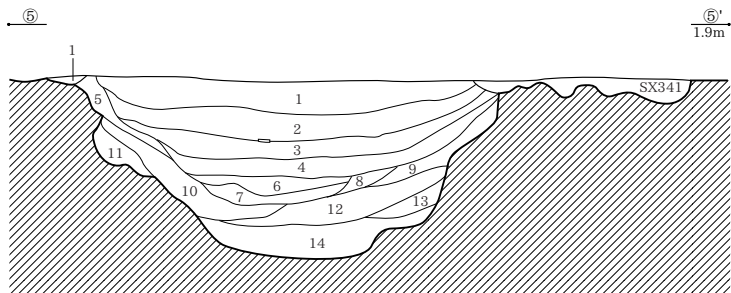
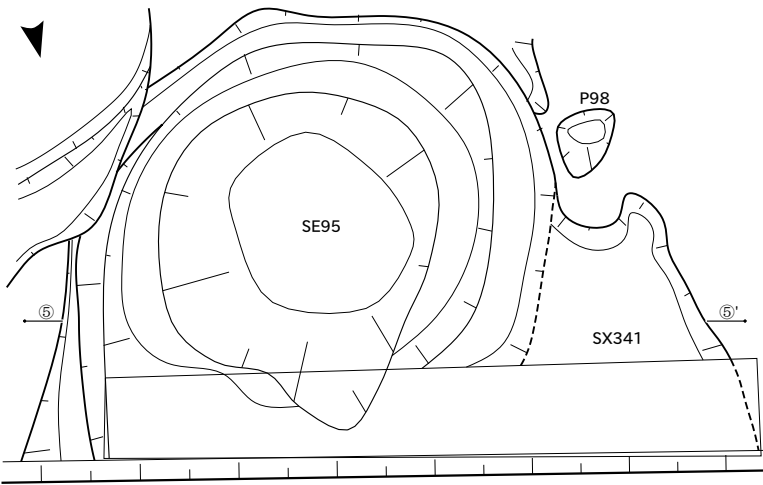
- SK44**
- 1.暗オリーブ褐色砂 (2.5Y3/3) 粘性ややあり。しまりあり。シルト混。SK43を切る。
- SE28**
- 1.暗灰黄色シルト (2.5Y4/2) 粘性あり。しまりあり。III層シルトブロック40%。
  - 2.黒色粘土 (2.5Y2/1) 粘性非常にあり。しまりあり。しまりは1層より無い。
  - 3.灰色粘土 (5Y4/1) 粘性非常にあり。しまりややあり。黄灰色砂混ざる。



- SE45
- 1. 灰黄色細砂 (5Y4/1)
  - 2. 灰オリーブ色細砂 (5Y4/2)
  - 3. 淡黄色細砂 (7.5Y8/3)
  - 4. 暗灰色細砂 (N3/0)
  - 5. 灰黄色粘質シルト (N4/0)
  - 6. 浅黄色細砂 (2.5Y7/4)
  - 7. 浅黄色細砂 (2.5Y7/4)
  - 8. 灰黄色細砂 (5Y5/1)
  - 9. オリーブ黒色細砂 (7.5Y3/1)
  - 10. オリーブ黒色細砂 (7.5Y3/1)
  - 11. 灰黄色細砂 (2.5Y7/2)
  - 12. 灰黄色細砂 (5Y4/1)
  - 13. 明黄褐色細砂 (10YR6/6)
  - 14. 淡黄色細砂 (2.5Y8/4)
  - 15. 黄灰色粘質シルト (2.5Y6/1)
  - 16. 淡黄色細砂 (2.5Y8/4)
  - 17. 黒色細砂 (10YR6/2)
  - 18. にぶい黄色細砂 (2.5Y6/3)
  - 19. 灰白色粘質シルト (5Y8/1)
  - 20. 灰白色細砂 (10Y4/1)
  - 21. にぶい黄褐色細砂 (10YR7/3)
  - 22. 淡黄色粘質シルト (2.5Y8/4)
  - 23. 灰白色細砂 (5Y8/1)
  - 24. 灰白色細砂 (2.5Y7/1)

- 粘性ややあり。しまりあり。Ⅲ層との混層。
- 粘性ややあり。しまりあり。Ⅲ層ブロック状に入る。
- 粘性ややあり。しまりややあり。Ⅲ層大ブロック+黒砂の混層。
- 粘性ややあり。しまりややあり。Ⅲ層斑状。炭化粒帯状に入る。
- 粘性あり。しまりあり。粘土塊状に入る。炭化粒帯状に入る。
- 粘性ややあり。しまりあり。地山。
- 粘性ややあり。しまりあり。地山。
- 順が違う。
- 粘性なし。しまりややあり。Ⅲ層ブロック状に入る。
- 粘性ややあり。しまりあり。炭化粒わずかに含む。
- 粘性ややあり。しまりややあり。Ⅲ層ブロック斑状に入る。
- 粘性ややあり。しまりややあり。やや酸化する。黒砂斑状に入る。
- 粘性ややあり。しまりややあり。11層とⅢ層土の混層で侵食性堆積か？
- 粘性ややあり。しまりややあり。黒砂帯状に入る。
- 粘性ややあり。しまりややあり。黒砂斑状に入る。
- 粘性ややあり。しまりややあり。白色粘土、地山土、黒砂が混ざる。
- 粘性ややあり。しまりややあり。黒砂帯状に入る。酸化が強い。
- 粘性ややあり。しまりあり。黒砂斑状ブロックで酸化する。
- 粘性ややあり。しまりあり。白色粘土ブロック斑状に入る。
- 粘性あり。しまりあり。黒砂斑状わずかに含む。炭化粒わずかに含む。
- 粘性あり。しまりあり。炭化粒の多く入った層と白色粘土層、赤褐色層(酸化している)の互層。井戸砂残欠が見られる。
- 粘性あり。しまりあり。白色粘土ブロック状に入る。黒砂斑状わずかに含む。
- 粘性あり。しまりあり。植物遺体わずかに混入。
- 粘性ややあり。しまりあり。酸化鉄斑状に入る。
- 粘性あり。しまりあり。黒砂ブロック状にまれに混入。酸化鉄斑状に入る。

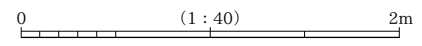
- SK90
- 1. 黒色細砂 (N1.5/0) 粘性ややあり。しまりあり。地山砂斑状に入る。
  - 2. 灰黄色細砂 (N4/0) 粘性ややあり。しまりややあり。地山砂+1層混層。
- SK97
- 1. 黒色細砂 (N2/0) 粘性なし。しまりややあり。地山砂小ブロック状に少混。
  - 2. 黒色細砂 (N2/0) 粘性なし。しまりあり。地山砂斑状+ブロック状に入る。
  - 3. 灰黄色細砂 (5Y4/1) 粘性ややあり。しまりあり。地山砂+黒砂ブロックの混層。

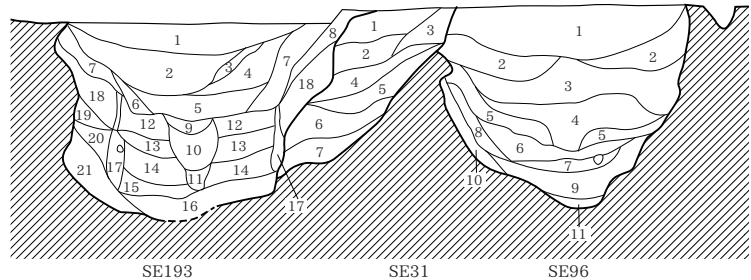
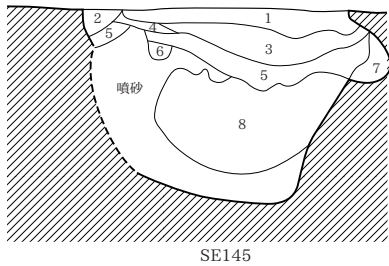
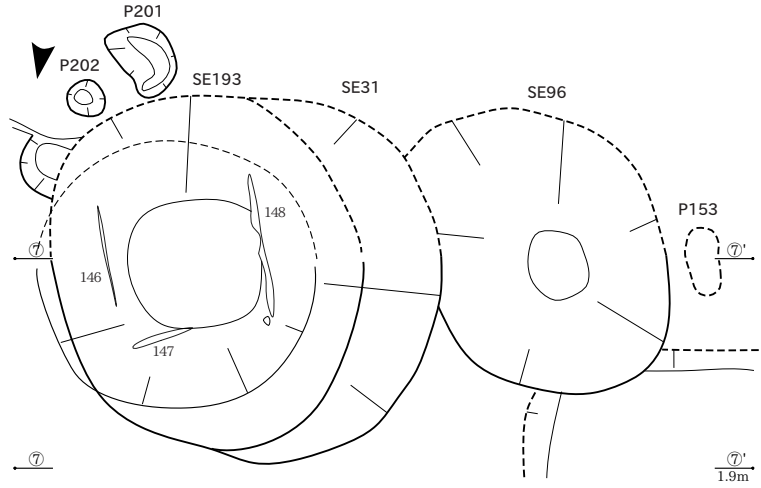
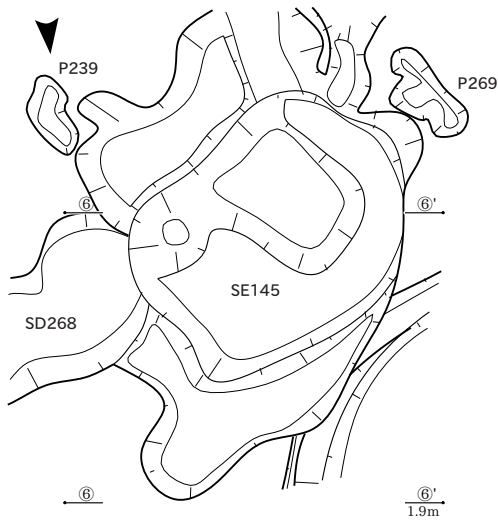


- SE95
- 1. 黒色細砂 (7.5Y2/1)
  - 2. 黒色細砂 (7.5Y2/1)
  - 3. オリーブ黒色細砂 (5Y2/2)
  - 4. オリーブ黒色細砂 (5Y2/2)
  - 5. 灰白色細砂 (5Y8/2)
  - 6. 黒色細砂 (N2/0)
  - 7. 浅黄色細砂 (5Y7/4)
  - 8. 灰オリーブ色中粒砂 (7.5Y4/2)
  - 9. 浅黄色細砂 (5Y7/4)
  - 10. オリーブ黒色細砂 (5Y2/2)
  - 11. 淡黄色細砂 (7.5Y8/3)
  - 12. 灰オリーブ色細砂 (5Y5/2)
  - 13. 灰白色細砂 (2.5Y8/2)
  - 14. 灰白色中粒砂 (5Y6/1)

- 粘性ややあり。しまり非常にあり。灰白色細砂少ブロック状に混入。やや土壌化。
- 粘性ややあり。しまりあり。1層と同質だが灰白色ブロックの量が多い。やや土壌化。
- 粘性ややあり。しまりあり。灰白色粘土ブロック(大)斑状に。
- 粘性あり。しまりあり。3層と灰白色粘土ブロック(大)の混層。
- 粘性なし。しまりあり。Ⅲ層の中に暗色細砂がブロック状に入る。斜面流入土。
- 粘性あり。しまりあり。腐食の強い黒砂層。Ⅳ層ブロックわずかに含む。
- 粘性ややあり。しまりややあり。Ⅲ層に6層ブロック状に混入。
- 粘性なし。しまりなし。斜面流入土。中粒砂よりなる純層。
- 粘性なし。しまりややあり。Ⅴ層と10・4・6層の混層と思われる。斜面流入土。
- 粘性ややあり。しまりややあり。腐食性の黒砂で地山砂少ブロックを斑状にわずかに含む。
- 粘性なし。しまりややあり。Ⅴ層と10層の混層。挟れている。足掛けか？
- 粘性ややあり。しまりややあり。黒砂と地山砂が小ブロック状に混入。
- 粘性あり。しまりあり。Ⅴ層ベースに黒砂ラミナ状に入る。斑状に。貼り壁？ この層が地山と誤認しやすい。
- 粘性なし。しまりなし。底部堆積土層+Ⅴ層ブロックとその下の中粒砂層の混層である。透水路と思われるが湧水はない。

- SX341
- 1. 黒褐色シルト (2.5Y3/1) 粘性あり。しまりややあり。Ⅲ層ブロック多く混じる。





SE145

- 1. 灰褐色細砂 (2.5Y3/1) 粘性ややあり。しまりあり。IV層砂小ブロックわずかに混入。
- 2. 灰オリーブ色細砂 (7.5Y6/2) 粘性なし。しまりややあり。地山砂小ブロックを含む。
- 3. 灰色細砂 (7.5Y4/1) 粘性ややあり。しまりあり。地山砂ブロック及び炭化物を少量含む。
- 4. 灰色細砂 (7.5Y5/1) 粘性なし。しまりややあり。斜面流入土で地山砂がラミナ状をなす。地山砂ブロック少量。
- 5. オリーブ黒色細砂 (5Y2/2) 粘性ややあり。しまりややあり。IV層とV層の混層。V層ブロック状に入る。炭化粒をまれに含む。
- 6. オリーブ黒色細砂 (5Y2/2) 粘性ややあり。しまりややあり。5層の同一層だが噴砂により攪乱されている。
- 7. オリーブ黒色中粒砂 (5Y2/2) 粘性なし。しまりややあり。V層・噴砂・IV層の混層。
- 8. 灰黄色シルト (2.5Y6/2) 粘性あり。しまりあり。

SE31

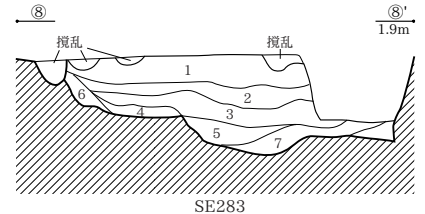
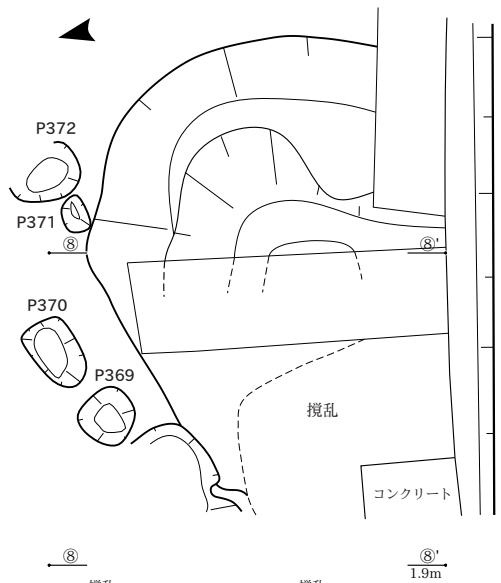
- 1. 灰色砂 (5Y4/1) 粘性ややあり。しまりあり。粒子細かい。V層ブロック少量。SE96を切り、SE193に切られる。
- 2. オリーブ黒色砂 (5Y3/1) 粘性ややあり。しまりあり。腐植土少混。V層ブロック少量。
- 3. 浅黄色砂 (5Y7/3) 粘性ややあり。しまりややあり。V層に2層まだらに混入。
- 4. 灰色砂 (5Y4/1) 粘性あり。しまりあり。V層ブロック混。
- 5. オリーブ黒色砂 (10Y3/1) 粘性ややあり。しまりあり。V層ブロック少量。
- 6. 赤黄色砂 (5Y8/4) 粘性ややあり。しまりややあり。V層とIV層の混合層。
- 7. オリーブ黒色砂 (5Y3/1) 粘性ややあり。しまりややあり。V層ブロック少量。

SE96

- 1. オリーブ黒色粘質シルト (5Y3/1) 粘性あり。しまりあり。V層ブロック状に混入。SE31に切られる。
- 2. 灰白色微砂 (5Y7/2) 粘性ややあり。しまりあり。V層ブロック+IV層ブロック混。
- 3. オリーブ黒色粘質シルト (5Y2/2) 粘性あり。しまりあり。V層ブロック状に混入。
- 4. 灰白色微砂 (5Y7/2) 粘性ややあり。しまりあり。IV層斑状に入る。酸化鉄帯状に入る。
- 5. 灰白色微砂 (5Y4/1) 粘性ややあり。しまりあり。V層砂斑状に入る。
- 6. オリーブ黒色粘質シルト (5Y3/1) 粘性あり。しまりあり。V層砂斑状に入る。炭化粒わずかに混入。
- 7. 灰色細砂 (5Y6/1) 粘性あり。しまりあり。酸化鉄帯状に混入。
- 8. オリーブ黒色細砂 (7.5Y3/2) 粘性ややあり。しまりややあり。V層砂斑状に入る。流入土。
- 9. 灰オリーブ色細砂 (7.5Y5/3) 粘性ややあり。しまりあり。V層ラミナ状に入る。
- 10. 灰白色微砂 (10Y4/1) 粘性ややあり。しまりあり。V層ブロック状に入る。
- 11. 灰白色微砂 (7.5Y6/1) 粘性ややあり。しまりあり。わずかに湧水あり。

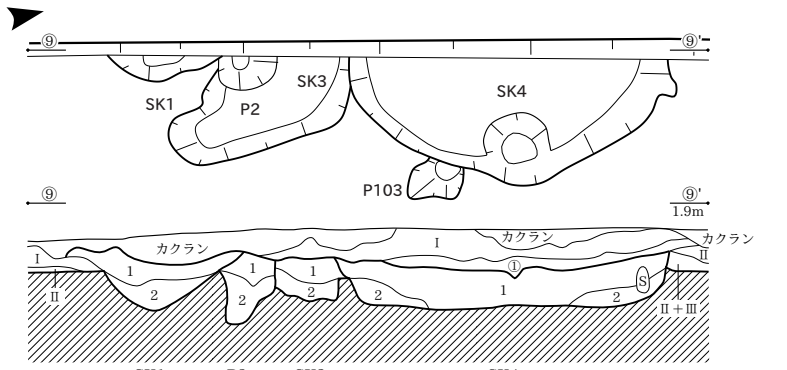
SE193

- 1. 黒色微砂 (10Y2/1) 粘性あり。しまりあり。シルト混。炭化物粒微混。SE31を切る。
- 2. 黒色微砂 (10Y2/1) 粘性あり。しまりあり。シルト混。炭化物粒微混。地山が帯状に混入。土壌化している？
- 3. 浅黄色砂 (5Y7/3) 粘性なし。しまりあり。シルト混。V層まだらに混入。斜面流入土。
- 4. 灰オリーブ色細砂 (5Y4/2) 粘性あり。しまりあり。シルト混。V層まだらに混入。
- 5. オリーブ黒色微砂 (7.5Y3/1) 粘性あり。しまりあり。V層まだらに混入するが概ね均質な黒色砂。
- 6. オリーブ黒色細砂 (7.5Y3/1) 粘性ややあり。しまりあり。シルト混。5層と同質だがV層ブロック上に混入。斜面流入土。
- 7. 灰白色微砂 (5Y4/1) 粘性ややあり。しまりややあり。シルト混。V層ブロック混。斜面流入土。
- 8. 灰オリーブ色細砂 (5Y4/2) 粘性あり。しまりあり。シルト混。4層と同質。
- 9. 黒色粘質シルト (2.5Y2/1) 粘性あり。しまりややあり。V層ブロック混。祭祀跡か？
- 10. オリーブ黒色粘質シルト (5Y3/1) 粘性ややあり。しまりなし。有機物由来の腐植土？祭祀跡か？
- 11. オリーブ黒色粘質シルト (5Y2/2) 粘性あり。しまりややあり。有機物由来の腐植土？。祭祀跡か？
- 12. オリーブ黒色微砂 (10Y3/1) 粘性ややあり。しまりあり。シルト混。IV層。
- 13. オリーブ黒色細砂 (5Y3/2) 粘性ややあり。しまりややあり。シルト混。炭化物粒微混。
- 14. オリーブ黒色細砂 (5Y3/2) 粘性ややあり。しまりややあり。シルト混。V層まだらに混入。
- 15. 灰白色微砂 (5Y4/1) 粘性ややあり。しまりややあり。V層・白色砂ラミナ状に入る。
- 16. 灰オリーブ色細砂 (7.5Y5/2) 粘性なし。しまりややあり。湧水激しい。
- 17. オリーブ黒色粘質シルト (7.5Y3/2) 粘性あり。しまりなし。井戸枠が腐食した層。
- 18. 黒褐色細砂 (2.5Y3/1) 粘性ややあり。しまりややあり。黒色・細砂・細砂ラミナ状に入る。斜面流入土。
- 19. 灰オリーブ色中粒砂 (5Y4/2) 粘性なし。しまりなし。V層+IV層。壁面崩落土と思われる。
- 20. オリーブ黒色細砂 (5Y2/2) 粘性ややあり。しまりややあり。腐植土多混。炭化物粒まだらに混入。
- 21. オリーブ黒色細砂 (7.5Y2/2) 粘性なし。しまりややあり。V層+IV層がラミナ状に混ざり合う。



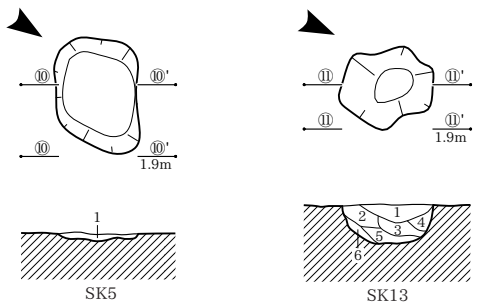
SE283

- 1. 灰黄色シルト (2.5Y6/2) 粘性あり。しまりあり。灰黄褐色 (10YR4/2) 砂がラミナ状に入る。
- 2. 灰黄色シルト (2.5Y6/2) 粘性あり。しまりあり。灰黄褐色 (10YR4/2) 砂がほとんど入らない。
- 3. 灰黄色シルト (2.5Y6/2) 粘性あり。しまりあり。黒褐色 (10TR3/1) シルトがラミナ状に入る。
- 4. 灰黄色シルト (2.5Y6/2) 粘性あり。しまりあり。灰黄褐色 (10YR4/2) 砂がほとんど入らない。
- 5. 灰黄色シルト (2.5Y6/2) 粘性あり。しまりあり。灰黄褐色 (10YR4/2) 砂がラミナ状に入る。
- 6. 灰黄褐色シルト (10YR4/2) 粘性ややあり。しまりあり。砂質強い。
- 7. 灰黄色シルト (2.5Y6/2) 粘性あり。しまりあり。黒褐色 (10TR3/1) シルトがラミナ状に入る。



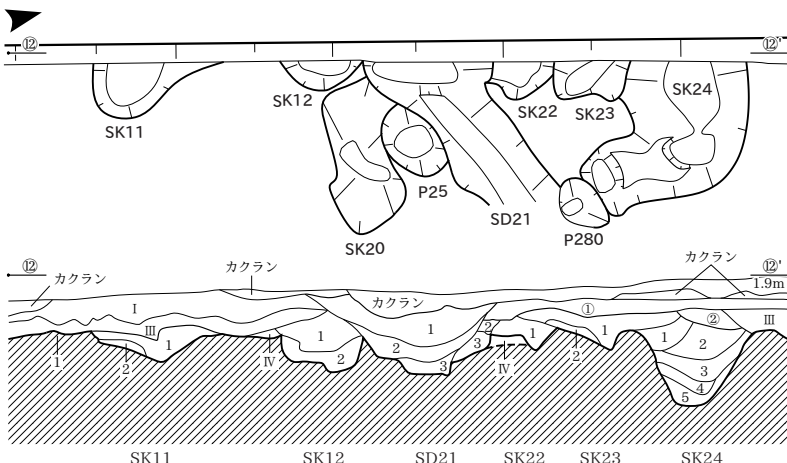
- SK1**  
 1.黒褐色シルト (10YR2/2)  
 2.灰黄褐色シルト (2.5Y4/2)  
**P2**  
 1.黒褐色砂 (10YR2/2)  
 2.オリーブ褐色シルト (2.5Y4/4)  
**SK3**  
 1.黒褐色砂 (10YR2/2)  
 2.オリーブ褐色シルト (2.5Y4/4)  
**SK4**  
 1.黒褐色砂 (10YR2/2)  
 2.オリーブ褐色シルト (2.5Y4/4)

- 粘性あり。しまりややあり。  
 粘性ややあり。しまりあり。Ⅲ層シルトに1層ブロック70%  
 粘性なし。しまりあり。  
 粘性あり。しまりあり。黒褐色シルトブロック多混。  
 粘性ややあり。しまりややあり。  
 粘性あり。しまりあり。黒褐色シルトブロック多混。  
 粘性ややあり。しまりややあり。Ⅲ層シルトブロック少混。  
 粘性あり。しまりあり。黒褐色シルトブロック多混。



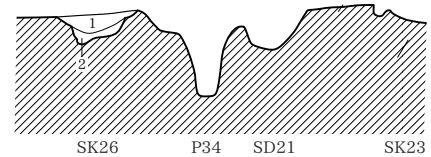
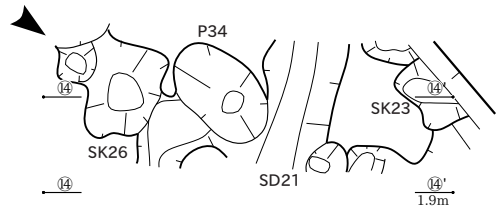
- SK5**  
 1.暗褐色シルト (10YR3/3)  
**SK13**  
 1.黒褐色砂 (10YR3/1)  
 2.黒褐色シルト (2.5Y3/2)  
 3.黒褐色砂 (10YR3/1)  
 4.黄褐色シルト (2.5Y5/3~5/4)  
 5.黄褐色シルト (2.5Y5/3~5/4)  
 6.黄褐色シルト (2.5Y5/3~5/4)

- 粘性ややあり。しまりややあり。砂質強い  
 粘性なし。しまりあり。  
 粘性ややあり。しまりあり。砂質強い。確認面シルトブロック少混。炭化物少混。  
 粘性なし。しまりあり。  
 確認面のシルトブロック30%程度。土質は1層。  
 粘性ややあり。しまりややあり。1層の砂が混ざる。  
 粘性ややあり。しまりややあり。  
 粘性ややあり。しまりややあり。



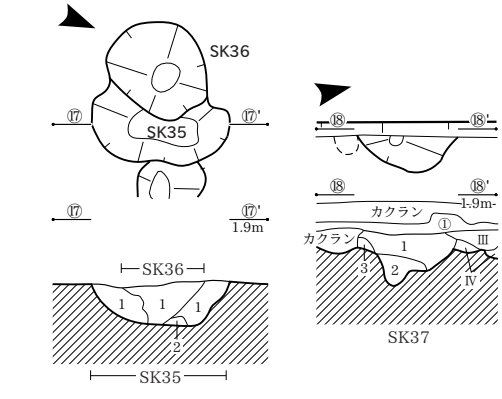
- SK11**  
 1.黒褐色砂 (10YR2/2)  
 2.オリーブ褐色シルト (2.5Y4/4)  
**SK12**  
 1.黒褐色砂 (10YR2/2)  
 2.オリーブ褐色シルト (2.5Y4/4)  
**SD21**  
 1.黄褐色シルト (2.5Y5/3)  
 2.黒褐色砂 (2.5Y3/2)  
 3.暗オリーブ褐色砂 (2.5Y3/3)  
**SK22**  
 1.黒褐色砂 (10YR3/2)  
 2.黒褐色シルト (10YR3/1)  
 3.黄褐色シルト (2.5Y5/4)  
**SK23**  
 1.黒褐色砂 (10YR2/2)  
 2.オリーブ褐色シルト (2.5Y4/4)  
**SK24**  
 1.暗オリーブ褐色シルト (2.5Y4/4)  
 2.黒褐色砂 (10YR3/2)  
 3.黒褐色シルト (10YR3/1)  
 4.黄褐色シルト (2.5Y5/4)  
 5.黄褐色シルト (2.5Y5/4)

- 粘性ややあり。しまりややあり。  
 粘性あり。しまりあり。黒褐色シルトブロック多混。  
 粘性なし。しまりあり。  
 粘性あり。しまりあり。黒褐色シルトブロック多混。  
 粘性あり。しまりあり。Ⅲ層と同じ土質(層位の逆転) P25を切る。  
 粘性ややあり。しまりあり。Ⅲ層シルトブロック少混。  
 粘性ややあり。しまりあり。Ⅲ層シルトブロック15%ラミナ状に入る。  
 粘性ややあり。しまりあり。Ⅲ層シルトブロック少混。  
 粘性あり。しまりあり。Ⅲ層シルトブロック多混。  
 粘性なし。しまりあり。  
 粘性あり。しまりあり。黒褐色シルトブロック多混。  
 粘性ややあり。しまりあり。2層ブロック多混。  
 粘性なし。しまりあり  
 粘性ややあり。しまりあり。2層およびⅢ層シルトブロック多混。  
 粘性あり。しまりあり。3層ブロック少混。  
 粘性あり。しまりあり。3層ブロック少混(4層より少ない)。



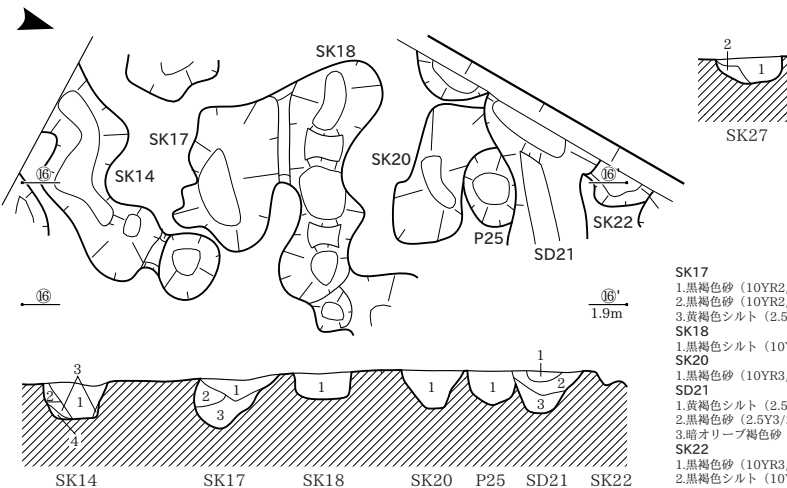
- SK26**  
 1.オリーブ褐色シルト (2.5Y4/3)  
 2.黒褐色シルト (2.5Y3/1)

- 粘性ややあり。しまりあり。砂質強い。  
 粘性あり。しまりややあり。  
 Ⅲ層シルトブロック多混。



- SK27**  
 1.黒褐色砂 (2.5Y2/2)  
 2.黄褐色シルト (2.5Y5/3)  
**SK35**  
 1.黒褐色砂 (2.5Y3/1)  
 2.黄褐色シルト (2.5Y5/3)  
**SK36**  
 1.黒色砂 (10YR1.7/7)  
**SK37**  
 1.黒褐色砂 (10YR3/2)  
 2.灰黄褐色シルト (2.5Y4/2)  
 3.オリーブ褐色シルト (2.5Y4/4)

- 粘性なし。しまりあり。φ5mm炭化物少混。  
 粘性あり。しまりあり。1層ブロックラミナ状に入る。  
 粘性ややあり。しまりあり。  
 Ⅲ層シルトブロック少混。  
 粘性あり。しまりあり。1層ラミナ状に入る。  
 粘性なし。しまりあり。  
 粘性なし。しまりあり。  
 粘性ややあり。しまりあり。  
 Ⅲ層シルトに1層ブロック70%  
 粘性あり。しまりあり。黒褐色シルトブロック多混。

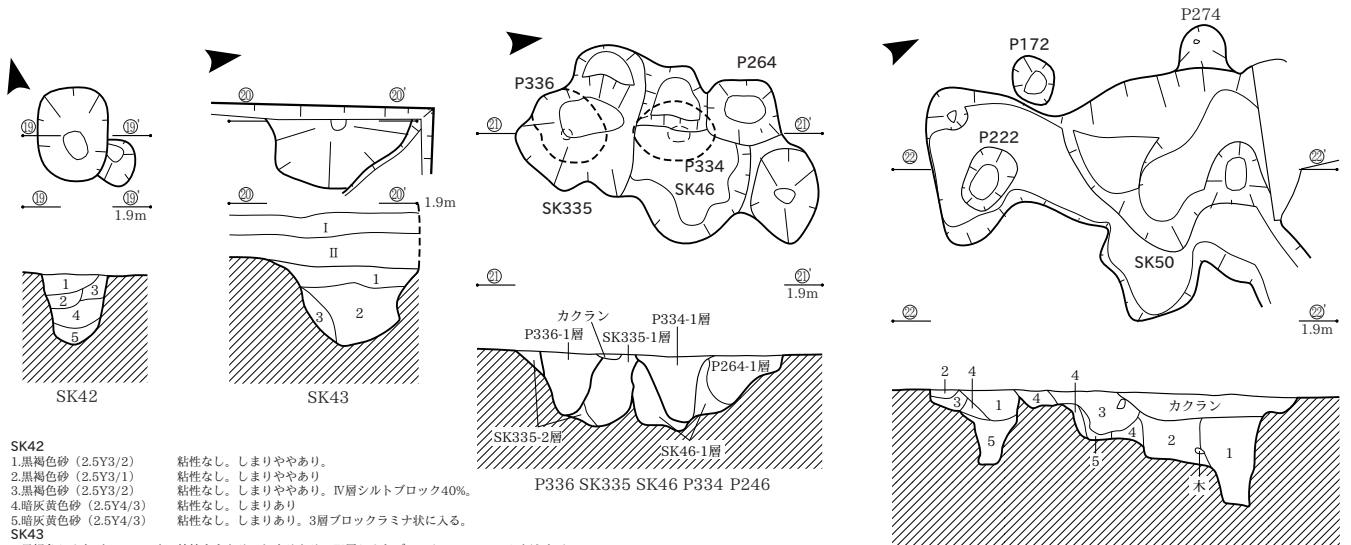


- SK14**  
 1.黒褐色砂 (10YR2/3)  
 2.黒褐色砂 (10YR2/2)  
 3.黄褐色シルト (2.5Y5/3)  
 4.黄褐色シルト (2.5Y5/3)

- 粘性なし。しまりあり。確認面のシルトブロック少混。  
 粘性なし。しまりあり。  
 粘性ややあり。しまりややあり。2層砂少混。  
 粘性ややあり。しまりややあり。2層砂ブロック状に少混。

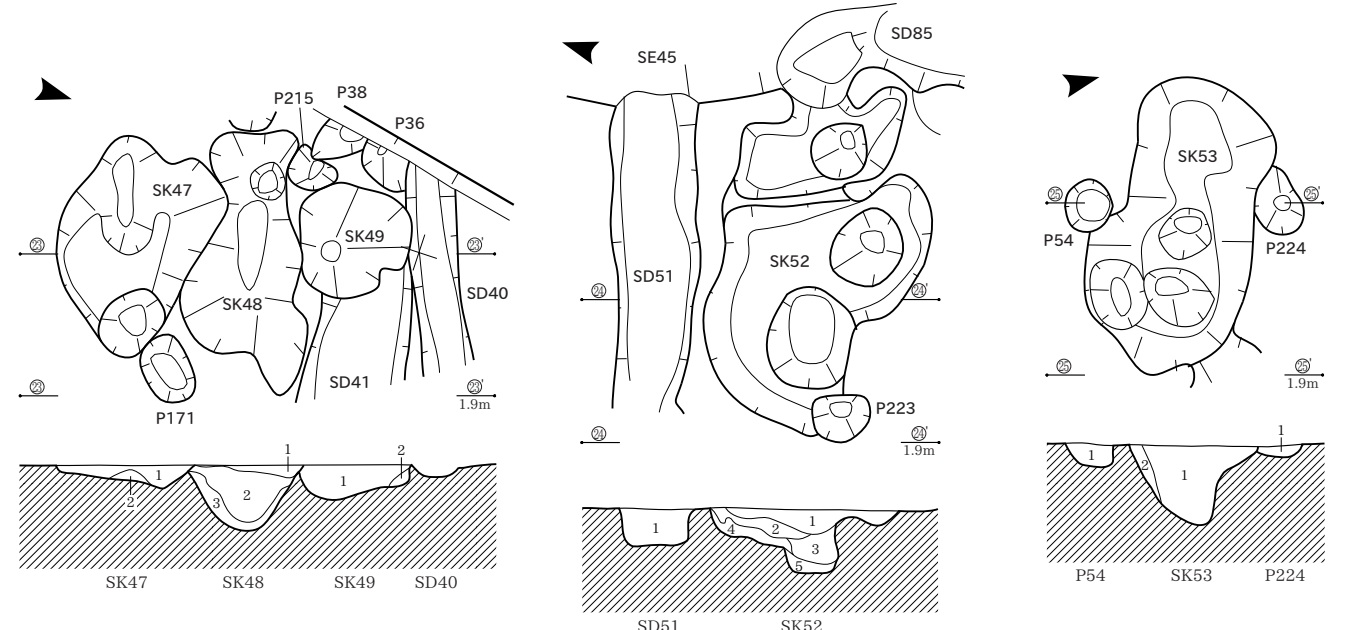
- SK17**  
 1.黒褐色砂 (10YR2/3)  
 2.黒褐色砂 (10YR2/2)  
 3.黄褐色シルト (2.5Y5/3)  
**SK18**  
 1.黒褐色シルト (10YR3/2)  
**SK20**  
 1.黄褐色シルト (10YR3/2)  
**SD21**  
 1.黄褐色シルト (2.5Y5/3)  
 2.黒褐色砂 (2.5Y3/2)  
 3.暗オリーブ褐色砂 (2.5Y3/3)  
**SK22**  
 1.黒褐色砂 (10YR3/2)  
 2.黒褐色シルト (10YR3/1)  
 3.黄褐色シルト (2.5Y5/4)  
**P25**  
 1.黒褐色砂 (10YR3/2)

- 粘性なし。しまりあり。Ⅲ層のシルトブロック少混。  
 粘性なし。しまりあり  
 粘性ややあり。しまりややあり。2層砂少混。  
 粘性あり。しまりあり。Ⅲ層シルトブロック50%  
 粘性なし。しまりあり。Ⅲ層シルトブロック20%。P25を切る。  
 粘性あり。しまりあり。Ⅲ層と同じ土質(層位の逆転) P25を切る。  
 粘性あり。しまりあり。Ⅲ層シルトブロック少混。  
 粘性ややあり。しまりあり。Ⅲ層シルトブロックラミナ状に入る。  
 粘性ややあり。しまりややあり。Ⅲ層シルトブロック15%ラミナ状に入る。  
 粘性ややあり。しまりあり。Ⅲ層シルトブロック少混。  
 粘性あり。しまりあり。黒褐色砂少混  
 粘性なし。しまりあり。Ⅲ層シルトブロック60%。SK20・SD21に切られる。



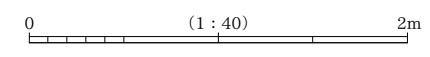
- SK42**  
 1.黒褐色砂 (2.5Y3/2) 粘性なし。しまりややあり。  
 2.黒褐色砂 (2.5Y3/1) 粘性なし。しまりややあり。  
 3.黒褐色砂 (2.5Y3/2) 粘性なし。しまりややあり。IV層シルトブロック40%。  
 4.暗灰黄色砂 (2.5Y4/3) 粘性なし。しまりあり。  
 5.暗灰黄色砂 (2.5Y4/3) 粘性なし。しまりあり。3層ブロックラミナ状に入る。
- SK43**  
 1.黒褐色シルト (10YR3/2) 粘性ややあり。しまりあり。IV層シルトブロック10%。SK44に切られる。  
 2.黄褐色シルト (2.5Y5/4) 粘性ややあり。しまりあり。1層ブロック10%。  
 3.黄褐色シルト (2.5Y5/4) 粘性ややあり。しまりあり。1層ブロック少混。
- SK46**  
 1.黄褐色シルト (2.5Y5/3) 粘性あり。しまりあり。1層のシルトブロックまだらに入る。P334・340に切られる。
- P264**  
 1.黄褐色シルト (2.5Y4/1) 粘性あり。しまりあり。IV層シルトブロック多混。
- P334**  
 1.黒褐色シルト (2.5Y3/2) 粘性あり。しまりあり。IV層シルトブロック多混。
- SK335**  
 1.黄褐色シルト (2.5Y5/3) 粘性あり。しまりあり。黄灰色シルトブロックまだらに少混。  
 2.黄褐色シルト (2.5Y5/3) 粘性あり。しまりあり。黄灰色シルトブロック多混。
- P336**  
 1.黄褐色シルト (2.5Y5/3) 粘性あり。しまりあり。黄灰色シルトブロックまだらに入る。

- SK50**  
 1.暗灰黄色シルト (2.5Y4/2) 粘性非常にあり。しまり非常にあり。Pitか木の根の可能性高い。  
 2.黄灰色シルト 粘性あり。しまりあり。黒褐色シルト少混。  
 3.黄灰色シルト 粘性あり。しまりあり。黒褐色シルトがラミナ状に入る。土師器片入る。  
 4.黄灰色シルト 粘性あり。しまりあり。2層に同じ。  
 5.暗灰黄色シルト (2.5Y5/2) 粘性ややあり。しまりあり
- P222**  
 1.黒褐色シルト (10YR3/2) 粘性あり。しまり非常にあり。IV層シルトブロック多混。  
 2.黄褐色シルト 粘性あり。しまりあり。1層シルトブロック少混。  
 3.黒褐色シルト (2.5Y3/2) 粘性あり。しまりあり。IV層シルト(2層)ブロックラミナ状に入る。  
 4.黄褐色シルト 粘性あり。しまりあり。1層シルト少混。  
 5.オリブ褐色シルト (2.5Y4/3) 粘性あり。しまり非常にあり。1層シルトブロック少混。

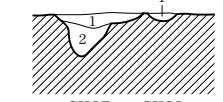
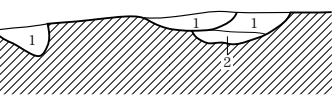
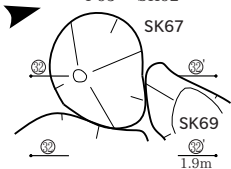
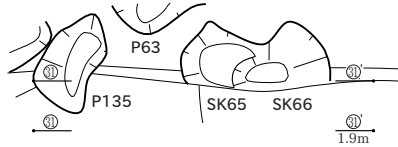
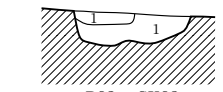
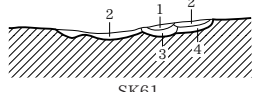
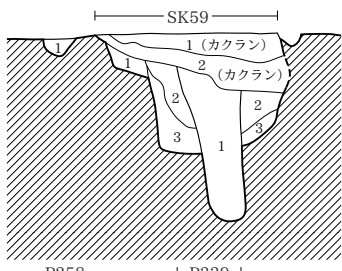
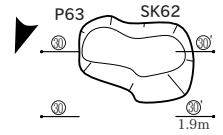
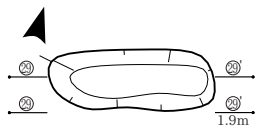
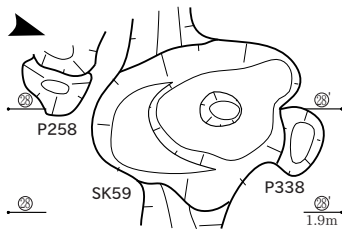


- SK47**  
 1.黒褐色砂 (2.5Y3/2) 粘性なし。しまりあり。IV層シルトブロック30%混。SK48を切る。  
 2.黄褐色シルト (2.5Y5/3) 粘性あり。しまりあり。1層砂少混。
- SK48**  
 1.黒褐色砂 (2.5Y5/2) 粘性ややあり。しまりあり。シルト少混。SK49を切る。  
 2.暗灰黄色シルト (2.5Y4/2) 粘性あり。しまり非常にあり。1層とIV層シルトが混ざり合う。  
 3.黄褐色シルト (2.5Y5/3) 粘性ややあり。しまりあり。IV層シルトに1層がやや混ざり合う。
- SK49**  
 1.暗オリブ褐色シルト (2.5Y3/3) 粘性あり。しまりあり。炭化物少混。IV層シルトブロック少混。SK48に切られる。  
 2.黒褐色シルト (2.5Y3/1) 粘性あり。しまりややあり。IV層シルトブロック多混。覆土B層。
- SD51**  
 1.黒褐色シルト (2.5Y4/3) 粘性あり。しまりややあり。IV層シルトブロックわずかに入る。
- SK52**  
 1.黒褐色シルト (2.5Y4/3) 粘性あり。しまりややあり。IV層シルトブロック40%。  
 2.黒褐色シルト (2.5Y4/3) 粘性あり。しまりややあり。IV層シルトブロック10%。  
 3.黒褐色シルト (2.5Y4/3) 粘性あり。しまりややあり。IV層シルトブロックわずかに入る。  
 4.黄褐色シルト (2.5Y5/4) 粘性あり。しまりあり。3層ブロックラミナ状に入る。  
 5.黄褐色シルト (2.5Y5/4) 粘性あり。しまりあり。3層ブロックわずかに入る。
- SK53**  
 1.黒褐色シルト (2.5Y3/2) 粘性あり。しまり非常にあり。IV層シルトブロック多混。  
 2.黄褐色シルト (2.5Y5/3) 粘性ややあり。しまりあり。IV層シルトに1層がやや混ざり合う。
- P54**  
 1.オリブ黒色シルト (5Y3/2) 粘性なし。しまり非常にあり。
- P224**  
 1.オリブ黒色シルト (5Y3/2) 粘性なし。しまり非常にあり。
- SK55**  
 1.黒褐色砂 (10YR3/2) 粘性なし。しまりあり。IV層シルトブロック少混。  
 2.暗オリブ褐色シルト (2.5Y3/3) 粘性あり。しまりあり。IV層シルトブロック多混。  
 3.黄褐色シルト (2.5Y5/4) 粘性ややあり。しまりややあり。2層ブロック混ざる。  
 4.黒褐色砂 (2.5Y3/2) 粘性ややあり。しまりややあり。IV層シルトブロック底の方に溜まる。
- SK56**  
 1.黒褐色シルト (10YR2/3) 粘性ややあり。しまりあり。IV層シルトブロック60%混

- SK57**  
 1.黒色砂 (10YR1/7) 粘性なし。しまりあり。IV層シルトブロック少混。  
 2.黒褐色シルト (2.5Y3/1) 粘性ややあり。しまりあり。IV層シルトブロック40%。  
 3.黄褐色シルト (2.5Y5/3) 粘性ややあり。しまりあり。2層少混
- P58**  
 1.黒褐色シルト (2.5Y3/1) 粘性ややあり。しまりあり。砂質強い。IV層シルトブロック少混。SK57に切られる。







**SK59**  
1.カクラン1 SD21を切る最も新しい土坑  
2.カクラン2

**SK338**  
1.黒褐色砂 (2.5Y3/1) 粘性ややあり。しまりあり。IV層シルトブロック少混。  
2.黄褐色シルト (2.5Y5/3) 粘性あり。しまりあり。黒褐色 (10TR3/1) 砂の混入少ない。  
3.黒褐色砂 (2.5Y3/1) 粘性ややあり。しまりあり。IV層シルトブロック少混。

**P339**  
1.黄褐色シルト (2.5Y5/3) 粘性あり。しまりあり。黒褐色 (10TR3/1) 砂がまだらに混入。

**SK60**  
1.黒褐色砂 (2.5Y3/2) 粘性ややあり。しまりあり。シルト少混。IV層シルトブロック底に溜まる。

**P258**  
1.黒褐色砂 (10YR2/2) 粘性ややあり。しまりあり。IV層シルトブロック底に溜まる。SK60内。

**SK61**  
1.黒色10YR1.7/炭化物層  
2.黒褐色シルト (10YR3/1) 粘性あり。しまりあり。IV層シルトブロック少混。  
3.暗褐色シルト (10YR3/3) 粘性あり。しまりあり。砂質強い。  
4.暗黄褐色シルト (10YR5/2) 粘性あり。しまりあり。2層ブロックラミナ状に入る。

**SK62**  
1.黒褐色シルト (2.5Y3/1) 粘性ややあり。しまりあり。砂質強い。IV層シルトブロック50%混。

**P63**  
1.黒褐色砂 (10YR3/1) 粘性なし。しまりあり。

**SK65**  
1.黒褐色シルト (10YR2/2) 粘性ややあり。しまりあり。砂質強い。

**SK66**  
1.暗褐色シルト (10YR3/3) 粘性ややあり。しまりややあり。砂質強い。IV層シルトブロック10%混。  
2.暗褐色シルト (10YR3/3) 粘性ややあり。しまりややあり。IV層シルトブロック50%混。

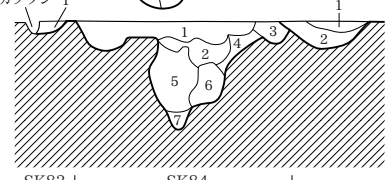
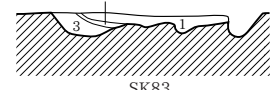
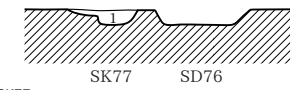
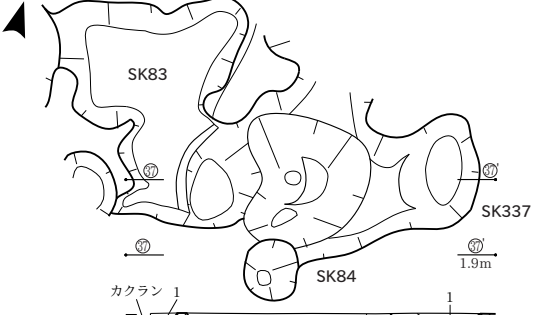
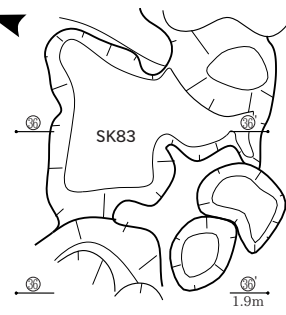
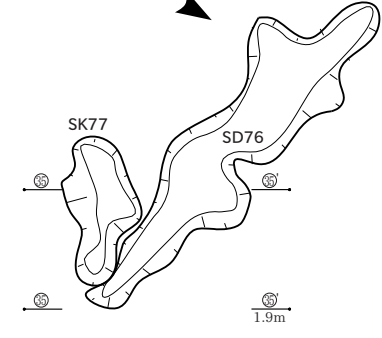
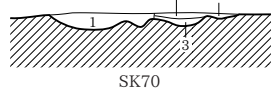
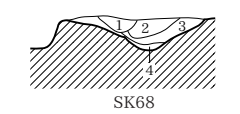
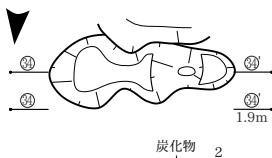
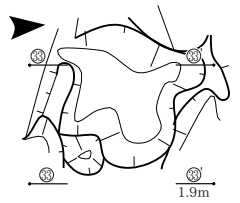
**P135**  
1.暗褐色シルト (10YR3/3) 粘性ややあり。しまりややあり。砂質強い。IV層シルトブロック40%混。

**SK67**  
1.黒褐色シルト (2.5Y3/1) 粘性あり。しまりややあり。  
2.黒褐色シルト (2.5Y3/1) 粘性あり。しまりややあり。IV層のシルトブロック少混。

**SK69**  
1.黒褐色シルト (2.5Y3/1) 粘性あり。しまりややあり。IV層のシルトブロック少混。

**SK68**  
1.オリーブ褐色シルト (2.5Y4/3) 粘性ややあり。しまりあり。砂質強い。  
2.黒褐色シルト (2.5Y3/1) 粘性あり。しまりややあり。IV層のシルトブロック少混。  
3.黒褐色シルト (2.5Y3/1) 粘性あり。しまりややあり。IV層のシルトブロック2層より多く混ざる。  
4.黒褐色シルト (2.5Y3/1) 粘性あり。しまりややあり。IV層のシルトブロック3層より多く混ざる。

**SK70**  
1.黒褐色シルト (2.5Y3/1) 粘性あり。しまりややあり。IV層シルトブロック少混。  
2.黒色シルト (10YR1.7/) 粘性あり。しまりなし。炭化物層。  
3.黒褐色シルト (2.5Y3/1) 粘性あり。しまりややあり。IV層シルトブロック多混。



**SK77**  
1.黒褐色シルト (2.5Y5/2) 粘性ややあり。しまりややあり。IV層シルトブロック少混。

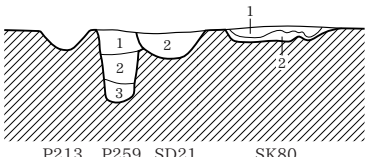
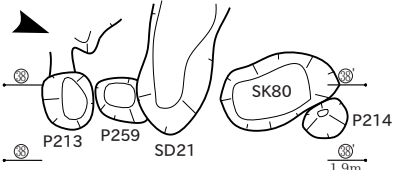
**SK80**  
1.オリーブ褐色シルト (2.5Y4/3) 粘性ややあり。しまりややあり。砂質強い。  
2.黄褐色シルト (2.5Y5/4) 粘性あり。しまりややあり。IV層シルトに1層シルトブロック少混。

**SD21**  
2.黒褐色砂 (2.5Y3/2) 粘性あり。しまりあり。IV層シルトブロック少混。

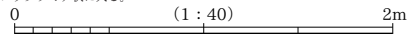
**P259**  
1.オリーブ褐色シルト (2.5Y4/3) 粘性ややあり。しまりあり。砂質強い。IV層シルトブロック多混。  
2.オリーブ褐色シルト (2.5Y4/3) 粘性あり。しまりあり。シルト質強い。IV層シルトブロックほとんど混ざらない。  
3.オリーブ褐色シルト (2.5Y4/3) 粘性あり。しまりあり。IV層シルトブロックまだらに混入。1層より少ない。

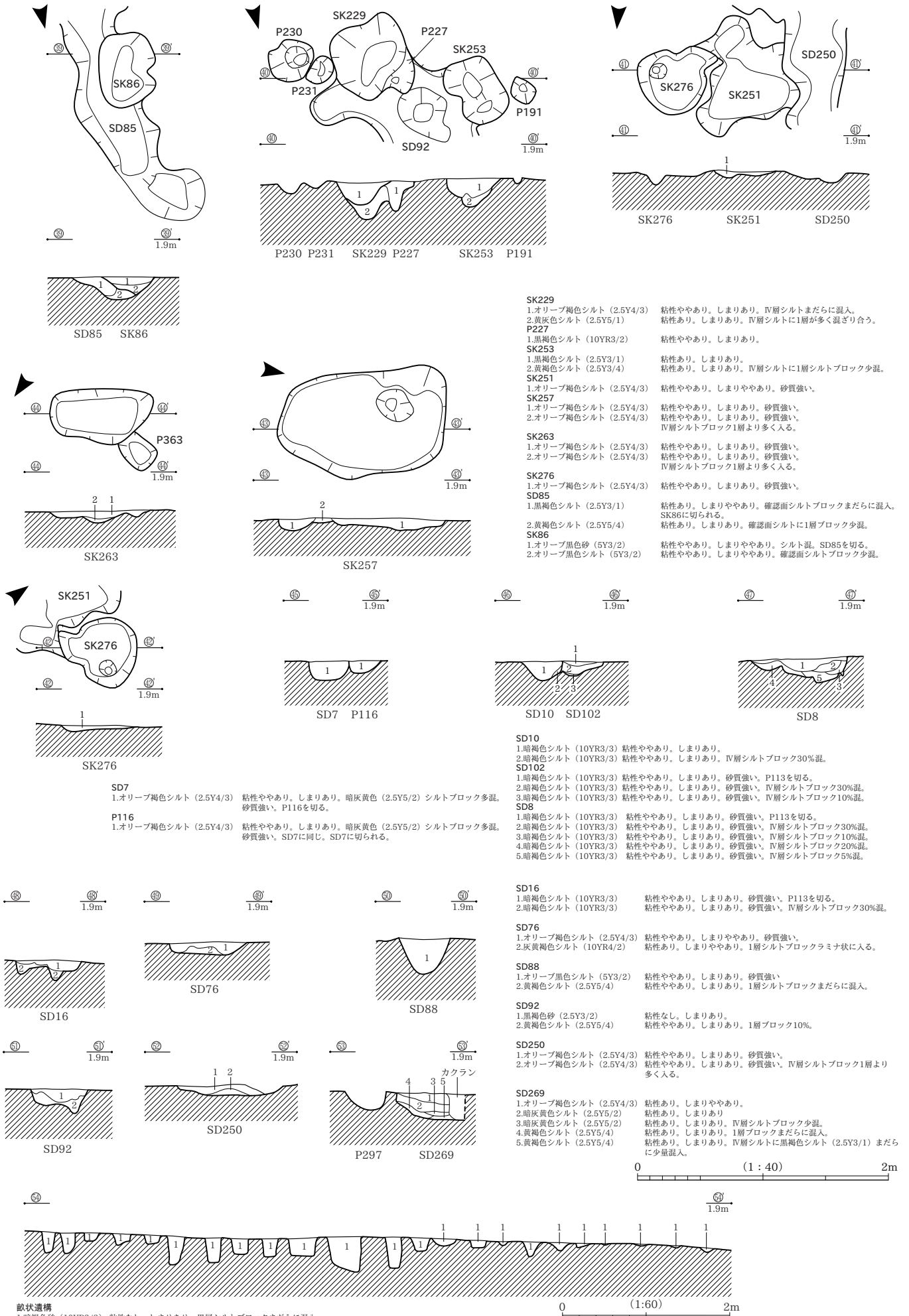
**SK83**  
1.黒色シルト (10YR2/2) 粘性なし。しまりあり。IV層シルトブロック少混。  
2.黄褐色シルト (2.5Y5/4) 粘性あり。しまりあり。1層シルトブロックまだらに混入。  
3.黒褐色シルト (10YR2/2) 粘性あり。しまりあり。IV層シルトブロックまだらに混入。  
4.暗灰黄色シルト (2.5Y4/2) 粘性あり。しまりあり。

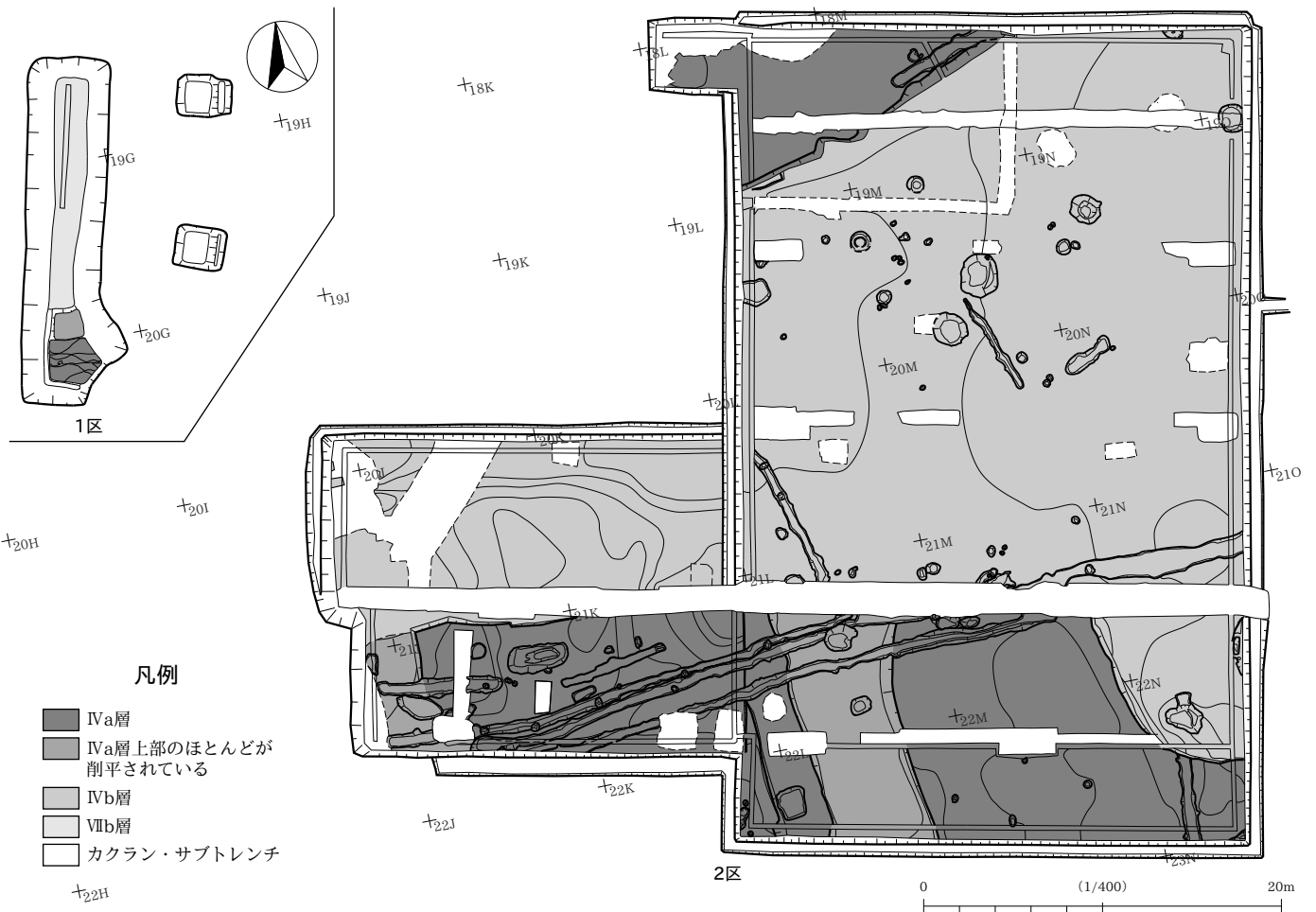
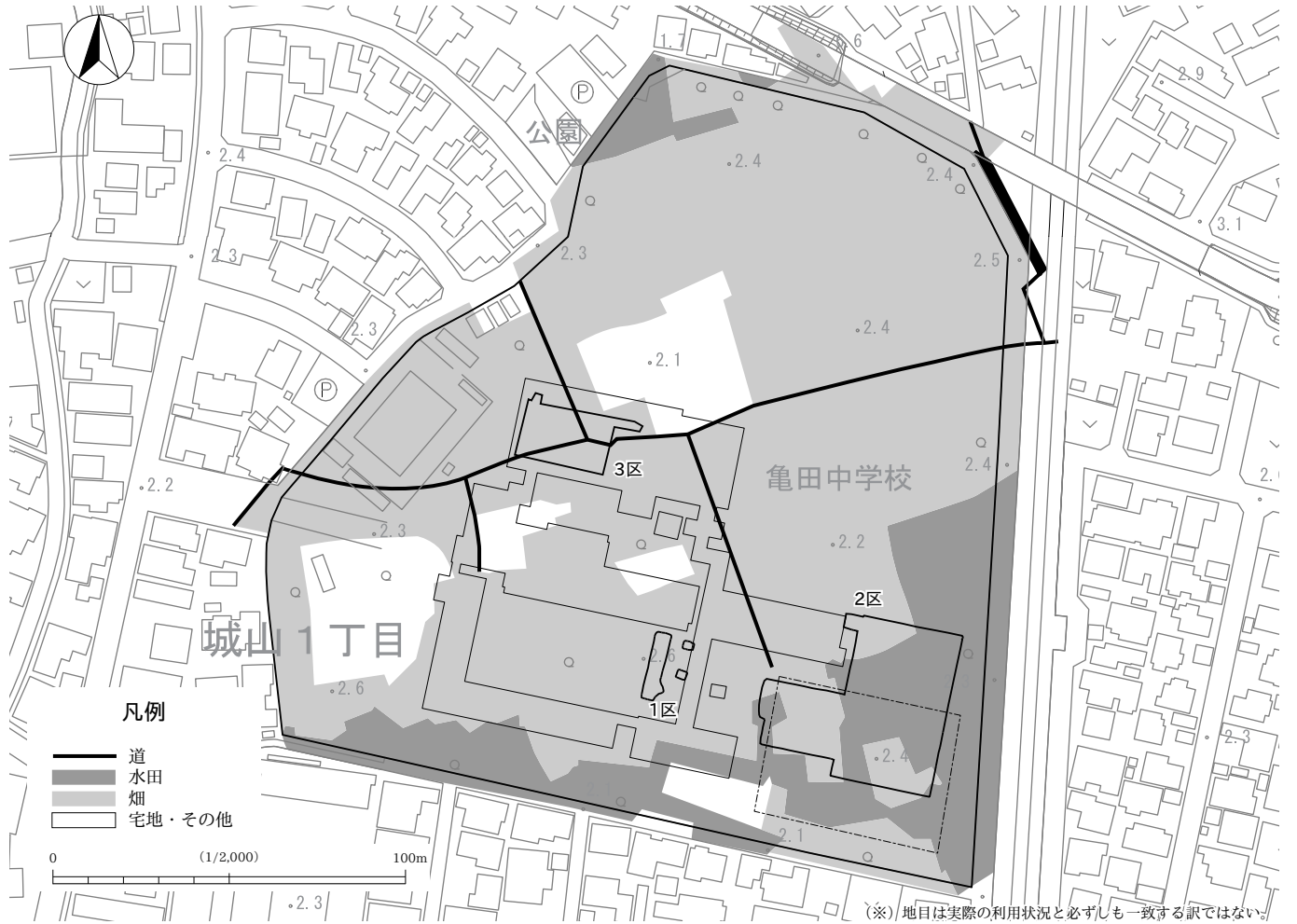
**SK84**  
1.黒色砂 (10YR2/1) 粘性なし。しまりあり。炭化物少混。IV層シルトブロック少混。  
2.黒褐色砂 (10YR2/2) 粘性なし。しまりあり。  
3.黒色砂 (10YR2/1) 粘性なし。しまりあり。1層より色調明るい。  
4.オリーブ褐色シルト (2.5Y4/3) 粘性ややあり。しまりあり。砂質強い。1層ブロックまだらに入る。  
5.暗灰黄色砂 (2.5Y4/2) 粘性なし。しまりあり。IV層シルト底の方に溜まる。  
6.黄褐色シルト (2.5Y5/4) 粘性ややあり。しまりあり。3層ブロックラミナ状に入る。  
7.灰黄褐色砂 (10YR4/2) 粘性なし。しまりなし。

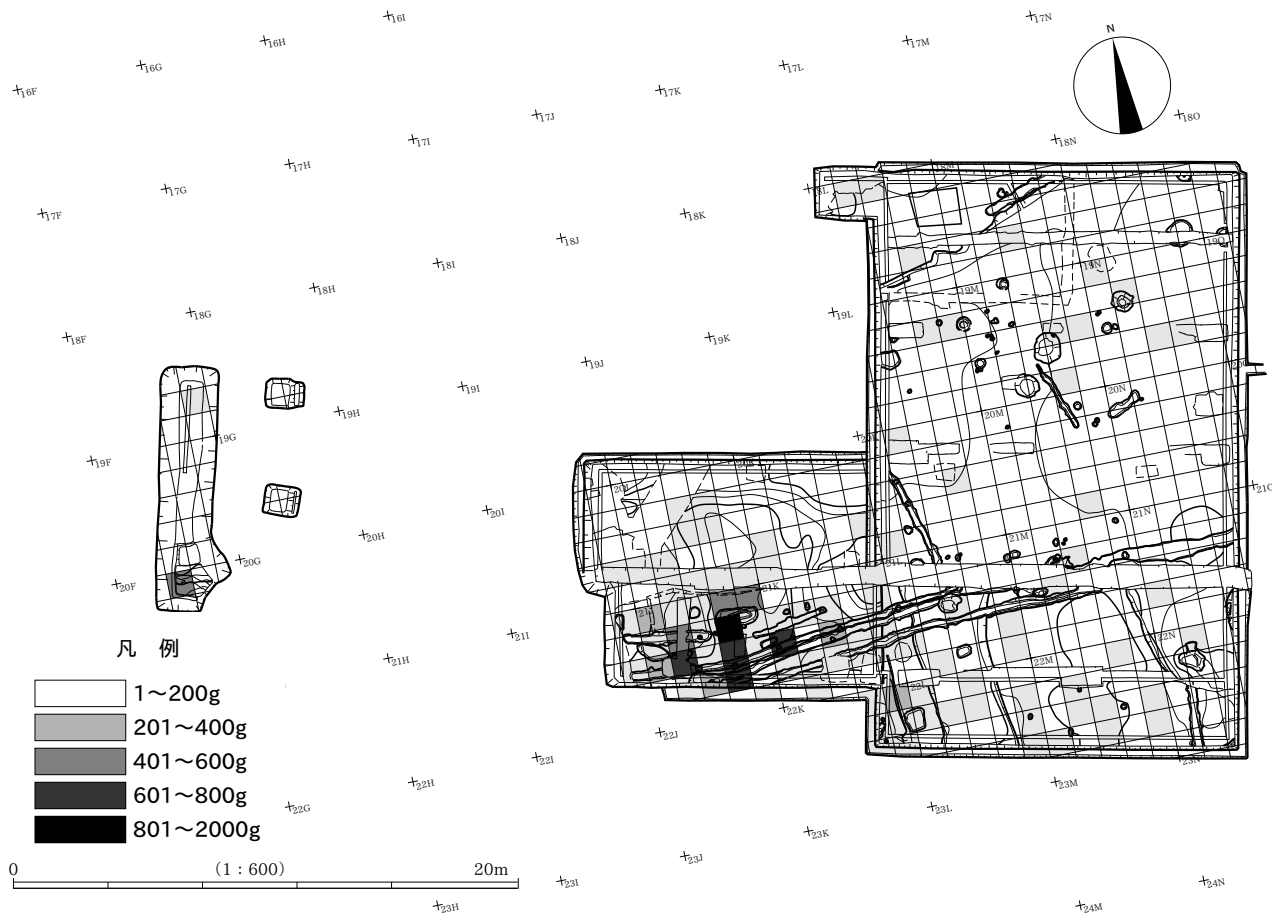


**SK337**  
1.黒色砂 (2.5Y2/1) 粘性なし。しまりあり。  
2.黄褐色シルト (2.5Y5/4) 粘性ややあり。しまりあり。1層ブロックラミナ状に入る。

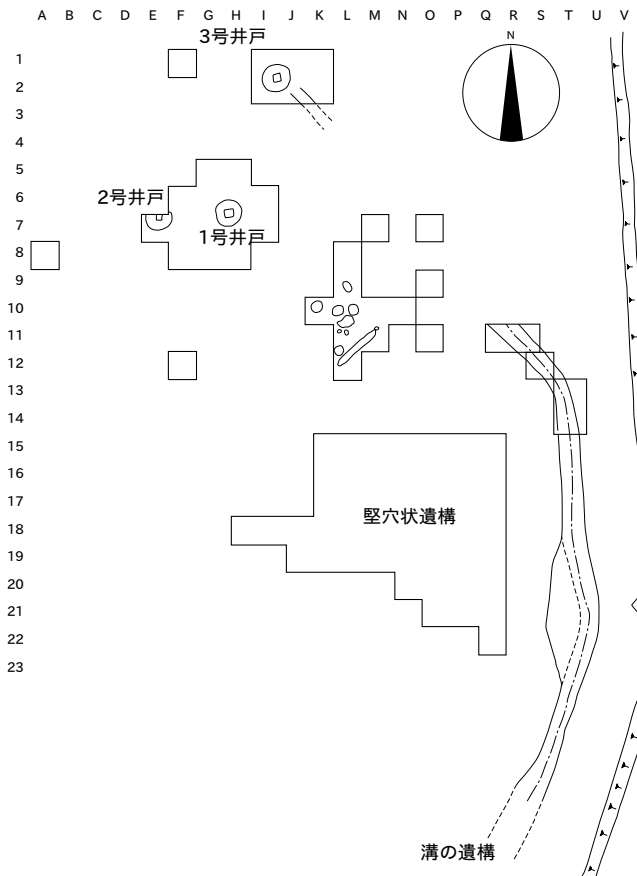




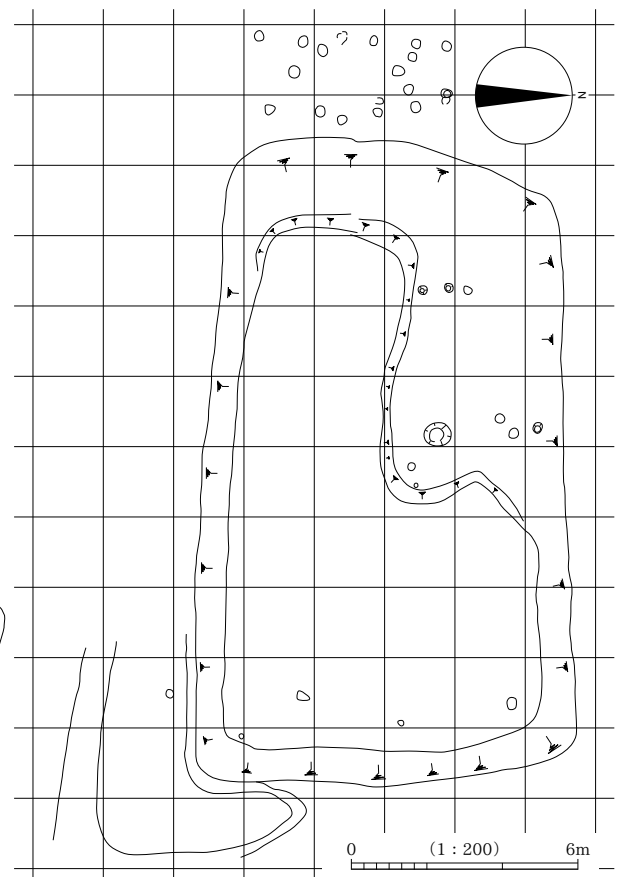




1・2区III層出土土器重量分布図 (1 : 600)

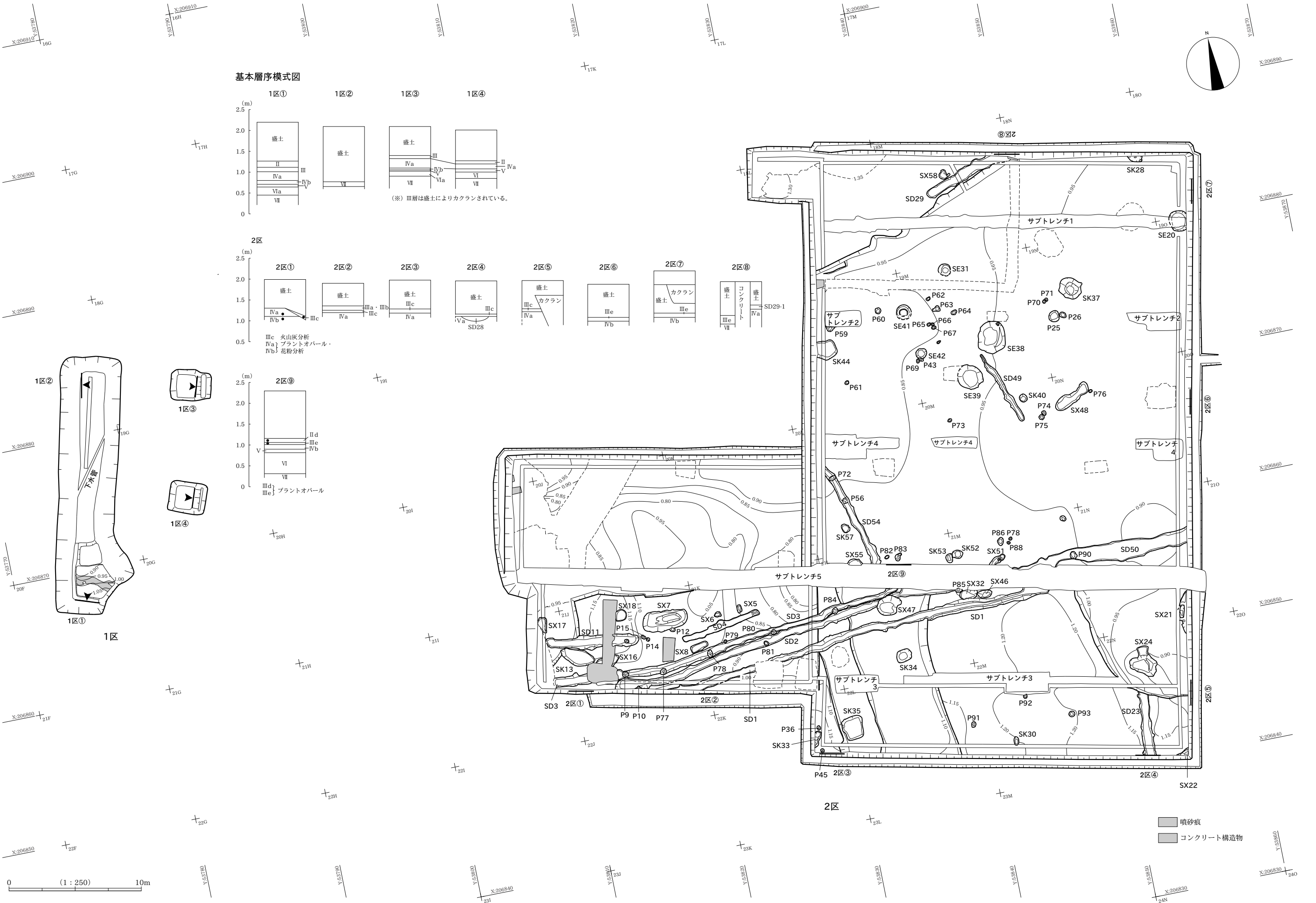


第一次調査地遺構配置図 (縮尺不同)  
 ([酒井1980] 4頁 第図2を一部改変)

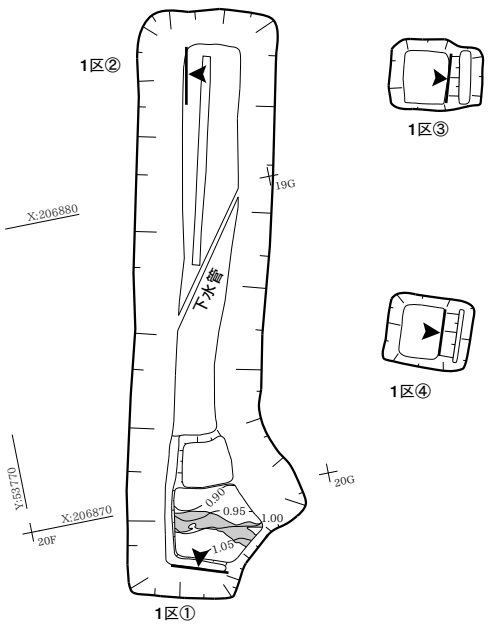
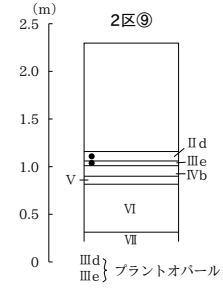
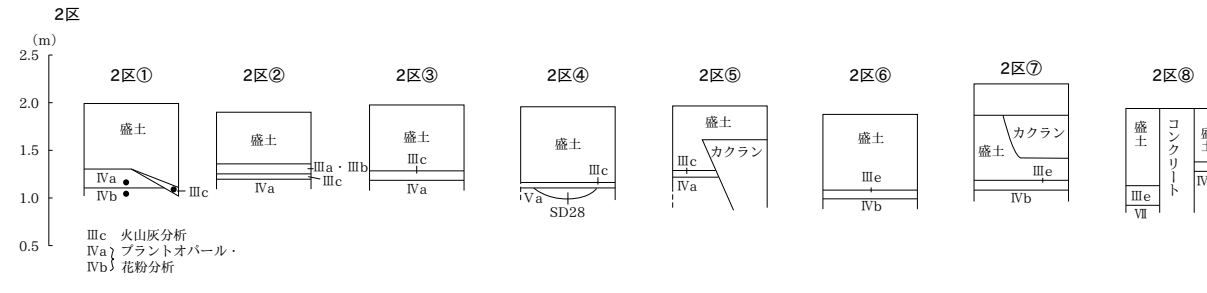
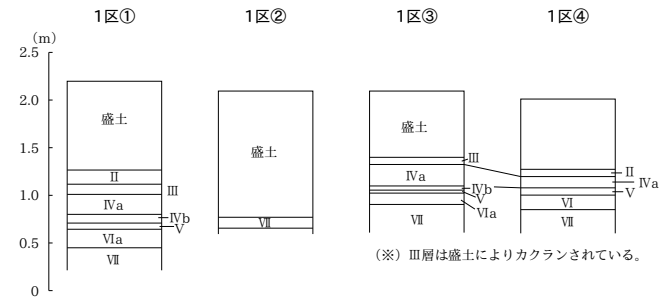


第一次調査竪穴状遺構平面図  
 ([酒井1980] 第3図)を再調整し一部改変)



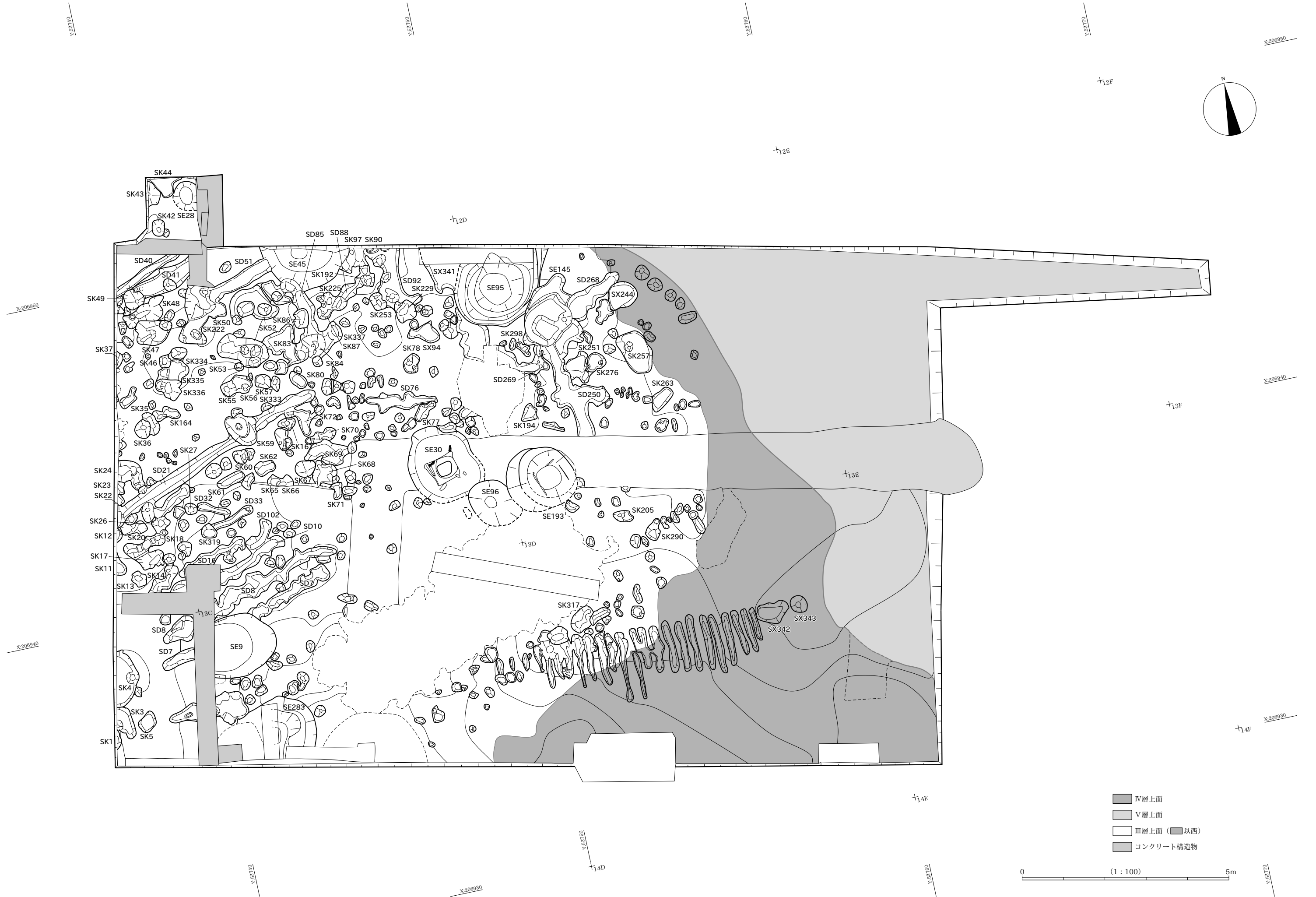


基本層序模式図

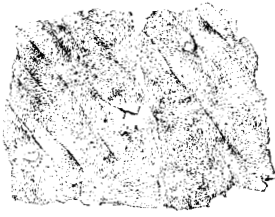
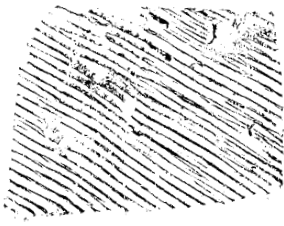


■ 噴砂痕  
■ コンクリート構造物

0 (1 : 250) 10m



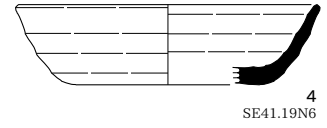
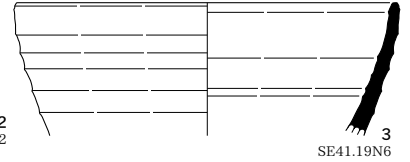
SE31 (1)



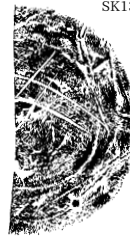
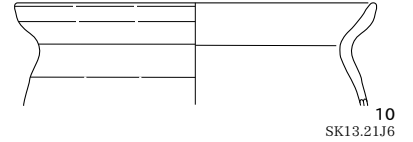
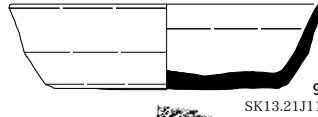
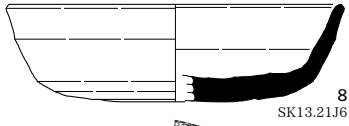
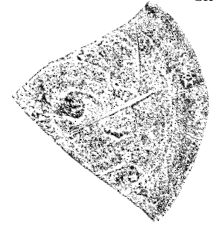
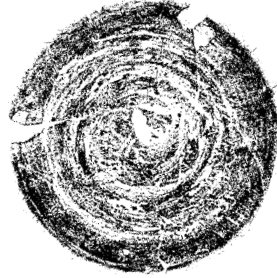
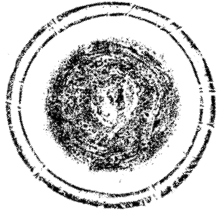
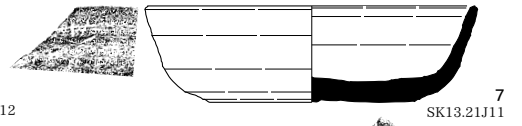
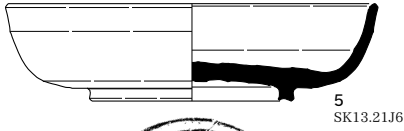
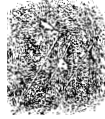
SE39 (2)



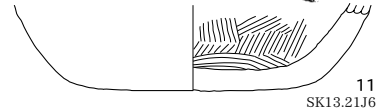
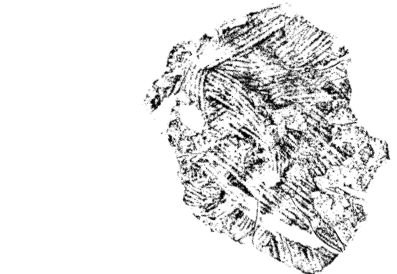
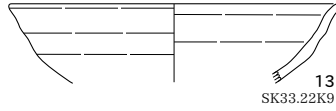
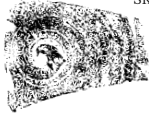
SE41 (3・4)



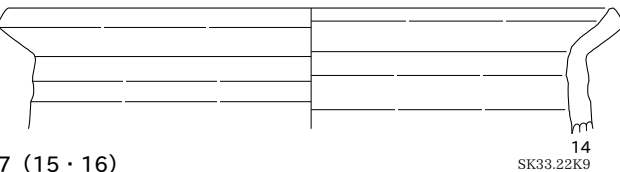
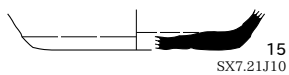
SK13 (5~11)



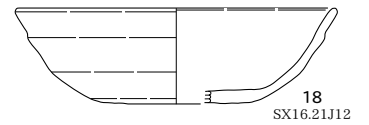
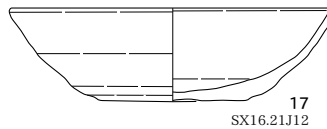
SK33 (12~14)



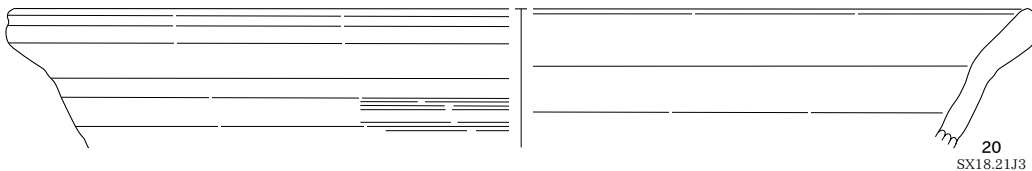
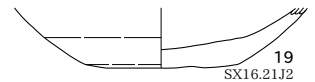
SX7 (15・16)



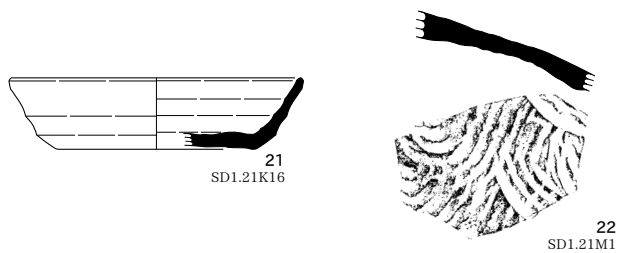
SX16 (17~19)



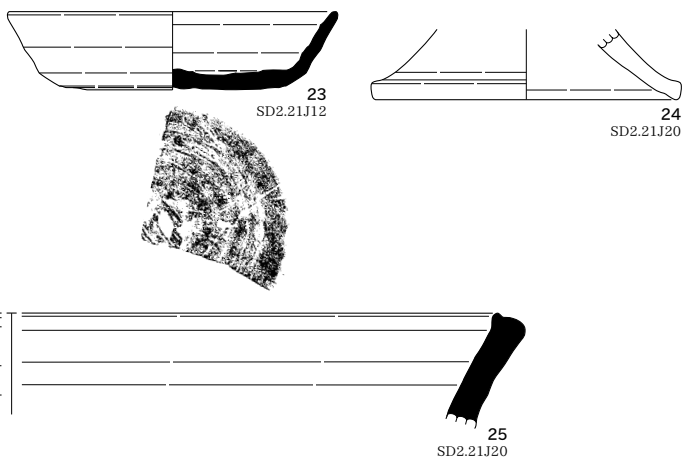
SX18 (20)



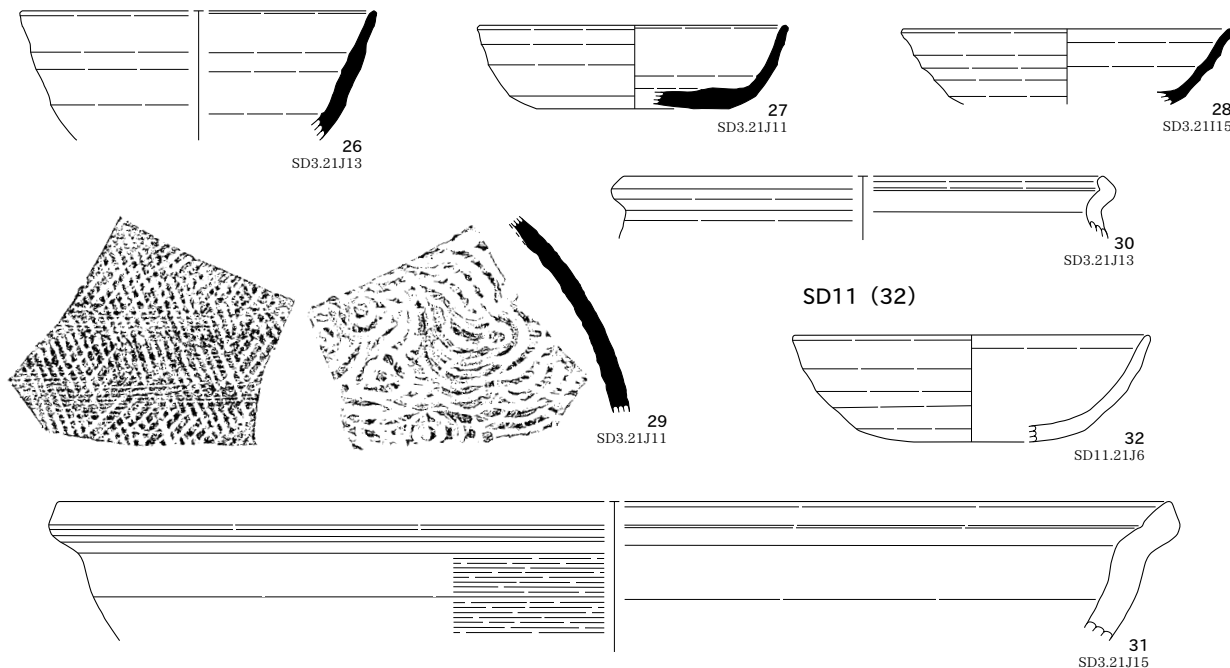
SD1 (21・22)



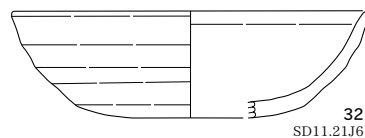
SD2 (23~25)



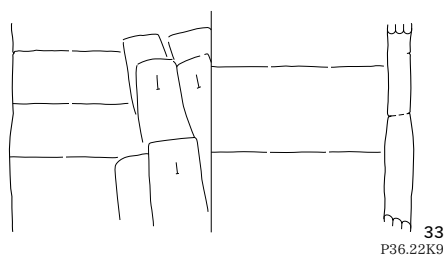
SD3 (26~31)



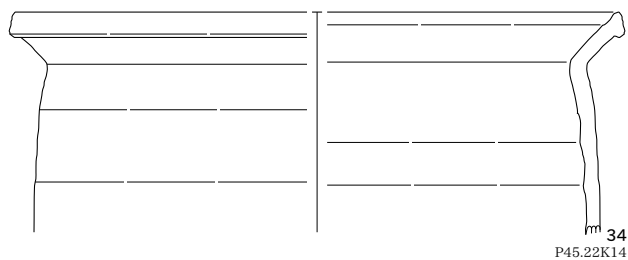
SD11 (32)



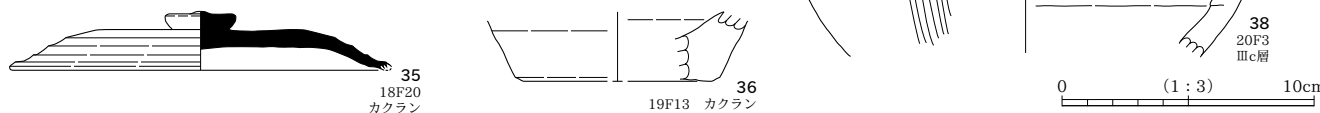
P36 (33)



P45 (34)

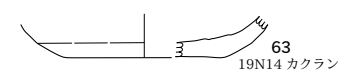
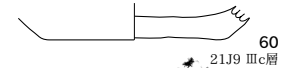
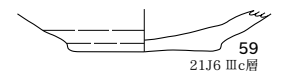
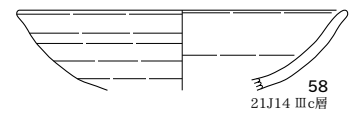
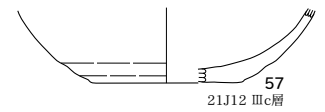
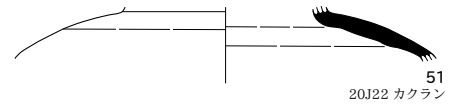
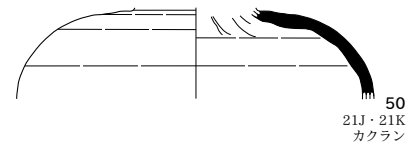
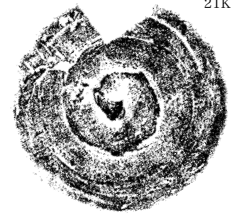
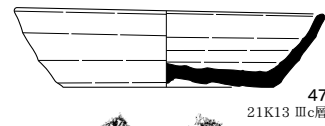
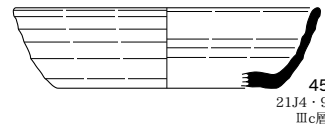
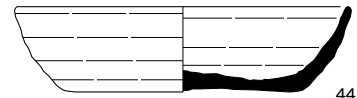
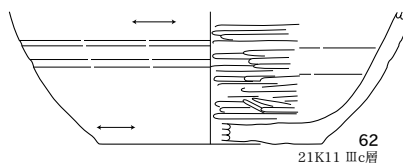
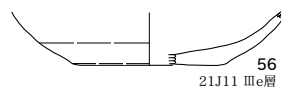
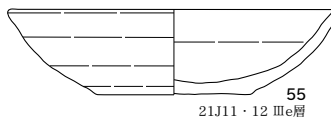
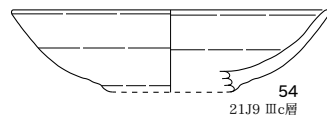
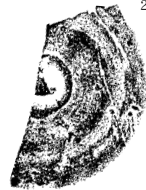
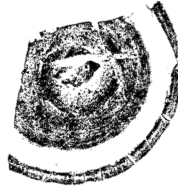
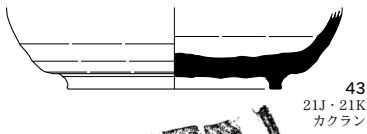
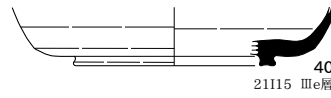
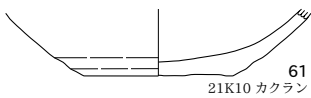
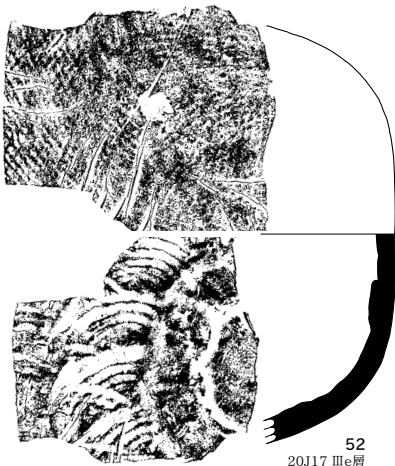
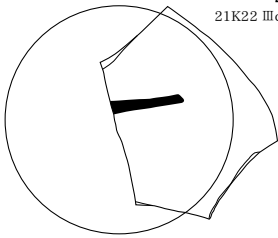
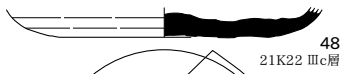
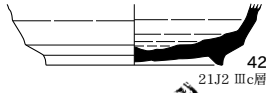
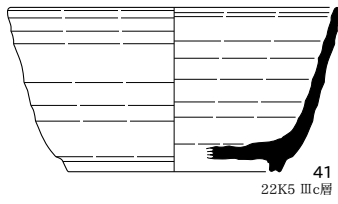
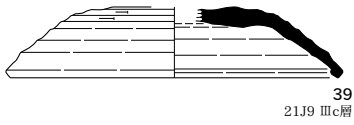


1区遺構外出土遺物 (35~38)



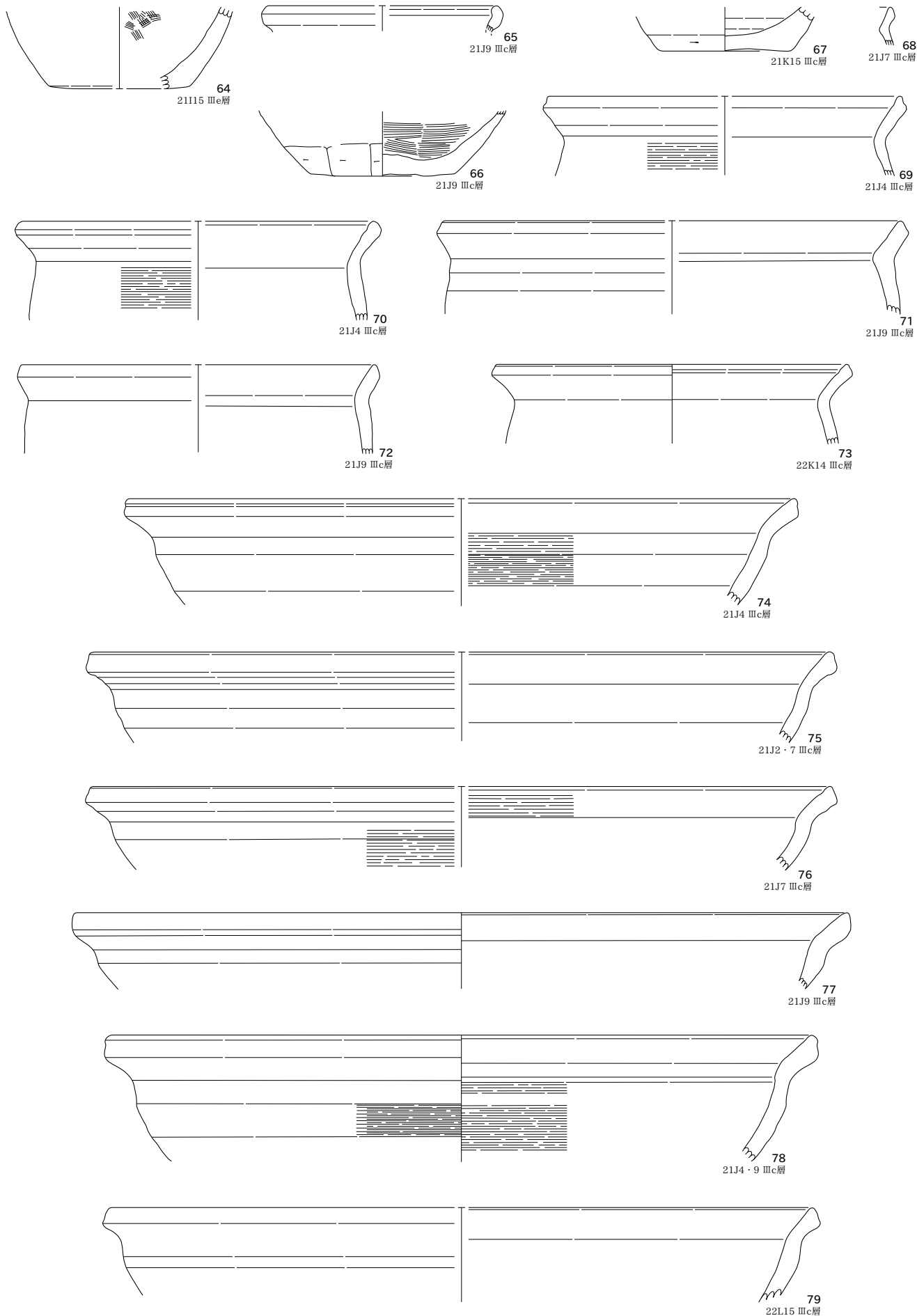


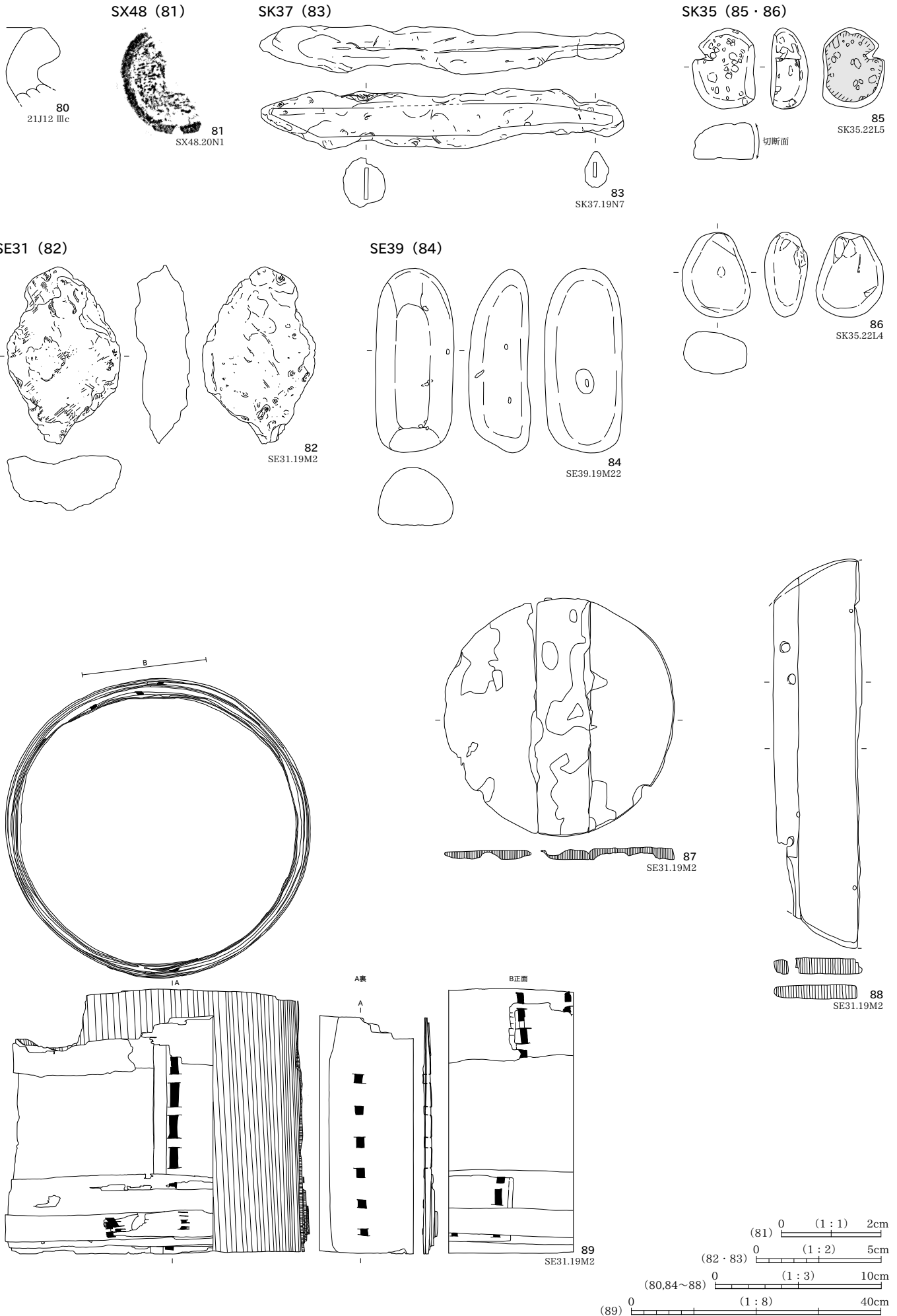
2区遺構外出土土器 (39~63)

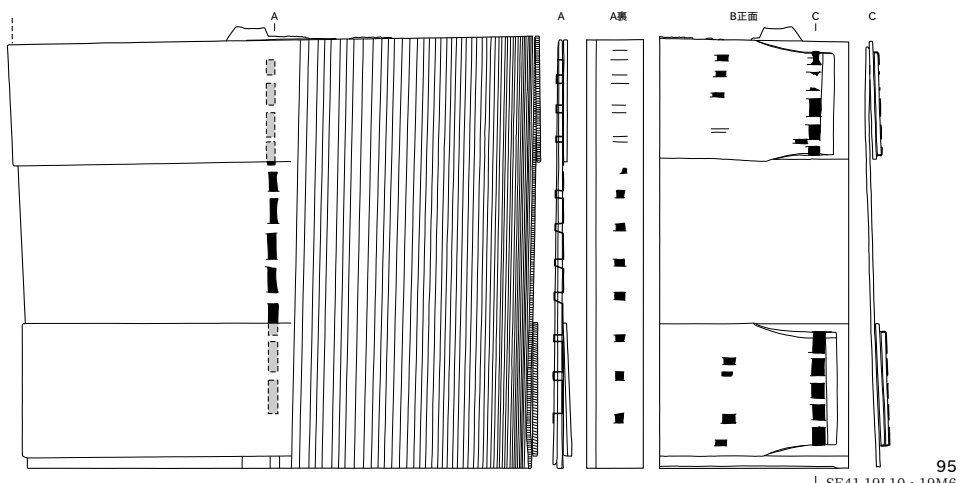
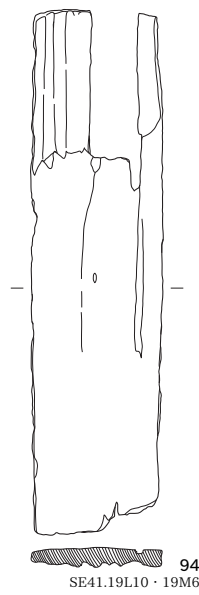
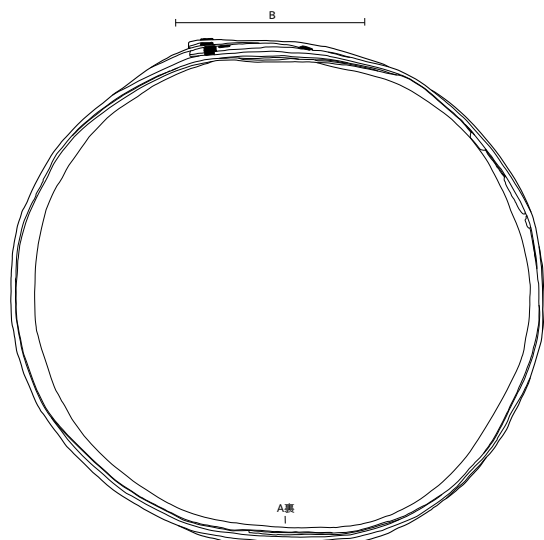
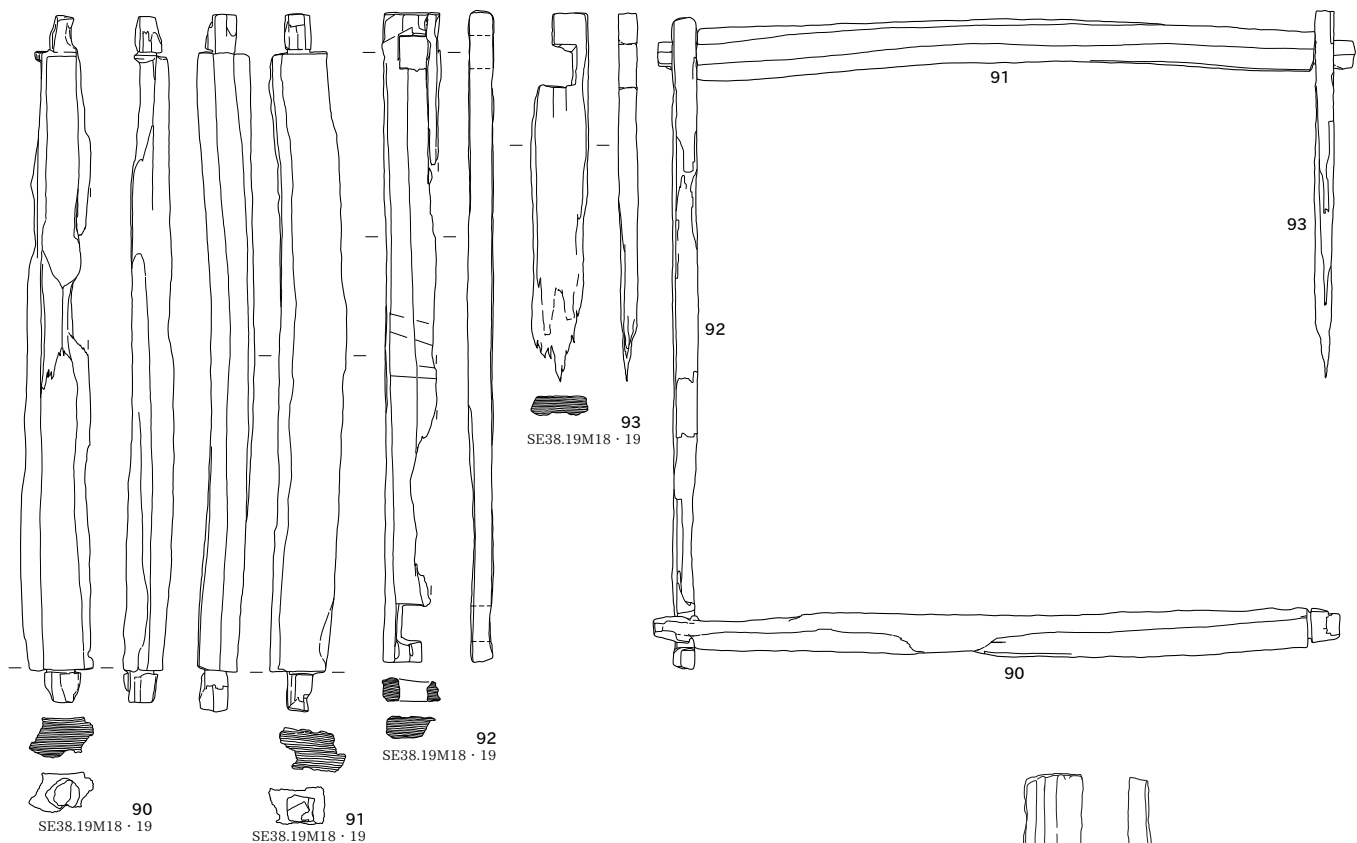


0 (1:3) 10cm

2区遺構外出土土器 (64~79)



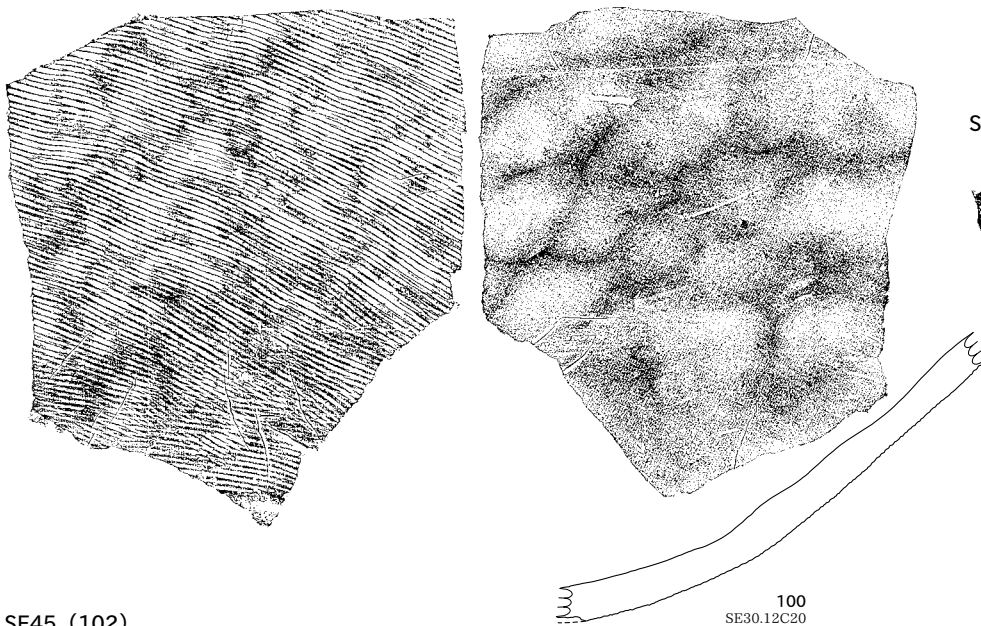
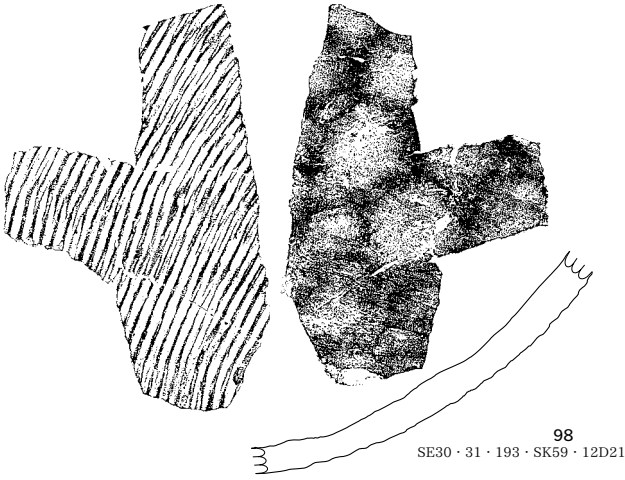
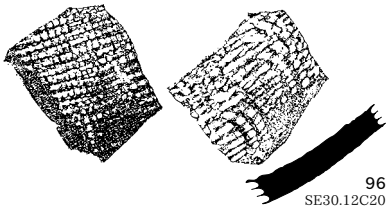




(94) 0 (1:6) 20cm (その他) 0 (1:8) 40cm

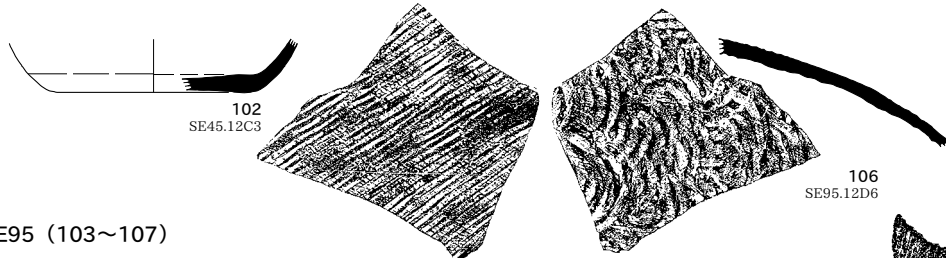


SE30 (96~100)

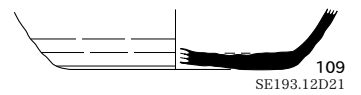


SE31 (101)

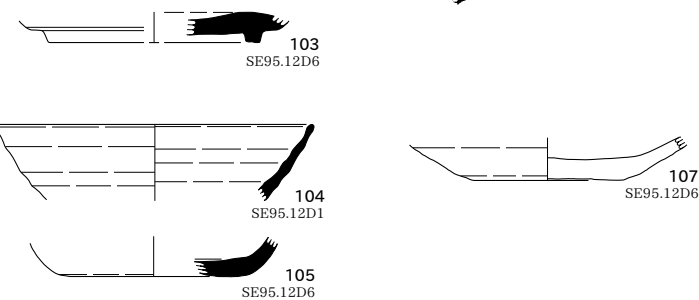
SE45 (102)



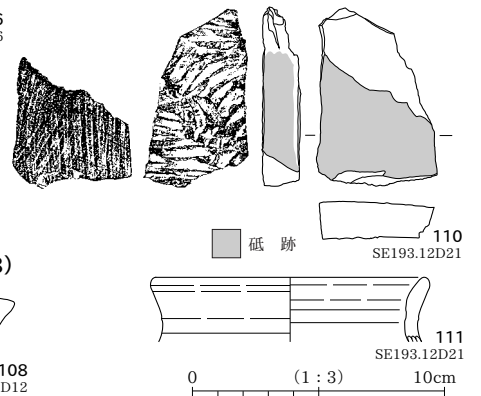
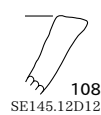
SE193 (109~111)



SE95 (103~107)



SE145 (108)

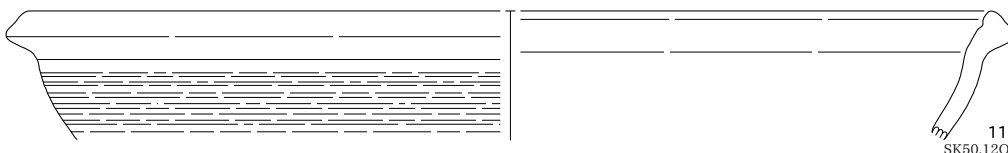


砥跡

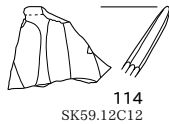
SK47 (112)



SK50 (113)



SK59 (114・115)

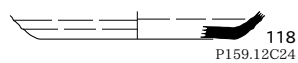


SD7 (117)

SK62 (116)



P159 (118)



P170 (119)



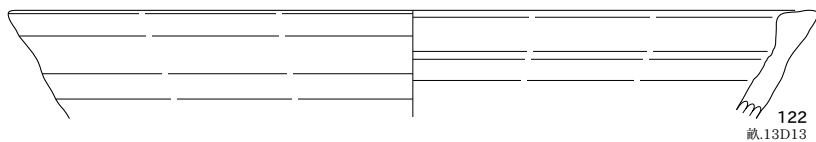
P254 (120)



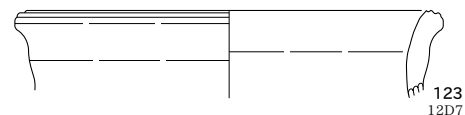
P332 (121)



畝 (122)

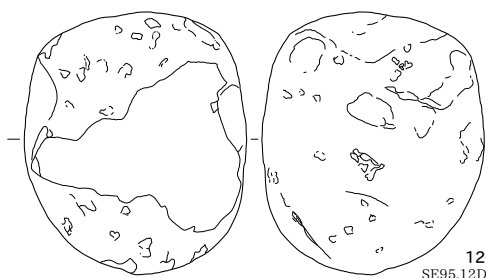
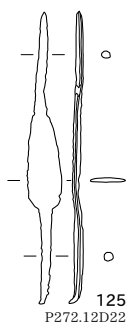


遺構外出土遺物 (123・124)

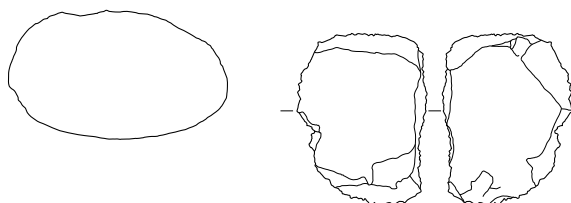
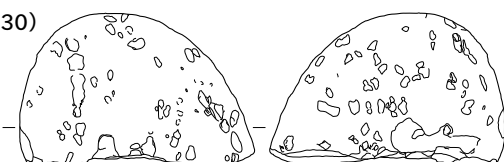


鉄製品 P272 (125)

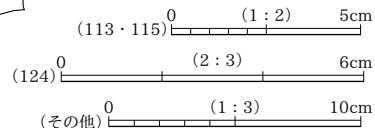
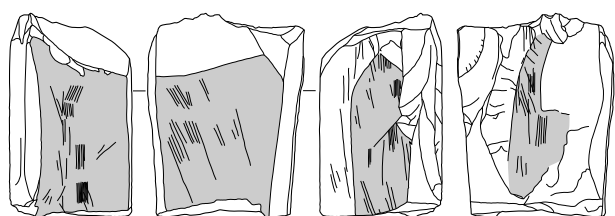
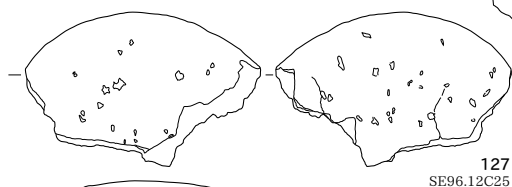
石製品 SE95 (126)



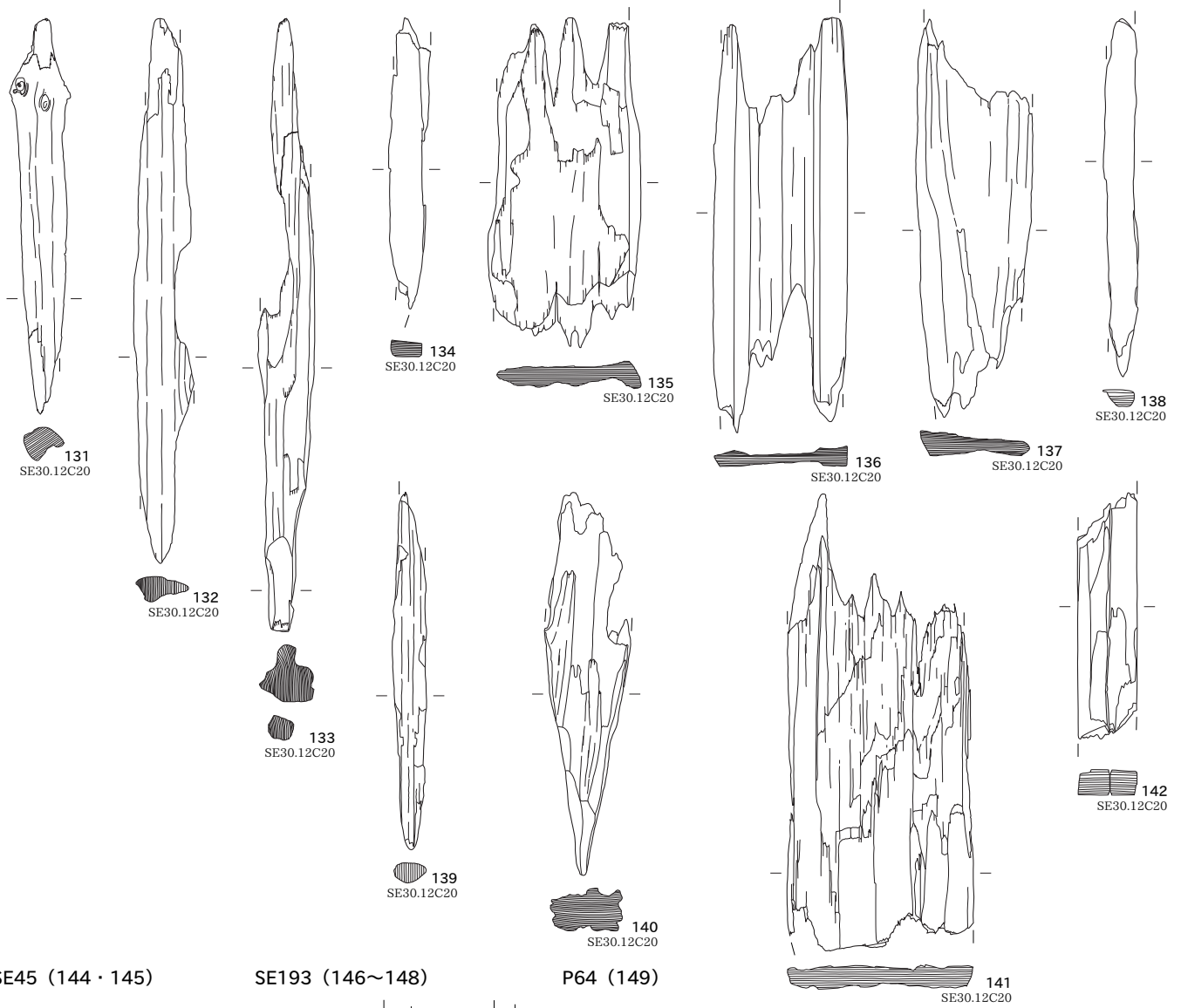
SE193 (128~130)



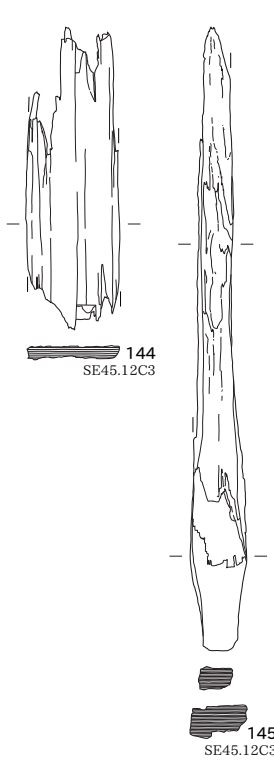
SE96 (127)



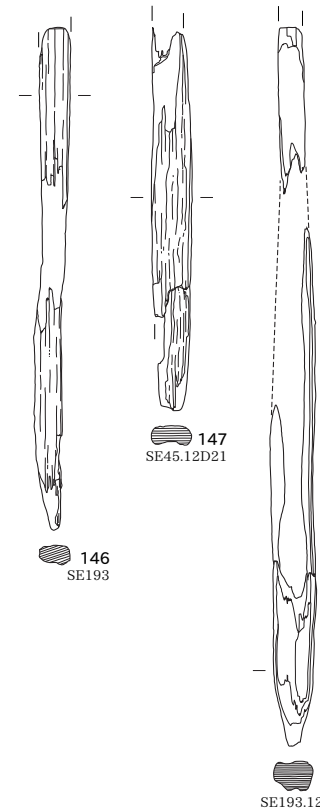
SE30 (131~143)



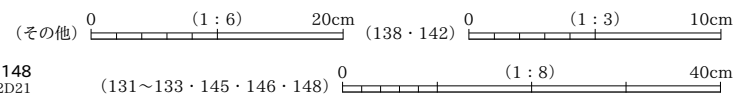
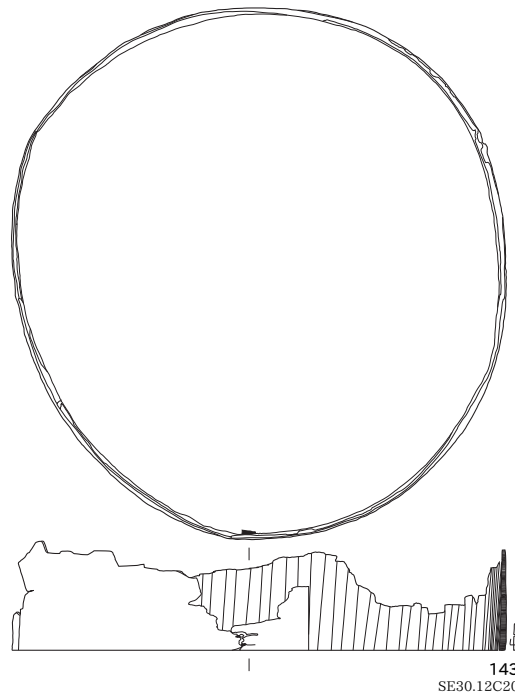
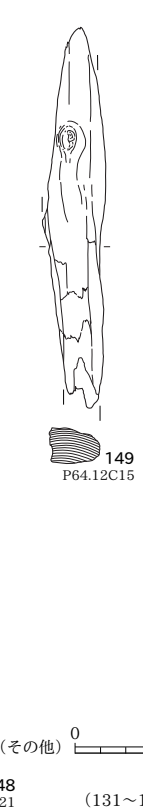
SE45 (144・145)



SE193 (146~148)



P64 (149)







三王山遺跡周辺空中写真

米軍撮影 1948年9月





三王山遺跡 2区 全景 空中写真(合成)





2区 全景1 (南西から)



2区 全景2 (北東から)





3区 全景1 12Cグリッドを中心に（北から）



3区 全景2（東から）





1区 完掘（北から）



1区 完掘（南から）



1区 基本層序①（北から）



1区 基本層序②（東から）



2区 基本層序②（北から）



2区 基本層序③付近（北から）



2区 基本層序⑤（西から）



2区 基本層序⑧（南から）



# 報告書抄録

ふりがな	さんのうやまいせきⅡ だい4・7じちょうさ							
書名	三王山遺跡Ⅱ 第4・7次調査							
副書名	新潟市立亀田中学校校舎・体育館改築工事に伴う三王山遺跡第2・4次発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	新潟市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号								
編著者名	朝岡政康・早田 勉（第Ⅵ章）							
編集機関	新潟市文化観光・スポーツ部 歴史文化課 埋蔵文化財センター							
所在地	〒950-3101 新潟県新潟市北区太郎代 2554 番地 TEL 025-255-2006							
発行年月	西暦 2010年 3月 30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
さんのうやま 三王山遺跡	新潟県新潟市 江南区城山1 丁目1170-2 ほか	15104	419	37° 51' 34"	139° 06' 53"	第4次調査 20070501～ 20070810 第7次調査 20081105～ 20081125	1,845.2  410.7  計 2,255.9	市立中学校校舎・体育館改築工事に伴う
所収遺跡	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
三王山遺跡	遺物包含地	古代（奈良時代・平安時代・鎌倉時代・室町時代）		井戸・土坑・溝・性格不明遺構など		須恵器・土師器・珠洲焼・石製品・鉄製品		
要約	<p>三王山遺跡は亀田砂丘と呼ばれる新砂丘Ⅰ上に位置する。昭和54年（1979）に亀田中学校からJR信越線を挟んだ北東側で宅地開発に伴う緊急調査が行われている。その調査では主に、古代・中世の遺構・遺物が発見された。また古墳時代の遺物も少量発見されている。この調査では鉄鉢や銅製香炉、瀬戸美濃焼香炉といった仏具や、青磁・白磁といった貿易陶磁、国内各所で焼かれた焼き物が多く発見され、中世においては階層の高い集団の存在が推測されている。</p> <p>第4・7次調査地は学校が建てられる以前は水田や畑として利用されていた。特に第4次調査地は旧地表面を広範囲に削平して水田を作っていたため遺構確認面の遺存状況は良くなかった。</p> <p>両調査を通じて奈良・平安時代では土坑や溝が発見され、須恵器や土師器が出土している。鎌倉・室町時代は井戸や溝などが見つかるとともに、珠洲焼や青磁の細片が出土している。今回の調査では昭和54年調査地ほど遺物は出土しなかったが、三王山遺跡の広がりや営まれた時代について、より所見を深めることができた。</p>							

## 三王山遺跡 第4・7次調査

新潟市立亀田中学校校舎・体育館改築工事に伴う三王山遺跡第2・4次発掘調査報告書

2010年 3月 30日印刷

2010年 3月 30日発行

編集・発行 新潟市教育委員会

〒950-8550 新潟県新潟市中央区学校町通一番町 602 番地 1

TEL (025) 228-1000

新潟市埋蔵文化財センター

〒950-3101 新潟県新潟市北区太郎代 2554 番地

TEL (025) 255-2006

印刷・製本 株式会社博進堂

〒950-0807 新潟県新潟市東区木工新町 378-2

TEL (025) 271-2600